にちれんだいしょうにんごしょぜんしゅう

日蓮大聖人御書全集

しんぱん　しどうようもんしゅう

新版　指導要文集

ごしょぜんぱん　ごしょじゅん

御書全般　御書順

謗法と申すは違背の義なり。随喜と申すは随順の義なり。

（001 唱法華題目抄 謗法のいましめ６ページ－９行）

謗法というのは、（法華経に）背くことであり、随喜というのは、（法華経の教えに）したがうことです。

悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を巧みにして、愚癡の人の心を取って善心を破るということなり。

（001唱法華題目抄）

善知識と悪知識10ページー15行）

悪知識というものは、甘い言葉で語りかけ、いつわり、こび、言葉巧みに、愚痴の人たちの心を取って、仏道修行に励もうとする心を破るということです。

「法に依って人に依らざれ」と説かせ給いて候えば、経のごとくに説かざるをば、いかにいみじき人なりとも御信用あるべからず候か。

（001唱法華題目抄

求道（行学の二道）12ページ-14行）

故に、妙法蓮華経の五字を唱うる功徳莫大なり。「諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり。妙法は能開なり」として、法華経の題目を唱うべし。

（001 唱法華題目抄 勤行・唱題19ページー2行）

ただ法門をもって邪正をただすべし。利根と通力とにはよるべからず。

（001 唱法華題目抄 信仰者の姿勢 23ページー13行）

ただし法理によって正邪は明らかにしていくべきであって、利根（環境に対して作用を起こしていく能力）や神力によって判定してはなりません。

つらつら微管を傾け、いささか経文を披きたるに、世皆正に背き、人ことごとく悪に帰す。故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還りたまわず。ここをもって、魔来り、鬼来り、災起こり、難起こる。言わずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず。

（002 立正安国論

立正安国25ページー7行）

わずかな見識をかたむけ、少しばかり経文を開いてみるのに、

世の中は上下万民すべて正法に背き、人びとは皆悪法に帰依し
ています。そのため、守護するべき諸天善神は国を捨てて去ってし
まい、聖人は所を辞して他の所へ行ったまま帰ってきません。
そこで諸天善神や聖人にかわって、魔神、鬼神が来って災いが
起こり、難が起こるのです。じつにこのことは、声を大にしていわな
ければならないことであり、恐れなくてはならないことなのです。

国土乱れん時はまず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る。

（002 立正安国論 仏法と社会27ページ－2行）

（仁王経に）「国土が乱れるときは、まずその前に鬼神が乱れる。鬼神が乱れて万民を悩ますがゆえに、万民が乱れるのである」とあります。

「我、今五眼もて明らかに三世を見るに、一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍うるによって帝王主となることを得たり。ここをもって、一切の聖人・羅漢、しかもために彼の国土の中に来生して大利益を作さん。もし王の福尽きん時は、一切の聖人、皆、ために捨て去らん。もし一切の聖人去らん時は、七難必ず起こらん」

（002 立正安国論

立正安国27ページー4行）

しかず、彼の万祈を修せんよりは、この一凶を禁ぜんには。

（002立正安国論）

立正安国33ページー13行

災難を根絶するためには、千万の祈りをするよりも、まず一凶である法然の謗法を禁じなければならないのです。

ここに知(し)んぬ、徴前(しるしさき)に顕(あらわ)れ、災(わざわ)い後(のち)に致(いた)ることを。

（002 立正安国論(りっしょうあんこくろん)

瑞相(ずいそう)35ページー11行）

予（よ）、少量（しょうりょう）たりといえども、忝（かたじけな）くも大乗（だいじょう）を学（がく）す。

（002立正安国論（りっしょうあんこくろん）

使命（しめい）36ページー9行）

蒼蠅、驥尾に附して万里を渡り、碧蘿、松頭に懸かって千尋を延ぶ。

（002立正安国論 妙法の偉大さ36ページー9行）

青バエも駿馬の尾につかまっていれば万里を行くことができ、葛も大きな松の先にかかって千尋の高さにまでのびることができます。（青バエ、葛は凡夫の譬え、駿馬、大きな松は妙法の譬え）

夫れ、釈迦の以前、仏教はその罪を斬るといえども、
能忍の以後、経説は則ちその施を止む。

（002 立正安国論

謗法のいましめ42ページー12行）

汝、蘭室の友に交わって麻畝の性と成る。

（002立正安国論　団結43ページー5行）

あなたも蘭室の友、つまり日蓮のもとへ来て帰伏することによ

り、蓬のように曲がっていた邪心が、麻のごとくすなおな正信に

なることができたのです。

ただし、人の心は時に随って移り、物の性は境に依って改まる。

（002 立正安国論 人間弱点へのいましめ43ページー7行）

ただし、人の心は時にしたがって移り、物の性分はその環境によって改まるものです。

汝（なんじ）、すべからく一身（いっしん）の安堵（あんど）を思（おも）わば、まず四表（しひょう）の静謐（せいひつ）を禱（いの）るべきものか。

（002 立正安国論（りっしょうあんこくろん））

立正安国（りっしょうあんこく）44ページー4行）

あなたが自分自身（じぶんじしん）の幸福（こうふく）を願（ねが）うならば、まず一国（いっこく）の静穏（せいおん）、平和（へいわ）を祈（いの）るべきです。

響きのごとく、影のごとく、人の夜書くに火は滅すれども
字は存するがごとく、三界の果報もまたかくのごとし
（002 立正安国論
因果の理法44ページー15行）

なんじ　はや　しんこう　すんしん　あらた　すみ　じつじょう　いちぜん
汝、早く信仰の寸心を改めて、速やかに実乗の一善に
き　すなわ　さんがい　みなぶっこく　ぶっこく　おとろ
帰せよ。しからば則ち、三界は皆仏国なり。仏国それ衰
じっぽう　ほうど　ほうどなん　やぶ
えんや。十方はことごとく宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。

（002 立正安国論）

りっしょうあんこく

立正安国45ページー7行）

いっこく　はや　じゃほうしんこう　こころ　あらた　じつじょう　いちぜん
あなたは一刻も早く邪法信仰の心を改めて、実乗の一善で
にちれん　ほうもん　きえ　ばんにん　みょうほう
ある日蓮の法門に帰依しなさい。そのような万人が妙法をたもっ
せかい　ぶっこく　ぶっぽう　こんてい　しゃかい
ていけば、この世界はすべて仏国です。仏法を根底とした社会であ

るならば、どうして衰（おとろ）えることがありましょうか。この十方（じっぽう）娑婆（しゃば）世界（せかい）はことごとく寂光（じゃっこう）の宝土（ほうど）（仏（ほとけ）の住（す）む光（ひか）り輝（かがや）く土地（とち））です。宝土（ほうど）であるならば、どうしてこわれることがありましょうか。

ただ我(わ)が信(しん)ずるのみにあらず、また他(た)の誤(あやま)りをも誡(いまし)めんのみ。

（002 立正安国論(りっしょうあんこくろん)
折伏(しゃくぶく)45ページー15行）

ただ自分(じぶん)ひとりが信(しん)ずるだけでなく、他(ほか)の人(ひと)たちの誤(あやま)りも誡(いまし)めていく決意(けつい)です。

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり、かるがゆえに玄という。ただ現在ばかりしれるににたり。現在において仁・義を制して、身をまぼり、国を安んず。これに相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等いう。これらの賢聖の人々は、聖人なりといえども、過去をしらざること凡夫の背をみず、未来をかがみざること盲人の前をみざるがごとし。

（005 開目抄）

三世の生命51ページー3行）

「仏教の流化、実にここに頼る。礼楽前に駆せて、真道後に啓く」等云々。

天台云わく「金光明経に云わく『一切世間のあらゆる善論は、皆この経に因る。もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり』」と」等云々。止観に云わく「我、三聖を遣わして、彼の真丹を化す」等云々。弘決に云わく「清浄法行経に云わく『月光菩薩は、かしこに顔回と称し、光浄菩薩は、かしこに仲尼と称し、迦葉菩薩

は、かしこに老子と称す』。天竺よりこの震旦を指して、かしこととなす」

（005開目抄）

三世の生命51ページー5行）

妙楽大師は「仏教の流布はじつに儒教の力をそのまま生かしたのである。儒教の礼楽（礼儀等の生活規範）が先に流布されて真の道である仏法が後に弘通されたのである」といっています。（中略）また同じ妙楽大師の止観輔行伝弘決には「清浄法行経にいわく、月光菩薩は中国に生まれて顔回と

いい、光浄菩薩は同じく孔子といい、迦葉菩薩は同じく老子といった。これらはすべて釈尊の使いとして、仏教の先駆として教えを説いたものである」とあります。

外道（げどう）の所詮（しょせん）は内道（ないどう）に入（い）る即（すなわ）ち最要（さいよう）なり。

（005開目抄（かいもくしょう））

仏法（ぶっぽう）と社会（しゃかい）53ページー４行）

一念三千の法門は、ただ法華経の本門寿量品の文の底に沈めたり。竜樹・天親、知ってしかもいまだひろいいだされず。ただ我が天台智者のみ、これをいだけり。懐

（005開目抄）

妙法の偉大さ54ページ-9行

一念三千の法門は、ただ法華経の本門・寿量品の文の底にのみしずめられているのです。このことを竜樹菩薩、天親菩薩は知っていましたが、拾い出してはいません。ただわが天台智者大師のみ

が、これを内心に悟っていたのです。

かつて仏法に入って正を偸んで邪を助け、八万・十二の高きを押して五千・二篇の下きに就け、もって彼の典の邪鄙の教えを釈するを『尊きを摧いて卑しきに入る』と名づく

（005開目抄）

謗法のいましめ55ページ－10行）

外典三千余巻の所詮に二つあり。いわゆる、孝と忠となり。忠もまた孝の家よりいでたり。孝と申すは高なり。天高けれども、孝よりも高からず。また孝とは厚なり。地あつけれども、孝よりは厚からず。

（005開目抄）

親子・孝養58ページ－10行）

（外典の教えの根本は）はいわゆる孝行と忠義です。忠もまた孝のなかから出てきたものです。孝というのは高ということであり、天は

高いものですが孝よりは高くないのです。また孝とは厚ということであり、大地は厚いものですが孝よりは厚くないのです。

賢王（けんおう）の世（よ）には道理（どうり）勝（かつ）べし、愚主（ぐしゅ）の世（よ）に非道先（ひどうさき）をすべし

（005開目抄（かいもくしょう）

仏法（ぶっぽう）と社会（しゃかい）63ページー17行）

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。

（005開目抄（上・下）

御本仏の境涯・確信70ページ－4行）

今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願じぬ。

（005開目抄）

退転のいましめ70ページ-11行）

今度こそ強い菩提心（悟りを求めて仏道修行する心のこと）を起こして、どんなことがあっても、絶対に退転しないと誓願したのです。

既に二十余年が間この法門を申すに、日々・月々・年々に難かさなる。少々の難はかずしらず、大事の難四度なり。二度はしばらくおく。王難すでに二度におよぶ。今度はすでに我が身命に及ぶ。その上、弟子といい、檀那といい、わずかの聴聞の俗人なんど来って重科に行わる。謀反なんどの者のごとし。

（005 開目抄

難を乗り越える70ページー12行）

すでに、日蓮は建長五年以来二十数年の間、この法門を弘めてきたが、日々・月々・年々と時のたつにつれて難がかさなってきています。悪口や打たれるような小さな難は幾度か数も知れません。流罪・死罪の大難はすでに四度におよび、そのうち二度はさておいて、二度は王難で遠島に追放流罪されました。今度（竜の口法難および佐渡流罪）はすでにわが身命におよぶもので、生きながらえることがむしろ不思議なくらいです。そのうえ、弟子も檀那もいうにおよばず、わずかに聴聞した俗人なども捕えられて重罪に処されているのは、謀反人などに対するようなものです。

「障りいまだ除かざる者を怨となし、聞くことを喜ばざる者を嫉と名づく」

（005 開目抄）

同士の怨嫉71ページー8行）

夫れ、小児に灸治を加うれば、必ず父母をあだむ。重病の者に良薬をあたうれば、定めて口に苦しとうれう。在世なおしかり、乃至像末辺土をや。山に山をかさね、波に波をたたみ、難に難を加え、非に非をますべし。

（005開目抄）

難を乗り越える72ページー5行）

日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれをもいだきぬべし。

（005 開目抄）

御本仏の大慈悲72ページー13行）

日蓮の法華経の理解力は、天台大師、伝教大師に比べて、千万が一分にもおよびませんが、難を忍び慈悲の勝れている点で は、天台、伝教も敬い、畏怖（恐れかしこまること）の心をも

つでありましょう。

「数々見擯出（しばしば擯出せられん）」等云々。日蓮、法華経のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかんがせん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず。いわんや余人をや。末法の始めのしるし「恐怖悪世の中」の金言のあうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり。

（005開目抄（上・下））

御本仏の境涯・確信73ページ－8行）

経文（きょうもん）に我（わ）が身（み）符合（ふごう）せり。御勘気（ごかんき）を被（かぶ）れば、いよいよ悦（よろこ）びを増（ま）すべし。

（005 開目抄（かいもくしょう）（上（じょう）・下）

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）74ページー2行）

例せば、世尊、提婆達多を「汝愚人、人の唾を食らう」と罵詈せさせ給いしかば、毒箭の胸に入るがごとくおもいて、うらみて云わく「瞿曇は仏陀にはあらず。我は斛飯王の嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が一類なり。いかにあしきことありとも、内々教訓すべし。これら程の人天大会に、これ程の大禍を現に向かって申すもの、大人・仏陀の中にあるべしや。されば、先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生々世々に大怨敵となるべし」

（005
開目抄（かいもくしょう）
人間弱点（にんげんじゃくてん）へのいましめ76ページ－17行）

善知識と申すは、一向師にもあらず一向弟子にもあらずあることなり。

（005 開目抄 善知識と悪知識80ページー9行）

善知識というのは、一向に師匠というのでもなく、また一向に弟子という立場でもないことをいうのです。

雨の猛きを見て竜の大なることをしり、華の大なるを見て池のふかきことはしんぬべし。

（005 開目抄）

瑞相85ページー8行）

雨が強く降るのを見て竜（雲）の大きいことを知ることができ、蓮華の花が大きいのを見て池の深いことが知られるのです。

万難（ばんなん）をすてて道心（どうしん）あらん者（もの）にしるしとどめ留（とど）めてみせん。記（しる）

（005開目抄（かいもくしょう）（上（じょう）・下）

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）94ページー16行）

一滴をなめて大海のしおをしり、一花を見て春を推せよ。

（005 開目抄）

指導者100ページ－17行）

いったい　嘗　だいかい　潮　知　いっか　み　はる　すい
かいもくしょう
しどうしゃ

当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし。

（005 開目抄（上・下）御本仏の境涯・確信101ページ－7行）

今の時代、日本の国でもっとも富めるものは日蓮です。命は法華経に捧げ、名を未来に残していくのです。

法華経の六難九易を弁うれば、一切経よまざるにしたがうべし。

（005開目抄 難を乗り越える101ページ－8行）

日蓮といいし者は、去年九月十二日子丑時に頸はねられぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、雪中にしるして有縁の弟子へおくれば、おそろしくておそろしからず。みん人いかにおじぬらん。

（005開目抄（上・下）御本仏の境涯・確信102ページ－8行）

日蓮というものは去年（文永八年）の九月十二日子丑の時（夜半）にくびをはねられました。（すなわち凡夫の肉身は竜の口に

おいて断ち切られ、久遠元初の自受用報身如来とあらわれたのです)。そして佐渡の国へ流罪されて、翌年の二月、雪深い季節にこの書(「開目抄」)を認めて、縁のある弟子へ送るのです。この書を拝する人は、末法に正法を弘めゆくときにかならず起こる大難を一往恐れるでしょうが、妙法弘通の決意がかたければ何を恐れることがありましょうか。しかし、その決心のない人はどれほど恐れることでしょうか。

勧持品に云わく「ただ願わくは 慮 いをなしたまわざれ。仏 滅度して後、恐怖悪世の中において、我らは当に広く説くべし。諸 の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀 杖を加うる者有らん。我らは皆当に忍ぶべし。悪世の中の比丘は、邪智にして心 諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充 満せん。あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って、自 ら真の道を行ずと謂って、人間を軽 賤する者有らん。利養に貪 著するが故に、

白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん。この人は悪心を懐き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮りて、好んで我らが過を出ださん○常に大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん○濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん○濁世の悪比丘は、仏の方便、宜しきに随って説きたも

うところの法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」等云々。

記の八に云わく「文に三つあり。初めに一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり。次に一行は道門増上慢の者を明かす。三に七行は僭聖増上慢の者を明かす。この三つの中、初めは忍ぶべし。次は前に過ぐ。第三は最も甚だし。後々の者は転た識り難きをもっての故に」等云々。

（005 開目抄

大地は指さばはずるとも、春は花はさかずとも、三類の敵人必ず日本国にあるべし。

（005 開目抄）

三類の強敵102ページー12行）

三類の強敵105ページー7行）

仏と提婆とは身と影とのごとし。生々にはなれず。

（005開目抄）

仏と魔111ページー10行）

天台云わく「今の我が疾苦は皆過去に由る。今生の修福は報、将来に在り」等云々。

（005開目抄

病気112ページー13行）

詮（せん）ずるところは、上品（じょうぼん）の一闡提人（いっせんだいにん）になりぬれば、順次生（じゅんじしょう）に必（かなら）ず無間獄（むけんごく）に堕（お）つべきゆえに現罰（げんばち）なし。

（005 開目抄（かいもくしょう））

罰（ばち）113ページ－11行）

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の塵をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、法華経をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経等について後生をごせよ、父母の頸を刎ねん、念仏申さずばなんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用い

じとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等とちかいし願いやぶるべからず。

（005開目抄（上・下）

御本仏の境涯・確信114ページ－1行）

（諸天善神の加護があるかないかを論じてきたが）つまるところ諸天善神も日蓮を見捨てるならば見捨てなさい。たとえどのような難にあったとしても、身命をなげうって正法弘通に邁進するのみです。舎利弗が六十劫という長い間菩薩行を積みながら、途中

で退転したのは、婆羅門が舎利弗の目を欲しいと責められたのに耐えられなかったためです。また久遠五百塵点劫および三千塵点劫の昔に法華経の下種を受けた者が三千塵点劫や五百塵点劫の間悪道（苦しみの状態）におちていたのも、修行中に悪知識（仏道修行を妨げる者のこと）にあって退転したからです。善きにつけ悪いことにつけ法華経を捨てることは地獄に堕ちる行為です。今こそ一生成仏、正法流布の大願を立てましょう。法華経を捨てて観経等の念仏の信仰に入り後生の極楽浄土を願うならば日本国の位をゆずろう、との誘惑があっても、また念仏を唱えな

けれ父母の首をはねるとの脅迫があっても、その他のいろいろな大難がおこってきても、知者に日蓮の立てる法門が破られないかぎりは絶対に他の教えにはしたがうことはありません。それ以外の大難は風の前の塵のようなものです。私は日本の柱となりましょう（主の徳）私は日本の眼目となりましょう（師の徳）私は日本の大船となりましょう（親の徳）等と、主師親の三徳をもって末法のあらゆる人びとを救おうとの誓いは絶対に破ることがないのです。

鉄（くろがね）を熱（や）くにいとうきたわざれば、きず隠（かく）れてみえず。
度々（たびたび）責（せ）むれば、きず現（あら）わる。麻（あさ）の子（み）をしぼるに、つよく責（せ）めざれば、油（あぶら）少なきがごとし。

005 開目抄（かいもくしょう）

自（みずか）らの成長（せいちょう）115ページー8行）

諸経は智者なお仏にならず、この経は愚人も仏因を種うべし。

（005 開目抄）

妙法の偉大さ117ページー5行

我ならびに我が弟子、諸難ありとも疑う心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。現世の安穏ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕教えしかども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならいは、約束せし事をまことの時はわするるなるべし。

（005 開目抄

難を乗り越える117ページー7行）

私（日蓮大聖人）と私の弟子はどのような大難にあっても、妙法を疑う心をおこさなければ、自然に成仏の境界にいたるでしょう。たとえ諸天善神が守護しないからといって、法華経の大功徳を疑ってはなりません。現在が安穏でないことを嘆いてはなりません。わが弟子に朝晩このこと（難の起こること）を教えてきたのに、疑いを起こしてみな退転していまいました。拙いものの習いとして、平常の時に約束したことをまことの時に忘れるのです。

夫れ、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水をいとう。水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう。折伏の者は摂受をかなしむ。

無智・悪人の国土に充満の時は、摂受を前とす。安楽行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は、折伏を前とす。常不軽品のごとし。

（005 開目抄

折伏118ページー17行）

およそ摂受と折伏の二つの法門は水と火のような関係です。火は水をいとい、水は火をにくんで、相容れません。摂受のものは折伏するものを冷笑し、折伏のものは摂受の手ぬるいのを見て悲しみます。仏法に無智な人、悪人が国土に充満している時は、摂受を第一に立てて法を弘めます。安楽行品のようにするのです。反対に邪智の人、謗法のものが多い時には、折伏を第一に立て常不軽品のように法を弘めていくのです。

「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等。天台云わく「時に適うのみ」等云々。

（005 開目抄）

時を知る119ページー17行）

（章安大師のいわく）「（摂受と折伏は）適切にどちらを用いどちらを捨てるかを判断して、一律にすべきではない」と。天台大師は「（摂受と折伏のいずれを取るかは）時によるのみである」といっています。

我が父母を人の殺さんに、父母につげざるべしや。悪子の酔狂して父母を殺すを、せいせざるべしや。悪人、寺塔に火を放たんに、せいせざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。

（005開目抄）

折伏121ページー2行

日蓮は日本国の諸人にしゅうし父母なり。

（005開目抄（上・下）御本仏の境涯・確信121ページー6行）

日蓮は日本のすべての人にとって主であり、師であり、親であるのです。

無道心の者、生死をはなるることはなきなり。

（005開目抄）

求道（行学の二道）121ページー8行

愚人（ぐにん）にほめられたるは第一（だいいち）のはじなり。恥（ち）

（005開目抄（かいもくしょう）

人生（じんせい）・生（い）き方（かた）121ページー11行）

愚人（ぐにん）にほめられることは最大（さいだい）の恥（はじ）です。

観心とは、我が己心を観じて十法界を見る、これを観心と云うなり。譬えば、他人の六根を見るといえども、いまだ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向かうの時、始めて自具の六根を見るがごとし。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 信・不信 125ページー6行）

観心というのは自分自身の生命を思い浮かべて自己の生命にそなわっている十方界（十界）を明らかに見ることを観心というので

す。たとえば他人の眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を見ることはできますが、自分自身の六根は見ることができないので知ることができません。明らかな鏡（御本尊）に向かうときはじめて自分の六根を見ることができるようなものです。

今しばしば他面を見るに、ただ人界のみに限って余界を見ず。自面もまたかくのごとし。いかんが信心を立てんや。

答う。しばしば他面を見るに、ある時は喜び、ある時は瞋り、ある時は平らかに、ある時は貪り現じ、ある時は癡か現じ、ある時は諂曲なり。瞋るは地獄、貪るは餓鬼、癡かは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平らかなるは人なり。他面の色法においては六道共にこれ有り。

四聖は冥伏して現ぜざれども、委細にこれを尋ねばこれ有るべし。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 生命とその尊厳 127ページ－3行）

今よく他人の顔を見ても、ただ人界ばかりがあらわれていて他の九界は見られません。同じように自分の顔を見てもまた人界ばかりで、どうして十界が互具するということが信じられるでしょうか。答えていうには、今よくよく他人の相を見るとあるときは喜び、あるときは瞋り、あるときは平らかに、あるときは貪りの表情を

現し、あるときは癡を現じ、ある時は諂曲（おごったり、へつらったりする修羅の相）です。これらはすべて六道が輪廻する姿であって、嗔るのは地獄、貪るのは餓鬼、癡は畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平らかなるは人界なのです。このように他人の相には六道がすべてそなわっているのであり、四聖（仏・菩薩・縁覚・声聞の四界）は冥伏していて日常には現れませんが、くわしく探し求めるならばかならずそなわっているのです。

「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」。涅槃経に云わく「大乗を学する者は、肉眼有りといえども、名づけて仏眼となす」等云々。末代の凡夫、出生して法華経を信ずるは、人界に仏界を具足するが故なり。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 一生成仏・仏界湧現 127ページ-15行）

十界互具、これを立つるは、石中の火・木中の花、信じ難けれども、縁に値って出生すればこれを信ず。人界所具の仏界は水中の火・火中の水、最もはなはだ信じ難し。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 一生成仏・仏界湧現128ページ-15行）

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す、我らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 妙法の偉大さ 134ページ-17行）

釈尊の因行（仏になるために尽くしたすべての修行）と果報（仏のもつすべての福徳）は、すべて妙法蓮華経の五字（御本尊）にそなわっています。私たちはこの五字を受持すれば

自然にその因果を譲り与えられるのです。

「我がごとく等しくして異なることなからしめん。我が昔の願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ。一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」。妙覚の釈尊は我らが血肉なり。因果の功徳は骨髄にあらずや。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 一生成仏・仏界湧現 135ページー3行）

「（法華経を説いてあらゆる衆生に即身成仏の教えを与えたので）仏と衆生は等しくなり差別がなくなった。仏がその昔に

願ったところのあらゆる衆生を悟りの境地に至らせたいとの誓いが、今はすでに満足し、あらゆる衆生をすべて成仏への道に入らしめることができた」と（法華経方便品に）あります。総じて御本尊を信じ持つとき、私たちの血や肉は妙覚の釈尊と同じであり、仏が久遠の遠い昔から積んできた、すべての功徳が骨の髄となっていくのです。

「この好き良薬」とは寿量品の肝要たる名・体・宗・用・教の南無妙法蓮華経これなり。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 妙法の偉大さ141ページ14行）

まさ　し
当に知るべし、この四菩薩、折伏を現ずる時は賢王と成
しぼさつ　しゃくぶく　げん　とき　けんおう　な
って愚王を誡責し、摂受を行ずる時は僧と成って正法
ぐおう　かいしゃく　しょうじゅ　ぎょう　とき　そう　な　しょうほう
を弘持す。
ぐじ

（006
如来滅後五五百歳始観心本尊抄
にょらいのめつごのごのごひゃくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう
折伏
しゃくぶく
145ページ－12行）

この時、地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となす
一閻浮提第一の本尊この国に立つべし。月支・震旦にいまだこの本尊有さず。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 妙法の偉大さ146ページ－4行）

（経釈の予言どおりの末法濁悪の）時代に地涌千界の大菩薩が世に現れて、本門の釈尊を脇士とする一閻浮提第一の本尊がこの日本に建立されるのでありましょう。この御本尊はインドにも

中国にもいまだ出現したことのない御本尊なのです。

天晴れぬれば地明らかなり。法華を識る者は世法を得べきか。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 仏法と社会146ページ-15行）

天が晴れれば大地は自然に明るくなります。法華を識る者（大聖人）は天が晴れるごとくで、世の中の事象も当然明らかに知ることができるのです。

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の内にこの珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 御本仏の大慈悲 146ページ-16行）

一念三千をしらない末法の人びとに対して久遠元初の御本仏（日蓮大聖人）は大慈悲を起こし、妙法五字に一念三千の球をつつんだ独一本門の大御本尊を顕して、後の世の仏法に未熟な衆生の頸に懸けてくださったのです。

諸病の中には法華経を謗ずるが第一の重病なり。諸薬の中には南無妙法蓮華経は第一の良薬なり。

（008法華取要抄

謗法のいましめ155ページー1行）

例(れい)せば不軽品(ふきょうほん)のごとし。我(わ)が門弟(もんてい)は順縁(じゅんえん)なり。日本国(にほんこく)は逆縁(ぎゃくえん)なり。

（008法華取要抄(ほっけしゅようしょう)

折伏(しゃくぶく)156ページー9行）

日蓮は広・略を捨てて肝要を好む。いわゆる、上行菩薩所伝の妙法蓮華経の五字なり。

（008法華取要抄

妙法の偉大さ156ページー14行）

かくのごとく国土乱れて後に上行等の聖人出現し、
本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に
妙法蓮華経の広宣流布疑いなきものか。

（008 法華取要抄）

広宣流布159ページー6行

夫れ、仏法を学せん法は、必ずまず時をならうべし。

（009撰時抄）

時を知る160ページー7行）

およそ仏法を修学するには、かならずまず“時”を習うべきです。

彼(か)の時鳥(ほととぎす)は春(はる)をおくり、鶏鳥(にわとり)は暁(あかつき)をまつ。畜生(ちくしょう)すら、なおかくのごとし。いかにいわんや、仏法(ぶっぽう)を修行(しゅぎょう)せんに時(とき)を糺(ただ)さざるべしや。

（009撰時抄(せんじしょう)

時(とき)を知(し)る160ページ－11行）

人路をつくる。路に迷う者あり。作る者の罪となるべし
や。良医薬を病人にあたう。病人嫌って服せずして死
せば、良医の失となるか。

（009撰時抄

折伏161ページー9行）

次の五百年には「我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」（009撰時抄）

時を知る163ページ6行）

ただし、彼の白法隠没の次には、法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の、一閻浮提の内八万の国あり、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下ならびに万民までも、今日本国に弥陀称名を四衆の口々に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

（009撰時抄）

広宣流布164ページー4行）

国主等そのいさめを用いずば、隣国におおせつけて彼々の国々の悪王・悪比丘等をせめらるるならば、前代未聞の大闘諍、一閻浮提に起こるべし。その時、日月の照らすところの四天下の一切衆生、あるいは国をおしみ、あるいは身をおしむゆえに、一切の仏菩薩にいのりをかくともしるしなくば、彼のにくみつる一りの小僧を信じて、無量の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆、頭を地につけ掌を合わせて、一同に南無妙法蓮華経ととなう

べし。

（009撰時抄（せんじしょう）

広宣流布（こうせんるふ）165ページー4行）

道心あらん人々は、これを見ききて悦ばせ給え。正像二千年の大王よりも、後世をおもわん人々は末法の今の民にてこそあるべけれ。これを信ぜざらんや。彼の天台座主よりも、南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし。

009 撰時抄

妙法を持った人の位

166ページ-12行）

仏道を求める人びとはこのことを見聞きして喜びなさい。正像二千年の大王と生まれるよりも、後世の成仏を願う人は、末法の

現在の人びとのほうが、即身成仏の機会を与えられているのです。どうして、これを信じられないでいられましょうか。あの天台宗の座主として、仏法の最高権威者であった者よりも、末法において南無妙法蓮華経を唱える癩病人となりたいものです。

これをもって案ずるに、大集経の白法隠没の時に次いで、法華経の大白法の日本国ならびに一閻浮提に広宣流布せんことも疑うべからざるか。

（009 撰時抄）

広宣流布173ページー3行）

法華経をひろむる者は、日本の一切衆生の父母なり。章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。されば、日蓮は、当帝の父母、念仏者・禅衆・真言師等が師範なり、また主君なり。

（009撰時抄

御本仏の境涯・確信173ページ-15行）

この経を釈して云わく「浅きは易く深きは難しとは、釈迦の所判なり。浅きを去って深きに就くは、丈夫の心なり。

（009撰時抄）

信仰者の姿勢182ページー3行）

この経文を（伝教大師が）釈していうのには、「浅きは易く深きは難しとは釈尊の説く立て分けであり、浅きを去って深きに就くのは丈夫（調御丈夫と呼ばれる釈尊のこと）の心である」

とあります。

仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親、乃至天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の正法、経文の面に現前なり。この深法、今、末法の始め五の五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきや

（009撰時抄）

広宣流布184ページー3行）

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありしかども、いまだ日蓮ほど法華経のかたうどして国土に強敵多くもうけたる者なきなり。まず眼前の事をもって日蓮は閻浮第一の者としるべし。

（009撰時抄

御本仏の境涯・確信199ページー3行）

権大乗経の題目の広宣流布するは、実大乗経の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は、これをすいしぬべし。権経流布せば実経流布すべし。権経の題目流布せば、実経の題目また流布すべし。欽明より当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず、南無妙法蓮華経と唱えよと他人をすすめ、我と唱えたる智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来れば愚王ほろぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人南無妙法蓮華経

と唱えば愚人のこれに随わんこと、影と身と、声と響きとのごとくならん。

日蓮は日本第一の法華経の行者なること、あえて疑いなし。これをもってすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の内にも、肩をならぶる者は有るべからず。

（009撰時抄

御本仏の境涯・確信199ページ-10行）

悦(よろこ)ばしきかなや、楽(たの)しきかなや、不肖(ふしょう)の身(み)として今度(このたび)心田(しんでん)に仏種(ぶっしゅ)を植(う)えたる。

（009撰時抄(せんじしょう)

福運(ふくうん)203ページー11行）

外典に云わく「未萌をしるを聖人という」。内典に云わく「三世を知るを聖人という」。

余に三度のこうみょうあり。

（009撰時抄）

御本仏の境涯・確信204ページー5行）

外典（仏教典以外の書）には「将来に起こるべきことを知る人を聖人いう」とあります。仏教の教えでは「過去、現在、未来の三世を知っている人を聖人という」とあります。日蓮には三度の

大功績（三度の予言がすべて的中したこと）があります。
王地に生まれたれば身をば随えられたてまつるようなり
とも、心をば随えられたてまつるべからず。
（009撰時抄）

信仰者の姿勢204ページー15行）

経に云わく「いわゆる諸法の如是相」と申すは何事ぞ。十如是の始めの相如是が第一の大事にて候えば、仏は世にいでさせ給う。「智人は起をしる。蛇はみずから蛇をしる」とは、これなり。

（009 撰時抄

指導者 205ページ－7行）

衆流あつまりて大海となる。微塵つもりて須弥山となれり。日蓮が法華経を信じ始めしは、日本国には一滴一微塵のごとし。法華経を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覚の須弥山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。仏になる道は、これよりほかに、またもとむることなかれ。

（009 撰時抄

地道205ページー9行）

多くの川が集まって大海となり、小さな塵が積もりつもって須弥山となります。日蓮が法華経を信じ始めたことは、日本の国にとっては一つのしずく、一つの微塵のようなものですが、二人、三人、十人、百千万億人と南無妙法蓮華経を唱え伝えていくならば、妙覚の須弥山ともなり、大涅槃という悟りの大海ともなるでありましょう。成仏への道もこの原理のほかに求めてはなりません。

されば、現に勝れたるを勝れたりということは、慢にに似てて大功徳となりけるか。

（009撰時抄）

御本仏の境涯・確信207ページ－11行）

当世日本国の智人等は衆の星のごとし、日蓮は満月のごとし。

（009撰時抄 御本仏の境涯・確信 208ページ16行）

我が弟子等、心みに法華経のごとく身命もおしまず修行して、この度仏法を心みよ。

（009 撰時抄）

勇気・忍耐 210ページ-1行）

日本国にしてこの法門を立てんは大事なるべし

（009撰時抄

立正安国211ページー14行）

夫れ、老狐は塚をあとにせず、白亀は毛宝が恩をほうず。畜生すら、かくのごとし。いおうや人倫をや。されば、古の賢者・予譲といいし者は剣をのみて智伯が恩にあて、こう演と申せし臣下は腹をさいて衛の懿公が肝を入れたり。いかにいおうや、仏教をならわん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。

この大恩をほうぜんには、必ず仏法をならいきわめて叶うべきか。

（010 報恩抄）

報恩 212ページー7行）

およそ狐は自分が生まれた古い塚を忘れずに、老いて死ぬときも首を古塚に向けるといわれます。また毛宝（中国・南北朝時代の武将）に助けられた白い亀は、後に戦いに敗れた毛宝を背にのせて助け、その恩に報いたといいます。このように、畜生ですら恩を知っています。いわんや人間に報恩の心がなくてよいでしょうか。昔、中国の予譲（中国・戦国時代の人）という賢人は、主君智伯の恩に感じ、智伯を滅ぼした超の襄子を刺して恩に

むく
報いようとはかりました。また衛の公演は、主君の懿公が戦死した
えい　こうえん　しゅくん　いこう　せんし
しゅくん　はじ
とき主君の恥をさらすまいとして、おのれの腹を割き、主君の肝を
はら　さ　しゅくん　きも
い　し
入れて死んだといいます。これらは世法上の報恩であり、ましてや
せほうじょう　ほうおん
ぶっぽう　まな
仏法を学ぶもの、どうして父母、師匠、国家社会の恩を忘れるこ
ふぼ　ししょう　こっかしゃかい　おん　わす
だいおん　ほう
とがあってよいでありましょうか。それでは、この大恩を報ずるため
ぶっぽう　おうてい
にはどうすればよいでしょうか。それには、かならず仏法の奥底を
まな　しゅぎょう　ちしゃ　おん　ほう
学び修行して、智者とならなければ恩を報ずることはできないでし
よう。

彼は謗法の者は国に充満せりといえどもささえ顕す智人なし。かるがゆえになのめなりき。譬えば、師子のねぶるは手をつけざればほえず、はやき流れは櫓をささえざれば波たかからず、盗人はとめざればいからず、火は薪を加えざればさかんならず。謗法はあれども、あらわす人なければ、国もおだやかなるににたり。

（010 報恩抄 折伏 239ページー5行）

「法華経を讃むといえども、還って法華の心を死す」等云々。これらをもってもうに、法華経をよみ讃歎する人々の中に、無間地獄は多く有るなり。嘉祥・慈恩すでに一乗誹謗の人ぞかし。

（010 報恩抄）

信仰者の姿勢241ページ－13行）

（伝教大師の「法華秀句」に）「法華経を讃めるといえども、かえって法華経の心を死す」とあります。これをとおして思うこと

は、むしろ法華経を読み法華経を讃嘆する人びとのなかに、かえって無間地獄におちる人が多くあるということです。中国の嘉祥大師という人びとは、法華経を一往はたたえているようですが、じつには法華一乗を誹謗する人たちなのです。

彼の伝を見るに、云わく「今畏の遺形を観るに、漸く縮小を加え、黒皮隠々として骨それ露なり」等云々。彼の弟子等は死後に地獄の相の顕れたるをしらずして徳をあぐなどおもえども、かきあらわせる筆は畏が失をかけり。死してありければ、身ようやくつづまりちいさく、皮はくろし、骨あらわなり等云々。人死して後色の黒きは地獄の業と定むることは、仏陀の金言ぞかし。

臨終（りんじゅう）243ページ－8行）

南無阿弥陀仏の用も、南無大日真言の用も、観世音菩薩の用も、一切の諸仏・諸経・諸菩薩の用、皆ことごとく妙法蓮華経の用に失わる。彼の経々は妙法蓮華経の用を借らずば、皆いたずらのものなるべし。当時眼前のことわりなり。日蓮が南無妙法蓮華経と弘むれば、南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひるがごとく、秋冬の草のかるるがごとく、氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

（010 報恩抄（ほうおんしょう）
御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）
257ページ－11行）

日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、人ごとに有智・無智を
きらわず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし。
このこといまだひろまらず。一閻浮提の内に仏の滅後
二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、
南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もおしまず唱うる
なり。

（010 報恩抄）

広宣流布261ページー4行）

日本および中国、インド、さらに全世界において、だれかれとなく仏法を理解しているいないにかかわりなく、みんないっしょに、他のことをさしおいて南無妙法蓮華経と唱えるべきです。この仏法は、いまだ弘まっていません。全世界のなかで、釈尊がなくなってから二千二百二十五年の間、一人も唱えなかった題目です。ただ日蓮一人が、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と、声も惜しまずに唱えた仏法なのです。

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり。無間地獄の道をふさぎぬ。

（010 報恩抄）

御本仏の大慈悲 261ページー10行）

日蓮の慈悲が広く大きいならば、南無妙法蓮華経は末法万年以上、未来永劫に弘まっていくでありましょう。日本の国にあらゆる人びとの宗教に対する盲目（無知）を開く力があり、無間

地獄への道をふさぐものなのです。

極楽百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。これひとえに、日蓮が智のかしこきにはあらず、時のしからしむるのみ。春は花さき、秋は菓なる。夏はあたたかに、冬はつめたし。時のしからしむるにあらずや。

（010 報恩抄

時を知る 261ページ－12行）

たとえ極楽で百年の間修行しても、穢土で一日修行した功徳

には及びません。正法、像法二千年の間の仏法の弘通は、末法の一時の弘通に劣るのです。このことは、ひとえに日蓮の智慧がすぐれているからというのではなく、弘めるべき時節がきたということです。春には花が咲き、秋には菓がなり、夏には暖かく、冬は冷たい、といったことも時の符節にかなっていることによるのではないでしょうか。

されば、花は根にかえり、真味は土にとどまる。この功徳は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし。

（010報恩抄

報恩262ページー5行）

「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」

（012四信五品抄

指導者265ページ-14行）

妙楽大師の釈に「教えがいよいよ高く勝れるほど、その教えを修行する人の位はいよいよ低くなる」とあります。

いわゆる五品の初・二・三品には、仏正しく戒・定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧また堪えざれば、信をもって慧に代え、信の一字を詮となす。不信は一闡提・謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり。

（012四信五品抄

信・不信266ページー2行）

もし知識に値わば宿善還って生ず、もし悪友に値わば則ち本心を失う

（012 四信五品抄

善知識と悪知識266ページー6行）

問う。汝が弟子、一分の解無くして、ただ一口に南無妙法蓮華経と称うるものは、その位いかん。

答う。この人は、ただ四味三教の極位ならびに爾前の円人に超過するのみにあらず、はたまた真言等の諸宗の元祖、畏・儼・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり。

請う、国中の諸人、我が末弟等を軽んずることなかれ。進んで過去を尋ぬれば、八十万億劫供養せし大菩薩

なり。あに熙連一恒の者にあらずや。退いて未来を論ずれば、八十年の布施に超過して五十の功徳を備うべし。天子の襁褓に纏われ、大竜の始めて生ずるがごとし。蔑如することなかれ、蔑如することなかれ。

（012 四信五品抄 270ページ－1行）

妙法を持った人の位

問う、あなた（日蓮大聖人のこと）の弟子で、仏法に対する理解もなくてただ南無妙法蓮華経と唱える人の位はどのようなものですか。答う、この御本尊受持した人は、爾前の諸経である四味

三教の最高の位の人と爾前経のなかの円教を行ずる人よりもすぐれているだけでなく、また真言宗等の諸宗の元祖、つまり善無畏、智儼、慈恩、吉蔵、道宣、達磨、善導たちの位よりも百千万億倍もすぐれているのです。そこで願うことは、日本の国の人びとが私の末弟を軽んじてはならないということです。彼らは過去において八十万億劫という長い間、仏を供養した大菩薩です。恐らく涅槃経に説かれる熙連一恒の者（中インドの川の砂の数ほど多くの仏のもとで修行した故に、今この経を信ずることができた人のこと）でしょう。また彼らは下って未来には、

さんぎょう　さいこう　くらい　ひと　にぜんきょう　えんぎょう　ぎょう　ひと
しんごんしゅうとう　しょしゅう　がんそ
ぜんむい　ちごん　じおん　きちぞう　どうせん　だるま　ぜんどう　くらい
ひゃくせんまんおくばい　ねが　にほん　くに
ひと　わたし　まってい　かろ　かれ
かこ　はちじゅうまんおくこう　なが　あいだ　ほとけ　くよう　だいぼさつ
おそ　ねはんぎょう　と　きれんいちごう　もの　ちゅう　かわ　すな
かず　おお　ほとけ　しゅぎょう　ゆえ　いま　きょう　しん
ひと　かれ　くだ　みらい

八十年の間布施行をしてきた者にも勝る五十のもろもろの功徳を備えるでありましょう。ちょうど生まれたばかりの天皇の子が産衣につつまれたようなものであり、また生まれたての大竜のようなものなのです。ゆえにけっしてさげすむようなことがあってはなりません。

「もし悩乱する者は頭七分に破れ、供養することあらん者は福十号に過ぐ」

（012 四信五品抄）

功徳270ページー8行）

「もし正法を誹謗する者は頭が七つに破れ、反対に法華経に供養する者は十号（十種の仏の尊称）をそなえた仏にまさる功徳福運に恵まれるのである」

国中の疫病は「頭七分に破る」なり。罰をもって徳を惟うに、我が門人等は「福十号に過ぐ」疑いなきものなり。

（012四信五品抄 270ページー12行）

功徳

仏法には賢げなるような人なれども、時により機により国により先後の弘通によることを弁えざれば、身心を苦しめて修行すれども験なきことなり。

（013 下山御消息

時を知る 273ページー10行）

教主釈尊より大事なる行者を、法華経の第五の巻をもって日蓮が頭を打ち、十巻共に引き散らして散々に踏みたりし大禍は、現当二世にのがれがたくこそ候わんずらめ。

（013下山御消息

罰299ページー15行）

「世間の人々の用いねば」とは、一旦のおろかのことなり。上の御用いあらん時は、誰人か用いざるべきや。その時はまた用いたりとも何かせん。人を信じて法を信ぜず。

（013下山御消息

仏法と社会301ページ－5行）

末代悪世の凡夫は何物をもって本尊と定むべきや。

答えて云わく、法華経の題目をもって本尊とすべし。

（014 本尊問答抄）

御本尊は仏の生命302ページー6行）

末法の悪い時代に生きる凡夫は、いったい、何物をもって本尊と定めるべきでしょうか。答えていうのには、法華経の題目（南無妙法蓮華経）をもって本尊とすべきです。

本尊（ほんぞん）とは勝（すぐ）れたるを用（もち）いるべし。

（014本尊問答抄（ほんぞんもんどうしょう））

妙法（みょうほう）の偉大（いだい）さ303ページー16行

本尊（ほんぞん）とは、もっともすぐれたるものをたてるべきです。

かくのごとく仏法の邪正乱れしかば、王法も漸く尽きぬ。結句は、この国、他国にやぶられて亡国となるべきなり。

（014本尊問答抄 立正安国311ページー10行）

日蓮がいさめを御用いなくて、真言の悪法をもって大蒙古を調伏せられば、日本国還って調伏せられなん。「還って本人に著きなん」と説けりと申すなり。

（014 本尊問答抄 罰314ページー4行）

日蓮の諫めをとりあげずに、真言宗の悪法で蒙古国の調伏（祈りにより相手を倒そうとすること）を祈られれば、かえって逆に日本の国が調伏されてしまうでしょう。「（法華経の行者を迫害

しようとする者（もの）は）かえって自身（じしん）にその報（むく）いをうる」と説（と）かれている
のは、このことをいうのです。

一心法界の旨とは、十界三千の依正・色心・非情草木・虚空刹土、いずれも除かずちりも残らず一念の心に収めて、この一念の心、法界に遍満するを指して、万法とは云うなり。

（015一生成仏抄

生命とその尊厳316ページ－10行）

故に、妙法と唱え蓮華と読まん時は、我が一念を指して
妙法蓮華経と名づくるぞと深く信心を発すべきなり。
（015 一生成仏抄
信仰者の姿勢316ページ－16行）

すべて一代八万の聖教、三世十方の諸の仏菩薩も、我が心の外に有りとはゆめゆめ思うべからず。しかれば、仏教を習うといえども、心性を観ぜざれば、全く生死を離るることなきなり。もし心外に道を求めて万行万善を修せんは、譬えば、貧窮の人、日夜に隣の財を計えたれども、半銭の得分もなきがごとし。

しかれば、天台の釈の中には「もし心を観ぜざれば、重罪滅せず」とて、もし心を観ぜざれば、無量の苦行と

なると判ぜり。故に、かくのごときの人をば、「仏法を学して外道となる」と恥じしめられたり。ここをもって、止観には「仏教を学すといえども、還って外見に同ず」と釈せり。

（015 一生成仏抄）

信仰者の姿勢 317ページ－1行

あらゆる仏教の教えも、そしてそこに説かれているすべての仏や菩薩も自分の生命の外にある特別なものであるとは、けっして考えてはなりません。そうであるから、いくら仏教を習うといっ

ても、自分の生命に仏界がそなわっていることを信じなければ、
生老病死という人生の苦悩からのがれることはできません。もし
自分の生命の外のところで、苦悩からはなれる道をもとめてあらゆ
る修行やよいことを行ったとしても、それは貧しい人が、
一日中、隣の家の財産を勘定しても、半銭のもうけにもならな
いのと同じで、価値のないことなのです。そのことを妙楽大師が
「止観輔行伝弘決」のなかで「もし生命を観じて、その根本を悟ら
なければ、過去世からの重い罪を消すことはできない」といって、
自分の生命を観じてその根本を悟らなければ、その修行はかえっ

て大きな苦しみとなることを教えています。だからこのような人は、自分では仏法を学んでいるつもりでも、じっさいには外道（仏法以外の教え）を学んでいることになると、恥ずかしいこととされているのです。それゆえに天台大師は「摩訶止観」のなかで「仏教を学ぶといっても、かえって外道の考え方におちている」といっているのです。

仏の名を唱え、経巻をよみ、花をちらし、香をひねるまでも、皆、我が一念に納めたる功徳・善根なりと信心を取るべきなり。

（015 一生成仏抄）

信・不信 317ページー8行）

仏の名（南無妙法蓮華経）を唱え、方便品・寿量品の経文を読み、仏前にしきみをそなえ、香をつまむことまでも、すべて自分の生命におさまる功徳・善根になるという信心を身につけるべきで

す。

「衆生の心けがるれば土もけがれ、心清ければ土も清し」とて、浄土といい穢土というも、土に二つの隔てなし、ただ我らが心の善悪によると見えたり。衆生というも仏というも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名づけ、悟る時をば仏と名づけたり。

（015 一生成仏抄）

一念の力 317ページ-11行）

人びとの生命が濁れば生活の環境も濁り、逆に人びとの

生命が清らかであれば生活の環境も清らかになるのであって浄土（幸福な仏の世界）といっても穢土（悩みにみちた世界）といっても、別々にあるものではありません。ただそこに住む私たちの生命のよしあしによって決まると説かれています。衆生と仏という違いもこれと同じで、生命の実相に迷っているときを衆生といい、悟ったときを仏というのです。

一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば、必ず法性真如の明鏡と成るべし。

深く信心を発して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。いかようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華経と唱えたてまつるを、これをみがくとはいうなり。

（015一生成仏抄

勤行・唱題317ページー14行）

迷い悩む生命は磨かない鏡のようなものです。これを磨くなら

ば、くもりのない鏡のように、かならず真実の悟りの智慧の鏡へと変わるのです。深く信心をふるいおこして、昼も夜も朝も暁も、つねに油断しないで自分の生命を磨かなければなりません。どのようにして磨けばよいかといえば、（御本尊に）真剣に南無妙法蓮華経を唱え、信心にはげむことが生命を磨くことになるのです。

我ら衆生、無始曠劫より已来、妙法蓮華経の如意宝珠を片時も相離れざれども、無明の酒にたぼらかされて、衣の裏にかけたりとしらずして、少なきを得て足りぬと思いぬ。南無妙法蓮華経とだに唱え奉りたらましかば速やかに仏に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわずかなる戒をもって、あるいは天に生まれて大梵天・帝釈の身と成っていみじきことと思い、ある時は人に生まれて諸の国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成って、これ

程のたのしみなしと思い、少なきを得て足りぬと思い、悦びあえり。これを仏は、「夢の中のさかえ、まぼろしのたのしみなり。ただ法華経を持ち奉り、速やかに仏になるべし」と説き給えり。

（016 主師親御書

人生・生き方320ページ－13行）

仏滅度(ほとけめつど)して後(のち)、当世(とうせい)・末代悪世(まつだいあくせ)に法華経(ほけきょう)をありのままに
能(よ)く説(と)かん、これを難(かた)しとすと説(と)かせ給(たま)えり。
（016 主師親御書(しゅしんごしょ)
如説修行(にょせつしゅぎょう) 322ページー13行）

しかれば、善男子と申すは、男この経を信じまいらせて聴聞するならば、提婆達多程の悪人だにも仏になる。まして末代の人は、たとい重罪なりとも、多分は十悪をすぎず。まして深く持ち奉る人、仏にならざるべきや。

（016 主師親御書

功徳323ページー9行）

経に云わく「これは則ち勇猛なり。これは則ち精進なり。これを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」

（017一代聖教大意

勇気・忍耐343ページー4行）

されば、この三如是を三身如来とは云うなり。この三如是が三身如来にておわしましけるをよそに思いへだてつるが、はや我が身の上にてありけるなり。かく知りぬるを、法華経をさとれる人とは申すなり。

（019十如是事

一生成仏・仏界湧現355ページー3行）

「妙法蓮華経の体のいみじくおわしますは、いかような体にておわしますぞ」と尋ね出だしてみれば、我が心性の八葉の白蓮華にてありけることなり。

（019十如是事

一生成仏・仏界湧現356ページ－15行）

これを信じて一遍も南無妙法蓮華経と申せば、法華経を覚って如法に一部をよみ奉るにてあるなり。十遍は十部、百遍は百部、千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべきなり。かく信ずるを如説修行の人とは申すなり。

（019十如是事

如説修行357ページー5行）

この妙法蓮華経とは、我らが心性、総じては一切衆生の心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の御詞なり。無始より以来、我が身中の心性に迷って生死を流転せし身、今この経に値い奉って三身即一の本覚の如来を唱うるに顕れて現世にその内証成仏するを、即身成仏と申す。

（020 一念三千法門

一生成仏・仏界湧現 362ページー5行）

妙法蓮華経と唱うる時、心性の如来顕る。

（020 一念三千法門

一生成仏・仏界湧現 362ページー9行）

この娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申すごとく、「当に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に百界千如・三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これを耳に触るる一切衆生は功徳を得る衆生なり。

（020 一念三千法門

功徳 363ページ-1行）

この娑婆世界（現実社会）は、耳で仏法を聞いて成仏する国土なのです。前にも述べたように「当に知るべし、身土は一念三千な

ることを」といって、法華経(ほけきょう)はあらゆる衆生(しゅじょう)に身(み)に百界(ひゃっかい)千如(せんにょ)、三千世間(さんぜんせけん)をおさめるとの意味(いみ)を明(あき)らかにしているので、この法門(ほうもん)を耳(みみ)にしたすべての人(ひと)びとは、かならず功徳(くどく)を得(え)るのです。

法華経の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人も残らず成仏すべし。譬えば、春夏、田を作るに、早・晩あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の行者も、上・中・下根あれども、必ず一生の中に証得す。

（020 一念三千法門 一生成仏・仏界湧現 363ページ－9行）

この十如是（じゅうにょぜ）、三転（さんてん）によまること、三身即一身（さんじんそくいっしん）・一身即三身（いっしんそくさんじん）の義（ぎ）なり。三（みっ）つに分（わ）かるれども一（ひと）つなり。一（ひと）つに定（さだ）まれども三（みっ）つなり。

（020 一念三千法門（いちねんさんぜんほうもん））

勤行（ごんぎょう）・唱題（しょうだい）364ページー11行）

「正法もて国を治め、人民を邪枉せず。これを第三の懺悔を修すと名づく」。涅槃経に云わく「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」。止観に云わく「もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり」。弘決に云わく「礼楽前に駆せて、真道後に啓く」。

（025 災難対治抄

仏法と社会456ページ－15行）

修羅道とは、止観の一に云わく「もしその心、念々に常に彼に勝らんことを欲し、耐えざれば人を下し、他を軽しめ、己を珍ぶこと、鵄の高く飛んで下し視るがごとし。しかも、外には仁・義・礼・智・信を揚げて下品の善心を起こし、阿修羅の道を行ずるなり」

（026十法界明因果抄　人生・生き方464ページ－14行）

八の巻に云わく「もしまたこの経典を受持せん者を見て、その過悪を出ださば、もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病を得ん。もしこれを軽笑することあらば、当に世々に牙歯疎欠、醜唇・平鼻、手脚繚戻し、眼目角睞に、身体臭穢にして、悪瘡・膿血、水腹・短気、諸の悪重病あるべし」文。

（026十法界明因果抄

病気466ページー7行）

謗法の者に向かっては、一向に法華経を説くべし。毒鼓の縁と成さんがためなり。

（028 教機時国抄 折伏 478ページー6行）

謗法の者に対しては、ひたすら法華経（御本尊のこと）を説き折伏するべきです。それは毒鼓の縁を結んで（逆縁によって）、相手の人を将来成仏させんがためです。

時を知らずして法を弘めば、益無き上、還って悪道に堕つるなり。

（028 教機時国抄

時を知る 478ページー13行）

これらの本文を見れば、三類の敵人を顕さずんば、法華経の行者にあらず。これを顕すは、法華経の行者なり。

（028 教機時国抄

三類の強敵482ページー14行）

「謗とは背くなり」等云々。法に背くが謗法にてはあるか。天親の仏性論に云わく「もし憎背せば」等云々。この文の心は、正法を人に捨てさするが謗法にてあるなり。

（029 顕謗法抄
謗法のいましめ491ページー9行）

後世を願わん人は一切の悪縁を恐るべし、一切の悪縁より
は悪知識をおそるべしとみえたり。

（029 顕謗法抄
善知識と悪知識 497ページ－14行）

夫れ、仏法をひろめんとおもわんものは、必ず五義を存して正法をひろむべし。五義とは、一には教、二には機、三には時、四には国、五には仏法流布の前後なり。

（029 顕謗法抄 折伏 499ページ-1行）

もし智慧(ちえ)有(あ)って信心(しんじん)有(あ)ることなきは、この人(ひと)は則(すなわ)ち能(よ)く邪見(じゃけん)を増長(ぞうちょう)す。

（029顕謗法抄(けんほうぼうしょう)

信(しん)・不信(ふしん)506ページー15行）

ただすべからく汝仏にならんと思わば、慢のはたほこを倒おし、忿りの杖をすてて、ひとえに一乗に帰すべし。名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり。

（030持妙法華問答抄 信仰者の姿勢513ページー5行）

あなたが成仏したいと思うならば、ひたする慢心のはたほこ（小旗のついた槍のようなもの）を倒し、怒りの杖を捨てて、

一仏乗の妙法（南無妙法蓮華経）を信ずるべきです。名聞名利は今生の飾りであって、我を張り、偏見（かたよった物の見方）に執着する心は後生菩提（成仏）の足かせになっていまいます。

「唯我一人、能為救護（ただ我一人のみ、能く救護をなす）」の仏の御力を疑い、「以信得入」の法華経の教えの縄をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱え奉らざらんは、力及ばず、菩提の岸に登ること難かるべし。不信の者は「堕在泥梨」の根元なり。

（030 持妙法華問答抄 信・不信 514ページー5行）

受けがたき人身をうけ、値いがたき仏法にあいて、いかでか虚しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、また大小・権実のある中に、諸仏出世の本意、衆生成仏の直道の一乗をこそ信ずべけれ

（030持妙法華問答抄 信・不信514ページー8行）

受けがたい人間として生をうけ、あいがたい仏法にあいながら、どうしてむなしくしていられましょうか。同じように信心をとるなら

ば、大乗経（だいじょうきょう）、小乗経（しょうじょうきょう）、権教（ごんきょう）、実教（じっきょう）とあるなかで、諸仏（しょぶっ）が世（よ）に出現（しゅつげん）した目的（もくてき）の、あらゆる人（ひと）びとを即身成仏（そくしんじょうぶつ）させていける一乗（いちじょう）の法（ほう）（三大秘法（さんだいひほう）の南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう））をこそ信（しん）ずるべきです。

この理をしらず見ずして名聞・狐疑・偏執を致せるは、堕獄の基なり。ただ願わくは、経を持ち、名を十方の仏陀の願海に流し、誉れを三世の菩薩の慈天に施すべし。

（030 持妙法華問答抄 使命514ページー13行）

「一念信解（いちねんしんげ）」の功徳（くどく）は五波羅蜜（ごはらみつ）の行（ぎょう）に越（こ）え、「五十展転（ごじってんでん）」の随喜（ずいき）は八十年（はちじゅうねん）の布施（ふせ）に勝（すぐ）れたり。

（030 持妙法華問答抄（じみょうほっけもんどうしょう））

功徳（くどく）515ページー2行）

法華経（ほけきょう）をよみたもたん者（もの）を見て、かろしめ（軽）、いやしみ（賤）、にくみ（憎）、そねみ（嫉）、うらみ（恨）をむすばん（結）、その人（ひと）は、命（いのち）おわりて阿鼻大城（あびだいじょう）に入（い）らん

（030 持妙法華問答抄（じみょうほっけもんどうしょう）

罰（ばち）515ページー13行）

一切の仏法もまた人によりて弘まるべし。

（030 持妙法華問答抄

折伏 516ページー3行）

されば、持(たも)たるる法(ほう)だに第一(だいいち)ならば、持(たも)つ人(ひと)随(したが)って第一(だいいち)なるべし

（030 持妙法華問答抄(じみょうほっけもんどうしょう)
妙妙法(みょうみょうほう)を持(たも)った人(ひと)の位(くらい)
516ページー5行）

冥（みょう）の照覧（しょうらん）は恥ずかしからざらんや。地獄（じごく）の苦（くる）しみ、恐（おそ）るべし恐（おそ）るべし、慎（つつし）むべし慎（つつし）むべし。

（030 持妙法華問答抄（じみょうほっけもんどうしょう）

因果（いんが）の理法（りほう）516ページー8行）

臨終すでに今にありとは知りながら、我慢偏執・名聞利養に著して妙法を唱え奉らざらんことは、志の程無下にかいなし。甲斐

（030持妙法華問答抄
人生・生き方517ページー3行）

命すでに一念にすぎざれば、仏は一念随喜の功徳と説き給えり。

（030持妙法華問答抄 一念の力 517ページ-7行）

生涯（しょうがい）幾（いくばく）ならず。思（おも）えば一夜（いちや）の仮（かり）の宿（やど）を忘（わす）れて、いくばくの名利（みょうり）をか得（え）ん。また得（え）たりとも、これ夢（ゆめ）の中（なか）の栄（さか）え、珍（めずら）しからぬ楽（たの）しみなり。

（030 持妙法華問答抄（じみょうほっけもんどうしょう）人生（じんせい）・生（い）き方（かた）517ページ－11行）

経文には「一人一日の中に八億四千念あり。念々の中に作すところは、皆これ三途の業なり」等云々。

（031女人成仏抄 人間弱点へのいましめ520ページ－6行）

経文には「一人の人間が一日の間に思うことがらは八億四千もある。それらの次々に起きては消える思いの一つ一つはすべて三悪道へとおちる悪業である」とあります。

法華経を信ずれども、深く信ぜざる者は、半月の闇夜を照らすがごとし。深く信ずる者は、満月の闇夜を照らすがごとし。

（032 薬王品得意抄

信・不信527ページー3行）

問うて云わく、法華経の意をもしらず、ただ南無妙法蓮華経とばかり、五字七字に限って一日に一遍、一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍なんど唱えても、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、ついに不退の位にいたるべしや。

答えて云わく、しかるべきなり。

（033 法華経題目抄（妙の三義の事））

妙法の偉大さ 531ページー15行）

夫れ、仏道に入る根本は信をもって本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たとい解さとりなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たとい解さとりあれども信心なき者は、誹謗・闡提の者なり。

（033法華経題目抄（妙の三義の事）
信・不信532ページ-12行）

およそ仏道（成仏の境界）に入るためには信が根本になりま

す。菩薩の五十二位（修行の位）のなかでは十信の位のなかでは信心が一番はじめになっています。ですから、たとえ理解はなくても信心のある者は、鈍根（才覚のにぶい性質）でも正見（悟りの境界）の者なのです。反対にたとえ理解はあっても、信心のない者は謗法闡提の者で成仏はできないのです。

されば、させる解りなくとも、南無妙法蓮華経と唱うるならば、悪道をまぬかるべし。

（033法華経題目抄（妙の三義の事）

勤行・唱題533ページー5行）

琥珀は塵をとり、磁石は鉄をすう。我らが悪業は塵と鉄とのごとく、法華経の題目は琥珀と磁石とのごとし。かくおもいて、常に南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべし。

（033法華経題目抄（妙の三義の事））

勤行・唱題533ページ-12行）

「法華の名を受持せん者、福は量るべからず」。

（033 法華経題目抄（妙の三義の事）

福運534ページー13行）

題目ばかりを唱うる福、計るべからずとみえぬ。一部八巻二十八品を受持・読誦し、随喜・護持等するは広なり。方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するは略なり。ただ一四句偈、乃至題目ばかりを唱え、となうる者を護持するは要なり。広・略・要の中には題目は要の内なり。

（033法華経題目抄（妙の三義の事）

勤行・唱題534ページ－15行）

題目ばかりを唱える人の福徳ははかることができないほどすばら

と　　ほけきょうしゅぎょう　しかた　わ
しいものであると説かれています。（さて法華経修行の仕方を分けて
ほけきょういちぶはっかんにじゅうはっぽん　じゅじ　どくしゅ
みますと）法華経一部八巻二十八品のすべてを受持、読誦し、
ずいき　ごじ　こうりゃくよう　こう　しゅぎょう　ほけきょう
随喜、護持するのは広略要のうちの広の修行です。法華経のなか
かなめ　ほうべんぼん　じゅりょうほんとう　じゅじ　ごじ　りゃく
の要である方便品・寿量品等を受持し、護持するのは、略の
しゅぎょう　いちしくげ　しく　ひと　げ　みじか
修行です。ただ一四句偈（四句をもって一つの偈をなす短い
きょうもん　ごじしちじ　だいもく　とな　もの　ごじ
経文）ないし五字七字の題目だけを唱え、また唱える者を護持す
よう　しゅぎょう　こうりゃくよう　ごじしちじ　だいもく　かなめ
るのは要の修行です。広略要のなかでは、五字七字の題目は要
ちゅう　かなめ
中の要なのです。

「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙となす」。妙楽大師、この文を受けて云わく「発とは開なり」等云々。妙と申すことは、開ということなり。

世間に、財を積める蔵に鑰なければ、開くことかたし。開かざれば、蔵の内の財を見ず。

（033法華経題目抄（妙の三義の事））

一生成仏・仏界湧現536ページ－10行）

妙とは、天竺には薩と云い、漢土には妙と云う。
妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。
（033 法華経題目抄（妙の三義の事））
妙法の偉大さ537ページー11行）
妙という言葉は、もともと天竺（インド）で薩という語で、それが漢土（中国）では妙と訳されたのです。その妙とは具足という意味であり、具足の具とは円満（欠けるところなく、完全で満ちたりること）という意味です。

竜樹菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の能く毒をもって薬となすがごとし」云々。この文は、大論に法華経の妙の徳を釈する文なり。妙楽大師、釈して云わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。

（033 法華経題目抄（妙の三義の事））

変毒為薬537ページー17行）

竜樹菩薩は「大論」のなかで、妙法の“妙”の一字について「たとえば名医が毒をも薬とするようなものである」と解釈して

いますが、ここでいう“毒”とは何かといえば、私たちの煩悩・業・苦の三道のことであり、“薬”とはそれら三道を転じた法身・般若・解脱の三徳のことです。

妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。

（033法華経題目抄（妙の三義の事）病気541ページー5行）

妙とは蘇生という意味です。蘇生とは蘇るということです。

法華経は死せる者をも治するが故に妙と云う釈なり（033法華経題目抄（妙の三義の事））

妙法の偉大さ541ページー12行）。

悲しいかな、痛ましいかな。我ら無始より已来、無明の酒に酔って六道四生に輪回して、ある時は焦熱・大焦熱の炎にむせび、咽ある時は紅蓮・大紅蓮の氷にとじられ、閉ある時は餓鬼の飢渇の悲しみに値って五百生の間飲食の名をも聞かず。ある時は畜生の残害の苦しみをうけて、小さきは大きなるにのまれ、呑短きは長きにまかる。巻これを残害の苦と云う。ある時は修羅の闘諍の苦をうけ、ある時は人間に生まれて八苦をうく。生・老・病・死・愛別

離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等なり。ある時は天上に生まれて五衰をうく。かくのごとく三界の間を車輪のごとく回り、父子の中にも、親の親たる、子の子たることをさとらず。夫婦の会い遇えるも、会い遇いたることをしらず。迷えることは羊目に等しく、暗きことは狼眼に同じ。我を生みたる母の由来をもしらず、生を受けたる我が身も、死の終わりをしらず。

ああ、受け難き人界の生をうけ、値い難き如来の聖教に値い奉れり。一眼の亀の浮き木の穴にあえるが

ごとし。今度(こんど)もし生死(しょうじ)のきずなをきらず、三界(さんがい)の籠樊(ろうはん)を出(い)でざらんこと、かなしかるべし、悲(かな)しかるべし。

（034聖愚問答抄(しょうぐもんどうしょうじょう)上 人生(じんせい)・生(い)き方(かた)545ページー2行）

いまだ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懐き、人師を見る族は薄氷の心を成せり。ここをもって金言には、「法に依って人に依らざれ」と定め、また爪上の土の譬えあり。もし仏法の真偽をしる人あらば、尋ねて師とすべし。求めて崇むべし。

（034 聖愚問答抄上 求道（行学の二道）550ページ-15行）

仏法はあながちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文を先とすべし。身の賤しきをもって、その法を軽んずることなかれ。

（034 聖愚問答抄上 求道（行学の二道）555ページー5行）

我、釈尊の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已来、知恩をもって最とし、報恩をもって前とす。世に四恩あり。これを知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。

（034 聖愚問答抄上

報恩 569ページ－7行）

今の世は濁世なり。人の情もひがみゆがんで権教・謗法のみ多ければ、正法弘まりがたし。この時は、読誦・書写の修行も観念・工夫・修練も無用なり。ただ折伏を行じて、力あらば威勢をもって謗法をくだき、また法門をもっても邪義を責めよとなり。

（034聖愚問答抄上

折伏574ページー9行）

もし仏法を行ずる人有って、謗法の悪人を治罰せずして観念・思惟を専らにして、邪正・権実をも簡ばず、詐って慈悲の姿を現ぜん人は、諸の悪人とともに悪道に堕つべし

（034 聖愚問答抄上 折伏 576ページ-15行）

ただ南無妙法蓮華経とだにも唱え奉らば、滅せぬ罪やあるべき、来らぬ福や有るべき。真実なり、甚深なり。これを信受すべし。

（034 聖愚問答抄上 罪障消滅 577ページー12行）

ただ南無妙法蓮華経とだけ唱えられるならば、滅しない罪はないのであり、招けない幸福はないのです。これは真実であり、深い法門であり、よく信受していきなさい。

一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の仏性が皆よばれてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身ともにひかれて顕れ出ずる、これを成仏とは申すなり。例せば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

（034聖愚問答抄上

一生成仏・仏界湧現578ページ－11行）

「綱維を提くに目として動かざること無く、衣の一角を牽くに縷として来らざること無きがごとし」。

（034 聖愚問答抄上 指導者581ページー1行）

法華経をもっていのらん祈りは必ず祈りとなるべし。

（035 祈禱抄

祈り582ページー9行）

法華経の行者の祈る祈りは、響きの音に応ずるがごとし。影の体にそえるがごとし。すめる水に月のうつるがごとし。方諸の水をまねくがごとし。磁石の鉄をすうがごとし。琥珀の塵をとるがごとし。

（035祈禱抄

祈り587ページー5行）

大地はささばはずるとも、虚空をつなぐ者はありとも、
潮のみちひぬことはありとも、日は西より出ずるとも、
法華経の行者の祈りのかなわぬことはあるべからず。

035 祈禱抄

（祈り 592ページー15行）

大地を指さしてはずれることがあったとしても、虚空をつないで結びつける者がいたとしても、また海水の満ち潮、引き潮がなくなることがあったとしても、太陽が西から昇るようなことがあったとし

ても、法華経の行者の祈りが叶わないということはありえないのです。

行者（ぎょうじゃ）は必（かなら）ず不実（ふじつ）なりとも、智慧（ちえ）はおろか愚（み）なりとも、身は不浄（ふじょう）なりとも、戒徳（かいとく）は備（そな）えずとも、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と申（もう）さば必（かなら）ず守護（しゅご）し給（たも）うべし。

袋（ふくろ）汚（よご）きたなしとて金（こがね）を捨（す）つることなかれ。伊蘭（いらん）をにくまば栴檀（せんだん）あるべからず。谷の池（いけ）を不浄（ふじょう）なりと嫌（きら）わば蓮（はちす）を取（と）らざるべし。

（035 祈禱抄（きとうしょう））

諸天（しょてん）の加護（かご）593ページー1行）

されば、この経を聴聞し始めん日より思い定むべし。「況滅度後（いわんや滅度して後をや）」の大難の三類甚だしかるべしと。

（036 如説修行抄 三類の強敵 599ページ-13行）

我が弟子等の中にも、兼ねて聴聞せしかども、大小の難来る時は、今始めて驚き、肝をけして信心を破りぬ。兼ねて申さざりけるか、経文を先として「猶多怨嫉。況滅度後。況滅度後」と朝夕教えしことは、これなり。

（036 如説修行抄

難を乗り越える599ページ-14行）

「法華の折伏は権門の理を破す」の金言なれば、終に権教・権門の輩を一人もなくせめおとして法王の家人となし、天下万民、諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば、吹く風枝をならさず、雨壌を砕かず、代は羲・農の世となりて、今生には不祥の災難を払い、長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を、各々御覧ぜよ。「現世安穏」の証文、疑いあるべからざるものなり。

（036 如説修行抄）

広宣流布600ページ-17行

「法華の折伏は、権門の理を破す」という天台大師の言葉がありますから、そのとおり最後には、権教を信じている人びとを、一人残らず正しい仏法に目ざめさせて仏の味方にし、世の中の人がみな正法を信じ、妙法のみが栄える広宣流布の時がきて、すべての人が南無妙法蓮華経を唱えていくならば、風は穏やかに吹き、降る雨も洪水などを起こさず、昔の中国の伏羲・神農の時代のような理想社会となり、人びとは災難にうちまかされることと

のない人生を送り、生命をまっとうして長生きすることができるようになります。人も法もともに、永遠に栄えるという道理が実現するそのようなときを、みんなで見てご覧なさい。その時こそ「現世は安穏である」という経文の言葉が事実となるのは疑いのないことです。

詮ずるところ、仏法を修行せんには人の言を用いるべからず。ただ仰いで仏の金言をまぼるべきなり。

（036 如説修行抄）

如説修行 601ページ-10行

結局、仏法を修行するためには、（仏以外の）人の言葉を用いるべきではなく、大切なことは、仏がおっしゃったことだけを守るべきです。

一乗流布の時は、権教有って敵と成ってまぎらわしくば、実教よりこれを責むべし。これを、摂折二門の中には、法華経の折伏と申すなり。天台云わく「法華の折伏は権門の理を破す」。まことに故あるかな。

しかるに、摂受たる四安楽の修行を今の時行ずるならば、冬種子を下ろして春菓を求むる者にあらずや。鶏の暁に鳴くは用なり、宵に鳴くは物怪なり。権実雑乱の時、法華経の御敵を責めずして、山林に閉じ籠もり

摂受を修行せんは、あに法華経修行の時を失う物怪にあらずや。

（036 如説修行抄 603ページー6行）

折伏

一乗の教え（南無妙法蓮華経）がひろまるとき、権教の敵となって、最高の仏法が何であるか混乱してまぎらわしいならば、実教（南無妙法蓮華経）の立場から権教のあやまりを破折すべきです。このことを摂受・折伏二門のなかでは、法華経の折伏というのです。天台大師が「法華玄義」のなかで「法華の折伏は、

権門の理を破す」といっていますが、本当に意味の深い言葉です。
それなのに摂受である四安楽の修行（法華経を安楽に修行して仏果を得るためにおこなう、身・口・意・誓願の修行法）を、末法の今の時に行うならば、それはちょうど冬に種をまいて春に果をとろうとする人と同じようなものではないでしょうか。鶏が明け方に鳴くのは時にかなっていますが、夕方に鳴いたなら、それは物怪です。それと同じで、権教と実教との立て分けが乱れているときに、法華経の敵を折伏しないで、世間を離れ山林の中にとじこもって摂受を修行するのはまさしく法華経修行の時を失

つた物怪（もっけ）ではありませんか。

誰人（たれひと）にても坐（おわ）せ、「諸経（しょきょう）は無得道（むとくどう）、堕地獄（だじごく）の根源（こんげん）、法華経（ほけきょう）独（ひと）り成仏（じょうぶつ）の法（ほう）なり」と、音（こえ）も惜（お）しまず呼（よ）ばわり給（たま）いて、諸宗（しょしゅう）の人法（にんぽうとも）共（とも）に折伏（しゃくぶく）して御覧（ごらん）ぜよ。三類（さんるい）の強敵（ごうてき）来（きた）らんこと疑（うたが）いなし。

（036 如説修行抄（にょせつしゅぎょうしょう）三類（さんるい）の強敵（ごうてき）603ページー12行）

されば、如説修行の法華経の行者には、三類の強敵打ち定んで有るべしと知り給え。

されば、釈尊御入滅の後二千余年が間に、如説修行の行者は、釈尊・天台・伝教の三人はさておき候いぬ、末法に入っては、日蓮ならびに弟子檀那等これなり。

（036 如説修行抄）

三類の強敵 604ページー3行）

したがって如説修行の法華経の行者には、三類の強敵がかな

らず競い起こってくるのだと知りなさい。だから釈尊の滅後から二千年あまりの間に如説修行の行者といえば、釈尊・天台大師・伝教大師の三人はさておいて、末法に入ってからは日蓮とその門下の弟子・信者がこれにあたります。

哀れなるかな、今、日本国の万人、日蓮ならびに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑うとも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮ならびに弟子檀那共に霜露の命の日影を待つばかりぞかし。只今仏果に叶って寂光の本土に居住して自受法楽せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈んで大苦に値わん時、我らいかばかり無慙と思わんずらん、汝等いかばかりうらやましく思わんずらん。

一期を過ぐること、程も無ければ、いかに強敵重なるとも、ゆめゆめ退する心なかれ、恐るる心なかれ。

（036 如説修行抄）

難を乗り越える604ページー13行）

本当にかわいそうなことです。いま日本中のあらゆる人びとは、日蓮と弟子・信者たちが三類の強敵に責められて、たいへんな苦しみにあっているのを見て、喜んで笑っていますが、「昨日は人の上、今日はわが身の上」とは世の常の習いで、いま日蓮と弟子・信者たちが受けているこの苦しみも、ちょうど霜や露が太陽の光

にあって消えてしまうように、わずかの間の辛抱ではありません
か。そしてついに成仏が叶って寂光の本土（仏の住む世界）に
住んで自受法楽するとき（成仏の境界になったとき）、反対にあ
なたたち謗法の者が、阿鼻地獄の底に沈んでたいへんな苦しみにあ
うのですが、そのとき、私たちはその姿をどんなにか、かわいそう
に思うことでしょう。あなたたちは私たちををどんなにかうらやま
しく思うことでしょう。一生は束の間に過ぎてしまうものなので、
どんなに三類の強敵が次々に襲ってきても、けっして退転する心
をおこしてはいけません。恐れる心をもつようなことがあってはな

りません。

たとい頸をば鋸にて引き切り、どうをばひしぼこをもつてつつき、足にはほだしを打ってきりをもってもむとも、命のかよわんほどは、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱えて、唱え死にに死ぬるならば、釈迦・多宝・十方の諸仏、霊山会上にして御契約なれば、須臾のほどに飛び来って、手をとり肩に引っ懸けて霊山へはしり給わば、二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し旛を上げて我らを守護して、たしかに寂光の

宝刹へ送り給うべきなり。あらうれしや、あらうれしや。

（036 如説修行抄）

臨終 605ページー3行）

（迫害を受けて）たとえ頸を鋸で引き切られ、胴をひし鉾（槍のような武器）でつきさされ、足には足かせをされたうえ、錐でもまれたとしても、命のあるかぎりは、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と題目を唱えに唱えて死んでいくならば、釈迦・多宝・十方の諸仏が、霊山会上で約束されていることなので、瞬間に飛んで来て、手を取り、肩にかけて、霊山にたちまち連れ

ていってくださるのです。薬王菩薩と勇勢菩薩の二聖、持国天王と毘沙門天王の二天、そして十羅刹女が、御本尊を持ってきた者をかばい護り、諸天善神は天蓋（きぬがさ）を指しだし旗をかかげて私たちを守護して、たしかに常寂光の仏国土に、送りとどけてくださるはずなのです。なんとうれしいことではありませんか。

この書、御身を離さず常に御覧あるべく候。

（036 如説修行抄

求道（行学の二道）605ページ-11行）

天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等云々。広宣流布の時を指すか。伝教大師云わく「正像や過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」等云々。末法の始めを願楽するの言なり。時代をもって果報を論ずれば、竜樹・天親に超過し、天台・伝教にも勝るるなり。

（037 顕仏未来記
御本仏の境涯・確信606ページー14行）

この人は、守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華経の五字をもって閻浮提に広宣流布せしめんか。例せば、威音王仏の像法の時、不軽菩薩「我深敬（我は深く敬う）」等の二十四字をもって彼の土に広宣流布し、一国の杖木等の大難を招きしがごとし。

（037 顕仏未来記）

広宣流布 608ページー16行）

我が言は大慢に似たれども、仏記を扶け如来の実語を顕さんがためなり。しかりといえども、日本国中に日蓮を除き去っては誰人を取り出だして法華経の行者となさん。汝、日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす。あに大悪人にあらずや。

（037 顕仏未来記
御本仏の境涯・確信 609ページ－14行）

月は西より出でて東を照らし、日は東より出でて西を照らす。仏法もまたもってかくのごとし。正像には西より東に向かい、末法には東より西に往く。

（037 顕仏未来記）

広宣流布 610ページー5行）

月はその出方は西から東へ移り、太陽は東から出て西の方角へ照らしていきます。仏法もこれと同じで、正法・像法時代には、インド、中国、朝鮮、日本と西から東へ仏教が伝わって

きましたが、末法には、逆に南無妙法蓮華経の大仏法が、東の日本に出現して、西に伝わり、全世界へ広まっていくのです。

まっぽう　ぎゃく　なんみょうほうれんげきょう　だいぶっぽう　ひがし
にほん　しゅつげん　にし　つた　ぜんせかい　ひろ

問うて曰わく、仏記既にかくのごとし。汝が未来記いかん。

答えて曰わく、仏記に順じてこれを勘うるに、既に後の五百歳の始めに相当たれり。仏法必ず東土の日本より出ずべきなり。

（037顕仏未来記

広宣流布611ページー1行）

当に知るべし、通途の世間の吉凶の大瑞にはあらざるべし。これひとえに、この大法興廃の大瑞なり。

（037顕仏未来記

瑞相611ページー11行）

願わくは、我を損ずる国主等をば、最初にこれを導かん。我を扶くる弟子等をば、釈尊にこれを申さん。我を生める父母等には、いまだ死せざる已前にこの大善を進らせん。

（037顕仏未来記
御本仏の大慈悲612ページー3行）

願わくは私を迫害した国主たちを最初に成仏への道へ導いてあげたいものです。日蓮を助ける弟子たちのことを釈尊（久遠

元初の自受用報身如来）に報告しましょう。またこのような自分を生んでくれた父母には、生きているうちにこの最高の仏法をおすすめしたいものです。

「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」

（038当体義抄）

仏法と社会614ページー13行）

（法華経方便品に）「是の法は、法位に安住していて、九界それぞれが違った姿でありながら、妙法の悟りを得てみれば衆生、仏ともに一体なのである」とあります。

「正像二千年の国王・大臣よりも、末法の非人は尊貴なり」と釈するも、この意なり。

（038当体義抄 616ページ－9行）

妙法を持った人の位

正直に方便を捨てて、ただ法華経を信じ、南無妙法蓮華経と唱うる人は、煩悩・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三観・三諦即ち一心に顕れ、その人の所住の処は常寂光土なり。能居・所居、身土、色心、倶体倶用、無作の三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等の中のことなり。

（038 当体義抄 一生成仏・仏界湧現 617ページ-1行）

真実もって秘文なり。真実もって大事なり。真実もって尊きなり。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経

（038 当体義抄

妙法の偉大さ620ページー17行）

しかるに、日蓮が一門は、正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて、正直に正法・正師の正義を信ずるが故に、当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顕すことは、本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華経と唱うるが故なり。

（038当体義抄
一生成仏・仏界湧現626ページ－10行）

およそ妙法の五字は末法流布の大白法なり、地涌千界の大士の付嘱なり。この故に、南岳・天台・伝教等は内に鑑みて、末法の導師にこれを譲って弘通し給わざりしなり。

（038 当体義抄 御本仏の境涯・確信 627ページ－7行）

世間の罪よりも仏法の失によって無間地獄に堕つる者数をしらず。

（040小乗大乗分別抄
謗法のいましめ636ページー12行）

たとい日蓮、富楼那の弁を得て、目連の通を現ずとも、勘うるところ当たらずんば、誰かこれを信ぜん。

（041 顕立正意抄

御本仏の境涯・確信639ページ－13行）

我が弟子等の中にも信心薄淡き者は、臨終の時、阿鼻獄の相を現ずべし。その時、我を恨むべからず

（041 顕立正意抄）

臨終 640ページー14行）

私の弟子たちのなかでも信心の弱い者は臨終のときに地獄の相になってしまうでしょう。そのときになって私（日蓮）を恨んではなりません。

本地難思の境智の妙法は、迹仏等の思慮に及ばず。いかにいわんや菩薩・凡夫をや。

（042 立正観抄

妙法の偉大さ 647ページー11行）

人の声を出だすに二つあり。一には、自身は存ぜざれど
も、人をたぶらかさんがために声をいだす。これは随他意
の声。自身の思いを声にあらわすことあり。されば、意
が声とあらわる。意は心法、声は色法。心より色をあら
わす。また声を聞いて心を知る。色法が心法を顕すな
り。色心不二なるがゆえに而二とあらわれて、仏の御意
あらわれて法華の文字となれり。文字変じてまた仏の
御意となる。されば、法華経をよませ給わん人は、文字と

思しめすことなかれ。すなわち仏の御意なり。

（045木絵二像開眼之事

御本尊は仏の生命663ページー7行）

鬼(き)をば奪命者(だつみょうしゃ)という。魔入(まい)って功徳(くどく)をうばう。魔(ま)をば奪(だつ)功徳者(くどくしゃ)という。

（045木絵二像開眼之事(もくえにぞうかいげんのこと)　仏(ほとけ)と魔(ま)664ページー13行）

世間の法には、下剋上・背上向下は国土亡乱の因縁なり。

（046善無畏抄

仏法と社会668ページ17行）

我が面を見ることは明鏡によるべし、国土の盛衰を計ることは仏鏡にはすぐべからず。

（047神国王御書

仏法と社会678ページ5行）

仏法に付きて国も盛え人の寿も長く、また仏法に付いて国もほろび人の寿も短かるべしとみえて候。

（047神国王御書

仏法と社会678ページー7行）

王法の曲がるは小波・小風のごとし。大国と大人をば失いがたし。仏法の失あるは大風・大波の小舟をやぶるがごとし。国のやぶること疑いなし。

（047神国王御書

仏法と社会678ページ-10行）

一国の政治が誤っているのは小さな風や波がたつようなもので、その国や大人（立派な人）をほろぼすようなことはありません。しかし、誤った仏法を信奉すれば、大きな風や波が小さな船をの

みこむように、一国をもほろぼしていくことは間違いありません。

法華経は、人の形を浮かぶるのみならず、心をもうかべ、心を浮かぶるのみならず、先業をも未来をも鑑み給うことくもりなし。

（047 神国王御書）

因果の理法 679ページー5行）

法華経は人間の外形を浮かべるだけでなく、心まで浮かべるのです。心を浮かべるだけでなく、過去世の業も、未来の姿も照らし出して少しのくもりもないのです。

知らず、さればこの人々は懺悔の力によって生死やはなれけん。はたまた、謗法の罪は重く懺悔の力は弱くして、阿闍世王・無垢論師等のごとく地獄にや堕ちにけん。

（047 神国王御書

懺悔 680ページ-11行）

国主は理を親とし非を敵とすべき人にておわすべきが、いかんがしたりけん、諸人の讒言をおさめて、一人の余をすて給う。

（047 神国王御書 682ページ－11行）

日蓮が眼おそろしくば、いそぎいそぎ仏前の誓いをはたし給え。

（047神国王御書

諸天の加護685ページー3行）

「法に依って人に依らざれ。義に依って語に依らざれ。智に依って識に依らざれ。了義経に依って不了義経に依らざれ」

（048 法華初心成仏抄 信仰者の姿勢 686ページー8行）

「仏の説いた経文によるべきであって、人師・論師によってはならない、常住不変の仏の実義によるべきであって、人師・論師の言葉によってはならない。仏の智慧によるべきであって、人師・

ろんし　ことば
論師の言葉によってはならない。了義経（仏の真実の教え）によ
りょうぎきょう　ほとけ　しんじつ　おし
るべきであって、不了義経（方便の教え）によって法を説いてはな
ふりょうぎきょう　ほうべん　おし　ほう　と
らない」（涅槃経）
ねはんぎょう

されば、この経を受持して南無妙法蓮華経と唱え奉るべしと見えたり。

薬王品には「後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」と説き給い、天台大師は「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」と釈し、妙楽大師は「しばらく大教の流行すべき時に拠る」と釈して、後の五百歳の間に法華経弘まって、その後は、閻浮提の内に絶え失せることあるべからずと見えたり。

（048 法華初心成仏抄（ほっけしょしんじょうぶつしょう）
広宣流布（こうせんるふ）693ページー7行）

かからん時は、たよりを得て天魔波旬乱れ入り、国土常に飢渇して、天下も疫癘し、他国侵逼難・自界叛逆難とて、我が国に軍・合戦常に有って、後には他国より兵どもおそい来ってこの国を責むべしと見えたり。かくのごとき闘諍堅固の時は、余経の白法は験失せて、法華経の大良薬をもってこの大難をば治すべしと見えたり。

（048 法華初心成仏抄

立正安国 694 ページー３行）

法華経をもって国土を祈らば、上一人より下万民に至るまで、ことごとく悦び栄え給うべき鎮護国家の大白法なり。

（048 法華初心成仏抄 立正安国 694ページー7行）

よき火打ちと、よき石のかどと、よきほくちと、この三つ寄り合って火を用いるなり。祈りもまたかくのごとし。よき師と、よき檀那と、よき法と、この三つ寄り合って祈りを成就し、国土の大難をも払うべきものなり。

（048 法華初心成仏抄

祈り 695 ページー 3 行）

よい火打ち金とよい石の角とよいほくちの三つがそろって、はじめて火を出して用いることができるように、祈りもまた同様です。

よい師匠(ししょう)とよい信者(しんじゃ)とよい法(ほう)と、この三(みっ)つが寄りあったとき祈り(いの)もかない、一国(いっこく)にふりかかる大(おお)きな難(なん)をも払(はら)うことができるのです。

とてもかくても法華経を強いて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし。謗ぜん者は毒鼓の縁となって仏になるべきなり。いかにとしても、仏の種は法華経より外になきなり。

（048 法華初心成仏抄 折伏 697ページー14行）

とにもかくにも法華経をしいて説いて聞かせるべきです。信ずる人は成仏するし、反対にそしる人も毒鼓の縁を結んで（逆縁によ

って）成仏できるのです。どのようにしても成仏の種は法華経の他にはありません。

一度妙法蓮華経と唱うれば、一切の仏、一切の法、一切の菩薩、一切の声聞、一切の梵王・帝釈・閻魔法王・日月・衆星・天神・地神、乃至地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天、一切衆生の心中の仏性をただ一音に喚び顕し奉る功徳、無量無辺なり。

我が己心の妙法蓮華経を本尊とあがめ奉って、我が己心中の仏性、南無妙法蓮華経とよびよばれて顕れ給うところを仏とは云うなり。譬えば、籠の中の鳥なけ

ば、空とぶ鳥のよばれて集まるがごとし。空とぶ鳥の集まれば、籠の中の鳥も出でんとするがごとし。口に妙法をよび奉れば、我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給う。梵王・帝釈の仏性はよばれて我らを守り給う。仏菩薩の仏性はよばれて悦び給う。

（048法華初心成仏抄
一生成仏・仏界湧現703ページ－16行）

ひとたび御本尊に向かって南無妙法蓮華経と唱えれば、あらゆる仏、あらゆる法、あらゆる菩薩、あらゆる声聞、あらゆる梵王、

帝釈（たいしゃく）、閻魔法王（えんまほうおう）、日月（にちがつ）、衆星（しゅしょう）、天神（てんじん）、地神（ちじん）、さらに地獄（じごく）、餓鬼（がき）、畜生（ちくしょう）、修羅（しゅら）、人天（にんてん）、あらゆる人びと（ひと）の心中（しんちゅう）にある仏性（ぶっしょう）を、ただ題目（だいもく）の一声（ひとこえ）に呼（よ）びあらわすのですから、御本尊（ごほんぞん）の功徳（くどく）に限（かぎ）りないものなのです。自分自身（じぶんじしん）の生命（せいめい）に備（そな）わっている妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）を御本尊（ごほんぞん）として、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）えていけば、自身（じしん）の生命（せいめい）にそなわる仏界（ぶっかい）が呼（よ）び呼（よ）ばれて涌現（ゆげん）するのです。たとえば、かごのなかの鳥（とり）がさえずれば、空（そら）を飛（と）んでいる鳥（とり）がその鳴（な）き声（ごえ）によばれて集（あつ）まってくるようなものです。また、空（そら）を飛（と）ぶ鳥（とり）が集（あつ）まってさえずれば、今度（こんど）はかごのなかの鳥（とり）も外（そと）に出（で）ようとするようなものです。口（くち）に

なんみょうほうれんげきょう　となえ　じこ　せいめい　ぶっしょう
南無妙法蓮華経と唱えれば、自己の生命のなかの仏性もよばれて
こおう　こんど　ぼんてん
かならずあらわれてくるのです。それに呼応して、今度は梵天、
たいしゃく　しょてんぜんじん　ぶっしょう　よ　わたし　まも
帝釈などの諸天善神の仏性が呼びあらわれて私たちを守るだ
ほとけ　ぼさつ　ぶっしょう　よ　よろこ
けでなく、あらゆる仏や菩薩の仏性も呼ばれて喜ぶのです。

九界の衆生は、一念の無明の眠りの中において、生死の夢に溺れて本覚の寤を忘れ、夢の是非に執して冥きより冥きに入る。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）
信仰者の姿勢 708ページ－7行）

過去と未来と現在とは三つなりといえども、一念の心中の理なれば無分別なり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一念の力 711ページ-9行）

生と死と二つの理は、生死の夢の理なり、妄想なり、顛倒なり。本覚の寤をもって我が心性を糾せば、生ずべき始めも無きが故に、死すべき終わりも無し。既に生死を離れたる心法にあらずや。劫火にも焼けず、水災にも朽ちず、剣刀にも切られず、弓箭にも射られず。芥子の中に入れども、芥子も広からず、心法も縮まらず。虚空の中に満つれども、虚空も広からず、心法も狭からず。

049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

生命とその尊厳 712ページ-17行

生と死というものは、九界の迷いのなか、あたかも夢の中での立て分けなのであり、それは凡夫の迷った、ひっくりかえった考えなのです。仏の覚めた悟りから生命を究明していけば、生まれてくる初めもなく、したがって死んでいく終わりもないのです。いわゆる生死というものからは超越しているのが生命です。ですから、生命そのものは人間世界が破滅するとき起こる大火にも焼けず、どんな水害にも滅びません。また刀でも切ることができず、弓矢で射るこ

ともできません。さらに生命（せいめい）というものは、極（きわ）めて小（ちい）さいケシのなかにいれてもケシが広（ひろ）がるのでもなく、生命（せいめい）が縮（ちぢ）まるというのでもありません。大空（おおぞら）に満（み）ちわたらせても、大空（おおぞら）が広（ひろ）すぎるということもなく、生命（せいめい）が狭（せま）すぎるというものでもないのです。

言と云うは、心の思いを響かして声を顕すを云うなり。凡夫は我が心に迷って、知らず覚らざるなり。仏はこれを悟り顕して神通と名づくるなり。神通とは、神の一切の法に通じて礙り無きなり。この自在の神通は、一切の有情の心にてあるなり。故に、狐狸も分々に通を現ずること、皆、心の神の分々の悟りなり。この心の一法より国土世間も出来することなり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

言動・振る舞い713ページー7行）

しかれば、八万四千の法蔵は我が身一人の日記文書なり。

（049三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

生命とその尊厳713ページー13行）

したがって、八万四千のあらゆる仏法の教えというものは、一個の人間の生命、人生そのものを説き明かした日記のようなものなのです。

この八万法蔵を我が心中に孕み持ち、懐き持ちたり。我が身中の心をもって、仏と法と浄土とを我が身より外に思い願い求むるを迷いとは云うなり。この心が、善悪の縁に値って善悪の法をば造り出だせるなり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一念の力 713ページ-13行）

心の不思議をもって経論の詮要となすなり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

生命とその尊厳 714ページー4行）

円教の意は一毫の惑をも断ぜず。故に、「一切法は皆これ仏法なり」と云うなり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）
仏法と社会 714ページ-11行）

この十法界は一人の心より出でて、八万四千の法門と成るなり。一人を手本として一切衆生平等なること、かくのごとし。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一人を大切に 715ページ－14行）

この十方界（十界）は、一人の生命（一念）から出て、八万四千の法門となるのです。一人の生命を手本としてあらゆる衆生もまた同じく平等であることは、そのような次第です。

己心と仏心とは異ならずと観ずるが故に、生死の夢を覚まして本覚の寤に還るを、即身成仏と云うなり。

即身成仏は、今、我が身の上の天性・地体なり。煩いも無く、障りも無し。衆生の運命なり、果報なり、冥加なり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一生成仏・仏界湧現 716ページ－1行）

「一切法は皆これ仏法なり」と通達し解了する、これを名字即となす。名字即の位より即身成仏す。故に、円頓の教には次位の次第無し。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一生成仏・仏界湧現717ページー17行）

総じて一代の聖教は一人の法なれば、我が身の本体を能く能く知るべし。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

生命とその尊厳 718ページ-10行）

この身の中につぶさに天地に倣うことを知る。知んぬ、頭の円かなるは天に象り、足の方なるは地に象り、身の内の空種なるは即ちこれ虚空なり。腹の温かなるは春夏に法り、背の剛きは秋冬に法り、四体は四時に法り、大節の十二は十二月に法り、小節の三百六十は三百六十日に法り、鼻の息の出入りは山沢渓谷の中の風に法り、口の息の出入りは虚空の中の風に法り、眼は日月に法り、開閉は昼夜に法り、髪は星辰に法り、

眉は北斗に法り、脈は江河に法り、骨は玉石に法り、皮肉は地土に法り、毛は叢林に法り

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

生命とその尊厳 718ページ－12行）

天崩れば我が身も崩るべし。地裂けば我が身も裂くべし。
地水火風滅亡せば我が身もまた滅亡すべし。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）
立正安国720ページー1行）

痛ましいかな、悲しいかな、末代の学者、仏法を習学して還って仏法を滅す。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）
信仰者の姿勢 721ページ－14行）

詮ずるところ、己心と仏身と一なりと観ずれば、速やかに仏に成るなり。故に、弘決にまた云わく「一切の諸仏、己心は仏心と異ならずと観じたもうに由るが故に、仏に成ることを得たもう」已上。これを観心と云う。実に己心と仏心と一心なりと悟れば、臨終を凝ぐべき悪業も有らず、生死に留むべき妄念も有らず。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一生成仏・仏界湧現 722ページー5行）

かくのごとく自在なる自行の行を捨てて、跡形も有らざる無明・妄想なる僻思いの心に住して三世の諸仏の教訓に背き奉れば、冥きより冥きに入り、永く仏法に背くこと、悲しむべし、悲しむべし。

（049三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）謗法のいましめ722ページ-11行）

「薩婆悉達の、祖王の弓を彎き満つるを名づけて力となし、七つの鉄鼓に中り、一つの鉄囲山を貫き、地を洞して水輪に徹るを名づけて用となすがごとし（049三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）一念の力723ページー5行）

能く能く秘蔵して深くこの理を証し、三世の諸仏の御本意に相叶い、二聖・二天・十羅刹の擁護を蒙り、滞り無く上上品の寂光の往生を遂げ、須臾の間に九界生死の夢の中に還り来って、身を十方法界の国土に遍し、心を一切有情の身中に入れて、内よりは勧発し外よりは引導し、内外相応し、因縁和合して、自在神通の慈悲の力を施し、広く衆生を利益すること滞り有るべからず。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）
遺族の方への激励 728ページ－8行）

「縁」とは、三因仏性は有りといえども、善知識の縁に値わざれば、悟らず知らず顕れず、善知識の縁に値えば、必ず顕るるが故に、縁と云うなり。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

善知識と悪知識 728ページー16行）

宿縁に催されて、生を仏法流布の国土に受けたり。善知識の縁に値いなば因果を分別して成仏すべき身をもって、善知識に値うといえども、なお草木にも劣って、身中の三因仏性を顕さずして黙止せる謂れあるべきや。

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）
善知識と悪知識 729ページ－9行）

今、日本国を案ずるに、代始まってすでに久しく成りぬ。旧き守護の善神は、定めて福も尽き、寿も減じ、威光勢力も衰えぬらん。仏法の味をなめてこそ威光勢力も増長すべきに、仏法の味は皆たがいぬ。齢はたけぬ。いかでか、国の災いを払い、氏子をも守護すべき。

（050 諫暁八幡抄

諸天の加護733ページー4行）

仏(ほとけ)この世界(せかい)と他方(たほう)の世界(せかい)との梵釈(ぼんしゃく)・日月(にちがつ)・四天(してん)・竜神(りゅうじん)等(とう)を集(あつ)めて、我(わ)が正像末(しょうぞうまつ)の持戒(じかい)・破戒(はかい)・無戒(むかいとう)等(とう)の弟子(でし)等(とう)を第六天(だいろくてん)の魔王(まおう)・悪鬼神等(あっきじんとう)が人王(にんのう)・人民等(じんみんとう)の身(み)に入(い)って悩乱(のうらん)せんを、見(み)ながら聞(き)きながら治罰(じばつ)せずして須臾(しゅゆ)も過(すご)すならば、必(かなら)ず梵釈等(ぼんしゃくとう)の使(つか)いをして四天王(してんのう)に仰(おお)せつけて治罰(じばつ)を加(くわ)うべし。

（050 諫暁八幡抄(かんぎょうはちまんしょう)

諸天(しょてん)の加護(かご)

733ページー11行）

「我滅度して後、能くひそかに一人のためにも、法華経を説かば、当に知るべし、この人は則ち如来の使いなり乃至如来は則ちために衣をもってこれを覆いたもう」

（050 諫暁八幡抄

折伏735ページー15行）

日蓮が法華経の肝心たる題目を日本国に弘通し候は、
諸天世間の眼にあらずや。眼には五つあり。いわゆる、
肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり。

（050 諫暁八幡抄

指導者 738ページー5行）

これ、いまだ、道理有って法の成就せぬには本尊をせむるということを存知せざる者の思いなり。

（050 諫暁八幡抄

折伏740ページー13行）

瞋恚（しんに）は善悪（ぜんあく）に通（つう）ずるものなり。

（050 諫暁八幡抄（かんぎょうはちまんしょう））

言動（げんどう）・振（ふ）る舞（ま）い742ページー1行）

今、日蓮は、去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今弘安三年太歳庚辰十二月にいたるまで、二十八年が間、また他事なし。ただ妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり。これ即ち、母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり

（050 諫暁八幡抄 御本仏の大慈悲 742ページー3行）

一切衆生の同一苦は、ことごとくこれ日蓮一人の苦なり
と申すべし。

（050 諫暁八幡抄
御本仏の大慈悲 745ページ-9行）

あらゆる人びとが受けているすべての苦しみは、全部、そのまま
日蓮一人の苦しみであります。

経文のごとくば、南無妙法蓮華経と申す人をば、大梵天・帝釈・日月・四天等、昼夜に守護すべしと見えたり。

（050 諫暁八幡抄）

諸天の加護 747ページー5行

経文のとおりならば、南無妙法蓮華経と唱える人を大梵天王、帝釈天、日天、月天、四天王などの諸天善神が昼夜に守るであろうとあります。

天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給うべき名なり。扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給わざらん。月は西より東に向かえり。月氏の仏法の東へ流るべき相なり。日は東より出ず。日本の仏法の月氏へかえるべき瑞相なり。月は光あきらかならず。在世はただ八年なり。日は光明、月に勝れり。五の五百歳の長き闇を照らすべき瑞相なり。

諫暁八幡抄

広宣流布（こうせんるふ）747ページー11行

天竺国（てんじくこく）（インド）を月氏国（がっしこく）といいますが、これは、仏が出現（ほとけしゅつげん）すべき国の名（くにな）です。扶桑国（ふそうこく）を日本国（にほんこく）といいます。どうして聖人（しょうにん）が出現（しゅつげん）しないわけがありましょうか。月は出方（つきでかた）が西（にし）から東（ひがし）へと向（む）かいます。それはインドの仏法（ぶっぽう）が東方（とうほう）へ流布（るふ）していくさまをあらわしています。太陽（たいよう）は東（ひがし）から出（で）ます。これは、日本（にほん）の仏法（ぶっぽう）がインドおよび全世界（ぜんせかい）にかえっていく瑞相（ずいそう）（しるし）なのです。月は光（つきひかり）が明（あか）るくないように法華経（ほけきょう）はただ釈尊在世（しゃくそんざいせ）の八年間（はちねんかん）を照（て）らしただけでした。太陽（たいよう）の輝（かがや）きは月（つき）に勝（すぐ）れており、これは五五百歳（ごごひゃくさい）、末法万年（まっぽうまんねん）の

未来永劫にわたって闇を照らしていく瑞相です。

信は道の源、功徳の母」と云えり。菩薩の五十二位には十信を本となし、十信の位には信心を始めとなし、諸の悪業・煩悩は不信を本となす

（051念仏無間地獄抄

信・不信748ページー14行）

信は成仏に至る根源であり、功徳を生ずる母といわれています。菩薩の修行の位である五十二位においては、十信が基本となり、その十信の位では、信心が出発点になっています。もろも

ろの悪い業や煩悩は不信が根本になっているのです。

譬喩品の十四誹謗も不信をもって体となせり。

（051 念仏無間地獄抄

信・不信748ページー16行）

されども「非学匠は理につまらず」と云って、他人の道理をも自身の道理をも聞き知らざるあいだ、暗証の者とは云うなり。すべて理におれざるなり。譬えば、行く水に数書かずかくがごとし。

（053 諸宗問答抄 言動・振る舞い 772ページー2行）

およそ心と色法とは不二の法にてあるあいだ、かきたる物をもって、その人の貧福をも相するなり。しかれば、文字はこれ一切衆生の色心不二の質なり。汝もし文字を立てざれば、汝が色心をも立つべからず。汝、六根を離れて、禅の法門一句答えよ」と責むべきなり。

（053 諸宗問答抄 生命とその尊厳 772ページ－15行）

我ら一切衆生、蝼蟻蚊虻等に至るまで、みな無始無終の色心なり。

（053 諸宗問答抄 三世の生命 775ページ－3行）

諫臣国に在れば則ちその国正しく、争子家に在れば則ちその家直し。国家の安危は政道の直否に在り、仏法の邪正は経文の明鏡に依る。

（064 北条時宗への御状
立正安国 854ページ－10行）

澗底の長松いまだ知らざるは良匠の誤り、闇中の錦衣いまだ見ざるは愚人の失なり。

（064 北条時宗への御状

指導者 855ページー5行）

「蜘蛛下(ちちゅくだ)つて喜(よろこ)び事来(ごときた)り、鴉鵲鳴(かんじゃくな)いて行人来(こうじんきた)る」。

（067北条弥源太(ほうじょうやげんた)への御状(ごじょう)

瑞相(ずいそう)858ページー9行）

おのおのようじんあ
各々用心有るべし。すこ　さいし　けんぞく　おも
少しも妻子・眷属を憶うことなかれ、
けんい　おそ　こんど　しょうじ　ばく　き　ぶっか
権威を恐るることなかれ。今度、生死の縛を切って仏果を
と　たま
遂げしめ給え。

（075 弟子檀那中への御状
でしだんなちゅう　ごじょう
退転のいましめ866ページ－9行）
たいてん

なんお　がた
（難が起こってくるかもしれないことについては）あなた方も
ようじん　つま　こ　しんぞく　けらい
用心していきなさい。ちょっとでも妻や子ども、親族や家来たちの
しんぱい　こころ　うご　ばくふとう　けんい　おそ
ことを心配し心を動かされてはなりません。幕府等の権威を恐れ

てはなりません。今度こそ、無常の生死の迷いの綱を断ち切って
一生成仏を遂げていきなさい。

謀（はかりごと）を帷帳（いちょう）の中（うち）に回（めぐ）らし、勝（か）つことを千里（せんり）の外（ほか）に決（けっ）せしものなり。

（078 一昨日御書（いっさくじつごしょ）

指導者（しどうしゃ）874ページー1行）

悪人有って、不善の心をもって、一劫の中において、現に仏前において、常に仏を毀罵せば、その罪はなお軽し。もし人、一つの悪言をもって、在家・出家の法華経を読誦する者を毀呰せば、その罪ははなはだ重し

（083一代五時図

罰899ページー7行）

夫れ、仏法を学する法には、必ず時を知るべきなり。

（091 上行菩薩結要付嘱口伝 976ページー14行）

金光明経に云わく「日の天子および月天、この経典を聞き、精気充実す」

最勝王経に云わく「日出でて千光を放ち、無垢焔清浄なり。この経王の力に由って、流暉、四天を遶る」

（092 日月の事

諸天の加護978ページー13行）

三力（さんりき）　一切衆生力（いっさいしゅじょうりき）・法力（ほうりき）・自身功徳力（じしんくどくりき）

（092 日月（にちがつ）の事（こと）

仏法（ぶっぽう）と社会（しゃかい）979ページー7行）

「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」と云う。人法こ
れ有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華経
に帰命し奉るなり。

（095 御義口伝）

信・不信 984ページー7行）

「南無」とはインドの言葉であり、中国、日本では「帰命」と訳
されています。帰命する対象には人と法とがあります。人に帰命
するとは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人に帰命するこ

とであり、法（ほう）に帰命（きみょう）するとは法本尊（ほうほんぞん）である三大秘宝（さんだいひほう）の南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）に帰命（きみょう）することです。

「帰」とは我らが色法なり。「命」とは我らが心法なり。色心不二なるを一極と云うなり。

（095 御義口伝）

生命とその尊厳 984ページ－10行）

“帰”とは、私たちの色法を意味し、“命”とは、私たちの心法を意味するのです。この色法すなわち肉体・物質と、心法すなわち精神・心の働きが不二（一体）なのを一極の位（仏）というのです。

「蓮華」とは因果の二法なり。これまた因果一体なり。

（095 御義口伝）

因果の理法 984ページー17行）

蓮華とは、原因と結果の二法のことであり、また因果一体、つまり因果倶時をあらわしているのです。

「経」とは一切衆生の言語音声を経と云うなり。釈に云わく「声、仏事をなす。これを名づけて経となす」。

（095 御義口伝）

勤行・唱題 984ページ-17行）

経というのはあらゆる生命体が発する言葉、音声のことです。章安大師の「私記縁起」（「法華玄義」の序）には「仏の音声はすべて衆生を教化する所作である。これを名づけて経という」とあります。

不信の人は「如是我聞」の「聞」にはあらず。法華経の行者は、「如是」の体を聞く人と云うべきなり。

（095 御義口伝

信・不信 986ページー12行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、
生死の闇を照らし晴らして、涅槃の智火明了なり。

（095 御義口伝

功徳 987 ページー6行）

煩悩の薪を焼いて、菩提の慧火現前するなり。

（095 御義口伝）

一生成仏・仏界湧現 987ページー7行

今、日蓮等の類い、聖霊を訪う時、法華経を読誦し南無妙法蓮華経と唱え奉る時、題目の光無間に至って即身成仏せしむ。回向の文、これより事起こるなり。

（095 御義口伝）

遺族の方への激励 991ページー2行

いま日蓮とその門下が、大御本尊に結縁して亡くなった人を法華経を読誦し、南無妙法蓮華経と唱えて追善供養するとき、題目の光が無間地獄にいたって、即身成仏させることができるの

です。廻向の文はここから起こっているのです。

法界三千を、「秘妙」とは云うなり。秘とは、きびしきなり、三千羅列なり。これより外に不思議これ無し。

（095 御義口伝

因果の理法 993ページ-17行）

大謗法の人たりというとも、妙法蓮華経を受持し奉るところを、妙法蓮華経方便品とは云うなり。今、末法に入って、正しく日蓮等の類いのことなり。妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入るるを、妙法蓮華経方便品とは云うなり。これを即身成仏とも如是本末究竟等とも説く。

（095 御義口伝

妙法の偉大さ 994ページ－1行）

根深(ねふか)ければ則(すなわ)ち条茂(えだしげ)く、源遠(みなもととお)ければ則(すなわ)ち流(なが)れ長(なが)きがごとし。

（095御義口伝(おんぎくでん)）

未来(みらい)への展望(てんぼう)

995ページ－4行）

（木(き)は）根(ね)が深(ふか)ければ枝(えだ)や葉(は)は茂(しげ)り、（川(かわ)は）源(みなもと)が遠(とお)ければその流(なが)れは長(なが)くなるようなものです。

「開」とは、信心の異名なり。信心をもって妙法を唱え奉らば、やがて開仏知見するなり。

（095 御義口伝）

信・不信 997ページー10行

「相とは、四濁増劇にしてこの時に聚まれり。瞋恚増劇にして刀兵起こり、貪欲増劇にして飢餓起こり、愚癡増劇にして疾疫起こる。三災起こるが故に、煩悩ますます隆んに、諸見転た熾んなり」。

（095御義口伝

仏法と社会1000ページ－1行）

南無妙法蓮華経と唱え奉って、日本国の一切衆生を我成仏せしめんというところの願、しかしながら「如我昔所願」なり。終に引導して己身と和合するを、「今者已満足（今、已に満足しぬ）」と意得べきなり。

（095御義口伝

御本仏の大慈悲1003ページ－16行）

妙覚の釈尊は我らが血肉なり。因果の功徳は骨髄にあらずや。釈には「因を挙げて信を勧む」と。「因を挙ぐ」は、即ち本果なり。今、日蓮が唱うるところの南無妙法蓮華経は、末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり。あに「今者已満足」にあらずや。

（095 御義口伝 一生成仏・仏界湧現 1004ページー7行）

妙覚の釈尊は私たち衆生の血や肉であり、因果の功徳は骨

の髄ではないでしょうか。（これは師である仏も久遠元初の自受用身、弟子である衆生もまた久遠元初の自受用身としてあらわれ、自受用身に約して師弟不二であることを明かされています）。また釈（天台大師の法華文句）には「因を挙げて信を勧む」とあり、因を挙げるのがすなわち本果です。（これは仏の種があることを悟らせることを成仏というからです）。いま日蓮が唱えるところの南無妙法蓮華経は、末法万年の衆生を、ことごとく成仏せしめるのです。どうして「今昔已満足」（今昔は已に満足しぬ）でないといえましょうか。

「合掌」とは、法華経の異名なり。「向仏」とは、法華経に値い奉るを云うなり。「合掌」は色法なり、「向仏」は心法なり。色心の二法を妙法と開悟するを、「歓喜踊躍」と説くなり。

（095 御義口伝）

勤行・唱題 1006ページ－16行）

「合掌」とは法華経の異名です。「向仏」とは、南無妙法蓮華経におあいしていくということです。合掌は色法に

あらわれた姿（すがた）であり、向仏（こうぶつ）とは信心（しんじん）の心法（しんぽう）です。色心（しきしん）の二法（にほう）（生命（せいめい））を妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）であると悟（さと）ることを、法華経譬喩品（ほけきょうひゆほん）で舎利弗（しゃりほつ）が歓喜踊躍（かんきゆやく）したと説くのであり、歓喜踊躍（かんきゆやく）とは心法一体（しんぽういったい）の姿（すがた）なのです。

「廻転（えてん）」とは、題目（だいもく）の五字（ごじ）なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

勤行（ごんぎょう）・唱題（しょうだい）1009ページー7行）

我ら衆生の五体・五輪、妙法蓮華経と浮かび出でたるあいだ、宝塔品をもって鏡と習うなり。信・謗の浮かび様、能く能くこれを案ずべし。自浮自影の鏡とは、南無妙法蓮華経これなり

（095 御義口伝

信・不信 1010ページー7行）

自身法性の大地を、生死生死と転り行くなり

（095 御義口伝）

三世の生命1010ページー15行

一念三千も「信」の一字より起こり、三世の諸仏の成道も「信」の一字より起こるなり。この「信」の字、元品の無明を切る利剣なり。その故は、「信」は、「疑いなきを『信』と曰う」とて、疑惑を断破する利剣なり。「解」とは、智慧の異名なり。「信」は価のごとく、「解」は宝のごとし。三世の諸仏の智慧をかうは「信」の一字なり。智慧とは南無妙法蓮華経なり。「信」は智慧の因にして名字即なり。「信」の外に「解」無く、「解」の外に「信」

無し。「信」の一字をもって妙覚の種子と定めたり。

095 御義口伝

（信・不信 1011ページー16行）

一念三千の法理といっても、信の一字より起こり成り立っているのです。また三世のあらゆる仏も、みな御本尊を信じて成仏したのです。この信というのは、元品の無明（成仏をさまたげる根本の迷い）を断ち切る利剣です。その理由は信とは「疑い無きを信と曰う」ということで、仏法に対する疑いや惑いを断ち破っていく利剣なのです。解（理解すること）とは智慧の別名です。信ずること

だいか　げ　たから　さんぜ
は代価のようなもので解とは宝のようなものです。三世のあらゆる
ほとけ　ちえ　え　しん　いちじ　ちえ
仏の智慧を得るのは信の一字によるのです。智慧とは
なんみょうほうれんげきょう　ごほんぞん　しん　ほとけ　ちえ
南無妙法蓮華経のことです。御本尊を信ずることは、仏の智慧を
みょうじそく　くらい　しん　げ　え
いただくもとであり、名字即の位なのです。信なくして解は得られ
げ　なんみょうほうれんげきょう　しんじつ　しん　しん
ず、解（南無妙法蓮華経）なくして真実の信もありえません。信の
いちじ　みょうがく　ほとけ　たね
一字こそ、妙覚（仏のさとり）で種であるのです。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と信受・領納する故に、「無上宝聚　不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから得たり）」の大宝珠を得るなり。

（095 御義口伝）

功徳1012ページー5行）

いま日蓮とその門下が、御本尊にむかって南無妙法蓮華経を唱えることが成仏の根本であると信じ納得することは、法華経信解品に「無上の宝珠、求めざるに自ずから得たり」とある、その

大宝珠を得たことになるのです。

「宝聚」とは、三世の諸仏の万行万善・諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華経なり。この無上宝聚を、辛労も無く行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」とは、これなり。

（095 御義口伝

功徳1014ページー10行）

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、過去の因にもとづきたり。

（095御義口伝

使命1021ページー2行）

我らが滅する当体は「化城」なり。この滅を滅と見れば、「化城」なり。不滅の滅と知見するを、「宝処」とは云うなり。

（095 御義口伝

臨終 1023ページー17行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、
化城即宝処なり。我らが居住の山谷曠野、皆、皆常寂光
の宝処なり

（095御義口伝

寂光土1024ページー3行）

「共」の一字は、日蓮に共する時は宝所に至るべし。不共ならば阿鼻大城に堕つべし

（095 御義口伝）

信仰者の姿勢 1024ページ－8行

「大願（だいがん）」とは、法華弘通（ほっけぐつう）なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

折伏（しゃくぶく）1027ページー４行）

大願（だいがん）とは法華経（ほけきょう）（御本尊（ごほんぞん））を弘（ひろ）めゆくこと、つまり広宣流布（こうせんるふ）のことです。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「与如来共宿」の者なり。傅大士の釈に云わく「朝々仏とともに起き、夕々仏とともに臥す。時々に成道し、時々に顕本す」云々。

（095 御義口伝）

勤行・唱題 1027ページ－12行）

いま日蓮とその門下が南無妙法蓮華経を唱えるのは、法華経法師品に説かれる「如来と共に宿する」人のことです。弥勒菩薩の

後身（こうしん）といわれる傅大士（ふだいし）は「毎朝仏（まいあさほとけ）とともに起き、毎晩仏（まいばんほとけ）をお
に安（やす）らかに寝（ね）ます。また瞬間瞬間（しゅんかんしゅんかん）に成道（じょうどう）し瞬間瞬間（しゅんかんしゅんかん）に顕本（けんぽん）
するのです」と述（の）べています。

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、仏勅を念ずるが故に、「応忍」とは云うなり。

（095 御義口伝）

勇気・忍耐 1029ページー5行

「宝」とは、五陰なり。「塔」とは、和合なり。五陰和合をもって「宝塔」と云うなり。この五陰和合とは、妙法の五字なりと見る、これを「見」とは云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「見宝塔」なり。

（095 御義口伝

生命とその尊厳 1031ページー5行）

「七宝」とは、聞・信・戒・定・進・捨・慙なり。また云わく、頭上の七穴なり。

（095 御義口伝）

生命とその尊厳 1031ページ－9行）

七つの宝とは、聞・信・戒・定・進・捨・慙のことで、七聖財（仏法修行の要となる法財）ともいわれます。また七宝とは、頭上の七穴、すなわち二つの目、二つの耳、二つの鼻の穴、一つの口をいうのです。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、

「大音声」なり。

（095 御義口伝

勤行・唱題 1032ページー2行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、仏に宝華を奉るなり。

（095御義口伝

勤行・唱題1033ページ－9行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、無明の惑障却けて、己心の釈迦・多宝住するなり。

（095御義口伝

一生成仏・仏界湧現1034ページー1行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、大風の吹くがごとくなり。

（095御義口伝）

勤行・唱題1034ページ－17行）

いま日蓮とその門下が、南無妙法蓮華経と唱えていく姿というものは、大風の吹くようなものです。

法華経を持ち奉るとは、我が身は仏身なりと持つなり。

（095御義口伝）

一生成仏・仏界湧現1035ページー2行

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱えて歓喜する、これなり

（095 御義口伝

歓喜・遊楽 1035ページー13行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、
日蓮に違わずして宣説すべきなり。
（095 御義口伝
如説修行 1038ページ-1行）

「八（ひらく）」とは、色心（しきしん）を妙法（みょうほう）と開（ひら）くなり。
（095 御義口伝（おんぎくでん））
一生成仏（いっしょうじょうぶつ）・仏界湧現（ぶっかいゆげん）1039ページ－10行）

漢高三尺の剣も一字の智剣に及ばざるなり。妙の一字の智剣をもって、生死・煩悩の縄を切るなり。

（095 御義口伝

妙法の偉大さ1040ページー17行）

「師子吼」とは、仏の説なり。説法とは法華、別しては南無妙法蓮華経なり。

「師」とは師匠授くるところの妙法、「子」とは弟子受くるところの妙法、「吼」とは師弟共に唱うるところの音声なり。「作」とは、「おこす」と読むなり。末法にして南無妙法蓮華経を作すなり。

（095御義口伝

使命1043ページ2行）

ししく　　ほとけ　せっぽう

師子吼とは仏の説法のことです。説法とは法華経、別して

なんみょうほうれんげきょう　と　　ししく　し　し　ほとけ

南無妙法蓮華経を説くことです。師子吼の「師」とは、師である仏

さず　みょうほう　し　でし　う　みょうほう

が授ける妙法であり、「子」とは、弟子が受ける妙法であり、

く　ししょう　でし　　となおんじょう　さ

「吼」とは、師匠と弟子と、ともに唱える音声をいうのです。作と

よ　ししく　おこ　　まっぽう

はおこすと読みます。「師子吼を作す」とは、末法において

なんみょうほうれんげきょう　おこ

南無妙法蓮華経を作すことをいうのです。

「鬼（き）」とは、「奪命者（だつみょうしゃ）（命（いのち）を奪（うば）う者（もの））」にして、「奪（だつ）功徳者（くどくしゃ）（功徳（くどく）を奪（うば）う者（もの））」と云（い）うなり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

仏（ほとけ）と魔（ま）1044ページー9行）

「無上道（むじょうどう）」とは、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）これなり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

妙法（みょうほう）の偉大（いだい）さ 1044ページー13行）

（法華経勧持品（ほけきょうかんじほん）に説（と）かれている「我身命（われしんみょう）を愛（あい）せず、但無上道（ただむじょうどう）を惜（お）しむ」の）無上道（むじょうどう）とは南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）のことです。

末法において、今、日蓮等の類いの修行は、妙法蓮華経を修行するに、難来るをもって安楽と意得べきなり。

（095 御義口伝）

難を乗り越える

（1045ページ-4行）

末法において日蓮とその門下の修行は、大御本尊を信じ、自行化他にわたる仏道修行をはげんで難が起きてくることをもって安楽であるとこころえていくべきなのです。

末法において法華を行ずる者をば、諸天の守護これ有るべし。「常為法故（常に法のための故に）」の「法」とは、南無妙法蓮華経これなり。

（095 御義口伝）

諸天の加護 1046ページー2行

この本法を受持するは、信の一字なり。元品の無明を対治する利剣は、信の一字なり。「疑いなきを信と曰う」の釈、これを思うべし

（095 御義口伝）

信・不信 1047ページー10行）

されば、無作の三身とは、末法の法華経の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華経」と云うなり。

（095 御義口伝 御本仏の境涯・確信 1048ページ-11行）

「神通之力」とは、我ら衆生の作々発々と振る舞うところを、「神通」と云うなり。獄卒の罪人を呵責する音も、皆「神通之力」なり。生住異滅森羅三千の当体、ことごとく「神通之力」の体なり。今、日蓮等の類いの意は、即身成仏と開覚するを、「如来秘密・神通之力」とは云うなり。成仏するより外の「神通」と「秘密」とはこれ無きなり。この無作の三身をば、一字をもって得たり。いわゆる「信」の一字なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

妙法（みょうほう）の偉大（いだい）さ1049ページー5行）

「已」とは、過去なり。「来」とは、未来なり。「已来」の言の中に現在は有るなり。

（095 御義口伝）

三世の生命 1049ページ-17行）

我実成仏已来の已とは過去のことであり、来とは未来のことです。この已来という言葉のなかに現在はふくまれるのです。

「三界之相」とは、生老病死なり。本有の生死とみれば、「無有生死」なり。生死無ければ、退出も無し。ただ生死無きのみにあらざるなり。生死を見て厭離するを、迷いと云い、始覚と云うなり。さて、本有の生死と知見するを、悟りと云い、本覚と云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、本有の生死、本有の退出と開覚するなり。

（095）御義口伝

「無」も「有」も、「生」も「死」も、「若退（もしは退）」も「若出（もしは出）」も、「在世」も「滅後」も、ことごとく皆本有常住の振る舞いなり。「無」とは、法界同時に妙法蓮華経の振る舞いより外は無きなり。「有」とは、地獄は地獄のありのまま、十界本有の妙法の全体なり。「生」とは、妙法の生なれば、随縁なり。「死」とは、寿量の死なれば、法界同時に真如なり。「若退」の故に滅後なり、「若出」の故に在世な

り。

（095 御義口伝）

三世の生命 1050ページ－14行

（「生死の、若しは退、若しは出 有ること無く」の）無も有も、生も死も、若 退も若 出も、また在世も滅後もすべて遠い過去世よりつねに生命そのものにそなわる本来の姿、働きなのです。また無有生死の“無”とは、宇宙のあらゆる森羅万象がすべて妙法蓮華経の振る舞い以外の何ものでもないということであり、”有“とは、地獄は地獄のありのままということであり、もともと十界

をそなえていること自体が妙法なのです。”生“とは、永遠に常住する妙法を根底とした生ですから、いまはじめて生じたものではなく、もともとあるものが縁にふれてあらわれたものです。”死“とは、永遠の生命からみた死ですから、大宇宙それ自体となり、法界がそのまま妙法それ自体なのです。それは「若しは退」のゆえに滅後すなわち死となり、「若しは出」のゆえに在世すなわち生となるのであって、退くか出現するかの違いにすぎません。

「失本心（しつほんしん）」とは、謗法（ほうぼう）なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

謗法（ほうぼう）のいましめ1052ページー7行）

されば、妙法の大良薬を服する者は、貪・瞋・癡の三毒の煩悩の病患を除くなり。

（095 御義口伝）

功徳1052ページー17行

法華の行者は、罵詈せらるれども忍辱を行ずるは、瞋恚の病を除くなり。

（095御義口伝）

勇気・忍耐1053ページー2行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、
大良薬の本主なり。

（095御義口伝
御本仏の境涯・確信1053ページー4行）

一切衆生の異の苦を受くるは、ことごとくこれ如来一人の苦なり

（095 御義口伝 御本仏の大慈悲 1056ページ-14行）

あらゆる人びとの種々のさまざまなすべての苦しみは、すべて日蓮ただ一人の苦しみでもあるのです。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る念は、
大慈悲の念なり

（095 御義口伝

御本仏の大慈悲 1057ページ-13行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、

「成就仏身」疑いなきなり

（095御義口伝

一生成仏・仏界湧現1057ページ-17行）

ほしいままにもちいるみ
自受用身とは、一念三千なり。伝教云わく「一念三千
いちねんさんぜん　でんぎょういい　いちねんさんぜん
そくじじゅゆうしん　じじゅゆうしん　そんぎょう　い　ほとけ
即自受用身。自受用身とは、尊形を出でたる仏なり」。
そんぎょう　い　ほとけ　むさ　さんじん
「尊形を出でたる仏」とは、無作の三身ということなり
うんぬん　いま　にちれんとう　たぐ　なんみょうほうれんげきょう　となたてまつ
云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る
もの　うんぬん
者、これなり云々。

（095 御義口伝
おんぎくでん
御本尊は仏の生命
ごほんぞん　ほとけ　せいめい
1058ページー8行）

修行（しゅぎょう）とは、「無疑曰信（むぎわっしん）（疑（うたが）いなきを信（しん）と曰（い）う）」の信心（しんじん）のことなり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

信（しん）・不信（ふしん）1059ページー2行）

「信」の一字は、最後品の無明を切る利剣なり。

（095 御義口伝

信・不信 1060ページー7行）

「喜（き）」とは、自他共（じたとも）に喜（よろこ）ぶことなり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

歓喜（かんき）・遊楽（ゆうらく）1061ページー10行）

自他共に智慧と慈悲と有るを、「喜」とは云うなり。

（095 御義口伝）

歓喜・遊楽 1061ページー12行

これに随い喜ぶを、「随喜」とは云うなり。総じて「随」とは、信の異名なり云々。ただ信心のことを、「随」と云うなり。

（095 御義口伝

信仰者の姿勢 1061ページー15行）

「功徳」とは、「六根清浄」の果報なり。詮ずるところ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「六根清浄」なり。されば、妙法蓮華経の法師と成って大いなる徳い有るなり。「功」も幸いということなり。または、悪を滅するを「功」と云い、善を生ずるを「徳」と云うなり。「功徳」とは、即身成仏なり。また「六根清浄」なり。

功徳（くどく）1062（ページ－10行）

功徳（くどく）とは六根（ろっこん）（眼（め）・耳（みみ）・鼻（はな）・舌（した）・身（み）・意（こころ））にそなわった煩悩（ぼんのう）が払（はら）い落（お）されて清（きよ）らかになった姿（すがた）です。結局（けっきょく）、日蓮（にちれん）とその門下（もんか）が、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）えれば六根清浄（ろっこんしょうじょう）となるのです。したがって、妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）の法（ほう）（御本尊（ごほんぞん））を自行化他（じぎょうけたぎょう）に行（し）ずるところの師（し）となって大（おお）きな功徳（くどく）があるのです。功徳（くどく）の「功（く）」とは幸（さいわ）いということです。または悪（あく）を滅（めっ）することを「功（く）」といい、善（ぜん）を生（しょう）じることを「徳（とく）」というのです。最高（さいこう）の功徳（くどく）とは即身成仏（そくしんじょうぶつ）であり、また六根清浄（ろっこんしょうじょう）なのです。

六根清浄の人は「瑠璃」「明鏡」のごとく三千世界を見るという経文なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、明鏡に万像を浮かぶるがごとく知見するなり。この明鏡とは、法華経なり。別しては宝塔品なり。

（095御義口伝一生成仏・仏界湧現1063ページー４行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者の「希有地」とは、末法弘通の明鏡たる本尊なり。

（095 御義口伝

妙法の偉大さ 1063ページ－16行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、皆
地涌の流類なり。

（095 御義口伝

使命1064ページ-15行）

いま日蓮とその門下で、南無妙法蓮華経と唱える者は、すべて
地涌の菩薩の眷属なのです。

法華の題目は獅子の吼うるがごとく、余経は余獣の音のごとくなり。「諸経中王（諸経の中の王なり）」の故に「王」と云うなり。

（095 御義口伝）

勤行・唱題 1064ページー16行）

法華経の題目は百獣の王・師子が吼えるようなものであり、法華経以外のあらゆる経は他の獣の声のようなものです。法華経は諸経の中の王であるので王というのです。

譬喩品に「身常臭処　垢穢不浄（身は常に臭処にして、垢穢不浄なり）」と云えり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、色心共に清浄なり。

（095 御義口伝）

病気1065ページ-17行）

「信」とは、「無疑曰信（疑いなきを信と曰う）」明了なり。「伏」とは、法華に帰伏するなり。「随」とは、心を法華経に移すなり。「従」とは、身をこの経に移すなり。

（095 御義口伝

信・不信 1066ページー12行）

「心無所畏（しんむしょい）」とは、今（いま）、日蓮等（にちれんとう）の類（たぐ）い、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と呼（よ）ばわるところの折伏（しゃくぶく）なり

（095 御義口伝（おんぎくでん））

折伏（しゃくぶく）1066ページ－17行）

末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、題目なり。「僧」とは、我ら行者なり。仏とも云われ、また凡夫僧とも云わるるなり。

（095 御義口伝
御本仏の境涯・確信 1067ページ－8行）

礼拝する時、両の手を合するは、煩悩即菩提・生死即涅槃なり。上慢の四衆の具うるところの仏性も、不軽の具うるところの仏性も、一種の妙法なりと礼拝するなり

（095 御義口伝

勤行・唱題1069ページ－13行）

不軽菩薩の四衆を礼拝すれば、上慢の四衆の具うるところの仏性もまた不軽菩薩を礼拝するなり。鏡に向かって礼拝をなす時、浮かべる影また我を礼拝するなり

（095 御義口伝

勤行・唱題1071ページ－11行）

本化弘通の妙法蓮華経を大忍辱の力をもって弘通する

を、「娑婆」と云うなり。「忍辱」は、寂光土なり。この

忍辱の心を、「釈迦牟尼仏」といえり。「娑婆」とは、

堪忍世界と云うなり

（095 御義口伝

勇気・忍耐1073ページ－16行）

「畢竟（ひっきょう）」とは広宣流布（こうせんるふ）なり。「住一乗（じゅういちじょう）」とは、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）の一法（いっぽう）に住（じゅう）すべきものなり。（095御義口伝（おんぎくでん））

広宣流布（こうせんるふ）1074ページー7行）

「妙音」とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉ることは、末法当今の不思議の音声なり。

（095御義口伝）

勤行・唱題1077ページ-11行）

日蓮とその門下が唱える南無妙法蓮華経の音声は、末法今時における不思議の音声、つまり真実の妙音なのです。

この法華経を閻浮提に行ずることは、普賢菩薩の威神の力に依るなり。

この経の広宣流布することは、普賢菩薩の守護なるべきなり

（095御義口伝）

広宣流布1085ページー2行）

この法華経を全世界に行じていくということは、普賢菩薩の力によるのです。この経（三大秘宝の南無妙法蓮華経）が広宣流布

するのは、普賢菩薩の守護の力によるのです。

法華経を持ち奉る処を、「当詣道場」と云うなり。ここを去ってかしこに行くにはあらざるなり。「道場」とは、十界の衆生の住所を云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住所は、山谷曠野、皆、寂光土なり。これを「道場」と云うなり。

（095御義口伝）

寂光土1086ページー2行）

法華経（大聖人の仏法）を持ち修行する、その場所を「当詣

道場（どうじょう）」というのです。この娑婆世界（しゃばせかい）を去（さ）って、極楽浄土等（ごくらくじょうどとう）の他土（たど）へ行（い）くのではありません。道場（どうじょう）とは十界（じっかい）をそなえた衆生（しゅじょう）が住（じゅう）するところをいうのです。いま南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）える日蓮（にちれん）とその門下（もんか）の住処（じゅうしょ）は、それが山（やま）であり、谷（たに）であり、広野（こうや）であっても、すべて寂光土（じゃっこうど）です。これを道場（どうじょう）というのです。

桜梅桃李の己々の当体を改めずして無作の三身と開見すれば、これ即ち「量」の義なり。

（095 御義口伝）

使命 1090ページ-9行）

桜は桜、梅は梅、桃は桃、李は李と、おのおのの姿を改めずに、そのままで無作三身（仏）と開いていくことが無量義の「量」の意義なのです。

法華の行者は、貪欲は貪欲のまま、瞋恚は瞋恚のまま、
愚癡は愚癡のまま、普賢菩薩の行法なりと心得べきなり
（095 御義口伝）

人生・生き方 1092ページー12行

「衆罪（しゅざい）」とは、六根（ろっこん）において業障（ごうしょうふ）降（くだ）り下ることは霜露（そうろ）のごとし。しかりといえども、「慧日（えにち）」をもって能（よ）く消除（しょうじょ）すと云（い）えり。「慧日（えにち）」とは、末法当今（まっぽうとうこん）、日蓮（にちれん）の弘（ひろ）むるところの南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

罪障消滅（ざいしょうしょうめつ）

1093ページー5行）

正法を天下一同に信仰せば、この国安穏ならん。されば、玄義に云わく「もしこの法によらば、則ち天下泰平ならん」。「この法」とは、法華経なり。法華経を信仰せば、天下安全たらんこと疑いあるべからざるなり

（095 御義口伝

立正安国 1093ページー13行）

いわゆる、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、自身の宮殿に入るなり。

（095御義口伝）

生命とその尊厳1095ページ－4行

いわゆる、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）は三世一念（さんぜいちねん）なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

一念（いちねん）の力（ちから）1096ページー11行）

我が心本来の仏なりと知るを、即ち「大歓喜」と名づく。いわゆる、南無妙法蓮華経は歓喜の中の大歓喜なり。

（095 御義口伝）

歓喜・遊楽 1097ページ－1行）

（御本尊を持つことによって、はじめて）自分自身が妙法の当体であると悟っていくことができます。これを大歓喜というのです。すなわち南無妙法蓮華経と唱えていくことは、自分自身の即身成仏を実現していくのですから、歓喜の中の大歓喜なのです。

いわゆる、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）え奉（たてまつ）るは、即（すなわ）ち「自在（じざい）」なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

功徳（くどく）1097ページー17行）

一念に億劫の辛労を尽くせば、本来無作の三身念々に起こるなり。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行なり。

（095 御義口伝）

一念の力 1099ページ－16行）

わが一念（生命）に億劫（長い間）にもわたる大変な辛労を尽くして仏道修行に励んでいくならば、本来、自分の身にそなわっている無作三身の仏の生命が、瞬間瞬間に起こってくるのです。いわゆる南無妙法蓮華経と唱えていくことそれ自体が

精進行（しょうじんぎょう）です。

一切即妙法（いっさいそくみょうほう）なれば、一心（いっしん）の源底（げんてい）を顕（あらわ）すこと甚妙無外（じんみょうむげ）なり。いわゆる、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）は不思議（ふしぎ）なり。

（095御義口伝（おんぎくでん））

一生成仏（いっしょうじょうぶつ）・仏界湧現（ぶっかいゆげん）1101ページー1行）

依正（えしょう）・福智（ふくち）共（とも）に「無量（むりょう）」なり。

いわゆる、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）は福智（ふくち）の二法（にほう）なり

（095 御義口伝（おんぎくでん））

福運（ふくうん）1104ページー5行）

この「宝塔」は宝浄世界より涌現するなり。その宝浄世界の仏とは、事相の義をばしばらくこれを置く、証道・観心の時は母の胎内これなり。故に、父母は宝塔造作の番匠なり。

宝塔とは、我らが五輪・五大なり。しかるに、託胎の胎を宝浄世界と云う。故に、出胎するところを「涌現」と云うなり。およそ衆生の涌現は地輪より出現するなり。故に「従地涌出（地より涌出す）」と云うなり。

妙法の宝浄世界なれば、十界の衆生の胎内は皆これ宝浄世界なり。蓮華の宝浄なれば、十界の胎内ことごとく無垢清浄の世界なり。妙法の地輪なれば、十界に亘るなり。蓮華の地なれば、清浄地なり。妙法の宝浄なれば、我らが身体は清浄の宝塔なり。妙法蓮華の涌出なれば、十界の出胎の産門、本来清浄の宝塔なり。

（095 御義口伝

出産 1110ページ－8行）

凡夫の血肉の色心を本有と談ずるが故に、本門とは云うなり。

（095 御義口伝）

三世の生命 1113ページー14行）

能説に約する時は釈迦なり。衆生の重病を消除する方は、薬王・薬師如来なり。（095御義口伝）

病気1116ページー4行

今、日蓮等の弘通の南無妙法蓮華経は、体なり、心なり。二十八品は用なり。二十八品は助行なり、題目は正行なり。正行に助行を摂むべきなり云々。

（095 御義口伝）

勤行・唱題 1106ページー8行）

いま、日蓮とその門下が弘めている南無妙法蓮華経は、久遠元初の自受用身が弘めるところの本体であり、心すなわち根本となるものです。釈尊が説いた妙法蓮華経二十八品は、用すなわ

さようめん　　なんみょうほうれんげきょう　せつめいしょ　　ぶつどうしゅぎょう
ち作用面であり、南無妙法蓮華経の説明書です。仏道修行のう
にじゅうはっぽん　じょぎょう　だいもく　しょうぎょう
えにおいても、二十八品は助行であり、題目が正行です。
じょぎょう　しょうぎょう　ふく
助行は正行に含めるべきなのです。

父母果縛の肉身を妙法蓮華経と礼拝するなり。

（095御義口伝

生命とその尊厳1114ページー17行）

父母の成仏は、即ち子の成仏なり。子の成仏は、即ち父母の成仏なり。

（096 御講聞書 1130ページ－8行）

親子・孝養

終(つい)には一閻浮提(いちえんぶだい)に広宣流布(こうせんるふ)せんこと一定(いちじょう)なるべし

（096御講聞書(おんこうききがき)）

広宣流布(こうせんるふ)1135ページー5行）

不信の意出来せば、たちまちに信心に住すべし。詮ずるところ、不信の心をば師となすべからず。信心の心を師匠とすべし。

（096御講聞書）

信・不信1174ページー14行）

題目の五字は、体のごとく、音のごとくなり。題目を唱え奉る音は、十方世界にとずかずという処なし。我らが小音なれども、題目の大音に入れて唱え奉るあいだ、一大三千界にいたらざる処なし。譬えば、小音なれども貝に入れて吹く時、遠く響くがごとく、手の音はわずかなれども鼓を打つに遠く響くがごとし。

（096 御講聞書

勤行・唱題 1121ページ－11行）

仏になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこそ、仏にはなり候らめとおしはからる。既に経文のごとく「悪口・罵詈」「刀杖・瓦礫」「しばしば擯出せられん」と説かれて、かかるめに値い候こそ法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく候。死して候わば、必ず各々をもたすけたてまつるべし。

（098 佐渡御勘気抄

御本仏の境涯・確信（1195ページ－11行）

仏になる道にはかならず命を捨てるほどのことがあってはじめて仏になれると思われます。すでに経文に説かれている悪口罵詈（悪口をいわれ、ののしられること）、刀杖瓦礫（刀、杖、瓦、小石による難）、数数見擯出（しばしば住む所を追われること＝二度の流罪）等の難にあってきたことは、まさに法華経を身読したことになると、ますます信心もおこり、後生もたのもしく思われます。死んでいったとしても、かならず一人一人の弟子、檀那を助けてさしあげましょう。

一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏なり。

（099 義浄房御書 一生成仏・仏界湧現 1197ページ-11行）

ただし、東条、日蓮心ざすことは生処なり。日本国よりも大切におもい候。例せば、漢王の沛郡をおもくおぼしめししがごとし。かれ生処なるゆえなり。

（101別当御房御返事

地域広布1205ページー2行）

日蓮（にちれん）をだに用（もち）いぬほどならば、将門（まさかど）・純友（すみとも）・貞任（さだとう）・利仁（としひと）・田村（たむら）のようなる将軍（しょうぐん）、百千万人（ひゃくせんまんにん）ありとも叶（かな）うべからず。

（102 清澄寺大衆中（せいちょうじだいしゅちゅう））

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）1208ページー3行）

源（みなもと）に水（みず）あれば流（なが）れかわかず、火（ひ）はたきぎかくれば薪（たきぎ）尽（つ）絶（きえ）ぬ。草木（そうもく）は大地（だいち）なくして生長（しょうちょう）することあるべからず。

（103 華果成就御書（けかじょうじゅごしょ））

未来（みらい）への展望（てんぼう）

1210ページー9行）

されば、いねは華果成就すれども、必ず米の精、大地におさまる。故にひつじおいいでて、二度、華果成就するなり。

日蓮が法華経を弘むる功徳は、必ず道善房の身に帰すべし。あらとうと、とうと。

（103華果成就御書

報恩1210ページー16行）

法華経（ほけきょう）は一文一句（いちもんいっく）なれども耳（みみ）にふるる者は既（すで）に仏（ほとけ）になるべき

（104 四恩抄（しおんしょう））

功徳（くどく）1213ページー11行）

仏法を習う身には必ず四恩を報ずべきに候か。

（104 四恩抄）

報恩1215ページー16行）

仏法を実践する人はかならず四恩（父母の恩、衆生の恩、国王の恩、三宝の恩）を報じていくべきです。

仏法は眼前なれども、機なければ顕れず、時いたらざればひろまらざること、法爾の道理なり。例せば、大海の潮の時に随って増減し、上天の月の上下にみちかくるがごとし。

（105 新尼御前御返事
時を知る
1221ページー1行）

なずきをわり、みをせめて、いのりてみ候わん。ただ
さきのいのりとおぼしめせ。これより後は、のちのことを
よくよく御かため候え。

（106大尼御前御返事

祈り1224ページー9行）

日蓮が去ぬる文応元年太歳庚申に勘えたりし立正安国論、今すこしもたがわず符合しぬ。この書は白楽天が楽府にも越え、仏の未来記にもおとらず。末代の不思議、なに事かこれにすぎん。

（107種々御振舞御書 1225ページー6行）

日蓮が去る文応元年（太歳庚申）にかんがえあらわして幕府に提出した立正安国論の予言は少しも違わずにあたりました。こ

の立正安国論は、あの中国の白楽天が当時の政治を風刺して国を諫めた楽府よりも勝れ、釈尊の未来を予言した経文にも劣るものではありません。末法の世にこれ以上の不思議がまたとありましょうか。

日蓮悦んで云わく、本より存知の旨なり。雪山童子は半偈のために身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子は火に入り、楽法梵志は皮をはぐ。薬王菩薩は臂をやく。不軽菩薩は杖木をこうむり、師子尊者は頭をはねられ、提婆菩薩は外道にころさる。

（107種々御振舞御書
難を乗り越える1226ページー10行）

おのおのわ　でし　名乗　ひとびと　ひとり　臆　思
各々我が弟子となのらん人々は、一人もおくしおもわるべ
からず。おや　妻子　をおもい、めこをおもい、所領　顧
ることなかれ。無量劫　親子　よりこのかた、おやこのため、
所領　命　のために命すてたることは大地微塵　多　よりもおおし。
法華経のゆえにはいまだ一度もすてず。法華経をばそこば
く行ぜしかども、かかること出来せしかば、退転してや
みにき。譬えば、湯沸ゆをわかして水に入れ、火を切るにとげ
ざるがごとし。各々思い切り給え。この身を法華経にかう

るは、石に金をかえ、糞に米をかうるなり。

（107種々御振舞御書
難を乗り越える
1227ページー5行）

あなた方日蓮の弟子と名乗る人びとは一人も臆病な心を起こしてはなりません。（大難のときには）親のことを心配したり、妻子のことを心配したり、領地を顧みてはなりません。無量劫の遠い昔から今日まで、親や子のため、また所領のために命を捨てたことは大地の土の数よりも多かったにもかかわらず、法華経のために命を捨てたことはいまだ一度もありません。過去に法華経を少しは

修行したけれども、このような大難が起きてくると退転してしまったのです。それはたとえばせっかく湯を沸かしておきながら水にいれてしまい、火をおこすのに途中でやめておこしきれないようなものです。今こそあなたがたは覚悟を決めなさい。この身を法華経のために捨てるのは、石を黄金と取り替え、糞を米と交換するようなものです。

上のせめさせ給うにこそ、法華経を信じたる色もあらわれ候え。月はかけてみち、しおはひてみつこと疑いなし。これも罰あり。必ず徳あるべし。なにしにかなげかん。

（119土木殿御返事（依智滞在の事））

難を乗り越える1277ページー1行）

法華経の肝心、諸仏の眼目たる妙法蓮華経の五字、末法の始めに一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に、日蓮さきがけしたり。

和党　先駆

わとうども二陣三陣つづきて、迦葉・阿難にも勝れ、天台・伝教にもこえよかし。

超

（107種々御振舞御書　使命1227ページー11行）

法華経の肝心であり、諸仏の眼目である妙法蓮華経の五字

が、末法の初めに全世界に広まっていくべき瑞相として、いま日蓮がその先駆をきったのです。わが一党の者たちよ、二陣三陣と続いてこの大法を弘めて、迦葉・阿難にも勝れ、天台大師、伝教大師にも超えていきなさい。

わずかの小島のぬしらがおどさんをおじては、閻魔王のせめをばいかんがすべき。仏の御使いとなのりながらおくせんは、無下の人々なり

（107種々御振舞御書 1227ページ－13行）

わずかばかりの小島である日本の国の主（執権）等がおどすのを恐れているようでは、退転して地獄に堕ちたときに閻魔王に責められたならばいったいどうするのですか。仏の御使いと名乗っておき

ながら、今さら臆病になったとしたら、それはもっともいやしい人びとです。

日蓮御勘気をかぶらば、仏の御使いを用いぬになるべし。梵天・帝釈・日月・四天の御とがめありて、遠流・死罪の後、百日・一年・三年・七年が内に、自界叛逆難とて、この御一門どしうちはじまるべし。

（107種々御振舞御書 1228ページ－8行）

今、日蓮は日本第一の法華経の行者なり。その上、身に一分のあやまちなし。日本国の一切衆生の法華経を謗じて無間大城におつべきをたすけんがために申す法門なり。

（107種々御振舞御書
御本仏の境涯・確信1230ページ－10行）

「今夜、頸切られへまかるなり。この数年が間願いつることこれなり。この娑婆世界にして、きじとなりし時はたかにつかまれ、ねずみとなりし時はねこにくらわれき。あるいはめこのかたきに身を失いしこと、大地微塵より多し。法華経の御ためには一度だも失うことなし。されば、日蓮、貧道の身と生まれて、父母の孝養、心にたらず。国の恩を報ずべき力なし。今度、頸を法華経に奉って、その功徳を父母に回向せん。そのあまりは弟子檀那

等にはぶくべしと申せしこと、これなり」

（107種々御振舞御書 1231ページー7行）

御本仏の境涯・確信

今夜首を斬られに行くのです。この数年の間願ってきたことはこのことです。この娑婆世界において雉となったときは鷹につかまれ、ねずみとなったときは猫に食われてきました。あるいは妻子の敵のために命を失ったことは大地の塵の数よりも多いのです。ところが、法華経のためにはただの一度も命をなくしたことはありません でした。そのために日蓮は貧しい僧侶の身と生まれて、父母への

孝養も思うようにできす、国の恩を報ずる力もありません。今度こそ首を法華経にさしあげて、その功徳を父母に回向しましょう。そのあまりは弟子、檀那に分け与えましょうといってきたのはこのことです。

日蓮申すよう「不かくのとのばらかな。これほどの悦びをばわらえかし。

（107種々御振舞御書 御本仏の境涯・確信1231ページー14行）

（竜の口法難の大聖人の処刑のさい、思わず涙を流した四条金吾に対して）日蓮（大聖人）が「不覚な殿方ではないか、これほどの喜びはないのだから笑いなさい」といいました。

宝塔品にして仏勅をうけ給い、嘱累品にして仏に頂を
摩なでられまいらせ、『世尊の勅のごとく、当につぶさに
奉行すべし』と誓状をたてし天ぞかし。仏前の誓いは
日蓮なくば虚しくてこそおわすべけれ。

（107種々御振舞御書
諸天の加護1233ページ－10行）

今、日蓮は、末法に生まれて妙法蓮華経の五字を弘めてかかるせめにあえり。仏滅度して後二千二百余年が間、恐らくは天台智者大師も「一切世間に怨多くして信じ難し」の経文をば行じ給わず。「しばしば擯出せられん」の明文は、ただ日蓮一人なり。「一句一偈、我は皆ために授記す」は我なり。阿耨多羅三藐三菩提は疑いなし。

（107種々御振舞御書
御本仏の境涯・確信
1235ページ－4行）

相模守殿こそ善知識よ、平左衛門こそ提婆達多よ。念仏者は瞿伽利尊者、持斎等は善星比丘なり。在世は今にあり、今は在世なり。法華経の肝心は、「諸法実相」ととかれて「本と末とは究竟して等し」とのべられて候はこれなり。

（107 種々御振舞御書 善知識と悪知識 1235ページー8行）

相模守時宗殿こそ（日蓮にとっては）善知識であり、

へいのさえもんのじょうよりつな　だいばだった　ねんぶつしゃ　くぎゃりそんじゃ
平左衛門尉頼綱こそ提婆達多であり、念仏者は瞿伽利尊者、
じさいとう　ぜんしょうびく　そんざい　しゃくそん　ざいせ
持斎等は善星比丘というべき存在です。釈尊の在世はちょうど
げんざい　げんざい　しゃくそん　ざいせ　おな　ほけきょう　かんじん
現在にあたり、現在は釈尊の在世と同じです。法華経の肝心は
しょほうじっそう　と　ほんまつくきょうとう
「諸法実相」と説かれて「本末究竟等」とのべられているのはこ
のことです。

「もし衆生、生死を出でず、仏乗を慕わずと知らば、魔は、この人において、なお親の想いを生ず」

（107種々御振舞御書

仏と魔1236ページー1行）

釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよくなすものは、かとうどよりも強敵が人をばよくなしけるなり。眼前に見えたり。この鎌倉の御一門の御繁昌は、義盛と隠岐法皇ましまさずんば、いかでか日本の主となり給うべき。されば、この人々はこの御一門の御ためには第一のかとうどなり。日蓮が仏にならん第一のかとうどは景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平左衛門尉・守殿ましまさずん

ば、いかでか法華経の行者とはなるべきと悦ぶ。

（107 種々御振舞御書 1236ページー6行）

善知識と悪知識

釈迦如来のためには提婆達多こそ第一の善知識でした。今の世間を見ると、人を成長させるものは味方よりもかえって強い敵のほうが人をよくさせているのです。その実例は眼前にもあります。すなわち、ここに鎌倉幕府（北条氏一門）の繁昌は和田義盛と隠岐法皇（後鳥羽上皇）が敵対したおかげであり、それがおられなかったならば、どうして北条氏が日本国の主となることができた

でしょうか。ですからこの人びとは北条氏一門のためには第一の味方であったといえます。それと同じように、日蓮が仏になるための第一の味方は東条景信であり、僧侶では良観、道隆、道阿弥陀仏であり、また平左衛門尉、北条時宗殿がいなかったならば、どうして法華経の行者になれただろうかと喜んでいるのです。

日蓮により日本国の有無はあるべし。譬えば、宅に柱なければたもたず、人に魂なければ死人なり。日蓮は日本の人の魂なり。

（107種々御振舞御書）

御本仏の境涯・確信1238ページー15行）

日蓮によって日本国の有無（存亡）は決まるのです。たとえば家に柱がなければ保たず。人に魂がなければ死人であるのと同じ道理です。日蓮は日本の人の魂なのです。

日蓮は幼若の者なれども、法華経を弘むれば釈迦仏の御使いぞかし。わずかの天照太神・正八幡なんどと申すは、この国には重けれども、梵釈・日月・四天に対すれば小神ぞかし。

（107種々御振舞御書 御本仏の境涯・確信 1239ページ－9行）

日蓮を用いぬるとも、悪しくうやまわば国亡ぶべし。いかにいわんや、数百人ににくませ、二度まで流しぬ。この国の亡びんこと疑いなかるべけれども、しばらく禁をなして『国をたすけ給え』と日蓮がひかうればこそ、今までは安穏にありつれども、ほうに過ぐれば罰あたりぬるなり。

（107種々御振舞御書
御本仏の大慈悲1239ページー14行）

日蓮を用いたとしても、悪しく敬う（間違った扱い方をする）ならばかならず国は亡びるでしょう。まして敬うどころか数百人に憎ませ、二度まで流罪にしました。この国が滅びることは疑いがないけれども、しばらく神々を止めて国を助け給え、と日蓮がひかえていたからこそ今まで安穏であったけれども、道理にあわないことがあまりにも度を越したから罰が当たってしまったのです。

病の起こりを知らざる人の病を治せば、いよいよ病は倍増すべし。

（107種々御振舞御書

病気1241ページー4行）

病気の起こる原因を知らない人が病気を治療すれば病気はます倍増するでしょう。

されば、仏法を習わん人、後世をねがわん人は、法華誹謗をおそるべし。

（107種々御振舞御書 1244ページ－16行）

日蓮こそ「念仏者よりも道義房と円智房とは無間地獄の底におつべし」と申したりしが、この人々の御臨終はよく候いけるか

（107種々御振舞御書 1245ページー6行）

「頭破作七分」と申すは、あるいは「心破作七分」とも申して、頂の皮の底にある骨のひびたうるなり。死ぬる時はわるることもあり。今の世の人々は、去ぬる正嘉の大地震、文永の大彗星に、皆頭われて候なり。その頭のわれし時、ぜいぜいやみ、五臓の損ぜし時、あかき腹をやみしなり。これは、法華経の行者をそしりしゆえにあたりし罰とはしらずや。

（107）種々御振舞御書

頭破作七分というのは、あるいは心破作七分ともいって、頭の皮の底にある骨が罅破れるのです。心が破れきって死んだ場合には頭が割れることもあります。今の世の人びとは、去る正嘉の大地震や文永の大彗星が出現したときに、皆頭が破れてしまったのです。その頭が破れたときに喘息（または肺結核）になり、五臓を損なったときに赤痢にかかったのです。これは法華経の行者を誹ったために当たってしまった現罰であると気がつかないのでしょうか。

されば、鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治むる者は他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華経を持つ者は必ず成仏し候

（107種々御振舞御書

功徳1246ページー16行）

病のならいは、いずれの病も、重くなりぬれば「これに過ぎたる病なし」とおもうがごとし。

（108光日房御書

病気1252ページー10行）

親子
おやこのわかれこそ、月日のへだつるままに、いよいよ
歎深見候え。
なげきふかかりぬべくみえ
（108 光日房御書
こうにちぼうごしょ
親子・孝養
おやこ　こうよう
1252ページー12行）

小罪（しょうざい）なれども懺悔（ざんげ）せざれば悪道（あくどう）をまぬかれず、大逆（だいぎゃく）なれども懺悔（ざんげ）すれば罪（つみ）消（き）えぬ。免（ゆる）

（108 光日房御書（こうにちぼうごしょ））

懺悔（ざんげ）1253ページー9行

人のおやは悪人なれども、子善人なれば、おやの罪ゆるすことあり。また子悪人なれども、親善人なれば、子の罪ゆるさるることあり。されば、故弥四郎殿はたとい悪人なりとも、うめる母、釈迦仏の御宝前にして昼夜なげきとぶらわば、いかでか彼の人うかばざるべき。いかにいおうや、彼の人は法華経を信じたりしかば、おやをみちびく身とぞならられて候らん。

（108 光日房御書

親子・孝養（1254ページ－15行）

人の親は悪人であっても子が善人であれば、親の罪が許される
こともあります。また子が悪人であっても親が善人であれば、子の
罪が許されることもあるのです。ですから、故弥四郎殿はたとえ
悪人であっても、生みの母が釈迦仏（御本尊）の御宝前で昼夜にな
げき、追善供養すれば、どうして弥四郎殿が成仏できないことがあ
りましょうか。ましてや弥四郎殿は生前は法華経（御本尊）と信じ
ていたのですから、苦しみの境界へおちるどころか、親を成仏へ
導く身となられていることでしょう。

かたきをしらねば、かたきにたぼらかされ候ぞ。

知

誑

候

（108光日房御書

こうにちぼうごしょ

用心1255ページー4行）

ようじん

この無間地獄と申すは、十二時に、一時かた時も大苦ならざることはなし。故に、無間地獄と申す。

（111 光日上人御返事

罰 1265 ページー3 行）

人死(ひとし)して後重(のちおも)きは、地獄(じごく)へ堕(お)つる相(そう)なり。

（111光日上人御返事(こうにちしょうにんごへんじ)

臨終(りんじゅう)1265ページー7行）

松栄うれば柏悦ぶ。芝かるれば蘭なく。情無き草木すら、友の喜び友の歎き一つなり。いかにいわんや、親と子との契り、胎内に宿して九月を経て生み落とし、数年まで養いき。

（111光日上人御返事

親子・孝養1267ページー9行）

子を思う金鳥は火の中に入りにき。子を思いし貧女は恒河に沈みき。彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり。彼の河に沈みし女人は大梵天王と生まれ給えり。いかにいわんや、今の光日上人は子を思うあまりに法華経の行者と成り給う。母と子と、ともに霊山浄土へ参り給うべし。

（111 光日上人御返事 親子・孝養 1267ページー12行）

かかる不思議の日蓮をうみ出だせし父母は、日本国の一切衆生の中には大果報の人なり。父母となり、その子となるも、必ず宿習なり。もし日蓮が法華経・釈迦如来の御使いならば、父母、あにその故なからんや。

（113寂日房御書

親子・孝養1269ページー4行）

かかる者の弟子檀那とならん人々は、宿縁ふかしと思って、日蓮と同じく法華経を弘むべきなり。法華経の行者といわれぬること、はや不祥なり、まぬかれがたき身なり。

（113寂日房御書

折伏1270ページー1行）

日蓮の弟子、檀那となる人びとは、宿縁が深いのだと覚悟して、日蓮と同じく、妙法を弘めるべきです。法華経の行者とい

われて、妙法流布に生きる人生は、もはやどうしようもないことであり、まぬかれがたい身であるのです。

同じはじなれども、今生のはじはもののかずならず、ただ後生のはじこそ大切なれ。獄卒・だつえば・懸衣翁が三途河のはたにていしょうをはがん時を思しめして、法華経の道場へまいり給うべし。法華経は後生のはじをかくす衣なり。

（113 寂日房御書 人生・生き方 1270ページー4行）

恥というものは、同じ恥であっても、今生（現世）の恥はもの

のかずではありません。ただ、後生の恥こそ大切なのです。獄卒や奪衣婆、懸衣翁、三途の河原の端で、衣装をはぎ取るときのことを思いやって、法華経（御本尊）修行の道場へ参られるべきです。法華経（御本尊）は後生の恥をかくす衣なのです。

この度（たび）は、大海（たいかい）のしおの満（み）つるがごとく、月（つき）の満（まん）ずるがごとく、福来（ふくらい）たり、命長（いのちなが）く、後生（ごしょう）は霊山（りょうぜん）とおぼし思（おも）しめせ。

（117 真間釈迦仏御供養逐状（ままのしゃかぶつごくようおいじょう）

功徳（くどく）1274ページー13行）

聞かんと欲せず、信ぜんと欲せず、その機に当たらざるは、言を出だして謗ることなきも、皆怨嫉の者と定め了わんぬ。

（120寺泊御書）

同士の怨嫉1278ページー3行）

命限り有り、惜しむべからず。ついに願うべきは仏国なり

（121富木入道殿御返事（願望仏国の事）使命1283ページー13行）

命は限りあるものです。惜しんではなりません。ついに願うべきものは仏国の建設なのです。

世間に人の恐るるものは、火炎の中と、刀剣の影と、この身の死するとなるべし。牛馬なお身を惜しむ、いわんや人身をや。癩人なお命を惜しむ、いかにいわんや壮人をや。

（122 佐渡御書 生命とその尊厳 1284ページ－11行）

世間において人がおそろしいと思うものは、火の中につつまれることと、刀で斬られようとすることと、自分自身が死ぬということで

しょう。牛や馬でさえ命を惜しむものです。まして人間はなおさらのことです。癩病人でも命を惜しむものです。まして健康な人はなおさらのことです。

仏説いて云わく「七宝をもって三千大千世界に布き満つるとも、手の小指をもって仏経に供養せんにはしかず」取意。

雪山童子の身をなげし、楽法梵志が身の皮をはぎし、身命に過ぎたる惜しきもののなければ、これを布施として仏法を習えば必ず仏となる。身命を捨つる人、他の宝を仏法に惜しむべしや。また、財宝を仏法におしまんもの、まさる身命を捨つべきや。

（122 佐渡御書）

信仰者の姿勢 1284ページ－13行

釈尊は法華経の薬王品に「金・銀・瑠璃など七種類の宝石を三千大千世界に敷きつめて供養したとしても、手の小指を仏法に供養することにおよばない」という意味のことをのべています。雪山童子は鬼に身を投げあたえて仏法をもとめました。楽法梵志は身の皮をはいで経を書き写したといいます。生命より尊いものはないのですから、この生命を施して仏法を学ぶならば、かならず成仏することができます。生命を捨てようという決意ができている

人が、他の宝を仏法にために惜しむでしょうか。また、財宝を仏法のために惜しむような人が、それ以上に尊い生命を捨てることができるでしょうか（そんなはずはありません）。

人もまたかくのごとし。世間の浅きことには身命を失えども、大事の仏法なんどには捨つること難し。故に仏になる人もなかるべし。

（122 佐渡御書

人生・生き方 1285ページー6行）

人間もまたこれと同じで、世間のつまらないことで生命をうしなうことはあっても、たいせつな仏法のために命を捨てることはめったにないのです。したがって仏になる人も、なかなかいないのでは

ないでしょうか。

強敵を伏して始めて力士をしる。

（122佐渡御書

勇気・忍耐1285ページー17行）

強い敵をたおして、はじめて力の強い人であることがわかるのです。

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず仏になるべし。例せば日蓮がごとし。

（122佐渡御書

御本仏の境涯・確信1286ページー1行）

悪い権力者が正しい仏法を破ろうとするのに、あやまった宗教の僧たちがその味方をして、智者をなきものにしようとするときに、師子王のように勇気ある信心をもつ人は、かならず成仏

することができます。たとえば日蓮のようなものです。日蓮は、この関東の御一門の棟梁なり、日月なり、亀鏡なり、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難必ず起こるべし

（122 佐渡御書 御本仏の境涯・確信 1286ページー4行）

日蓮は、この関東の御一門（鎌倉北条幕府）の棟梁（指導者）であり、日月であり、鏡であり、眼目（将来をあやまりなく見定める中心となる人）であります。その日蓮を用いず流罪して捨て去ってしまうときには、七種類の難がかならず起こる

でありましょう。

正法は、一字一句なれども、時機に叶いぬれば必ず得道なるべし。千経万論を習学すれども、時機に相違すれば叶うべからず。

（122 佐渡御書）

時を知る

1286ページー5行

正しい仏法は一字一句であっても、時と機にかなっていれば、ならず成仏できます。逆にいかにあらゆる経典・書物を学んだとしても、時と機に相違していれば成仏はできません。

外道・悪人は如来の正法を破りがたし。仏弟子等、必ず仏法を破るべし。「師子身中の虫の師子を食む」等云々。大果報の人をば他の敵やぶりがたし、親しみより破るべし。

（122 佐渡御書

団結 1286ページー7行）

外道（仏教以外の教えをたもつ人）や悪人は、仏の説いた正しい法を破ることはできません。むしろ仏の弟子たちが内から

仏法を破るものなのです。それはちょうど師子の体内にすむ害虫が、師子をくうといわれているようなものです。また大果報の人を、他の敵は破ることはできません。親しくしている人たちが破るのです。

現世に云いおく言の違わざらんをもって、後生の疑いをなすべからず。

（122佐渡御書

三世の生命1286ページー13行）

これは華報なるべし。実果の成ぜん時、いかがなげかわしからんずらん。

（122佐渡御書

罰1286ページー16行）

日蓮もまた、かくせめらるるも、先業なきにあらず。不軽品に云わく「その罪は畢え已わって」等云々。不軽菩薩の無量の謗法の者に罵詈・打擲せられしも、先業の所感なるべし。

（122佐渡御書 転重軽受 1287ページー8行）

日蓮もまた、このように迫害をうけるのも過去世の業のためともいえます。法華経不軽品に「その罪、おえおわって」とあります。

ふきょうぼさつ　おお　ほうぼう　ひと　わるくち　う
不軽菩薩が多くの謗法の人に悪口をいわれ、打ちすえられたのも
かこせ　ごう　せいめい　かんのう
過去世の業が生命に感応していることによるものなのです。

鉄は炎い打てば剣となる。賢聖は罵詈して試みるなるべし。

（122佐渡御書

指導者1288ページ－1行）

鉄はきたえて打てば剣になります。賢人といわれる人は世間から悪口をいわれ、迫害をうけてためされてはじめて、その立派さがわかるものです。

ただし、一闡提人（いっせんだいにん）と申（もう）して、謗法（ほうぼう）の者（もの）ばかり地獄守（じごくもり）に留（とど）められたりき。彼（かれ）らがうみひろげて、今（いま）の世（よ）の日本国（にほんこく）の一切（いっさい）衆生（しゅじょう）となれるなり。

（122 佐渡御書（さどごしょ））

仏（ほとけ）と魔（ま）1288ページー11行）

いかにいわんや、過去の謗法の心中にそみけんをや。経文を見候えば、烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし。

（122佐渡御書

因果の理法1288ページー16行）

まして過去世の謗法が生命に染めこまれているのは、なおさら消えるものではありません。経文を見ると、烏の黒いのも、鷺の白いのも、過去世の業が強くしみこんで、そうなっているのだとありま

す。

般泥洹経に云わく「善男子よ。過去に無量の諸罪、種々の悪業を作るに、この諸の罪報は、あるいは軽易せられ、あるいは形状醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利あらず、貧賤の家および邪見の家に生まれ、あるいは王難に遭う」等云々。また云わく「および余の種々の人間の苦報あらん。現世に軽く受くるは、これ護法の功徳力に由るが故なり」等云々。この経文は、日蓮が身なくば、ほとんど仏の妄語となりぬべし。一には「ある

いは軽易せらる」、二には「あるいは形状醜陋」、三には「衣服足らず」、四には「飲食麤疎」、五には「財を求むるに利あらず」、六には「貧賤の家に生まる」、七には「および邪見の家」、八には「あるいは王難に遭う」等云々。

この八句は、ただ日蓮一人が身に感ぜり。

高山に登る者は必ず下り、我人を軽しめば還って我が身人に軽易せられん。形状端厳をそしれば醜陋の報いを得。人の衣服・飲食をうばえば必ず餓鬼となる。持戒・尊貴を笑えば貧賤の家に生ず。正法の家をそしれば邪見

の家に生ず。善戒を笑えば国土の民となり王難に値う。
これは常の因果の定まれる法なり。
日蓮はこの因果にはあらず。

（122 佐渡御書

因果の理法 1289ページー10行）

この八種は、尽未来際が間一つずつこそ現ずべかりしを、日蓮つよく法華経の敵を責むるによって一時に聚め起こせるなり。譬えば、民の郷郡なんどにあるには、いかなる利銭を地頭等におおせたれども、いたくせめず、年々にのべゆく。その所を出ずる時に競い起こるがごとし。「これ護法の功徳力に由るが故なり」等はこれなり。

（122佐渡御書

転重軽受1290ページー7行）

これはさておきぬ。日蓮を信ずるようなりし者どもが、日蓮がかくなれば、疑いをおこして法華経をすつるのみならず、かえりて日蓮を教訓して我賢しと思わん僻人等が、念仏者よりも久しく阿鼻地獄にあらんこと、不便とも申すばかりなし。

修羅が「仏は十八界、我は十九界」と云い、外道が云わく「仏は一究竟道、我は九十五究竟道」と云いしがごとく、「日蓮御房は師匠にてはおわせども余りにこわし。

我らはやわらかに法華経を弘むべし」と云わんは、蛍火が日月をわらい、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなずり、烏鵲が鸞鳳をわらうなるべし、わらうなるべし。

（122 佐渡御書

信仰者の姿勢 1291ページー3行）

これらの人びとのことはさておき、日蓮を信ずるような態度をとっていた人たちが、日蓮がこのようになると（佐渡流罪になったこと）、疑いをおこして法華経を捨て退転するだけでなく、かえって日蓮を教訓して、自分がかしこいと思っている心のひがんだ人た

ねんぶつしゃ　　ながあいだむげんじごくじゅう
ちが、念仏者よりもさらに長い間無間地獄に住しているであろう
いがい　　ぞうじょうまんしゅら
ことは、かわいそうという以外にありません。増上慢の修羅が
ほとけさとろっこんろっきょうろくしきじゅうはっかいじぶんさと
「仏の悟りは六根、六境、六識の十八界であるが、自分の悟
ひとおおじゅうきゅうかいげどうほとけさと
りはそれより一つ多い十九界である」といい、外道が「仏の悟
いちぶつじょうひとじぶんきゅうじゅうごしゅさと
りは一仏乗の一つしかないが、自分は九十五種の悟りがある」
にちれんごぼうししょうしゃくぶくつよ
といったように、「日蓮御房は師匠ではあるが、あまりに折伏が強
ほけきょうひろ
すぎる。われわれはやわらかに法華経を弘めよう」などというのは、
ほたるひたいようつきわらちいありづかかざんいど
螢の火が太陽や月を笑い、小さな蟻塚が華山をみくだし、井戸や
ちいかわたいがうみらんほうとりおう
小さな川が、大河や海をあなどり、かささぎが鸞鳳（鳥の王）をあ

ざわらうようなものです。

佐渡国は紙候わぬ上、面々に申せば煩いあり。一人ももるれば恨みありぬべし。

（122佐渡御書

一人を大切に1291ページー12行）

この文を、心ざしあらん人々は寄り合って御覧じ、料簡候いて、心なぐさませ給え。

（122 佐渡御書

求道（行学の二道）1291ページー12行）

ほぼ経文を勘え見るに、日蓮、法華経の行者たること疑いなきか。ただし、今に天の加護を蒙らざるは、一には、諸天善神この悪国を去る故か。二には、善神、法味を味わわざるが故に威光勢力無きか。三には、大悪鬼、三類の心中に入り、梵天・帝釈も力及ばざるか等

（123富木殿御返事（諸天加護なき所以の事）

諸天の加護

1292ページー9行）

だいたい経文を読み思索してみると、日蓮が法華経の行者であ

なん
ることは疑いないところです。ただしいま（難にあっていても）、
しょてんぜんじん　しゅご　　りゆう　だいいち　しょてんぜんじん　あっこく
諸天善神の守護をうけない理由は、第一に諸天善神がこの悪国で
にほん　さ　　だいに　ほけきょうひぼう　もの　おお　しょてん
ある日本を去ったためであり、第二には法華経誹謗の者が多く諸天
ぜんじん　ほけきょう　ほうみ　あじ　　いきお　ちから
善神が法華経の法味を味わえないため勢いも力もなくなったため
だいさん　あっきじん　さんるい　ごうてき　こころ　なか　はい
であり、第三には悪鬼神が三類の強敵の心の中に入ってしまって
だいぼんてんのう　たいしゃくてんのう　ちから　およ
いて大梵天王や帝釈天王も力が及ばないためでありましょう。

ただし、生涯、本より思い切り了わんぬ。今に翻反ること無く、その上また遺恨無し。諸の悪人はまた善知識なり。摂受・折伏の二義、仏説に任る。あえて私曲にあらず。万事、霊山浄土を期す。

（123富木殿御返事（諸天加護なき所以の事）使命1292ページー14行）

ただ私の生涯についてはもとより思い切っているところです。どんな難にであっても翻ることもなく、また恨みも悔いもありま

せん。もろもろの悪人も善知識なのです。時に応じた摂受、
折伏のあり方も経文によるのであって、少しも日蓮の私見では
ありません。すべては霊山浄土で明らかになるでしょう。

日蓮が臨終一分も疑いなし。頭を刎ねらるるの時は殊に喜悦有るべく候。大賊に値って大毒を宝珠に易うと思うべきか。

（123富木殿御返事（諸天加護なき所以の事）
御本仏の境涯・確信1293ページ－1行）

日蓮、またまたかくのごとし。竜樹・天親等すら、なおその類いにあらず等云々。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ。

故に、天台大師、日蓮を指して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等云々。伝教大師、当世を恋いて云わく「末法はなはだ近きに有り」等云々。

幸いなるかな、我が身「しばしば擯出せられん」の文に当たること。悦ばしいかな、悦ばしいかな。

（125 土木殿御返事（経文符合の事）
ときどのごへんじ　きょうもんふごうのこと
御本仏の境涯・確信 1293ページ－1行）
ごほんぶつ　きょうがい　かくしん

たとい、日蓮（にちれん）、死生不定（ふしょうふじょう）たりといえども、妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）の五字（ごじ）の流布（るふ）は疑（うたが）いなきものか。

（125 土木殿御返事（ときどのごへんじ）（経文符合（きょうもんふごう）の事（こと））

広宣流布（こうせんるふ） 1298 ページー10 行）

一切の諸人、これを見聞し、志有らん人々は、互いに
これを語れ。

（127 法華行者逢難事
求道（行学の二道）1303ページー14行）

各々我が弟子たらん者は深くこの由を存ぜよ。たとい身命に及ぶとも退転することなかれ。

（127法華行者逢難事）

退転のいましめ1304ページー3行

西王母（せいおうぼ）の先相（せんそう）には青鳥（せいちょう）、客人（きゃくじん）の来相（らいそう）には鴉鵲（かんじゃく）、これなり。

（127法華行者逢難事（ほっけぎょうじゃほうなんじ）

瑞相（ずいそう）1304ページー3行）

定業すら、能く能く懺悔すれば、必ず消滅す。いかにいわんや不定業をや。

（130可延定業書）

懺悔1307ページー7行）

定業であっても、よくよく懺悔すればかならず消滅するので す。まして不定業がかえられないわけがありません。

仏の滅後一千五百余年、陳鍼と申す人ありき。命は知命にありと申して、五十年に定まって候いしが、天台大師に値って十五年の命を延べて六十五までおわしき。その上、不軽菩薩は、「さらに寿命を増す」ととかれて、法華経を行じて定業をのべ給いき。

（130可延定業書

宿命転換1307ページ－17行）

されば、日蓮、悲母をいのりて候いしかば、現身に病をいやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。今、女人の御身として病を身にうけさせ給う。心みに法華経の信心を立てて御らんあるべし。

（130 可延定業書）

病気 1308ページー6行

さて日蓮は先年、悲母が重病のとき御本尊に祈ったところ、現にその病気を治すことができただけでなく、四年間の寿命をの

ばすことができたのです。いま、あなたは女性の身として病気になりました。こころみに法華経（御本尊）への信心を起こしてごらんなさい。

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれを延ぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華経の一代の聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞかし。

（130 可延定業書）

生命とその尊厳 1308ページ－9行

命というものは、自分にとって一番貴重な宝です。一日でも寿命を延ばすならば、千万両の黄金以上の価値があるのです。

法華経（ほけきょう）が釈尊一代（しゃくそんいちだい）のすべての経教（きょうきょう）に超（こ）えてすばらしいというのは、如来寿量品第十六（にょらいじゅりょうほんだいじゅうろく）があるからです。

閻浮第一の太子なれども、短命なれば草よりもかろし。日輪のごとくなる智者なれども、夭死あれば生ける犬に劣る。早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あるべし。

（130可延定業書 1308ページ－10行）

世界一の王子であっても、短命であれば（その人の命は）草よりも軽くなってしまいます。また、太陽のような勝れた智慧をもつ

人であっても、若くして死んでしまっては、生きている犬にも劣ります。早く信仰の財産を積み重ねて、速やかに病気を対治していきなさい。

これよりも申すべけれども、人は申すによって吉きことも
あり、また、我が志のうすきかとおもう者もあり。人
の心しりがたき上、先々に少々かかること候。この
人は、人の申せばすこそ心えずげに思う人なり。なかな
か申すはあしかりぬべし。ただ、なこうどもなく、ひら
なさけに、また、心もなくうちたのませ給え。

（130可延定業書

人間弱点へのいましめ1308ページー13行）

かえすがえす、身の財をだにおしませ給わば、この病治えがたかるべし。

一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まず御志をみみえさせ給うべし。

（130可延定業書

生命とその尊厳1309ページ－4行）

法華経を説く人は、「柔和忍辱衣」と申して必ず衣あるべし。

（131 御衣並単衣御書）

勇気・忍耐 1310ページ－9行

法華経を説く人は、法華経法師品にある「柔和忍辱の衣（正法を弘めるためにはどんな難にあっても耐え忍ぶ心構えのこと）」という衣を着ているのです。

仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華経を信ずる人は「一りとして成仏せざることなけん」、如来の金言なり。

（131御衣並単衣御書

妙法の偉大さ1310ページー15行）

詮ずるところ、成仏の大綱を法華にこれを説き、その余の網目は衆典にこれを明かす。法華のための網目なるが故に、法華の証文にこれを引き用いるべきなり。

（132観心本尊得意抄

妙法の偉大さ1312ページー12行）

聖人と申すは、委細に三世を知るを聖人と云う。

（133 聖人知三世事

御本仏の境涯・確信 1314ページー6行）

聖人というのは、くわしく過去・現在・未来の三世を知る人を

聖人というのです。

日蓮（にちれん）は一閻浮提第一（いちえんぶだいだいいち）の聖人（しょうにん）なり。

（133聖人知三世事（しょうにんちさんぜじ））

御本仏（ごほんぶつ）の境涯（きょうがい）・確信（かくしん）1315ページー４行）

我が弟子、仰いでこれを見よ。これひとえに、日蓮が尊貴なるにあらず、法華経の御力の殊勝なるによるなり。身を挙ぐれば慢ずと想い、身を下せば経を蔑る。松高ければ藤長く、源深ければ流れ遠し。幸いなるかな、楽しいかな。穢土において喜楽を受くるは、ただ日蓮一人なるのみ。

（133 聖人知三世事 御本仏の境涯・確信 1315ページ－8行）

矢走
やのはしることは弓のちから、雲行
くものゆくことは竜
りゅう
のちから、夫仕業妻力
おとこのしわざはめのちからなり。

（134富木尼御前御返事
ときあまごぜんごへんじ
婦人と信仰
ふじんしんこう
1316ページー7行）

矢が走るのは弓の力によります。雲が流れていくのは竜の力によるといわれています。それと同じように、夫の働きは妻の力によってきまるのです。

けぶりをみれば火をみる。あめをみればりゅうをみる。
おとこを見ればめをみる。今ときどのにげんざんつかまつ
れば、尼ごぜんをみたてまつるとおぼう。

（134富木尼御前御返事
婦人と信仰1316ページー8行）

かまえて、さもと三年、はじめのごとくにきゆうじせさせ給え。病なき人も無常まぬかれがたし。ただし、としの果てにはあらず、法華経の行者なり。非業の死にはあるべからず。よも業病にては候わじ。たとい業病なりとも、法華経の御力たのもし。

（134富木尼御前御返事

病気1316ページー14行）

阿闍世王は法華経を持って四十年の命をのべ、陳鍼は十五年の命をのべたり。尼ごぜん、また、法華経の行者なり。御信心、月のまさるがごとく、しおのみつがごとし。いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強盛におぼしめし、身を持し心に物をなげかざれ。

（134富木尼御前御返事

病気1316ページー16行）

しかりといえども、一人の悲母、堂に有り。朝には出で
て主君に詣で、夕べには入って私宅に返り、営むところ
は悲母のため、存するところは孝心のみ。しかるに、去ぬ
る月下旬の比、生死の理を示さんがために黄泉の道に
趣く。ここに貴辺と歎いて云わく、齢すでに九旬に及
び、子を留めて親の去ること次第たりといえども、つらつ
ら事の心を案ずるに、去って後来るべからず。いずれの
月日をか期せん。二母、国に無し。今より後、誰をか拝す

べき。

離別忍び難きのあいだ、舎利を頸に懸け、足に任せて大道に出で、下州より甲州に至る。その中間、往復千里に及ぶ。国々皆飢饉し、山野に盗賊充満し、宿々粮米乏少なり。我が身羸弱にして所従亡きがごとく、牛馬合期せず。峨々たる大山重々として、漫々たる大河多々なり。高山に登れば頭を天に挿し、幽谷に下れば足雲を踏む。鳥にあらざれば渡り難く、鹿にあらざれば越え難し。眼眩き、足冷ゆ。羅什三蔵の葱嶺、役の優婆塞の

大峰も只今なり云々。

しかる後、深洞に尋ね入って一菴室を見る。法華読誦の音青天に響き、一乗談義の言山中に聞こゆ。案内を触れて室に入り、教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し、五体を地に投げ合掌して、両眼を開いて尊容を拝し、歓喜身に余り心の苦しみたちまち息む。我が頭は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口なり。譬えば、種子と菓子と、身と影とのごとし。教主釈尊の成道は浄飯・摩耶の得道、吉占師子・

青提女・目揵尊者は同時の成仏なり。かくのごとく観ずる時、無始の業障たちまちに消え、心性の妙蓮たちまちに開き給うか。

（135忘持経事

遺族の方への激励1319ページ－4行）

城の主剛ければ、守る者も強し。城の主恚ずれば、守る者も忙ず。

（136 道場神守護事

指導者1320ページー16行）

「常に人を護るといえども、必ず心の固きに仮って、神の守り則ち強し」。

（136 道場神守護事

諸天の加護 1321ページ－1行）

たとい科有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか。

（136 道場神守護事

功徳1321ページー10行）

夫れ、賢人は安きに居て危うきを欲い、佞人は危うきに居て安きを欲う。

（137富木殿御書（止暇断眠御書）指導者1323ページー7行）

およそ賢人は安全な立場にあっても、いざというときに対応できる心構えで、将来の危険に対して万全の配慮をしています。反対に、小人は、自分の身が危険にさらされていてもそれに気づかず、目前の安逸をむさぼり、なおその足りないことを嘆いているの

です。

我が門家は、夜は眠りを断ち昼は暇を止めてこれを案ぜよ。一生空しく過ごして万歳悔ゆることなかれ。

（137富木殿御書（止暇断眠御書）

求道（行学の二道）1324ページー8行）

日蓮の門下は夜は眠る時間をさき、昼は寸暇を惜しんで、一生成仏のことを考えなさい。一生を空しく過ごしてしまって、永遠にわたる後悔を残してはなりません。

竜樹菩薩、妙法の妙の一字を釈して、「譬えば、大薬師の能く毒をもって薬となすがごとし」等云々。

「毒」というは何物ぞ、我らが煩悩・業・苦の三道なり。

「薬」とは何物ぞ、法身・般若・解脱なり。

（138 始聞仏乗義

変毒為薬 1327ページー9行）

夫れ、人に二つの病あり。一には身の病。いわゆる、地大百一、水大百一、火大百一、風大百一、已上四百四病なり。この病は、たとい仏にあらざれどもこれを治す。いわゆる治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬、これを治するにいゆて愈えずということなし。二には心の病。いわゆる三毒乃至八万四千の病なり。この病は二天三仙・六師等も治し難し。いかにいわんや、神農・黄帝等の方薬及ぶべしや。

また心の病、重々に浅深・勝劣分かれたり。

（139 治病大小権実違目）

病気 1329ページ－9行

およそ人間の病気は大きく分けて二種類あります。一つは身体の病気です。人間の身体は地水火風の四大より成り立っており、病気も地水火風にそれぞれ百一ずつ合計四百四病あります。これらの病気は仏でなくても治すことができます。たとえば経文に説かれる持水・流水の親子や釈尊在世の耆婆や中国の扁鵲などの名医が処方して治せないという病気はありませんでした。

第二の病気は心の病です。これは貪・瞋・癡の三毒をはじめとする八万四千の無数の煩悩の病です。この病気はバラモン教の神である二天（摩醯首羅天と毘紐天）、開祖である三仙（迦毘羅・溫樓僧佉・勒沙婆）や六師外道（富蘭那迦葉・末伽梨拘舎梨子・刪闍那毘羅胝子・阿耆多翅舎欽婆羅・迦羅鳩駄迦梅延・尼乾陀若堤子）なども治しにくいもので、ましてや中国古代の名王である神農や黄帝などの薬の及ぶところではないでしょう。また心の病は浅いものと深いもの、重いものと軽いものといったように数多くに分かれています。

法華経にまた二経あり。いわゆる迹門と本門となり。

本迹の相違は水火・天地の違目なり。

（139 治病大小権実違目

妙法の偉大さ 1330ページ－5行）

法華経にまた二つの法門があります。いわゆる迹門と本門です。この本門と迹門との違いは、水と火と、天と地ほどの差があるのです。

あるいは自身の愚癡の故、あるいは実教の行者を賤しむゆえ等の故、彼の訴人等の語をおさめて実教の行者をあだめば、実教の守護神の梵釈・日月・四天等その国を罰する故に、先代未聞の三災七難起こるべし。

（139治病大小権実違目

罰1331ページー4行）

善と悪とは無始よりの左右の法なり。

（139 治病大小権実違目

生命とその尊厳 1331ページ－10行）

法華宗の心は一念三千なり。性悪・性善、妙覚の位になお備われり。元品の法性は梵天・帝釈等と顕れ、元品の無明は第六天の魔王と顕れたり。

139 治病大小権実違目

仏と魔 1331ページ－12行

法華経（日蓮大聖人の仏法）の法門の心とは一念三千であり、したがって善も悪も妙覚の位の仏であってもそなえているのです。そして元品の法性は大梵天王、帝釈天王などの諸天

善神（ぜんじん）としてあらわれ、元品（がんぽん）の無明（むみょう）は第六天（だいろくてん）の魔王（まおう）としてあらわれるのです。

いかにとして候やらん、彼らよりもすくなくやみすくなく死に候は、不思議におぼえ候。人のすくなき故か、また御信心の強盛なるか。

（139治病大小権実違目

功徳1331ページー16行）

結句は、勝負を決せざらん外は、この災難止み難かるべし。

（139 治病大小権実違目 仏法は勝負 1333ページ－8行）

一念三千の観法に二つあり。一には理、二には事なり。天台・伝教等の御時には理なり。今は事なり。観念すでに勝る故に、大難また色まさる。彼は迹門の一念三千、これは本門の一念三千なり。天地はるかに殊なり

（139 治病大小権実違目

妙法の偉大さ 1333ページー12行）

法華経と爾前と引き向かえて勝劣・浅深を判ずるに、当分跨節のことに三様有り。日蓮が法門は第三の法門なり。世間にほぼ夢のごとく一・二をば申せども、第三をば申さず候。第三の法門は、天台・妙楽・伝教も、ほぼこれを示せども、いまだ事了えず。詮ずるところ、末法の今に譲り与えしなり。

（140 常忍抄

妙法の偉大さ 1336ページー1行）

法華経とそれ以外の爾前の諸経とを比べて、教えの勝劣を当分（一往）、と跨節（再往）で立てわけて判定していくと、権実相対（爾前経より法華経がすぐれていること）、本迹相対（法華経迹門より本門がすぐれていること）、種脱相対（大聖人の仏法がもっともすぐれていること）の三つになります。日蓮（大聖人）の仏法は第三の法門（種脱相対）です。世間の人たちはわずかに権実、本迹相対の法理は述べていますが、第三の文底独一本門（大聖人の仏法）については何もいっていません。この第三の法門は天台大師、妙楽大師、伝教大師

もあらあら示すことはしましたが、全体は説けなかったのです。
（しめ）　（ぜんたい）　（と）
結局、末法の今時にゆずられたのです。
（けっきょく）　（まっぽう）　（こんじ）

魔の習いは、善を障えて悪を造らしむるをば悦ぶことに候。

（140 常忍抄

仏と魔 1336ページー12行）

日蓮は、世間には日本第一の貧しき者なれども、仏法をもって論ずれば一閻浮提第一の富める者なり。これ、時のしからしむる故なりと思えば、喜び身にあまり、感涙押さえ難く、教主釈尊の御恩報じ奉り難し。

（141 四菩薩造立抄

御本仏の境涯・確信 1339ページ－15行）

日蓮は世間的にみれば日本で一番貧しい者ですが、仏法のうえからみれば世界中でもっとも富める者なのです。このことはひとえに

末法という時に生まれたがためであると思えば、喜びは体じゅうにあふれ、歓喜の涙は押えがたく、どのようにして教主釈尊への御恩に報いていけばいいでしょうか。

それさえなお、人々の御心中は量りがたし。（141ページ－4行）

四菩薩造立抄

人間弱点へのいましめ

1341

それについては、いのちはつるかめのごとく、さいわいは月のまさりしおのみつがごとくとこそ、法華経にはいのりまいらせ候え。

（143 富木殿女房尼御前御書
祈り1342ページー17行）

生死の長夜を照らす大灯、元品の無明を切る利剣は、この法門に過ぎざるか。

（145 諸経と法華経と難易の事
信・不信 1345ページー6行）

生死長夜の闇を照らす大燈明であり、われわれの元品の無明を断ち切る大利剣は、この法門（三大秘宝の南無妙法蓮華経）のほかにはありません。

師子王の剛弱を嫌わずして大力を出だすがごとし。
（145　諸経と法華経と難易の事
指導者1346ページー6行）

仏法ようやく顚倒しければ、世間もまた濁乱せり。仏法は体のごとし、世間はかげのごとし。体曲がれば影ななめなり。

（145諸経と法華経と難易の事 仏法と社会 1346ページ-10行）

仏法がしだいに乱れて諸宗の正邪が逆さまになってきたので、世間もまた濁り乱れてきました。仏法は体のようなもので、世間は影のようなものです。体である仏法が曲がっていれば、その影であ

せけん　　こんらん
る世間もなためになる（混乱する）のです。
あま　御　前　　ごしょろう　おんこと　わ　みいっしん　うえ　思　そうら
尼ごぜんの御所労の御事、我が身一身の上とおもい候え
ちゅうや　てん　もう　そうろう
ば、昼夜に天に申し候なり。

（148富木殿御返事（平癒祈願の事））
ときどのごへんじ　へいゆきがん　こと
ひとり　たいせつ
一人を大切に1353ページー2行）

いたずらに曠野（こうや）に捨（す）てん身（み）を、同（おな）じくは一乗法華（いちじょうほっけ）の方（かた）になげて、雪山童子（せっせんどうじ）・薬王菩薩（やくおうぼさつ）の跡（あと）を追（お）い、仙予（せんよ）・有徳（うとく）の名（な）を後代（こうだい）に留（とど）めて、法華（ほっけ）・涅槃経（ねはんぎょう）に説（と）き入（い）れられまいらせんと願（ねが）うところなり。

（149 金吾殿御返事（きんごどのごへんじ）

使命（しめい）1355ページー4行）

涅槃経に転重軽受と申す法門あり。先業の重き今生に尽きずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかかる重苦に値い候えば、地獄の苦しみぱっときえて死に候えば、人天・三乗・一乗の益をうること候。

（150 転重軽受法門

転重軽受 1356ページー8行）

涅槃経に転重軽受という法理が説かれています。それは過去の悪業が重くて、今世だけでは消滅することができず、未来にも

地獄の苦しみを受けなければならないところを、今世で法華経を
修行したためにこのような重い苦しみにあうならば、地獄の苦しみ
はたちまちに消え去って、死んでからは人界、天界、三乗
（声聞・縁覚・菩薩の三界）、一乗（仏界）の功徳を得ることが
できるという法門です。

不軽菩薩の悪口・罵詈せられ杖木・瓦礫をかぼるも、故ゆえなきにはあらず。過去の誹謗正法のゆえかとみえて、「その罪は畢え已わって」と説かれて候は、不軽菩薩の難に値うゆえに過去の罪の滅するかとみえはんべり

（150 転重軽受法門）

罪障消滅 1356ページ－11行

不軽菩薩が悪口をいわれ、ののしられ、杖や木で打たれ、瓦や小石を投げつけられたのも、理由がなかったわけではありません。

過去においてしょうほうひぼう正法を誹謗したものとみえて、きょうもん経文には「そつみおの罪畢えおわって」と説かれています。つまり、ふきょうぼさつなん不軽菩薩は難にあってこれを耐え忍んだがゆえに、かこつみめっ過去の罪を滅することができたときょうもん経文には説かれています。

法華経（ほけきょう）は紙付（かみつ）きに音（こえ）をあげてよめども、彼（か）の経文（きょうもん）のごとくふれまうことはかたく候（そうろう）か。

振舞難（ふるまいがた）し

（150転重軽受法門（てんじゅうきょうじゅほうもん））

如説修行（にょせつしゅぎょう）1357ページー8行）

今、日蓮、法華経一部よみて候。一句一偈になお受記をかぼれり。いかにいわんや一部をやと、いよいよたのもし。ただ、

（150転重軽受法門

御本仏の境涯・確信1357ページ－17行）

「病の起こる因縁を明かすに、六つ有り。一には四大の順ならざるが故に病む。二には飲食の節ならざるが故に病む。三には坐禅の調わざるが故に病む。四には鬼便りを得。五には魔の所為なり。六には業の起こるが故に病む」

（151 太田入道殿御返事 病気 1359ページー3行）

（摩訶止観に）「病気の起こる原因を明かすと、六つある。一つ

は地、水、火、風の四大（身体を構成する基本要素）が順調で
ないため病気になる。二つは暴飲暴食によって病気になる。三つ
は座禅がととのわないために病気になる。四つは悪鬼が隙をねらっ
て巧みにつけこむ。五つは魔のしわざにより。六つは宿業にために
病気になる」とあります。

「今世に悪業成就し乃至必ず応に地獄なるべし乃至三宝を供養するが故に、地獄に堕ちずして現世に報いを受く。いわゆる頭と目と背との痛みなり」

（151 太田入道殿御返事

病気 1359 ページー7 行）

「その時、王舎大城の阿闍世王その性弊悪にして乃至父を害し已わって、心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが故に、遍体に瘡を生ず。その瘡、臭穢にして附近すべからず。その時、その母にして韋提希と字づくるものは、種々の薬をもってためにこれを傅く。その瘡、ついに増して降損有ることなし。王即ち母に白す。『かくのごとき瘡は心に従って生ず。四大より起こるにはあらず。もし衆生に能く治する者有りと言わば、この処有ることな

けん』と」云々。「その時、世尊・大悲導師、阿闍世王のために月愛三昧に入り、三昧に入り已わって、大光明を放ちたもう。その光、清涼にして、往って王の身を照らすに、身の瘡即ち愈えぬ」

（151太田入道殿御返事

病気1359ページー16行）

「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし人病有らんに、この経を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん」

（151太田入道殿御返事）

病気1360ページー6行）

（法華経薬王菩薩本事品に）「この法華経は、全世界の一切衆生の病気の良薬である。もし、病気の人がこの経を聞くことができれば、病気は治ってしまい、常に若々しい生命を保つことがで

きるのであろう」とあります。

御病を勘うるに、六病を出でず。その中の五病はしばらくこれを置く。第六の業病、最も治し難し。はたまた、業病に軽き有り重き有って、多少定まらず。なかんずく、法華誹謗の業病、最第一なり。

（151太田入道殿御返事

病気1360ページ－8行）

大涅槃経に法華経を指して云わく「もし、この正法を毀謗するも、能く自ら改悔し、正法に還帰することあらば乃至この正法を除いてさらに救護することなし。この故に応当に正法に還帰すべし」云々。

（151 太田入道殿御返事

懺悔 1360ページー12行）

人の地に倒れて、還って地より起くるがごとし。

（151 太田入道殿御返事 変毒為薬 1360ページー15行）

（妙楽大師の法華文句記に）「たとえば人が大地に倒れたならば、立ち上がるときにはかならずその大地に手をついて立ち上がるようなものである」とあります。

馬鳴菩薩は東印度の人、付法蔵の第十三に列なれり。本外道の長たりし時、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、その心言下に解けて、重科を遮せんがために、自らの頭を刎ねんと擬す。謂うところは「我、我に敵して堕獄せしめん」。勒比丘、諫め止めて云わく「汝、頭を切ることなかれ。その頭と口とをもって大乗を讃歎せよ」。

（151太田入道殿御返事

信仰者の姿勢1361ページー4行）

本師既に曲がれり、末葉あに直からんや。「源濁れば流れ清からず」等とはこの謂いか。これによって日本久しく闇夜となり、扶桑終に他国の霜に枯れんと欲す。

（151 太田入道殿御返事 未来への展望 1362ページー5行）

身は邪家に処して年久しく、心は邪師に染まって月重なる。たとい大山は頽るとも、たとい大海は乾くとも、この罪は消え難きか。しかりといえども、宿縁の催すところ、また今生に慈悲の薫ずるところ、存外に貧道に値遇して改悔を発起す。故に、未来の苦を償って現在に軽瘡出現せるか。

（151 太田入道殿御返事

懺悔 1362ページ－8行）

所持の妙法は月愛に超過す。あに軽瘡を愈やして長寿を招かざらんや。

（151太田入道殿御返事

病気1362ページー15行）

書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。事々見参の時を期せん。

（151 太田入道殿御返事
言動・振る舞い 1363ページ－1行）

そもそも、俗諦・真諦の中には勝負をもって詮となし、世間・出世とも甲乙をもって先となすか。

（152 大田殿許御書

仏法は勝負 1363ページー11行）

しかるに、日蓮、世を恐れてこれを言わずんば、仏敵とならんか。したがって、章安大師、末代の学者を諫暁して云わく「仏法を壊乱するは、仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、これ彼の人の怨なり。能く糾治せんは、即ちこれ彼が親なり」等云々。

（152 大田殿許御書

折伏 1365ページー2行）

ここで日蓮が世間を恐れてこのこと（天台宗や真言宗などが

誤（あやま）っていること）をいわないならば、仏（ほとけ）の敵（てき）となってしまうでしょう。したがって章安大師（しょうあんだいし）は後（のち）の世（よ）の学者（がくしゃ）を諫（いさ）めて「慈悲（じひ）がなくて、いつわり親（した）しむのは相手（あいて）の人（ひと）にとって敵（てき）であり、よくその誤（あやま）りをただす者はその人（ひと）の親（おや）（味方（みかた））である（もの）」といわれています。

詮ずるところ、仏意のごとくんば、経の勝劣を詮とするにあらず、法華経の行者は一切の諸人に勝れたるの由これを説く。

（152 大田殿許御書

妙法を持った人の位 1366ページー7行）

寒
かんにせめられて、おとがいのわなめく等を、阿波々々・
頤　　とう　　あはは
阿咤々々・阿羅々々等と申す。かんにせめられて、身の
あたたあらららとうもう　　寒　　み
紅　　似
くれないににたるを紅蓮・大紅蓮等と申すなり。
ぐれん　だいぐれんとうもう
（154太田殿女房御返事（八寒地獄の事））
おおたどののにょうぼうごへんじ　はっかんじごく　こと
罰
ばち
1369ページー15行）

商那和修と申せし人は、裸形なりし辟支仏に衣をまいらせて、世々生々に衣服身に随う。

（154太田殿女房御返事（八寒地獄の事）

功徳1370ページー5行）

予が法門は、四悉檀を心に懸けて申すならば、あながちに成仏の理に違わざれば、しばらく世間普通の義を用いるべきか。

（155 太田左衛門尉御返事
折伏 1372ページー10行）

私（日蓮大聖人）の法門は、仏法は人びとに教え弘める四つの方法である四悉檀を心にかけて弘教するならば、かならずしも成仏するための根本の法理に反するものでない限り、当分の

あいだ　せけん　ふつう　どうり　もち
間は世間の普通の道理を用いてもいいのです。
ほけきょう　もう　おんきょう　しんしん　しょびょう　ろうやく
法華経と申す御経は、身心の諸病の良薬なり。
（155　太田左衛門尉御返事
おおたさえもんのじょうごへんじ
病気（びょうき）1372ページー12行）

法華経の持者は教主釈尊の御子なれば、いかでか梵天・帝釈・日月・衆星も昼夜朝暮に守らせ給わざるべきや。厄の年、災難を払わん秘法には、法華経に過ぎず。たのもしきかな、たのもしきかな。

（155 太田左衛門尉御返事
宿命転換 1375ページー1行）

当年の大厄をば、日蓮に任せ給え。釈迦・多宝・十方分身の諸仏の法華経の御約束の実・不実は、これにて量るべきなり。

（155 太田左衛門尉御返事 宿命転換 1375ページー7行）

外典三千余巻は、政道の相違せるに依って代は濁ると明かす。内典五千・七千余巻は、仏法の僻見に依って代濁るべしとあかされて候。今の代は、外典にも相違し内典にも違背せるかのゆえに、二つの大科一国に起こって、すでに亡国とならんとし候か。

（159 大田殿女房御返事（即身成仏抄）
仏法と社会 1384ページ－1行）

末法に入って、今、日蓮が唱うるところの題目は、前代に異なり、自行・化他に亘って南無妙法蓮華経なり。

（160 三大秘法禀承事（三大秘法抄）

勤行・唱題 1387ページー4行）

末法に入って、いま日蓮が唱えているところの題目は、正法、像法時代の題目とは異なり、自行と化他にわたる南無妙法蓮華経なのです。

この法門（ほうもん）は、義理（ぎり）を案（あん）じて義（ぎ）をつまびらかにせよ。詳（つまびらか）

（160三大秘法稟承事（さんだいひほうほうじょうじ）　三大秘法抄（さんだいひほうしょう））

求道（きゅうどう）（行学（ぎょうがく）の二道（にどう））　1387ページー17行

今、日蓮が時に感じて、この法門広宣流布するなり。

（160 三大秘法稟承事（三大秘法抄）

広宣流布 1388 ページー8 行）

いま日蓮がその時であると感じて、この三大秘宝を広宣流布するのです。

法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は、この三大秘法を含みたる経にてわたらせ給えばなり。

（160三大秘法稟承事（三大秘法抄）

妙法の偉大さ1388ページー11行）

夫れ以(そおも)んみれば、重病(じゅうびょう)を療治(りょうじ)するには良薬(ろうやく)を構索(こうさく)し、逆謗(ぎゃくぼう)を救助(くじょ)するには要法(ようほう)にはしかず。

（162 曽谷入道殿許御書(そやにゅうどうどのもとごしょ)

病気(びょうき) 1390ページー3行）

「眉(まゆ)は近(ちか)けれども見(み)えず、自(みずか)らの禍(わざわ)いを知(し)らず」とはこの謂(い)いか。

（162 曽谷入道殿許御書(そやにゅうどうどのもとごしょ)

用心

1393ページー16行）

これひとえに、上薬(じょうやく)を持(たも)ち用(もち)いて衆生(しゅじょう)の重病(じゅうびょう)を治(じ)せんとせる、これなり。

（162曽谷入道殿許御書(そやにゅうどうどのもとごしょ)

病気(びょうき)1396ページー13行）

予(よ)この記(き)の文(もん)を拝見(はいけん)して、両眼滝(りょうがんたき)のごとく、一身(いっしん)あまねく悦(よろこ)べり。

（162曽谷入道殿許御書(そやにゅうどうどのもとごしょ)

使命(しめい)1407ページー13行）

正像二千には西より東に流る。暮月の西空より始まるがごとし。末法五百には東より西に入る。朝日の東天より出ずるに似たり。

（162曽谷入道殿許御書広宣流布1407ページー16行）

この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし。

（162 曽谷入道殿許御書 1408ページー14行）

この大法（大聖人に仏法）を弘めるためには、釈尊一代の聖教を備え、八宗（倶舎、成実、律、華厳、三論、法相、天台、真言の各宗派）がよりどころとしている書物を学ぶべきです。

「讃(ほ)むる者(もの)は福(ふく)を安明(あんみょう)に積(つ)み、謗(そし)る者(もの)は罪(つみ)を無間(むけん)に開(ひら)く」

（162曽谷入道殿許御書(そやにゅうどうどのもとごしょ)

功徳(くどく)1409ページー12行）

今この亀鏡をもって日本国を浮かべ見るに、必ず法華経の大行者有るか。既にこれを謗る者に大罰有り。これを信ずる者、何ぞ大福無からん。

（162 曽谷入道殿許御書

御本仏の境涯・確信 1410ページ－2行）

今、両人、微力を励まし、予が願に力を副え、仏の金言を試みよ。経文のごとくこれを行ぜんに徴無くんば、釈尊正直の経文、多宝証明の誠言、十方分身の諸仏の舌相、有言無実とならんか。

（162 曽谷入道殿許御書

如説修行 1410ページー5行）

もし、この書を見聞して宿習有らば、その心を発得すべし。

（162 曽谷入道殿許御書

使命1410ページー10行）

今も昔も、聖人も凡夫も、人の中をたがえること、女人よりして起こりたる第一のあだにてはんべるなり。

（164 法蓮抄）

婦人と信仰 1412ページー17行）

これ程に貴き教主釈尊を、一時二時ならず一日二日ならず一劫が間、掌を合わせ、両眼を仏の御顔にあて、頭を低れて、他事を捨てて、頭の火を消さんと欲するがごとく、渇して水をおもい飢えて食を思うがごとく、間無く供養し奉る功徳よりも、戯論に一言、継母の継子をほむるがごとく、心ざしなくとも、末代の法華経の行者を讃め供養せん功徳は、彼の三業相応の信心にて一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐ

べしと説き給いて候。

（164法蓮抄

功徳1418ページー1行）

信ぜば、妙覚の仏にもなりぬべし。いかにしてか、今度、法華経に信心をとるべき。信なくしてこの経を行ぜんは、手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を企つるがごとし。

（164 法蓮抄）

信・不信 1418ページー12行）

（法華経の行者をそしれば地獄におち、たたえれば功徳福運を得るとの法門を）信ずれば妙覚（菩薩が仏の悟りを得た位）の

仏（ほとけ）になることができます。どのようにして、今度（こんど）、法華経（ほけきょう）に信心（しんじん）を
つかむべきでしょうか。信心（しんじん）がなくて法華経（ほけきょう）を修行（しゅぎょう）することは、手（て）
のない人（ひと）が宝山（たからやま）に入（はい）り、足（あし）のない人（ひと）が千里（せんり）の道（みち）を歩（ある）こうと考（かんが）
えるようなものです。

六道四生の衆生に男女あり。この男女は皆、我らが先生の父母なり。

（164法蓮抄

人生・生き方1420ページ－15行）

六道四生の衆生には男女があります。この男女は皆、過去世では私たちの父母だったのです。

今、法華経寿量品を持つ人は、諸仏の命を続ぐ人なり。

（164法蓮抄）

勤行・唱題1426ページ－1行

今の法華経の文字は皆、生身の仏なり。我らは肉眼なれば文字と見るなり。たとえば、餓鬼は恒河を火と見る。人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども、果報にしたがって見るところ各別なり。この法華経の文字は、盲目の者はこれを見ず。肉眼は黒色と見る。一乗は虚空と見、菩薩は種々の色と見、仏種純熟せる人は仏と見奉る。

御本尊は仏の生命（1426ページ－6行）

今の法華経の文字はみな生身の仏です。私たちは肉眼なのでだの文字と見るのです。たとえば、餓鬼はガンジス川の水を火と見ますし、人は水と見て、天人は甘露と見ます。水にはかわりがありませんけれども、見るものの果報（境界）によって、どう見えるかが違ってくるのです。この法華経の文字は、盲目の者はこれを見ることができません。肉眼ならば黒色の文字と見ますし、二乗の境界の者には虚空と見え、菩薩は種々の色と見、仏種が純熟した人は仏と拝するのです。

法蓮法師は毎朝口より金色の文字を出だし現す。この文字の数は五百十字なり。一々の文字変じて日輪となり、日輪変じて釈迦如来となり、大光明を放って大地をつきとおし、三悪道・無間大城を照らし、乃至東西南北、上方に向かっては非想非非想へものぼり、いかなる処にも過去聖霊のおわすらん処まで尋ね行き給いて、彼の聖霊に語り給うらん。「我をば誰とか思しめす。我はこれ汝が子息・法蓮が毎朝誦するところの法華経の自我偈

の文字なり。この文字は、汝が眼とならん、耳とならん、足とならん、手とならん」とこそ、ねんごろに語らせ給うらめ。その時、過去聖霊は、「我が子息・法蓮は、子にはあらず、善知識なり」とて、娑婆世界に向かって拝おがませ給うらん。これこそ実の孝養にては候なれ。

（164 法蓮抄

遺族の方への激励 1426ページ－13行）

智者と申すは、かくのごとき時を知って法華経を弘通するが第一の秘事なり。

（164 法蓮抄

時を知る 1427 ページー10 行）

夫れ、天地は国の明鏡なり。今この国に天災地夭あり。知るべし、国主に失ありということを。鏡にうかべたれば、これを諍うべからず。国主小禍のある時は天鏡に小災見ゆ。今の大災は、当に知るべし、大禍ありということを。

（164法蓮抄

指導者1430ページ－14行）

そもそも、この経釈の心は、仏になる道はあに境智の二法にあらずや。されば、境というは万法の体を云い、智というは自体顕照の姿を云うなり。しかるに、境の淵ほとりなくふかき時は、智慧の水ながるることつつがなし。この境智合しぬれば、即身成仏するなり。

（165曽谷殿御返事（成仏用心抄）
一生成仏・仏界湧現1433ページー８行）

およそこの経釈（法華経を解釈した天台大師の法華玄義の

文）の意味は、成仏する道は境智の二法のほかにないのです。ですから、境というのは万法の体（御本尊）をいい、智というのは自体顕照の姿をいうのです。しかも、境のふち（淵）が際限がないほど深いときには、知恵の水が流れるのになんの支障もありません。この境と冥合すれば即身成仏するのです。

総別の二義あり。総別の二義少しも相そむけば、成仏思いもよらず。輪廻生死のもといたらん。

（165曽谷殿御返事（成仏用心抄）信仰者の姿勢1434ページー4行）

（大聖人の仏法には）総別の二義があります。この総別の二つの意義について少しでも背けば成仏することは思いもよりませんし、六道の苦しみを輪廻する原因となってしまうのです。

法華経の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、余へ心をうつさば、必ず輪廻生死のわざわいなるべし。

（165曽谷殿御返事（成仏用心抄））

信仰者の姿勢1434ページー8行）

涅槃経に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」云々。この文の中に、「法を壊る者を見て」の「見て」と、「置いて、呵責せずんば」の「置いて」とを能く能く心腑に染むべきなり。法華経の敵を見ながら、置いてせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし。

（165 曽谷殿御返事（成仏用心抄）

折伏 1434 ページー15 行）

涅槃経に「もし正法を守るよき僧であっても、仏法を破る者を見ながら、それをほうっておいて、誤りを責め、追い出し、処分しないならば、その者は仏法のなかの敵である。もしよく追い出し、責め、処分するならば、これこそ私の弟子であり、真の声聞である」とあります。この文のなかの見壊法者（仏教を破壊する者を見て）の「見」の字と、置不呵責（捨て置いて罪を呵責しない）の「置」の字とをよくよく肝に銘ずるべきです。法華経の敵を見てい

ながら、そのままにしておいて、破折（はしゃく）しなければ、師匠（ししょう）も檀那（だんな）もともに無間地獄（むげんじごく）に堕（お）ちることは疑（うたが）いないことです。

謗法を責めずして成仏を願わば、火の中に水を求め、水の中に火を尋ぬるがごとくなるべし。はかなし、はかなし。いかに法華経を信じ給うとも、謗法あらば必ず地獄に堕つべし。うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんがごとし。「毒気は深く入って、本心を失えるが故に」はこれなり。

（165 曽谷殿御返事（成仏用心抄）
謗法のいましめ 1435ページー3行）

謗法をせめないで成仏を願うことは、あたかも火のなかに水を求め、水のなかに火をたずねるようなもので、はかないかぎりです。どのように法華経を信じていても、謗法があればかならず地獄におちるのです。それはちょうど漆千杯に蟹の足を一ついれることによって、漆の効力がゼロになってしまうのと同じことです。法華経寿量品にある「毒気が深く入って本心を失う」とあるのはこのことです。

この法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らう道理なるが故に、流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いまだこりず候。

（165曽谷殿御返事（成仏用心抄）1435ページー12行）

難を乗り越える

日蓮はこの法門を申し上げることによって、忠言は耳に逆らうの道理から、流罪され、命にも及ぶ難を受けたのです。しかしながら、いまだこりてはおりません。

南無妙法蓮華経と申すは、一代の肝心たるのみならず、法華経の心なり、体なり、所詮なり。

（166曽谷入道殿御返事（如是我聞の事））

妙法の偉大さ1438ページー1行）

烏（からす）と申（もう）す鳥（とり）は、無下（むげ）のげす衆（ちょう）鳥なれども、鷲（わし）・鵰（くまたか）の知らざる年中（ねんじゅう）の吉凶（きっきょう）を知（し）れり。蛇（へび）と申（もう）す虫（むし）は、竜（りゅう）・象（ぞう）に及ばずとも、七日（しちにち）の間（あいだ）の洪水（こうずい）を知（し）るぞかし。

（166 曽谷入道殿御返事（そやにゅうどうどのごへんじ）（如是我聞（にょぜがもん）の事（こと））

瑞相（ずいそう）1438ページー8行）

日蓮をいやしみて南無妙法蓮華経と唱えさせ給わぬは、小児が乳をうたごうてなめず、病人が医師を疑うて薬を服せざるがごとし。竜樹・天親等はこれを知り給えども、時なく機なければ弘通し給わざるか。余人はまたしらずして宣伝せざるか。仏法は時により機によりて弘まること となれば、云うにかいなき日蓮が、時にこそあたりて候らめ。

（166）曽谷入道殿御返事（如是我聞の事）

時を知る（1438ページ－10行）

法華経は灯のごとく、行者は油のごとし。檀那は油のごとく、行者は灯のごとし。

（167曽谷殿御返事（輪陀王の事））

信仰者の姿勢（1439ページ－14行）

法華経は燈のようなものであり、行者は油のようなものです。檀那は油のようなものであり、行者は燈のような関係にあります。

禅宗と申す大邪法、念仏宗と申す小邪法、真言と申す大悪法、この悪宗、はなをならべて一国にさかんなり。

（167曽谷殿御返事（輪陀王の事）

謗法のいましめ1446ページー5行）

減劫の時は小の三災おこる。ゆわゆる飢渇・疫病・合戦なり。飢渇は大貪よりおこり、やくびょうはぐちよりおこり、合戦は瞋恚よりおこる。今、日本国の人々四十九億九万四千八百二十八人の男女、人々ことなれども、同じく一つの三毒なり。いわゆる、南無妙法蓮華経を境としておこれる三毒なれば、人ごとに、釈迦・多宝・十方の諸仏を一時にのり、せめ、流しうしなうなり。これ即ち小の三災の序なり。

（167 曽谷殿御返事（輪陀王の事）
仏法と社会 1446ページ－13行）

白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは我らが南無妙法蓮華経のこえなり。この声をきかせ給う梵天・帝釈・日月・四天等、いかでか色をましひかりをさかんになし給わざるべき、いかでか我らを守護し給わざるべきと、つよづよとおぼしめすべし。

（167曽谷殿御返事（輪陀王の事）
勤行・唱題1447ページー3行）

白馬は日蓮です。白鳥は私の弟子、門下です。白馬が鳴くとい

うのは、私たちが唱える南無妙法蓮華経の音声です。この声を聞く梵天・帝釈・日・月・四天等の諸天善神は、輪陀王が白馬のいななきを聞いて生命力を増していったようにどうして力を増し光を盛んにしないということがありましょうか。どうして私たちを守護しないことがありましょうか、と心強く思っていきなさい。

釈尊は孝養の人を世尊となづけ給えり。貴辺あに世尊にあらずや。

（167曽谷殿御返事（輪陀王の事）

親子・孝養1447ページー9行）

まず、五節供の次第を案ずるに、妙法蓮華経の　五字の次第の祭りなり。正月は妙の一字のまつり、天照太神を歳の神とす。三月三日は法の一字のまつりなり。辰をもって神とす。五月五日は蓮の一字のまつりなり。午をもって神とす。七月七日は華の一字の祭りなり。申をもって神とす。九月九日は経の一字のまつり、戌をもって神とす。かくのごとく心得て、南無妙法蓮華経と唱えさせ給え。「現世安穏にして、後に善処に生ず」疑いなかるべ

し。

仏法と社会（1455ページ―13行）

169 秋元殿御返事（あきもとどのごへんじ）

まず五節供（節句）の由来を考えてみると、これは、妙法蓮華経の五字の次第の祭なのです。正月は妙の一字の祭で、天照太神を歳神とします。三月三日は法の一字の祭で、辰を主神とします。五月五日は蓮の一字の祭で、午が主神です。七月七日は華の一字の祭で、申が主神です。九月九日は経の一字の祭で、戌が主神とされます。このようにいつも節供も

みょうほうごじ　まつり　こころ　なんみょうほうれんげきょう　とな

妙法五字の祭と心えて南無妙法蓮華経と唱えていきなさい。そ

うすれば、かならず現世（げんせ）は安穏（あんのん）であり、後世（ごせ）には善処（ぜんしょ）にうまれるこ

とは間違（まちが）いないところです。

師檀となることは三世の契り、種・熟・脱の三益別に人を求めんや。

（169 秋元殿御返事 信仰者の姿勢 1456ページ－9行）

器に四つの失あり。一には覆と申して、うつぶけるなり、またはくつがえす、または蓋をおおうなり。二には漏と申して、水もるなり。三には汚と申して、けがれたるなり。水浄けれども、糞の入りたる器の水をば用いることなし。四には雑なり。飯に、あるいは糞、あるいは石、あるいは沙、あるいは土なんどを雑えぬれば、人食らうことなし。

器は我らが身心を表す。我らが心は器のごとし。口

も器（うつわ）、耳（みみ）も器（うつわ）なり。
（170秋元御書（あきもとごしょ））
信仰者（しんこうしゃ）の姿勢（しせい）1457ページ－11行）

あるいは少し信ずるようなれども、また悪縁に値って信心うすくなり、あるいは打ち捨て、あるいは信ずる日はあれども捨つる月もあり。これは水の漏るるがごとし。

（170 秋元御書）

善知識と悪知識 1458ページ－1行

妙法を信仰していても、悪い縁にあうと信心が弱くなったり、または信心を捨ててしまったり、あるいは一日信じて一か月の間捨ててしまうというようでは、これは器から水が漏れるようなもの

です。

世間の学匠は法華経に余行を雑えても苦しからずと思えり。日蓮もさこそ思い候えども、経文はしからず。

（170 秋元御書

謗法のいましめ 1458 ページー5 行）

種・熟・脱の法門、法華経の肝心なり。三世十方の仏は、必ず妙法蓮華経の五字を種として仏に成り給えり。

（170秋元御書 1458ページー9行）

妙法の偉大さ

信心のこころ全ければ、平等大慧の智水乾くことなし。

（170 秋元御書

信・不信 1458ページー13行）

（完全な器が水をもらさないように）信心の志が完全で正しければ、人びとに平等に功徳を与えていく仏の智慧の水はかわくことはありません。

日蓮、この大いなる失を兼ねて見し故に、与同罪の失を脱れんがため、仏の呵責を思うが故に、知恩・報恩のため、国の恩を報ぜんと思って、国主ならびに一切衆生に告げ知らしめしなり。

（170 秋元御書

報恩 1463ページー4行）

天台山に竜門と申す所あり。その滝百丈なり。春の始めに魚集まってこの滝へ登るに、百千に一つも登る魚は竜と成る。この滝の早きこと、矢にも過ぎ、電光にも過ぎたり。登りがたき上に、春の始めにこの滝に漁父集まって魚を取る。網を懸くること百千重、あるいは射て取り、あるいは酌んで取る。鷲・鵰・鴟・梟・虎・狼・犬・狐集まって昼夜に取り噉らうなり。十年に二十年に一つも竜となる魚なし。

（170 秋元御書）

難を乗り越える 1465ページ－15行

中国の天台山に竜門という所があります。この滝は高さが百丈もあります。毎年、春の初めには魚が集まってきてこの滝をのぼろうとしますが、百千ものうち一つでものぼりきった魚は竜になるといわれます。この滝の流れの早いことは走る矢にもまさり、いなびかりよりも早いのです。滝はのぼりにくいうえに、春の初めには漁師が来て魚をとるために百重、千重にも網をかけ、さらにモリ等で射てとったり、すくいとったりします。そのう

え、鷲（わし）・鵰（くまたか）・鳶（とび）・鵂（ふくろう）・梟（とら）・虎（おおかみ）・狼（いぬ）・犬（きつね）・狐も集（あつ）まってきて、昼（ひる）も夜（よる）も魚（さかな）をとって食（く）っています。そのために十年（じゅうねん）、二十年（にじゅうねん）に一（ひと）つとして竜（りゅう）になる魚（さかな）はありません。

常に仏禁めて言わく、いかなる持戒、智慧高く御坐して、まして一切経ならびに法華経を進退せる人なりとも、法華経の敵を見て、責め罵り国主にも申さず、人を恐れて黙止するならば、必ず無間大城に堕つべし。

（170秋元御書

折伏1466ページー5行）

「常に地獄に処すること、園観に遊ぶがごとく、余の悪道に在ること、己が舎宅のごとし」

（171 兄弟抄 人間弱点へのいましめ 1469ページ－11行）

されば、法華経を信ずる人のおそるべきものは、賊人・強盗・夜打ち・虎狼・師子等よりも、当時の蒙古のせめよりも、法華経の行者をなやます人々なり。

（171 兄弟抄）

善知識と悪知識 1471ページー11行）

たとい等覚の菩薩なれども、元品の無明と申す大悪鬼身に入って、法華経と申す妙覚の功徳を障え候なり。いかにいわんや、その已下の人々においてをや。

（171兄弟抄）

仏と魔1472ページー7行

「横しまに死殃に罹り、呵責・罵辱・鞭杖・閉繋・飢餓・困苦、かくのごとき等の現世の軽報を受けて、地獄に堕ちず」

（171兄弟抄

転重軽受1473ページー3行）

過去の謗法の罪滅せんとて、邪見の父母にせめられさせ給う。また法華経の行者をあだむ国主にあえり。

（171兄弟抄）

罪障消滅1473ページー12行）

各々随分に法華経を信ぜられつるゆえに、過去の重罪をせめいだし給いて候。たとえば、鉄をよくよくきたえばきずのあらわるるがごとし。石はやけばはいとなる。金はやけば真金となる。

この度こそまことの御信用はあらわれて、法華経の十羅刹も守護せさせ給うべきにて候らめ。

（171兄弟抄）

自らの成長1474ページー1行）

あなたがたは、しっかりと法華経を信じてこられたために、過去の重罪を現世に責め出されているのです。それは、たとえば鉄をよくよく鍛え打てば内部の疵が表面にあらわれてくるようなもので す。石は焼けば灰となりますが、金は焼けば真金（純粋な金）となります。このたびの難こそ、本当の信心があらわれて法華経に出てくる十羅刹女もあなたがたをかならず守るにちがいありません。

前車(ぜんしゃ)のくつがえすは後車(こうしゃ)のいましめぞかし。覆戒

（171兄弟抄(きょうだいしょう)）

用心(ようじん)1474ページー7行）

今の世には、なにとなくとも道心おこりぬべし。

（171兄弟抄）

仏法と社会1474ページー7行）

今度(こんど)念(ねん)暮(ぼ)
にようじくらして法華経(ほけきょう)の御利生(ごりしょう)心(こころ)みさせ給(たま)え。
日蓮(にちれん)もまた強盛(ごうじょう)に天(てん)に申(もう)し上(あ)げ候(そうろう)なり。いよいよ、へ謙
る心(こころ)根ね・すがた姿おわすべからず。定(さだ)めて、女人(にょにん)は心(こころ)弱
きにておわすれば、ごぜんたちは心(こころ)翻ひるがえりてやおわ
すらん。ごうじょうにはがみをして、たゆむ心(こころ)弛なかれ。
御前歯噛強盛
（171兄弟抄(きょうだいしょう)
勇気(ゆうき)・忍耐(にんたい)1474ページー17行）

なにとなくとも一度(いちど)の死(し)は一定(いちじょう)なり。いろばし悪(あし)くて人(ひと)に笑(わら)われさせ給(たも)うなよ。

（171 兄弟抄(きょうだいしょう)

臨終(りんじゅう)1475ページー5行）

一生(いっしょう)が間賢(あいだけん)なりし人(ひと)も一言(いちごん)に身(み)をほろぼすにや。滅(めつ)

（171 兄弟抄(きょうだいしょう)

言動(げんどう)・振(ふ)る舞(ま)い1476ページー3行）

一切はおやに随うべきにてこそ候えども、仏になる道は随わぬが孝養の本にて候か。

（171兄弟抄）

親子・孝養1476ページー7行）

この法門を申すには、必ず魔出来すべし。魔競わずば、正法と知るべからず。

第五の巻に云わく「行解既に勤めぬれば、三障四魔、紛然として競い起こる乃至随うべからず、畏るべからず。これに随えば、人を将いて悪道に向かわしむ。これを畏るれば、正法を修することを妨ぐ」等云々。この釈は、日蓮が身に当たるのみならず、門家の明鏡なり。謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ。

（171 兄弟抄）

難を乗り越える1479ページー12行）

この法門を説くと、かならず魔があらわれるのです。魔が競い起こらなかったならば、その法が正法であると考えてはいけません。「摩訶止観」の第五の巻には「仏法を持ち、行解が進んできたときには、三障四魔が紛然として競い起こってくる。（中略）だが三障四魔にけっして随ってはならない。畏れてはならない。これに随ったならば、かならず人を悪道に向かわせてしまう。これを畏れるならば正法を修行することができなくなる」と説かれていま

す。止観のこの釈は、日蓮の身にあてはまるばかりでなく、門家一同の明鏡です。謹んで習い伝えて、未来永久に修行の糧としなさい。

三障と申すは、煩悩障・業障・報障なり。煩悩障と申すは、貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし。業障と申すは、妻子等によりて障礙出来すべし。報障と申すは、国主・父母等によりて障礙出来すべし。

（171 兄弟抄）

仏と魔 1480ページー1行）

三障というのは、煩悩障・業障・報障のことです。

煩悩障というのは、貪・瞋・癡などの煩悩によって、仏道修行

をさまたげようとする障害があらわれるのです。業障というのは、妻や子どもなどによって障害があらわれることです。報障というのは、国主や父母などによって障害があらわれることです。

女人（にょにん）となることは、物（もの）に随（したが）って物（もの）を随（したが）える身（み）なり。

（171兄弟抄（きょうだいしょう））

婦人（ふじん）と信仰（しんこう）1480ページー11行）

女性（じょせい）というのは物（もの）にしたがって、物（もの）をしたがえる身（み）です。

比翼と申す鳥は、身は一つにて頭二つあり。二つの口より入る物、一身を養う。ひぼくと申す魚は、一目ずつある故に、一生が間はなるることなし。夫と妻とは、かくのごとし。この法門のゆえには、たとい夫に害せらるるとも、悔ゆることなかれ。一同して夫の心をいさめば、竜女が跡をつぎ、末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし。

兄弟抄

婦人と信仰（1480ページ－15行）

比翼という鳥は、身は一つで、頭が二つあり、二つの口から別々入った食物が、同じ一つの身を養います。比目という魚（比目魚）は、雌雄に一目ずつあるために一生の間離れることがありません。夫と妻とは、このようなものなのです。この法門（御本尊）のためには、たとえ夫から殺されるようなことがあっても後悔してはなりません。夫人たちが力を合わせて夫の信心を諫めるならば、竜女の跡を継ぎ、末法悪世に女人成仏の手本となられることでありましょう。

「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは六波羅蜜経の文なり。

（171 兄弟抄

信・不信 1481ページー3行）

「心の師となることはあっても、自分の心を師としてはいけない（弱く醜い心のままに行動してはいけない）」とは、六波羅蜜経の文です。

たといいかなるわずらわしきことありとも、夢になして、ただ法華経のことのみさばくらせ給うべし。

（171兄弟抄）

信仰者の姿勢1481ページー3行）

たとえ、どのような煩わしいことがあっても、夢のなかのこととして、ただ法華経のことだけを思っていきなさい。

中にも日蓮が法門は古こそ信じがたかりしが、今は前々言置いおきしこと既にあいぬれば、よしなく謗ぜし人々も悔ゆる心あるべし。

たといこれより後に信ずる男女ありとも、各々にはかえ思うべからず。始めは信じてありしかども、世間のおそろしさに、すつる人々かずをしらず。その中に、返って本より謗ずる人々よりも強盛にそしる人々またあまたあり。

兄弟抄

退転（たいてん）のいましめ（1481ページ－5行）

これより後（のち）も、いかなることありとも、すこしもたゆむこ
となかれ。いよいよはりあげてせむべし。たとい命（いのち）に及
ぶとも、すこしもひるむことなかれ。

（174 兵衛志殿御返事（ひょうえのさかんどのごへんじ）（鎌足造仏（かまたりぞうぶつ）の事（こと））

勇気（ゆうき）・忍耐（にんたい）（1484ページ－11行）

千年のかるかやも一時にはいとなる。百年の功も一言にやぶれ候は、法のことわりなり。

（176兵衛志殿御返事（三障四魔の事）言動・振る舞い1487ページー5行）

千年も生い茂ったかるかやでも、火がつけば一時に灰となってしまい、百年もかかって立てた功績もわずか一言でやぶれてしまうことは、法の道理です。

法華経のかたきになる親に随って、一乗の行者なる兄をすてば、親の孝養となりなんや。せんずるところ、ひとすじにおもい切って、兄と同じく仏道をなり給え。親父は妙荘厳王のごとし、兄弟は浄蔵・浄眼なるべし。昔と今はかわるとも、法華経のことわりたがうべからず。

（176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事））

親子・孝養 1487ページ－10行）

潮干満

しおのひるとみつと、月の出ずるといると、夏と秋と、冬と春とのさかいには、必ず相違することあり。凡夫の仏になる、またかくのごとし。必ず三障四魔と申す障りいできたれば、賢者はよろこび愚者は退く、これなり。

（176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事）

難を乗り越える1488ページー4行）

潮が引くときと満ちるときと、月の出るときと入るときと、夏と秋と、冬と春との変わり目には、かならず普段と違ったことが起こ

るものです。凡夫（ぼんぷ）が仏（ほとけ）になるときもそれと同（おな）じことです。かならず三障四魔（さんしょうしま）という障害（しょうがい）が現（あらわ）れてきますが、賢者（けんじゃ）はそれを喜（よろこ）び、愚者（ぐしゃ）は恐（おそ）れて退転（たいてん）するのです。

仏になり候ことは、この須弥山にはりをたてて、彼の須弥山よりいとをはなちて、そのいとのすぐにわたりてはりのあなに入るよりもかたし。いおうや、さかさまに大風のふきむかえたらんは、いよいよかたきことぞかし。

（176兵衛志殿御返事（三障四魔の事）1488ページ－9行）

難を乗り越える

されば、父母はもうけやすし、法華経はあいがたし。今度あいやすき父母のことばをそむきて、あいがたき法華経のともにはなれずば、我が身、仏になるのみならず、そむきしおやをもみちびきなん。

（176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事））

親子・孝養 1489ページ－10行）

代のおさまれるには賢人見えず、代の乱れたるにこそ聖人・愚人は顕れ候え。

（178兵衛志殿御書（親父入信の事）指導者1493ページー2行）

今、我が弟子等、死したらん人々は仏眼をもってこれを見給うらん。命つれなくて生きたらん眼に見よ。国主等は他国へ責めわたされ、調伏の人々は、あるいは狂い死に、あるいは他国、あるいは山林にかくるべし。教主釈尊の御使いを二度までこうじをわたし、弟子等をろうに入れ、あるいは殺し、あるいは害し、あるいは所・国をおいし故に、その科必ずその国々・万民の身に一々にかかるべし。あるいはまた白癩・黒癩、諸の悪重病

の人々おおかるべし。我が弟子等、この由を存ぜさせ給え。

（178 兵衛志殿御書（親父入信の事）罰1493ページー14行）

親父より度々の御かんどうをこうぼらせ給いしかども、兄弟ともに浄蔵・浄眼の後身か、はたまた薬王・薬上の御計らいかのゆえに、ついに事ゆえなく親父の御かんきをゆりさせ給いて、前に立てまいらせし御孝養、心にまかせさせ給いぬるは、あに孝子にあらずや。定めて天よりも悦びをあたえ、法華経・十羅刹も御納受あるべし。

（181孝子御書

親子・孝養1499ページー10行）

二人一同の儀は、車の二つのわのごとし、鳥の二つの羽のごとし。たとい妻子等の中のたがわせ給うとも、二人の御中、不和なるべからず。恐れ候えども、日蓮をたいとしとおもいあわせ給え。もし中不和にならせ給うならば、二人の冥加いかんがあるべかるらめと思しめせ。あなかしこ、あなかしこ。各々みわきかたきもたせ給いたる人々なり。

（185 兵衛志殿御返事（兄弟同心の事））

団結(だんけつ)1503ページー8行）

内(うち)より論出(ろんい)で来(きた)らば、鷸蚌(いつぼう)の相扼(あいひし)ぐも漁夫(ぎょふ)の恐(おそ)れ有(あ)るべし。

（185兵衛志殿御返事(ひょうえのさかんどのごへんじ)（兄弟同心(きょうだいどうしん)の事(こと)）

団結(だんけつ)1503ページー11行）

返す返す穏便にして、あだみうらむる気色なくて、身を
やつし下人をもぐせず、よき馬にものらず、のこぎり・か
なづち手にもち、こしにつけて、つねにえめるすがたにて
おわすべし。

（187八幡宮造営事
言動・振る舞い1508ページ－16行）

なかんずく夫婦共に法華の持者なり。法華経流布あるべきたねをつぐところの玉の子出で生まれん。めでたく覚え候ぞ。色心二法をつぐ人なり。いかでかおそなわり候べき。とくとくこそうまれ候わんずれ。この薬をのませ給わば、疑いなかるべきなり。

闇なれども灯入りぬれば明らかなり。濁水にも月入りぬればすめり。明らかなること、日月にすぎんや。浄きこと、蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮華となり。

故に妙法蓮華経と名づく。日蓮また日月と蓮華とのごとくなり。信心の水すまば、利生の月、必ず応を垂れ、守護し給うべし。とくとくうまれ候べし。法華経に云わく「かくのごとき妙法」。また云わく「安楽にして福子を産まん」云々。

口伝相承のことは、この弁公にくわしく申しふくめて候。則ち如来の使いなるべし。返す返すも信心候べし。

（189）

四条金吾女房御書

出産（しゅっさん）1510ページ－8行）

信者（しんじゃ）のなかでも、ときにあなた方夫婦（がたふうふ）はともに法華経（ほけきょう）を受持（じゅじ）しています。したがって、お二人（ふたり）の間（あいだ）には法華経（ほけきょう）が流布（るふ）していく種（たね）を継ぐところの玉（たま）のようなお子（こ）さんが生まれることでしょう（う）。まことにめでたいことです。法華経（ほけきょう）の持者（じしゃ）であるあなた方（がた）お二人（ふたり）の色心（しきしん）の二法（にほう）（生命（せいめい））を継ぐ人（ひと）です。どうして出産（しゅっさん）が遅（おく）れたり（難産（なんざん）の意）することがありましょうか。（中　略）信心（しんじん）という水（みず）が澄（す）むならば、利生（りしょう）の月（つき）（人（ひと）びとを利益（りやく）することは間違（まちが）いないのです。したがって、かならず安産（あんざん）されるでしょう。法華経方便品（ほけきょうほうべんぼん）には「是（か）くの如（ごと）き

妙法（みょうほう）」とあり、また法師功徳品（ほっしくどくほん）には「安楽（あんらく）にして福子（ふくし）を産（う）まん」と説（と）かれています。符（ふ）をいただく心構（こころがま）えについては、この弁公（べんこう）（日昭（にっしょう））に詳（くわ）しく申（もう）しふくめてあります。すなわち弁公（べんこう）は如来（にょらい）の使（つか）いです。くれぐれも信心（しんじん）を起（お）こしていきなさい。

今の月満御前は、うまれ給いてうぶごえに南無妙法蓮華経
と唱え給うか。

（190 月満御前御書

出産 1512 ページー９行）

定めて十羅刹女は寄り合ってうぶ水をなで養い給うらん。あらめでたや、あらめでたや。御悦び推量申し候。

（190 月満御前御書 出産 1512ページー12行）

日蓮、この業障をけしはてて未来は霊山浄土にまいるべしとおもえば、種々の大難雨のごとくふり雲のごとくにわき候えども、法華経の御故なれば、苦をも苦ともおもわず。

（191四条金吾殿御書
難を乗り越える1514ページ－16行）

「これこそ四条金吾殿の母よ母よ」と、同心に頭をなで、悦びほめ給うらめ。「あわれ、いみじき子を我はもちたり」と釈迦仏とかたらせ給うらん。

（191 四条金吾殿御書 遺族の方への激励 1515ページー2行）

「この経は持ち難し。もししばらくも持たば、我は即ち歓喜す。諸仏もまたしかなり。かくのごときの人は、諸仏の歎めたもうところなり」云々。日蓮讃歎したてまつることはもののかずならず。「諸仏の歎めたもうところなり」と見えたり。あらたのもしや、あらたのもしやと、信心をふかくとり給うべし、信心をふかくとり給うべし。

（191四条金吾殿御書

持続1515ページー9行）

日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか。娑婆世界の中には日本国、日本国の中には相模国、相模国の中には片瀬、片瀬の中には竜の口に日蓮が命をとどめおくことは、法華経の御故なれば、寂光土ともいうべきか。

（192四条金吾殿御消息

寂光土1516ページー17行）

日蓮が難にあう所は、みな仏土といえるでしょう。娑婆世界の中では日本国、日本国の中では相模の国、相模の国の中では片瀬、

片瀬（かたせ）の中（なか）では竜（たつ）の口（くち）に、日蓮（にちれん）が命（いのち）をとどめておくということは法華経（ほけきょう）のためですから、そこは寂光土（じゃっこうど）であるというべきです。

女人（にょにん）はたとえば藤（ふじ）のごとし。おとこは松（まつ）のごとし。須臾（しゅゆ）も
離（はな）れぬれば立（た）ちあがることなし。

（193 同生同名御書（どうしょうどうみょうごしょ）
人生（じんせい）・生（い）き方（かた）1519ページー5行）

はかばかしき下人（げにん）もなきに、かかる乱（みだ）れたる世（よ）にこのとの殿をつかわされたる心（こころ）ざし、大地（だいち）よりもあつし。地神定（ちじんさだ）めてしりぬらん。知

（193 同生同名御書（どうしょうどうみょうごしょ）

婦人（ふじん）と信仰（しんこう）1519ページー5行）

人の身には、同生・同名と申す二りのつかいを、天生まるる時よりつけさせ給いて、影の身にしたがうがごとく、須臾もはなれず、大罪・小罪、大功徳・小功徳、すこしもおとさず、かわるがわる天にのぼって申し候

（193同生同名御書

因果の理法1519ページ－8行）

人間には生まれたときから同生天・同名天という二人の使いが天からつけられていて、影がいつも体についているように、

一瞬の間も離れず、その人の大罪、小罪・大功徳・小功徳を少しも残すことなく、かわるがわる天に昇って報告しているのです。

この御文(おんふみ)は、藤四郎殿(ふじしろうどの)の女房(にょうぼう)と常(つね)に寄合(よりあい)て御覧(ごらん)あるべく候(そうろう)。

（193 同生同名御書（どうしょうどうみょうごしょ）

求道（行学の二道）（きゅうどう　ぎょうがく　にどう）1519ページ－13行）

法華経の行者としてかかる大難にあい候は、くやしく
おもい候わず。いかほど生をうけ死にあい候とも、こ
れほどの果報の生死は候わじ。また三悪四趣にこそ候い
つらめ。今は生死切断し、仏果をうべき身となれば、よろ
こばしく候。

（194四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）
御本仏の境涯・確信1520ページ－7行）

今、日蓮が弘通する法門は、せばきようなれどもはなはだふかし。

（194 四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）
妙法の偉大さ 1520ページ－15行）

いま日蓮が弘めている法門は狭いようではありますが、じつはたいへん深い法門なのです。

まさしく男女交会のとき、南無妙法蓮華経ととなうるところを煩悩即菩提・生死即涅槃というなり。唱（なんにょこうえ　なんみょうほうれんげきょう）

（194　四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）（ぼんのうそくぼだい　こと）（しじょうきんごどのごへんじ）

生命とその尊厳（せいめい　そんげん）1521ページ－9行）

法華経の信心をとおし給え。火をきるに、やすみぬれば火をえず。

（194 四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）持続 1522ページー13行）

法華経の信心を 貫き通していきなさい。火打ち石で火をつけるのに、途中で休んでしまえば火を得られません。

強盛の大信力をいだして、「法華宗の四条金吾、四条金吾」と、鎌倉中の上下万人、乃至日本国の一切衆生の口にうたわれ給え。あしき名さえ流す。いわんやよき名をや。いかにいわんや法華経ゆえの名をや。

（194四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）信仰者の姿勢1522ページ－13行）

強い信心をおこして、法華宗の四条金吾、四条金吾と、鎌倉中の上下のあらゆる人びと、そして日本中のすべての人たち

に語られていきなさい。人は悪名でさえ流すものです。まして善い名を流すのは当然のことです。ましてや法華経のゆえの名においてはいうまでもありません。

たとえば、百草を抹って一丸乃至百丸となせり。一丸も百丸も、共に病を治することこれおなじ。譬えば、大海の一滴も衆流を備え、一海も万流の味をもてるがごとし。

（195四条金吾殿御返事（梵音声の事））

地道1527ページー13行）

師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば、余の一切の獣の筋の絃、皆きらざるにやぶる。仏の説法をば師子吼と申す。乃至、法華経は師子吼の第一なり。

（195 四条金吾殿御返事（梵音声の事）
妙法の偉大さ 1528ページー3行）

法華経は、釈迦如来の御志を書き顕して、この音声を文字と成し給う。仏の御心はこの文字に備われり。

（195四条金吾殿御返事（梵音声の事）

御本尊は仏の生命1528ページー15行）

釈迦仏と法華経の文字とはかわれども、心は一つなり。
しかれば、法華経の文字を拝見せさせ給うは、生身の
釈迦如来にあいまいらせたりとおぼしめすべし。

（195四条金吾殿御返事（梵音声の事）

御本尊は仏の生命1528ページ-17行）

過去遠々の重罪をばいかにしてか皆集めて今生に消滅して、未来の大苦を免れんと勘えしに、当世、時に当たって謗法の人々国々に充満せり。その上、国主既に第一の誹謗の人たり。この時、この重罪を消さずば、いずれの時をか期すべき。

（196呵責謗法滅罪抄 罪障消滅1530ページ－14行）

小事（しょうじ）すら験（しるし）先に現（げん）ず。いかにいわんや大事（だいじ）をや。

（196 呵責謗法滅罪抄（かしゃくほうぼうめつざいしょう））

瑞相（ずいそう）1534ページー8行）

尺の池には丈の浪たたず、驢吟ずるに風鳴らず。日本国の政事乱れ、万民歎くによっては、この大瑞現じがたし。誰か知らん、法華経の滅・不滅の大瑞なりと。

（196呵責謗法滅罪抄

瑞相1534ページー15行）

いかなる世の乱れにも各々をば法華経・十羅刹助け給え

と、湿れる木より火を出だし、乾ける土より水を儲けんが

ごとく、強盛に申すなり。

（196 呵責謗法滅罪抄）

祈り

1539ページー4行

どのような世の乱れにも、あなた方を法華経・十羅刹よ助けてください。」と湿っている木より火を出し、乾いた土より水を出すような強盛な信心で祈っています。

有情の第一の財は、命にはすぎず。これを奪う者は、必ず三途に堕つ。

（197主君耳入此法門免与同罪事（与同罪を免るるの事）

生命とその尊厳1539ページ－15行）

心(こころ)は日蓮(にちれん)に同意(どうい)なれども、身(み)は別(べつ)なれば与同罪(よどうざい)のがれが
たきの御事(おんこと)に候(そうろう)に、主君(しゅくん)にこの法門(ほうもん)を耳(みみ)に触(ふ)れさせ進(まい)ら
せけるこそ、ありがたく候(そうら)え。
（197 主君耳入此法門免与同罪事（与同罪(よどうざい)を免(まぬか)るるの事(こと)）
折伏(しゃくぶく)1540ページー13行）

構　　構　　ごようじんそうろう　　憎　　ひとびと
かまえてかまえて御用心候べし。いよいよにくむ人々
狙　　そうろう　　おん　酒　盛　　よる　いっこう　とど　たま
ねらい候らん。御さかもり、夜は一向に止め給え。ただ
にょうぼう　さけ打　の　　ごふそく　　たにん
女房と酒うち飲んで、なにの御不足あるべき。他人の
昼　　おん　　懈　　さけ　はな
ひるの御さかもり、おこたるべからず。酒を離れてねらう
隙　あ
ひま有るべからず。

（197　しゅくんににゅうしほうもんめんよどうざいじ　　よどうざい　まぬか　　こと
主君耳入此法門免与同罪事（与同罪を免るるの事）

ようじん
用心
1540ページー17行）

禍　さんにょ　起
わざわい三女よりおこれりと定められて候に、この
ほけきょう　きょう　たも　にょにん　いっさい　にょにん　過
法華経ばかりに、この経を持つ女人は一切の女人にすぎ
いっさい　なんし　超　そうろう
たるのみならず、一切の男子にこえたりとみえて候。
しじょうきんごどののにょうぼうごへんじ
（198四条金吾殿女房御返事
ふじん　しんこう
婦人と信仰1542ページー12行）

こだいちゅうごくしゃかい　こんらん　さんにん　あくじょ　げんいん　お
古代中国社会の混乱は三人の悪女が原因で起こったことが
ていせつ　ほけきょう　きょう　じゅじ
定説とされていますが、この法華経においては、この経を受持する
じょせい　ほか　じょせい　だんせい
女性は、他のあらゆる女性にすぐれるだけでなく、すべての男性に

こ　と
も超えていると、説かれているのです。
いっさい　ひと　憎　しゃかぶつ　たほうぶつ　じっぽう
一切の人はにくまばにくめ、釈迦仏・多宝仏・十方の
しょぶつ　ないしぼんのう　たいしゃく　にちがつとう　不　便　思
諸仏、乃至梵王・帝釈・日月等にだにもふびんとおもわ
苦　ほけきょう　褒
れまいらせなば、なにくるし。法華経にだにもほめられた
てまつりなば、なにかくるしかるべき。
しじょうきんごどののにょうぼうごへんじ
（198 四条金吾殿女房御返事
しんこうしゃ　しせい
信仰者の姿勢
1542ページ－16行）
ひと　にく　しゃかぶつ　たほうぶつ　じっぽう　しょぶつ
あらゆる人に憎まれても、釈迦仏、多宝仏、十方の諸仏や
だいぼんてんのう　たいしゃくてん　にってん　がってんとう　おも
大梵天王、帝釈天、日天、月天等にかわいそうだと思われるな

らば、何の不足がありましょうか。ましてや法華経（御本尊）にほめられるならば、何の不足があるでしょうか。

しかるに、さえもんどのは、俗のなかには、日本にかたを
ならぶべきものもなき法華経の信者なり。これにあいつれ
させ給いぬるは、日本第一の女人なり。

（198四条金吾殿女房御返事
婦人と信仰1543ページー10行）

三十三のやくは、転じて三十三のさいわいとならせ給うべし。「七難は即ち滅し、七福は即ち生ず」とは、これなり。年はわこうなり、福はかさなり候べし。

（198四条金吾殿女房御返事
宿命転換1543ページー14行）

三十三の厄はかえって三十三の福となるでありましょう。「七難即滅・七福即生」というのはこのことです。年は若返り、福は重なることでしょう。

この経をききうくる人は多し。まことに聞き受くるごとくに大難来れども憶持不忘の人は希なるなり。受くるはやすく、持つはかたし。さるあいだ、成仏は持つにあり。

（199四条金吾殿御返事（此経難持の事）

持続1544ページー11行）

法華経を聞いて受ける人は多くいます。しかし、聞いて信受し、経文どおりに大難がきても、法華経を憶い持って忘れない人はま

れなのです。御本尊（ごほんぞん）を受（う）けることはやさしいのですが、持（たも）ちつづける
ことはむずかしいのです。それゆえに成仏（じょうぶつ）する肝要（かんよう）は、持（たも）ちつづけ
ることにあるのです。

法華経の行者は火と求羅とのごとし。薪と風とは大難のごとし。法華経の行者は久遠長寿の如来なり。修行の枝をきられ、まげられんこと、疑いなかるべし。これより後は、「此経難持」の四字を暫時もわすれず案じ給うべし。

（199四条金吾殿御返事（此経難持の事））

難を乗り越える1545ページー2行）

法華経の行者（御本尊を信じ実践する人）は火と求羅（風が吹

くと倍増する生き物）とのようなもので、薪と風とは大きな難のようなものです。また、法華経の行者は永遠の生命を悟った仏です。だから、松と同じように、修行の枝を切られたり曲げられたりするという難があることは疑いないのです。これから後は、「此経難持」の四字を少しの間も忘れず思索し、信心していくべきです。

御いのりの叶い候わざらんは、弓のつよくしてつるよわく、太刀・つるぎにてつかう人の臆病なるようにて候べし。あえて法華経の御とがにては候べからず。

（200 王舎城事）

祈り 1547ページー3行

祈りが叶わないというのは、ちょうど弓が強いのに弦が弱く、太刀や剣があっても使う人が臆病であるようなものです。けっして法華経に力がないためではありません。

夫れ、十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のごとし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なくば依報なし。また正報をば依報をもってこれをつくる。

（202 瑞相御書 生命とその尊厳 1550ページー14行）

およそ十方世界は依報であり、衆生は正報です。依報は、たとえば影であり、正報はその影をつくる体です。身がなければ影がないように、正報がなければ依報もありません。また、その正報

は、依報をもってその体をつくっているのです。

されば、国土やぶれんとするしるしには、まず山くずれ、草木かれ、江河つくるしるしあり。人の眼・耳等驚そうすれば天変あり、人の心をうごかせば地動ず。

（202 瑞相御書

立正安国 1550 ページー17 行）

大地の動ずることは人の六根の動くによる。人の六根の動きの大小によって大地の六種も高下あり。爾前の経々には、一切衆生、煩悩をやぶるようなれども、実にはやぶらず。今、法華経は、元品の無明をやぶるゆえに大動あり。末代はまた在世よりも悪人多々なり。かるがゆえに、在世の瑞にもすぐれてあるべきよしを示現し給う。

（202 瑞相御書

立正安国 1552 ページー10 行）

大地の震動は人間の六根が動くことによって起こるのです。人の六根の動きの大小によって大地の震動にも六種の高低がありま す。爾前の諸経はあらゆる人びとの六根の煩悩を破っているようですが、実際は、破ってはいないのです。いま、法華経は、煩悩のもっとも根本である元品の無明を破るゆえに大震動が起こるのです。しかも、末法は、釈尊の在世よりも悪人が多く、その無明を破るのですから、末法の瑞相は、釈尊在世の瑞相よりも大きいということを仏は示されているのです。

人の悦び多々なれば、天に吉瑞をあらわし、地に帝釈の動あり。人の悪心盛んなれば、天に凶変、地に凶夭出来す。瞋恚の大小に随って天変の大小あり。地夭もまたかくのごとし。

（202瑞相御書

仏法と社会1552ページ－17行）

一切衆生、南無妙法蓮華経と唱うるより外の遊楽なきなり。経に云わく「衆生所遊楽（衆生の遊楽する所）」云々。この文、あに自受法楽にあらずや。「衆生」のうちに貴殿もれ給うべきや。「所」とは、一閻浮提なり。日本国は閻浮提の内なり。「遊楽」とは、我らが色心・依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらずや。法華経を持ち奉るより外に遊楽はなし。「現世安穏、後生善処」とは、これなり。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）

歓喜・遊楽 1554ページー6行）

あらゆる人びとにとって、南無妙法蓮華経と唱えるよりほかに遊楽はありません。法華経寿量品第十六には「（この世の中は）衆生が遊楽する所である」とあります。（中略）「遊楽」というのは、私たちの身体と心、環境と生命が、信仰によって、そのまま一念三千という生命の法則のあらわれとなり、もっとも強くきれいな仏の生命の働きになることです。ですから、法華経（御本尊）をたもち信ずるよりほかに遊楽はないのです。法華経

薬草喩品第五に「現世は安穏にして後に善処に生ず」とあるのは、このことです。

ただ世間の留難来るともとりあえ給うべからず。賢人・聖人もこのことはのがれず。ただ女房と酒うちのみて、南無妙法蓮華経ととなえ給え。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）
難を乗り越える 1554ページ－10行）

ただ、どんなに社会から迫害されても、相手にして争ってはいけません。賢人や聖人でも、難にあうことは避けられないのです。た

だ、奥さんと酒を飲みかわして、南無妙法蓮華経と唱えていきなさい。

苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合わせて南無妙法蓮華経とうちとなえいさせ給え。これあに自受法楽にあらずや。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）

勤行・唱題 1554ページ－12行）

苦しいときには苦しいと悟り、楽しいときは楽しいなと喜び、苦しいときも楽しいときも南無妙法蓮華経と唱えきっていきなさい。それが自受法楽（仏の境地）ということではないでしょうか。

経文に「不知恩の者は横死有り」と見えぬ。

（204 四条金吾釈迦仏供養事 報恩 1559 ページー13 行）

華厳経の中に「恩を知らない者は横死する」と説かれています。

この文御覧ありて後は、けっして、百日が間、おぼろけならではどうれいならびに他人と我が宅ならで夜中の御さかもりあるべからず。主のめさん時は、ひるならばいそぎまいらせ給うべし。夜ならば、三度までは頓病の由申させ給いて、三度にすぎば、下人また他人をかたらいて、つじをみせなんどして御出仕あるべし。

（204四条金吾釈迦仏供養事用心1560ページー3行）

正法（しょうほう）をひろむることは、必（かなら）ず智人（ちじん）によるべし。弘（ひろ）

（205四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）（智人弘法（ちじんぐほう）の事（こと））

折伏（しゃくぶく）1561ページー6行）

正法（しょうほう）を弘（ひろ）めるのはかならず智者（ちしゃ）でなければできません。

たとい正法を持てる智者ありとも、檀那なくんば、いかでか弘まるべき。

（205 四条金吾殿御返事（智人弘法の事）

折伏 1561 ページー9 行）

日蓮をたすけんと志す人々少々ありといえども、あるいは心ざしうすし、あるいは心ざしはあつけれども、身ごうごせず。

（205 四条金吾殿御返事（智人弘法の事））

人間弱点へのいましめ 1562ページ－14行）

様々（ようよう）におわするに、御辺（ごへん）はその一分（いちぶん）なり。心（こころ）ざし人（ひと）にすぐれておわする上（うえ）、わずかの身命（しんみょう）をささうるもまた御故（おんゆえ）なり。天（てん）もさだめてしろしめし、地（ち）もしらせ給（たま）いぬらん。

殿（との）いかなる事（こと）にもあわせ給（たも）うならば、ひとえに日蓮（にちれん）が命（いのち）を天（てん）のたたせ給（たま）うなるべし。

（205 四条金吾殿御返事（智人弘法の事））

御本仏（ごほんぶつ）の大慈悲（だいじひ）

1562ページ－16行（しじょうきんごどのごへんじ　ちじんぐほう　こと）

人の命は山海空市まぬかれがたきことと定めて候えども、また「定業もまた能く転ず」の経文もあり。

（205四条金吾殿御返事（智人弘法の事）

宿命転換1563ページー1行）

只今の心は、いかなる事も出来候わば、入道殿の御前にして命をすてんと存じ候。もしやの事ならば、越後よりはせ上らんははるかなる上、不定なるべし。たとい所領をめさるるなりとも、今年はきみをはなれまいらせ候べからず。

（205四条金吾殿御返事（智人弘法の事）
言動・振る舞い1563ページー6行）

賢人は、八風と申して八つのかぜにおかされぬを、賢人と申すなり。利い・衰え・毀れ・誉れ・称え・譏り・苦しみ・楽しみなり。おお心は、利いあるによろこばず、おとろうるになげかず等のことなり。この八風におかされぬ人をば、必ず天はまぼらせ給うなり。しかるを、ひりに主をうらみなんどし候えば、いかに申せども、天まぼり給うことなし。

（206）四条金吾殿御返事（八風抄）

指導者（1565ページ－3行）

賢人てや八風といて八種の風におかされない人をいうのです。八風とは、利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽の八つです。だいたいの意味は、世間的な利益があっても喜ばず、衰えるのを嘆かないなどということです。この八風におかされない人を、諸天善神はかならず守られるのです。しかし道理にそむいて主君を恨んだりするような人は、どんなに祈っても諸天に守られないのです。

智者と申すは、国のあやうきをいさめ、人の邪見を申し
とどむるこそ智者にては候なれ。

（207 頼基陳状

指導者 1573 ページ－10 行）

一丈の堀を越えざる者、二丈三丈の堀を越えてんや。
やすき雨をだにふらし給わず、いわんやかたき往生・
成仏をや。

（207 頼基陳状）

勇気・忍耐 1575ページー17行）

一丈の堀を超えられない者が、どうして二丈、三丈の堀を超えることができましょうか。雨を降らすという簡単なことさえできないのに、どうして難しい往生成仏をさせることができるでしょ

うか。

度々の難、二箇度の御勘気に心ざしをあらわし給うだにも不思議なるに、かくおどさるるに、一所の所領をすてて法華経を信じとおすべしと御起請候ことも申すばかりなし。

（208四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）持続1582ページ－14行）

一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなるとも、法華経にきずをつけ給うべからず。

（208 四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）
使命1583ページー10行）

人間の一生は夢のなかの出来事のようなもので、明日の命もわかりません。どのような乞食になろうとも、法華経にきずをつけてはなりません。

されば、同じくはなげきたるけしきなくて、この状にかきたるがごとく、すこしもへつらわず振る舞い仰せあるべし。中々へつらうならば、あしかりなん。

（208 四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）
言動・振る舞い 1583ページ－11行）

たとい所領(しょりょう)をめされ召(お)い追い出だし給うとも、十羅刹女(じゅうらせつにょ)の御計(おんはか)らいにてぞあるらんとふかく深(たも)侍(たも)たのませ給うべし。

（208 四条金吾殿御返事（不可惜所領(しじょうきんごどのごへんじ ふかしゃくしょりょう)の事(こと)）

信仰者(しんこうしゃ)の姿勢(しせい)

1583ページー13行）

小事こそ善よりはおこって候え。大事になりぬれば、必ず大いなるさわぎが大いなる幸いとなるなり。

（208四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）

瑞相1584ページー4行）

夜（よる）は用心（ようじん）きびしく、夜廻（よめぐ）りの殿原（とのばら）かたらいて用（もち）い、常（つね）にはよりあわるべし。寄合（よりあい）今度（こんど）、御内（みうち）をだにもいだされずば、十（じうっ）に九（く）は内（うち）のものねらいなん。者（もの）狙（ねら）かまえて、きたなきし汚（しに）死（し）すべからず。

（208 四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）（しじょうきんごどのごへんじ（ふかしゃくしょりょうのこと）
用心（ようじん）1584ページ－12行）

夫れ、仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰を本とせり。故に、仏をば世雄と号し、王をば自在となづけたり。

（209四条金吾殿御返事（世雄御書））

仏法は勝負1585ページー7行）

およそ、仏法というのは勝負を第一とし、王法というのは賞罰を根本としています。したがって、仏が世雄と号し、王を自在と名づけるのです。

御辺は腹あしき人なれば、火の燃ゆるがごとし。一定人にすかされなん。また主のうらうらと言和らかにすかさせ給うならば、火に水をかけたるように御わたりありぬと覚ゆ。

（209四条金吾殿御返事（世雄御書）
用心1590ページー5行）

あなたは短気であるから、火の燃えるようなところがあります。かならず人に足をすくわれることでしょう。また、主君がのどかに、

言葉（ことば）やわらかにいいくるめようとするならば、火（ひ）に水（みず）をかけたように、主君（しゅくん）に説（と）き伏（ふ）せられてしまうだろうと思（おも）われます。

鍛金盛ひいい疾溶そうろう
きたわぬかねは、さかんなる火に入るればとくとけ候。
こおり湯い
氷をゆに入るるがごとし。剣つるぎなんどは、大火にたいかいに入るれど
も、しばらくはとけず。これきたえる故なり。
溶鍛ゆえ
（209四条金吾殿御返事（世雄御書）
しじょうきんごどのごへんじ　せおうごしょ
自らの成長1590ページー8行）
みずか　せいちょう

仏法と申すは道理なり。道理と申すは主に勝つものなり。

（209 四条金吾殿御返事（世雄御書）

仏法は勝負 1590 ページ-10 行）

仏法というのは道理をもととしています。道理というものは主君のもつ権力にもかならず勝てるのです。

愛離
いかにいとおしはなれじと思うめなれども、死しぬれば
おも妻
甲斐
かいなし。いかに所領をおししとおぼすとも、死しては
しょりょう惜思
たにん他人の物。すでにさかえて年久し。すこしも惜しむことな
栄
し
お
としひさ
かれ。またさきざき申すがごとく、さきざきよりも
前々もう
百千万億倍御用心あるべし。
ひゃくせんまんおくばいごようじん
（209 四条金吾殿御返事（世雄御書）
しじょうきんごどのごへんじ　せおうごしょ
用心1590ページー10行）
ようじん

日蓮は少きより今生のいのりなし。ただ仏にならんと
おもうばかりなり

（209 四条金吾殿御返事（世雄御書）
御本仏の境涯・確信 1590ページ－14行）

日蓮は若いときから、今世のことを願ったことはありません。ただ仏になろうと思い願うだけです。

殿の御事をば、ひまなく法華経・釈迦仏・日天に申すなり。その故は、法華経の命を継ぐ人なればと思うなり。

（209四条金吾殿御返事（世雄御書）1590ページー14行）

あなた（四条金吾）のことは、たえず法華経、釈迦仏、日天子に祈っています。それは、あなたが法華経の命を継ぐ人だと思うからです。

夜廻りの殿原は、ひとりもたのもしきことはなけれども、法華経の故に屋敷を取られたる人々なり。常はむつばせ給うべし。また夜の用心のためと申し、かたがた殿の守りとなるべし。吾が方の人々をば少々の事をばみずきかずあるべし。

（209四条金吾殿御返事（世雄御書）周囲の人を大切に1590ページー16行）

仏法の中に内薫外護と申す大いなる大事あり

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）

一生成仏・仏界湧現 1592ページー14行）

彼(かれ)らが柱(はしら)とたのむ竜象(りゅうぞう)すでにたおれぬ。和讒(わざん)せし人(ひと)も、またその病(やまい)に冒(おかさ)れぬ。

（210崇峻天皇御書（すしゅんてんのうごしょ）（三種財宝御書（さんしゅざいほうごしょ））

罰(ばち)1593ページー4行）

いかにとがありとも、弟どもしばらくも身をはなち給うな。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）
周囲の人を大切に 1593 ページ－９行）

賢人も、五常は口に説いて身には振る舞いがたし」と見えて候ぞ。「こうの座をば去れ」と申すぞかし。

（210崇峻天皇御書（三種財宝御書）

地道1594ページー7行）

いかに申すとも、鎌倉のえがら夜廻りの殿原にはすぎじ。
いかに心にあわぬこと有りとも、かたらい給え。
（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）
周囲の人を大切に 1594ページ－12行）

日蓮と法華経とを信ずる人々をば、前々彼の人々いかなることありともかえりみ給うべし。その上、殿の家へこの人々常にかようならば、かたきはよる行きあわじとおじるべし。させる親のかたきならねば、顕れてとはよも思わじ。かくれん者は、これ程の兵士はなきなり。常にむつばせ給え。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）
周囲の人を大切に 1594ページー16行）

人身は受けがたし、爪の上の土。人身は持ちがたし、草の上の露。百二十まで持って名をくたして死せんよりは、生きて一日なりとも名をあげんことこそ大切なれ。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）
人生・生き方 1596 ページー6 行）

人間として生まれてくることは難しいことで、爪の上にのる土が少ないように、ごくまれなことなのです。たとえ人間として生まれたとしても、その生命をたもつことは難しく、太陽が昇れば、す

ぐ消えてしまう草の上の露のようにたよりないものなのです。百二十歳まで長生きしたとしても、汚名を残して死ぬよりは、生きて一日でも名をあげることのほうが大切（立派）なことなのです。

「中務三郎左衛門尉は、主の御ためにも、仏法の御ためにも、世間の心ねも、よかりけり、よかりけり」と、鎌倉の人々の口にうたわれ給え。

（210崇峻天皇御書（三種財宝御書）
仏法と社会1596ページー7行）

中務三郎左衛門尉は、主君のためにも、仏法のためにも、世間に対する心がけも、非常に立派であると、鎌倉の人びとから口々にいわれるようになりなさい。

蔵の財よりも身の財すぐれたり、身の財より心の財第一なり。この御文を御覧あらんよりは、心の財をつませ給うべし。

（210崇峻天皇御書（三種財宝御書）福運1596ページー9行）

蔵にたくわえる財宝よりも、身の財がすぐれており、身の財よりも、心に積んだ財が第一なのです。この手紙を御覧になってから以後は、心の財を積んでいきなさい。

一代の肝心は法華経、法華経の修行の肝心は不軽品にて候なり。不軽菩薩の人を敬いしは、いかなることぞ。教主釈尊の出世の本懐は人の振る舞いにて候いけるぞ。あなかしこ、あなかしこ。賢きを人と云い、はかなきを畜という。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）
言動・振る舞い 1597ページ－13行）

釈尊一代の説法の肝心（もっとも大事なところ）は法華経で

す。その法華経を修行するうえで一番大事なのは不軽品なので
す。不軽菩薩があらゆる人を敬ったのは、どういうわけなのか、よ
く考えてごらんなさい。教主釈尊の出世の本懐（生まれてきた
目的）は、人間としてどのように振る舞ったらいいかを教えること
だったのです。くれぐれも身をつつしみなさい。賢いものを人間と
いい、愚かなものを畜生（動物）というのです。

真実、一切衆生、色心の留難を止むる秘術は、ただ南無妙法蓮華経なり。

（211四条金吾殿御返事（留難を止むる秘術の事）1598ページー8行）

難を乗り越える

あらゆる人びとにとって、正しく色心にわたる難を打ちやぶる唯一の方法は、ただ南無妙法蓮華経による以外にないのです。

孔子は九思一言、周公旦は浴する時は三度にぎり、食する時は三度はかせ給う。古の賢人なり、今の人のかがみなり。されば、今度はことに身をつつしませ給うべし。

（212 四条金吾御書 言動・振る舞い 1599ページ-12行）

孔子は九思一言（十分考えてから話すこと）といい、周公旦は客が来れば髪を洗っている時でも中止して三度も迎え、食事中であっても口の中にある食物を吐いてでも客を待たせず

三度も対応しました。それが昔の賢人であり、今の人たちの鏡です。したがって、今度からはよくよく自重していきなさい。

夜よるは、いかなることありとも、一人そとへ出でさせ給うべからず。たとい上の御めし有りとも、まず下人をごそへつかわして、ないない一定をききさだめて、はらまきを着きて、はちまきし、先後左右に人をたてて出仕し、御所の傍かたわらに心よせのやかたか、また我がやかたかにぬぎ置おきて、まいらせ給うべし。家へかえらんには、さきに人を入れて、とのわき、はしのした、むまやのしり、高殿いっさい暗たかどの、一切くらきところをみせて入るべし。

焼亡

しようもうには、我が家よりも人の家よりもあれ、たからをおしみてあわてて火をけすところへつっとよるべからず。まして走り出ずることなかれ。出仕より主の御ともして御かえりの時は、みかどより馬よりおりて、いとまのさしあうよし、ぼうかんに申して、いそぎかえるべし。上のおおせなりとも、よに入って御ともして御所にひさしかるべからず。かえらんには、第一心にふかきようじんあるべし。ここをばかならずかたきのうかがうところなり。人のさけたばんと申すとも、あやしみて、あるいは言をい

惜慌寄

財

ひと いえ

わ いえ

ひ 消

はし い

おん 帰

とき 御門

うま 下

暇

しゅつし しゅ おん 供

合由傍官

もう

急

帰

かみ

夜 おん 供

ごしょ

久

仰

だいいちこころ 深

用心

帰

必敵窺

ひと

酒給

もう

怪

ことば 出

だし、あるいは用(もち)いることなかれ。

（212 四条金吾御書(しじょうきんごごしょ)

用心(ようじん) 1599 ページー14 行）

女るいは、いかなる失ありとも、一向に御きょうくんまでもあるべからず。ましていさかうことなかれ。

（212四条金吾御書

言動・振る舞い1600ページ－11行）

双六は二つある石はかけられず、鳥は一つの羽にてとぶことなし。将門・さだとうがようなりしゆうしょうも一人は叶わず。されば、舎弟等を子とも郎等ともうちたのみておわせば、もしや法華経もひろまらせ給いて、世にもあらせ給わば、一方のかとうどたるべし。

（212 四条金吾御書 周囲の人を大切に 1601ページー2行）

双六は二つ並んだ石は破られず、鳥は一つの羽では飛ぶことが

できません。平将門や安部貞任のような勇将でも一人では望みを叶えることはできません。したがって舎弟たちをわが子とも郎党ともたのんでいれば、法華経も広まり、あなたも健在であればかならず立派な法華経の味方になることでありましょう。

夫れ、人に二病あり。一には身の病。いわゆる、地大百一・水大百一・火大百一・風大百一、已上四百四病。この病は治水・流水・耆婆・扁鵲等の方薬をもってこれを治す。二には心の病。いわゆる三毒乃至八万四千の病なり。仏にあらざれば二天三仙も治しがたし。いかにいわんや、神農・黄帝の力及ぶべしや。

（213 中 務左衛門尉殿御返事
病気 1602ページ－6行）

法華経に云わく「もし医道を修して、方に順じて病を治せば、さらに他の疾を増し、あるいはまた死を致さん。しかもまた増劇せん」。

（213　中　務　左衛門尉殿御返事　病気1603ページー3行）

法華経譬喩品第三に「若し、医道（医学）を学んで、その方法にしたがって病気をなおそうとすれば、さらに他の病気を併発したり、あるいは死に至ることもある。しかも、また病勢を増すであろ

う」とあります。

この疫病は阿闍世王の瘡のごとし。彼は仏にあらずんば治し難し、此は法華にあらずんば除き難し。

（213 中 務 左衛門尉殿御返事 病気 1603 ページー7 行）

竜樹菩薩の大論に法華経の一代にすぐれていみじきよう
を釈して云わく「譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬と
なすがごとし」等云々。

（214 四条金吾殿御返事（所領加増の事）
変毒為薬 1606ページー6行）

弥勒菩薩の瑜伽論、竜樹菩薩の大論を見候えば、定業の者は薬変じて毒となる、法華経は毒変じて薬となると見えて候。

（215四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）変毒為薬1607ページー15行）

敵（かたき）と申（もう）す者（もの）は、わすれさせてねらうものなり。

（215 四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）（石虎将軍御書（せっこしょうぐんごしょ））

用心（ようじん）1608ページー7行）

されば、能く能く心をきたわせ給うにや。

（215 四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）

自らの成長 1608 ページ－15 行）

頭をふればかみゆるぐ。心はたらけば身うごく。大風吹けば草木しずかならず。大地うごけば大海さわがし。教主釈尊をうごかし奉れば、ゆるがぬ草木やあるべき、さわがぬ水やあるべき。

（216日眼女造立釈迦仏供養事　祈り1610ページー4行）

頭をふれば髪がゆれ動き、心が働けば身体もそれに従って動き、大風が吹けば草や木が揺れ、大地が動けば海も荒れるよう

に、教主釈尊（御本尊）を揺り動かしていくような信心をすれば、揺れない草木がなく、さわがない水があるわけはありません。（そのように、自身も変わり、力も発揮していけるようになるのです）

病は肉より起これば治しやすし、節より起これば治しがたし。家にはかきなければ盗人いる。人にはとがあれば敵便りをうく。やくと申すはふしぶしのごとし。家にかきなく、人に科あるがごとし。よきひょうじをもってまぼらすれば、盗人をからめとる。ふしの病をかねて治すれば命ながし。

（216日眼女造立釈迦仏供養事）

病気1610ページ－7行）

日本国と申すは女人の国と申す国なり。

（216日眼女造立釈迦仏供養事

婦人と信仰1611ページー13行）

「陰徳あれば陽報あり」

（217 陰徳陽報御書）

功徳1613ページー2行

陰徳（かくれた善行）があるならば、陽報（はっきり現れる善い報い）があります。

この法門の一門、いかなる本意なきこととありとも、みずき聞
かずいわずしてむつばせ給え。言睦給
（217陰徳陽報御書
団結1613ページー6行）

幾（いく）
いくそばくぞ御内（みうち）の人々（ひとびと）嫉（そねみ）候（そうろう）らんに、度々（たびたび）の仰（おお）せを
返（かえ）し、よりよりの御心（みこころ）に違（たが）わせ給（たま）えば、いくそばくの
讒言（ざんげん）こそ候（そうろう）らんに、度々（たびたび）の御所領（ごしょりょう）を返（かえ）して、今（いま）
た所領給（しょりょうたま）わらせ給うと云々。これ程（ほど）の不思議（ふしぎ）は候（そうら）わず。
これひとえに、「陰徳（いんとく）あれば陽報（ようほう）ありとは、これなり
（218 四条金吾殿御返事（源遠流長の事）（しじょうきんごどのごへんじ（げんおんりゅうちょうのこと））
功徳（くどく）1614ページー15行）

この法門（ほうもん）につきし人あまた候（そうら）いしかども、おおやけ・公（おおやけ）
わたくし私（わたくし）の大難度々重（だいなんたびたびかさ）なり候（そうら）いしかば、一年二年（いちねんにねん）こそつ付（つ）き候（そうら）いしが、後々（のちのち）には、皆（みな）、あるいはおち落（おち）、あるいは返（かえ）り矢（や）をいる。あるいは身（み）はおちねども心（こころ）おち、あるいは心（こころ）はおちねども身（み）はおちぬ。

（218 四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）（源遠流長（げんおんりゅうちょう）の事（こと））

信仰者（しんこうしゃ）の姿勢（しせい）1615ページ－8行）

題目を唱うる人、如来の使いなり。始中終すてずして
大難をとおす人、如来の使いなり。
（218 四条金吾殿御返事（源遠流長の事）
持続 1616 ページ－17 行）

去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に、安房国長狭郡の内、東条郷、今は郡なり。天照太神の御厨くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。この郡の内、清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午時にこの法門申しはじめて、今に二十七年、弘安二年太歳己卯なり。仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う。その中の大難申すばかりなし。

先々に申すがごとし。余は二十七年なり。その間の大難は、各々かつしろしめせり。

（219 聖人御難事）

御本仏の大慈悲 1618ページー6行）

去る建長五年四月二十八日に、安房の国（千葉県）長狭郡のなかの東条の郷、今は郡となっていますが、そこには天照太神（伊勢神宮）に源頼朝が寄付した日本第二の神領があり、いまでは日本第一になっています。この郡のなかの清澄寺という寺の諸仏坊という坊の持仏堂（仏を安置する堂）の南側で、正午

に、私がこの法門（南無妙法蓮華経）を説きはじめてから、今年は二十七年目で、弘安二年となりました。釈尊は四十数年、天台大師は三十数年、伝教大師は二十数年の後に、それぞれ生まれてきた目的（最高の教えをとくこと）をはたされました。そのあいだの大きな難は、それぞれに言いつくせないほどであります。それは前々から述べてきたとおりです。私は二十七年のいま、生まれてきた目的（大御本尊をあらわすこと）をはたしたいと思います。立宗からこれまでのあいだにうけた大きな難は、あなたがたがすでによく知っているとおりです。

仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知らず。竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人なり。

（219 聖人御難事
御本仏の境涯・確信
1619ページー5行）

（大聖人の受けてこられた難は）釈尊がうけた難と同じか、あるいはもっと大きいか、それはしりませんが、竜樹菩薩、天台大師、伝教大師がうけた難は私（大聖人）と比べものになりません。日蓮が末法に生まれてこなければ、釈尊は大うそつきの人となり、それを真実だと証明した多宝如来や十方の諸仏は、大うそを正しいと証明したことになってしまいます。釈尊がなくなってから二千二百三十数年の間に、世界中で、仏の言ったことをそのとおりに実践して、仏の教えが正しいことを証明し、助けた人はただ日蓮一人だけです。

過去・現在の末法の法華経の行者を軽賤する王臣・万民、始めは事なきようにて、終ほろびざるは候わず。

（219聖人御難事）

罰1619ページ－10行

罰は総罰・別罰・顕罰・冥罰、四つ候。日本国の大疫病と大けかちとどしうちと他国よりせめらるるは総ばちなり。やくびょうは冥罰なり。大田等は現罰なり、別ばちなり。

（219 聖人御難事）

罰には、総罰・別罰・顕罰・冥罰の四つがあります。日本の国に大疫病が起こり、大飢饉におそわれ、北条一門に同士討ち

罰 1619 ページ－15 行）

が起こり、また他国からせめられているのは、総罰です。疫病は冥罰です。大田親昌や大進房の落馬などは現罰であり、別罰なのです。

おのおの　ししおう　こころ　と　い　ひと
各々、師子王の心を取り出だして、いかに人おどすとも
ししおう　ひゃくじゅう　ししこ
おずることなかれ。師子王は百獣におじず。師子の子、
かれ　やかん　にちれん　いちもん
またかくのごとし。彼らは野干のほうるなり。日蓮が一門
ししほ
は師子の吼うるなり。

（219 聖人御難事）

しょうにんごなんじ

ゆうき　にんたい
勇気・忍耐
1620ページー1行

がた　ししおう　つよ　こころ
あなた方は師子王のような強い心をもって、どんなに人がおどし
おそ　ししおう　けもの　おそ　ひと　ししこ
ても恐れてはなりません。師子王はどんな獣も恐れません。師子の

子もまた同じです。かれら正法に反対する人びとは、野干（狐）が吼えているようなものです。日蓮の一門は師子が唱えるのと同じです。

月々日々につより給え。すこしもたゆむ心あらば、魔
たよりをうべし。

（219聖人御難事

持続1620ページー7行）

月々、日々に信心を強くしていきなさい。少しでもゆるむ心があれば魔がそれをいいチャンスにして、しのびよってくるにちがいありません。

我ら、現にはこの大難に値うとも、後生は仏になりなん。たとえば灸治のごとし。当時はいたけれども、後の薬なれば、いたくていたからず。

（219 聖人御難事）

難を乗り越える

1620ページー12行

私たちはいまはこのように仏法のために、大難にあっていますが、後にはかならず仏になることができるのです。それはたとえば、灸治のようなものです。その時は熱くて痛いけれども、後には

薬（くすり）となるのですか、疼（いた）くても本当（ほんとう）はいたくないのです。

彼のあつわらの愚癡の者（か　熱　原　ぐち　もの）ども、言（いい）励（はげ）まして堕（おとす）すことなかれ。彼（かれ）らには、ただ一円（いち　えん）思（おも）い切（き）れ。善（よから）らんは不思議（ふしぎ）、わるからんは悪（あく）一定（いちじょう）とおもえ。思（おも）ひだるしとおもわば、餓鬼道（がきどう）をおしえよ。寒（さむ）しといわば、八寒地獄（はっかんじごく）をおしえよ。恐（おそろ）ししといわば、たかにあえるきじ、ねこにあえるねずみを他人（たにん）とおもうことなかれ。鷹遭雉猫鼠思

これはこまごまとかき候（そうら）ことは、かくとしどし月々日々に申（もう）して候えども、なごえの尼・しょう房・のと

細々書（こまごまとかき）　年々（としどし）つきづき　名越（なごえ）　少輔房（しょうぼう）　能登（のと）　尼（あま）　御前（ごぜん）

房・三位房なんどのように候、おくびょう、物おぼえず、よくふかく、うたがい多き者どもは、ぬれるうるしに水をかけそらをきりたるように候ぞ。

三位房がことは大不思議の事ども候いしかども、とのばらのおもいには「智慧ある者をそねませ給うか」とぐちの人おもいなんとおもいて、物も申さで候いしが、はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ。なかなか、さんざんとだにも申せしかば、たすかるへんもや候いなん。あまりにふしぎさに申さざりしなり。また、かく申せ

ば、おこ人どもは「死もうのことを仰せ候」と申すべし。鏡のために申す。またこのことは、彼らの人々も内々はおじおそれ候らんとおぼえ候ぞ。

（219聖人御難事）退転のいましめ1620ページー14行）

あの熱原の信心の弱い人たちに対しては、励ましの言葉をかけてあげなさい。けっしておどしてはなりません。彼らには、ただきっぱり腹をきめなさい、善い結果になるのが不思議であり、悪い結果になるのが当然と考えなさいと言い聞かせなさい。空腹にたえられない

といったら餓鬼道の苦しみを教えなさい。寒さにたえられないといったら八寒地獄の苦しみを教えなさい。恐ろしいといったら鷹にあった雉、猫にあった鼠を他人事と思ってはならないと教えなさい。

このようにこまごまと書いたことは、年々、月々、毎日のようにいってきたことですが、それでも名越の尼や、少輔房、能登房、三位房などのように、臆病で、求道心がなく、そのうえ欲が深く、疑い深い人たちは、塗ったうるしに水をかけ、空を刀で切るように、まったく教えたことがなんの役にも立っていないのです。三位房については、たいへん不思議なことが前々からあったのですが、それをい

うと、三位房のように知恵がある者を、日蓮がねたんであのようにいうのだと愚かな人は想像すると思ったので、今まで何もいわなかったのですが、（予想していたとおり）ついに悪心をおこして大難にあい、不幸の死をとげてしまったのです。かえって十分に戒めていたならば、たすかったかもしれません。あまりにも不思議だったので、これまでいわなかったのです。またこのようにいえば、愚かな人びとは、死んだ人のことを、勝手にいっているというかもしれません。しかし、後々の鏡のためにいっておきます。また、三位房が死んだことは、あの人びと（大聖人の一門を迫害した人たち）も、

心のなかでは恐ろしいことだと思っていることでしょう。前々の用心といい、またけなげといい、また法華経の信心つよき故に、難なく存命せさせ給い、めでたし、めでたし。

（220四条金吾殿御返事（法華経兵法の事））

用心1622ページー7行）

ふだんからの用心といい、勇気といい、また法華経（御本尊）への信心が強かったので、無事に命をながらえることができたのです。本当にめでたいことです。

夫れ、運きわまりぬれば兵法もいらず、果報つきぬれば所従もしたがわず。

（220四条金吾殿御返事（法華経兵法の事）1622ページー9行）

およそ福運がなくなってしまえば、どんな兵法も役に立たなくなるし、果報が尽きてしまえば、家来も従わなくなるものです。

いかに日蓮いのり申すとも、不信ならば、ぬれたるほくちに火をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛に信力をいだし給うべし。

（220四条金吾殿御返事（法華経兵法の事）祈り1623ページー7行）

日蓮があなたのことを心配してどんなに御本尊に祈ったとしても、あなたに信心がなければ、濡れた火口に火をつけようとしてもつかないように、無駄なことになっていきます。ですから、なおいっ

そう自分自身を励まして、強い信心の力を出していきなさい。なにの兵法よりも法華経の兵法をもちい給うべし。「諸余の怨敵は、みな摧滅す」の金言むなしかるべからず。兵法・剣形の大事もこの妙法より出でたり。ふかく信心をとり給え。あえて臆病にては叶うべからず候。

（220四条金吾殿御返事（法華経兵法の事）

勇気・忍耐1623ページ－9行）

どのような作戦よりも法華経の兵法（信心）を根本にしていくべきです。法華経薬王品第二十三の「諸の余の怨敵、皆悉く

摧滅す」とある金言はけっしてうそではありません。作戦や剣術の根本原理はこの妙法から出たものです。このことを深く信じていきなさい。あえて臆病でどんな祈りも叶うことはありません。

多くの月日を送り読誦し奉るところの法華経の功徳は、
虚空にも余りぬべし。しかるを、毎年度々の御参詣には、
無始の罪障も定めて今生一世に消滅すべきか。

（221四条金吾殿御返事（法華行者住処の事））

罪障消滅

1625ページー10行）

経王御前のこと、二六時中に日月天に祈り申し候。

（225 経王殿御返事

一人を大切に1632ページー13行）

師子王（ししおう）は、前三後一（ぜんさんごいち）と申（もう）して、蟻（あり）の子（こ）を取（と）らんとするにも、またたけきもの猛（たけ）きものを取（と）らんとする時（とき）も、いきおい勢（いきおい）を出（い）だすことは、ただおなじきこと同（おなじ）となり。

（225 経王殿御返事（きょうおうどのごへんじ））

指導者（しどうしゃ）1632ページー15行）

日蓮、守護たるところの御本尊をしたため参らせ候ことも、師子王におとるべからず。経に云わく「師子奮迅の力」とは、これなり。

（225 経王殿御返事 御本仏の大慈悲 1632ページー16行）

この曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし。南無妙法蓮華経は師子吼のごとし、いかなる病さわりをなすべきや。

（225 経王殿御返事）

病気 1633 ページ－1 行）

この曼荼羅（御本尊）をよくよく信じていきなさい。南無妙法蓮華経は師子の叫びのようなものです。どのような病気も、（題目と唱える人の幸せを）さまたげることはできません。

さいわいは愛染のごとく、福は毘沙門のごとくなるべし。

（225 経王殿御返事 1633 ページー2 行）

幸せは愛染明王のように、福運は毘沙門天のように備わっていくことでしょう。

ただし御信心によるべし。つるぎなんども、すすまざる人のためには用いることなし。法華経の剣は、信心のけなげなる人こそ用いることなれ。鬼にかなぼうたるべし。

（225 経王殿御返事）

信・不信 1633ページー5行

ただし（諸天善神の守護も）信心の強さ弱さによります。剣なども、敵にむかって進まない臆病な人には何の役にも立ちませ

ん。法華経（御本尊）という剣は、信心の強い勇気ある人であって
こそ役に立つのです。これこそ鬼に鉄棒なのです。

日蓮がたましいをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給え。仏の御意は法華経なり、日蓮がたましいは南無妙法蓮華経にすぎたるはなし。

（225 経王殿御返事）

御本尊は仏の生命 1633ページー6行）

この御本尊は、日蓮が魂（全生命）を墨に染めながして書き認めたものです。信じていきなさい。釈迦仏の本意は法華経です。日蓮の魂は南無妙法蓮華経にすぎたものはありません。

経王御前には、わざわいも転じて幸いとなるべし。

（225 経王殿御返事）

宿命転換 1633ページ－9行

経王御前の、今の病気という不幸も、転じて幸福にかわていくことはまちがいありません。

相構

あいかまえて御信心を出だし、この御本尊に祈念せしめ給え。何事か成就せざるべき。

（225 経王殿御返事 1633ページー9行）

これより具（ぐ）し至（し）ていたらん人（ひと）により法門（ほうもん）は御聴聞（ごちょうもん）あるべし。互（たが）いに師弟（してい）とならんか。

（226 弁殿御消息（べんどのごしょうそく）（法門聴聞（ほうもんちょうもん）の事（こと））

善知識（ぜんちしき）と悪知識（あくちしき）1634ページー7行）

第六天の魔王、十軍のいくさをおこして、法華経の行者と生死海の海中にして、同居穢土を、とられじ、うばわんとあらそう。日蓮その身にあいあたりて、大兵をおこして二十余年なり。日蓮、一度もしりぞく心なし。しかりといえども、弟子等・檀那等の中に、臆病のもの、大体あるいはおち、あるいは退転の心あり。

（227弁殿並尼御前御書
仏と魔1635ページー6行）

第六天の魔王は、十の魔軍を起こして、法華経の行者と現実の生死の苦悩うずまく世界にあって、凡聖同居（仏と凡夫が一緒にいる）の穢土（娑婆世界）をとられまい、奪おう、として争っているのです。日蓮は第六天の魔王と対決する者であり、魔との戦を起こして戦うこと二十数年になります。その間、日蓮は一度として退く心はありませんでした。しかしながら弟子や信者たちのなかで臆病な者はだいたいが退転するか、もしくは退転の心があるのです。

おのおのは随分の日蓮がかとうどなり。しかるに、なずきをくだきていのるに、いままでしるしのなきは、この中に心のひるがえる人の有るとおぼえ候ぞ。

（229 弁殿御消息（師弟同心の祈りの事））

祈り 1637ページ－12行）

あなた方は日蓮のよい味方です。ところが、脳髄を砕くようにして祈ったのに、今までしるしがない（結果がでない）のは、このなかに心をひるがえした人（不信の人）がいるからだと思われます。

ただし御不審のこと、法華経はいずれの品も先に申しつるように愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり。されば、常の御所作には、方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候え。また別に書き出だしてもあそばし候べく候。余の二十六品は、身に影の随い、玉に財の備わるがごとし。寿量品・方便品をよみ候えば、自然に余品はよみ候わねども備わり候な

り。

（234月水御書（がっすいごしょ）

勤行（ごんぎょう）・唱題（しょうだい）1646ページー3行）

「御持仏堂にて法門申したりしが面目」なんどかかれて候こと、かえすがえす不思議におぼえ候。そのゆえは、僧となりぬ、その上一閻浮提にありがたき法門なるべし。たとい等覚の菩薩なりとも、なにとかおもうべき。まして梵天・帝釈等は、我らが親父・釈迦如来の御所領を預あずかりて、正法の僧を養うべき者につけられて候。毘沙門等は四天下の主、これらが門まぼり、また四州の王等は毘沙門天が所従なるべし。その上、日本秋津島は

四州の輪王の所従にも及ばず、ただ島の長なるべし。長なんどにつかえん者どもに「召されたり」「上」なんどかく上、「面目」なんど申すは、かたがたせんずるところ日蓮をいやしみてかけるか。総じて、日蓮が弟子は、京にのぼりぬれば、始めはわすれぬようにて、後には天魔つきて物にくるう。しょう房がごとし。わ御房もそれていになりて、天のにくまれかぼるな。のぼりていくばくもなきに、実名をかうるじょう、物ぐるわし。定めてことばつき、音なんども京なめりになりたるらん。ねずみが

蝙蝠

かわほりになりたるように、鳥にもあらず、ねずみにもあらず、田舎法師にもあらず、京法師にもにず。しょう房がようになりぬとおぼゆ。言をば、ただいなかことばにてあるべし。なかなかあしきようにて有るなり。「尊成」書とかけるは、隠岐法皇の御実名か。かたがた不思議なるべし。

（237法門申さるべき様の事
信仰者の姿勢
1657ページー7行）

一念三千の出処は略開三の十如実相なれども、義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。ただし、真実の依文判義は本門に限るべし。

（238 十章抄）

妙法の偉大さ 1665ページー7行

三千大千世界に積みたる金銀等の財も、一つの如意宝珠をば、かうべ替からず。

（238十章抄）

妙法の偉大さ1667ページー7行

正像に益を得し人々は顕益なるべし、在世結縁の熟せる故に。今、末法には初めて下種す。冥益なるべし。

（239 教行証御書

功徳 1669ページー6行）

和らかに、また強く、両眼を細めに見、顔貌に色を調えて閑かに言上すべし。

（239 教行証御書 折伏 1673ページー1行）

（誤った教えを破折するときは）穏やかに、しかも力強く、両眼を細くし、顔色をととのえて、落ち着いて話していきなさい。

この法華経の本門の肝心・妙法蓮華経は、三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて五字となせり。この五字の内にあに万戒の功徳を納めざらんや。

（239 教行証御書）

妙法の偉大さ1676ページー9行）

今、末法当世の有智・無智、在家・出家、上下万人、この妙法蓮華経を持って説のごとく修行せんに、あに仏果を得ざらんや。

（239 教行証御書）

如説修行 1676ページー13行）

道のとおきに心ざしのあらわるるにや。

（241 乙御前母御書

求道（行学の二道）1684ページ－16行）

犬は師子をほうれば 腸 くさる。修羅は日輪を射 奉 れば
頭七分に破る。一切の真言師は犬と修羅とのごとく、
法華経の行者は日輪と師子とのごとし。

（242 乙御前御消息

罰1687ページ－17行）

犬は師子にむかって吠えれば 腸 がくさり、阿修羅は日輪
（太陽）を矢で射れば 頭 が七分に破れるといいます。すべての
真言宗の僧は犬と阿修羅のようであり、法華経の行者は日輪と

師子のようなものです。

軍には大将軍を魂とす。大将軍おくしぬれば、歩兵

臆病なり。

（242乙御前御消息）

指導者1688ページー14行）

戦には大将軍を魂とするのです。大将軍が臆したならば

部下の兵はことごとく臆病となってしまいます。

女人は夫を魂とす。夫なければ、女人魂なし。この世に夫ある女人すら、世の中渡りがとうみえて候に、魂もなくして世を渡らせ給うが、魂ある女人にもすぐれて心中かいがいしくおわする上、神にも心を入れ、仏をもあがめさせ給えば、人に勝れておわする女人なり。

（242乙御前御消息

婦人と信仰1688ページー14行）

（夫のある身の）女性は夫を魂とするのです。夫がいなければ女性の魂はないのと同じです。この世に夫のある女人でさえ世の中を渡りがたいと思われるのに、魂と頼む夫もなくて世を渡られているあなたが、夫のある女性にも勝れてお心もしっかりたもたれておられるうえ、諸天善神の加護をも信じ、仏をも尊ばれておられるということは、当然、人よりも勝れた女性なのです。

日蓮をば、日本国の上一人より下万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども、今までこうて候ことは、一人なれども心のつよき故なるべしとおぼすべし。

（242 乙御前御消息

御本仏の境涯・確信 1689ページ－17行）

一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同に船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいなければ多くの能も無用なり。

（242 乙御前御消息

指導者1690ページー2行）

一隻の船に乗り合わせてしまえば、もし船頭の舵取りが悪ければ一同に船中の人びとは命を損なってしまうでしょう。またどんなに体が強くても心が弱ければ多くの能力があってもなんの役に

も立ちません。

いかなる男をせさせ給うとも、法華経のかたきならば、

随い給うべからず。

いよいよ強盛の御志あるべし。

（242 乙御前御消息）

婦人と信仰 1690ページ－12行

どのような男性を夫とされても、法華経に敵対するならばしたがってはいけません。ますます強い信心を貫いていきなさい。

氷は水より出でたれども、水よりもすさまじ。青きことは藍より出でたれども、かさぬれば藍よりも色まさる。

（242 乙御前御消息）

信仰者の姿勢 1690ページ－13行

氷は水からできたものですが氷よりもなお冷たくなり、青い色は藍から生まれ出たものですが色を重ねると藍よりも色が濃くなるのです。

「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」とのべて候えば、身は軽ければ人は打ちはり悪むとも、法は重ければ必ず弘まるべし。

（242 乙御前御消息

折伏 1691 ページー7 行）

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功徳すら申すばかりなし。いわんや、日本国の一切衆生の眼をあけて候わん功徳をや。いかにいわんや、一閻浮提・四天下の人の眼のしいたるをあけて候わんをや。

法華経の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。法華経を持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて候。

（242 乙御前御消息（おとごぜんごしょうそく）

功徳（くどく）1691ページー12行）

いかなることも出来し候わば、これへ御わたりあるべし。見奉らん。山中にて共にうえ死にし候わん。

（242乙御前御消息

一人を大切に1692ページ－6行）

「譬えば、一人にして七子有り。この七子の中に一子病に遇えり。父母の心平等ならざるにはあらざれども、しかも病子において心則ちひとえに多きがごとし」

（244妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）一人を大切に1694ページー13行）

法華経を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。いまだ昔よりきかずみず、冬の秋とかえれることを。いまだきかず、法華経を信ずる人の凡夫となることを。

（244 妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）1696ページー1行）

難を乗り越える

法華経を信ずる人は冬のようなものです。冬はかならず春となります。いまだかつて冬が秋に戻ったなどということは、聞いたこともありません。同じように、いまだかつて法華経を信ずる人

が凡夫になってしまったなどということも聞いたことがありません。これをもって案ずるに、聖霊はこの功徳あり。大月輪の中か、大日輪の中か、天鏡をもって妻子の身を浮かべて十二時に御らんあるらん。たとい、妻子は凡夫なれば、これをみずきかず。譬えば、耳しいたる者の雷の声をきかず、目つぶれたる者の日輪を見ざるがごとし。御疑いあるべからず。定めて御まぼりとならせ給うらん。その上、さこそ御わたりあるらめ。

（244 妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）

遺族の方への激励（1696ページ－7行）

さどの国と申し、これと申し、下人一人つけられて候は、いつの世にかわすれ候べき。この恩は、かえりつかえたてまつり候べし。

（244妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）1696ページ－14行）

夫れ、信心と申すは別にはこれなく候。妻のおとこをおしむがごとく、おとこの妻に命をすつるがごとく、親の子をすてざるがごとく、子の母にはなれざるがごとくに、法華経、釈迦・多宝、十方の諸の仏菩薩、諸天善神等に信を入れ奉って、南無妙法蓮華経と唱えたてまつるを、信心とは申し候なり。

（245妙一尼御前御返事
信・不信
1697ページ－6行）

およそ信心（しんじん）というのは、特別（とくべつ）にこれといったものではありません。妻（つま）が夫（おっと）をいとおしく思（おも）うように、夫（おっと）が妻（つま）のためには命（いのち）を捨（す）てるように、親（おや）が子（こ）を捨（す）てないように、子供（こども）が母親（ははおや）から離（はな）れないように、法華経（ほけきょう）・釈迦（しゃか）・多宝（たほう）・十方（じっぽう）の諸仏（しょぶつ）・菩薩（ぼさつ）・諸天善神（しょてんぜんじん）を信（しん）じて、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）えていくことを信心（しんじん）というのです。

一日片時（いちにちかたとき）もたゆむことなく弛（よ）ばわりし呼（ゆえ）に、かかる大難（だいなん）に遭（あ）えり。

（246弥源太殿御返事（やげんたどのごへんじ））

持続（じぞく）1698ページー9行）

法華経（ほけきょう）は三世（さんぜ）の諸仏（しょぶつ）発心（ほっしん）のつえ　杖にて候（そうろう）ぞかし。ただし、日蓮（にちれん）をつえはしらともたのみ給うべし。杖　柱　恃　倒　険　悪けわしき山（やま）、あし道（みち）、つえをつきぬればたおれず。殊（こと）に手をひかれぬれば転（まろ）ぶことなし。南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）は死出（しで）の山（やま）にてはつえ　杖はしら柱となり給（たま）え。

（246　弥源太殿御返事（やげんたどのごへんじ）
御本仏（ごほんぶつ）の大慈悲（だいじひ）
1699ページー４行）

南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえはしらとなり給え。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給うべし。日蓮さきに立ち候わば、御迎えにまいり候ことともやあらんずらん。またさきに行かせ給わば、日蓮必ず閻魔法王にも委しく申すべく候。このこと少しもそら事あるべからず。日蓮、法華経の文のごとくならば、通塞の案内者なり。ただ一心に信心おわして霊山を期し給え。

（246）弥源太殿御返事

臨終（りんじゅう）1699ページー5行）

ただし、法華経（ほけきょう）と申す経（もうすきょう）は、転子病（てんしびょう）と申す病（もうすやまい）のように候（そうろう）。転子（てんし）と申す（もうす）は、親（おや）のようなる子（こ）は少なく（すく）候え（そうら）ども、この病（やまい）は必ず（かなら）伝わり（つたわり）候（そうろう）なり。

（247弥源太入道殿御返事（やげんたにゅうどうどのごへんじ）

親子（おやこ）・孝養（こうよう）1700ページー14行）

根露(ねあらわ)れぬれば枝(えだ)枯かれ、源(みなもとかわ)渇けば流(なが)れ尽くると申(もう)すことあり。

（248弥源太入道殿御消息（やげんたにゅうどうどのごしょうそく）未来への展望（みらいてんぼう）1703ページ－12行）

女人は水のごとし、うつわ物にしたがう。女人は矢のごとし、弓につがわさる。女人はふねのごとし、かじのまかするによるべし。しかるに、女人は、おとこぬす人なれば女人ぬす人となる。おとこ王なれば女人きさきとなる。おとこ善人なれば女人仏になる。今生のみならず、後生もおとこによるなり。

（249 桟敷女房御返事（無量無辺の功徳の事）

婦人と信仰 1704ページ－6行）

女性は水にたとえることができます。水は器の形に素直に従っていきます。また、女性は矢のようなものです。矢は弓につがえられて飛ぶのです。また、女性は船のようなものです。船は楫の取り具合によって、どちらの方向にも進むのです。そのため、女性はその夫が盗人であれば、妻も盗人となり、夫が王であれば妻は王妃となるのです。夫が正法をたもつ善人であれば、妻も仏になることができます。今世だけでなく後生も夫によるのです。

はるの野の千里ばかりにくさのみちて候わんに、すこし
きの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、一時に
無量無辺の火となる。

（249 桟敷女房御返事（無量無辺の功徳の事））

広宣流布 1704ページー16行）

人に食を施すに、三つの功徳あり。一には命をつぎ、二には色をまし、三には力を授く。命をつぐは、人中・天上に生まれては長命の果報を得、仏に成っては法身如来と顕れ、その身虚空と等し。力を授くる故に、人中・天上に生まれては威徳の人と成って眷属多し。仏に成っては報身如来と顕れて蓮華の台に居し、八月十五夜の月の晴天に出でたるがごとし。色をます故に、人中・天上に生まれては三十二相を具足して端正

なること華のごとく、仏に成っては応身如来と顕れて釈迦仏のごとくなるべし。

（251 妙密上人御消息 福運1706 ページー11行）

人に食物を施すことには三つの功徳があります。一には生命をたもつことができます。二には色艶を増します。三には力を与えるのです。命をたもつことによって、人間界、天上界に生まれると、長寿の果報を得、仏となっては法身如来とあらわれて、その身は虚空と等しい境涯となるのです。力を授けることでは、

人間界、天上界に生まれると、威徳をそなえた人となって多くの人びとがその周りに集まってくるのです。仏となっては報身如来と顕れて蓮華の台に座り、ちょうど八月十五夜の満月が晴れた天に出たような姿となるのです。色を増すことによって、人間界、天上界に生まれると三十二相をそなえてその相の端正なことは華のように美しく、仏となっては応身如来と顕れて釈迦仏のようになるのです。

賢人（けんじん）と申（もう）すは、善（よ）き師（し）より伝（つた）えたる人（ひと）、聖人（しょうにん）と申（もう）すは、師（し）無（な）くして我（われ）と覚（さと）れる人（ひと）なり。

（251 妙密上人御消息（みょうみつしょうにんごしょうそく））

指導者（しどうしゃ） 1710 ページー８行）

日本国の中にただ一人、南無妙法蓮華経と唱えたり。これは須弥山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人・三人・十人・百人、一国・二国、六十六箇国、すでに島二つにも及びぬらん。今は謗ぜし人々も唱え給うらん。また上一人より下万民に至るまで、法華経の神力品のごとく、一同に南無妙法蓮華経と唱え給うこともやあらんずらん。

妙密上人御消息

広宣流布（1711ページ－12行）

（日蓮は）日本国でただ一人、南無妙法蓮華経と題目を唱えたのです。このことは須弥山という大きな山をつくっている最初の一塵であり、大きな海の最初の一滴の水と同じです。二人、三人、十人、百人、一国、二国、六十六か国（日本中）まで弘まり、壱岐、対馬にまでおよんでいるでありましょう。今では日蓮を謗じていた人たちも題目を唱えているでしょう。また日本の国の上は最高権力者から下は庶民にいたるあらゆる人びとが、法華経神力品で説かれているように、かならず一同に声を合わせて

なんみょうほうれんげきょう　となえ
南無妙法蓮華経と唱えるときがくるでありましょう。
こくちゅう　しょにん　いちにんにんにん　ないしせんまんおく　ひと　だいもく　となえ
国中の諸人、一人二人、乃至千万億の人、題目を唱うる
ぞんがい　くどくみ　しゅ　たも　くどく
ならば、存外に功徳身にあつまらせ給うべし。その功徳
たいかい　つゆ　しゅ　しゅみせん　みじん　つ
は、大海の露をあつめ、須弥山の微塵をつむがごとし。
みょうみつしょうにんごしょうそく
（251　妙密上人御消息
くどく
功徳　1712
1712ページー11行）

金はやけばいよいよ色まさり、剣はとげばいよいよ利くなる。法華経の功徳は、ほむればいよいよ功徳まさる。

（251 妙密上人御消息）

功徳 1713ページ－1行

金は焼いて鍛えれば、いよいよ色がよくなり、剣はとげばいよいよよく切れるようになります。同じように法華経の功徳は讃嘆すればするほどますます勝れていくのです。

祈禱(きとう)においては顕祈顕応(けんきけんおう)・顕祈冥応(けんきみょうおう)・冥祈冥応(みょうきみょうおう)・冥祈(みょうき)顕応(けんおう)の祈禱(きとうあ)有りといえども、ただ肝要(かんよう)は、この経(きょう)の信心(しんじん)を致(いた)し給(たま)い候(そうら)わば、現当(げんとう)の所願(しょがん)、満足(まんぞく)あるべく候(そうろう)。

（252 道妙禅門御書(どうみょうぜんもんごしょ)）

祈(いの)り 1713ページ－11行）

祈禱(きとう)には顕祈顕応(けんきけんおう)・顕祈冥応(けんきみょうおう)・冥祈冥応(みょうきみょうおう)・冥祈顕応(みょうきけんおう)という四種類(よんしゅるい)の祈禱(きとう)がありますが、そこでもっとも大切(たいせつ)なことは、この経(きょう)（御本尊(ごほんぞん)）に対(たい)する信心(しんじん)を通(とお)すならば、現在(げんざい)と未来(みらい)に願(ねが)いをか

なえることができるということです。

法華経の一字は大地のごとし、万物を出生す。一字は大海のごとし、衆流を納む。一字は日月のごとし、四天下をてらす。照

この一字変じて月となる。月変じて仏となる。稲は変じて苗となる。苗は変じて草となる。草変じて米となる。米変じて人となる。人変じて仏となる。女人変じて妙の一字となる。妙の一字変じて台上の釈迦仏となるべし。

（254 王日殿御返事）

妙法の偉大さ1716ページ－11行）
御みやづかいを法華経とおぼしめせ。「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せず」とは、これなり。
（256檀越某御返事
仏法と社会1719ページ－1行）
勤め（仕事）が法華経とお考えなさい。天台大師が摩訶止観のなかで「すべての世間の世を治め生活をするすべなどは、みな実相（仏法）と違背しない」といっているのはこのことです。

師曠（しこう）が耳（みみ）・離婁（りろう）が眼（まなこ）のように聞（き）き見（み）させ給（たま）え。

（258　椎地四郎殿御書（しいじのしろうどのごしょ））

言動（げんどう）・振（ふ）る舞（ま）い1720ページー7行）

末法には法華経の行者必ず出来すべし。ただし、大難来りなば、強盛の信心いよいよ悦びをなすべし。火に薪をくわえんに、さかんなることなかるべしや。大海へ衆流入る。されども、大海は河の水を返すことありや。法華大海の行者に諸河の水は大難のごとく入れども、かえすこと、とがむることなし。諸河の水入ることなくば、大海あるべからず。大難なくば、法華経の行者にはあらじ。

（258 椎地四郎殿御書（しいじのしろうどのごしょ）
難（なん）を乗（の）り越（こ）える 1720ページ－9行）

末法（まっぽう）には法華経（ほけきょう）の行者（ぎょうじゃ）がかならず出現（しゅつげん）します。ただし大難（だいなん）がきたならば強盛（ごうじょう）に信心（しんじん）を起（お）こして、ますます喜（よろこ）んで励（はげ）んでいきなさい。たとえば、火（ひ）に薪（たきぎ）を加（くわ）えるのに、火（ひ）が盛（さか）んにならないということがあるでしょうか。また、大海（たいかい）には多（おお）くの河川（かせん）が流（なが）れ込（こ）んでいますが、大海（たいかい）が川（かわ）の水（みず）を押（お）し返（かえ）すようなことがあるでしょうか。それと同（おな）じように、大海（たいかい）のような法華経（ほけきょう）の行者（ぎょうじゃ）に大難（だいなん）は諸河（しょが）の水（みず）のように入（はい）ってくるけれども、法華経（ほけきょう）の行者（ぎょうじゃ）はそれを押（お）し返（かえ）すこと

も、とがめることもないのです。諸河の水が流れこむことがなければ大海が存在しないように、大難がなければ法華経の行者ではないのです。

しょが　みず　なが
だいなん
ほけきょう　ぎょうじゃ
たいかい　そんざい

法華経の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去の
宿縁ふかしとおぼしめすべし。

（258 椎地四郎殿御書
使命 1720 ページー14 行）

法華経の法門を、一文一句であっても、人に説くことは、過去の
宿縁が深いのだとこころえていくべきです。

この経を一文一句なりとも聴聞して神にそめん人は、生死の大海を渡るべき船なるべし。妙楽大師云わく「一句も神に染めぬれば、ことごとく彼岸を資く。思惟・修習すれば、永く舟航に用たり」云々。生死の大海を渡らんことは、妙法蓮華経の船にあらずんば、かなうべからず。

（258 椎地四郎殿御書 妙法の偉大さ 1721ページ－1行）

法華経を行ぜん者をば、諸天善神等、あるいは男となり、あるいは女となり、形をかえ、さまざまに供養してたすくべしという経文なり。弥三郎殿夫婦の「士女」と生まれて、日蓮法師を供養すること疑いなし。

（259 船守弥三郎許御書 諸天の加護 1722ページ－17行）

「顚倒(てんどう)の衆生(しゅじょう)をして、近(ちか)しといえども見(み)ざらしむ」

（259　船守弥三郎許御書(ふなもりやさぶろうもとごしょ)

人間弱点(にんげんじゃくてん)へのいましめ　1723ページー15行）

この曼陀羅は、文字は五字七字にて候えども、三世の諸仏の御師、一切の女人の成仏の印文なり。冥途にはともしびとなり、死出の山にては良馬となり、天には日月のごとし、地には須弥山のごとし。生死海の船なり、成仏得道の導師なり。

（261 妙法曼陀羅供養事

妙法の偉大さ 1726ページー7行）

この曼荼羅（日蓮大聖人が顕されたご本尊のこと）は、文字

ごじしちじ
は五字七字ですけれども、三世の諸仏（過去・現在・未来に出現
さんぜ　しょぶつ　かこ　げんざい　みらい　しゅつげん
するあらゆる仏の総称のこと）が仏となった師であり、いっさい
ほとけ　そうしょう　ほとけ　し
の女性の成仏を約束する印文（責任を負うしるしとして推す、
じょせい　じょうぶつ　やくそく　いんもん　せきにん　お　お
版に刻まれた文字のこと）なのです。冥途（亡くなった者がいく
はん　きざ　もじ　めいど　な　もの
道、死後の世界）では闇を照らすともしびとなり、死出の山（冥途に
みち　しご　せかい　やみ　て　しで　やま　めいど
ある山）では良馬となります。天にあっては、太陽や月のような
やま　りょうば　てん　たいよう　つき
のであり、地にあっては須弥山（古代インドの世界観で世界の中心
ち　しゅみせん　こだい　せかいかん　せかい　ちゅうしん
にあるとされる高山）のようなものです。生死の苦海を渡る船であ
こうざん　せいし　くかい　わた　ふね
り、成仏得道（成仏のこと）に導く師なのです。
じょうぶつとくどう　じょうぶつ　みちび　し

されば、この良薬を持たん女人等をば、この四人の大菩薩、前後左右に立ちそいて、この女人たたせ給えば、この大菩薩も立たせ給う。乃至、この女人道を行く時は、この菩薩も道を行き給う。譬えば、かげと身と、水と魚と、声とひびきと、月と光とのごとし。

（功徳1728ページー3行）

法華経を持ち信ずれども、誠に色心相応の信者、
能持此経の行者はまれなり。

（262 阿仏房尼御前御返事
信仰者の姿勢 1729ページ－10行）

ただし、謗法に至って浅深あるべし。偽り愚かにして、せめざる時もあるべし。真言・天台宗等は法華誹謗の者、いとう呵責すべし。

しかれども、大智慧の者ならでは日蓮が弘通の法門分別しがたし。しかるあいだ、まずまずさしおくことあるなり。立正安国論のごとし。

いうといわざるとの重罪免れ難し。云って罪のまぬかるべきを、見ながら、聞きながら、置いていましめざるこ

と、眼・耳の二徳たちまちに破れて大無慈悲なり。章安云わく「慈無くして詐り親しむは、即ちこれ彼が怨なり」等云々。

重罪消滅しがたし、いよいよ利益の心もっともしかるべきなり。軽罪の者をばせむる時もあるべし、またせめずしておくも候べし。自然になおる辺あるべし。せめて自他の罪を脱れて、さてゆるすべし。その故は、一向謗法になれば、まされる大重罪を受くるなり。「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」とは、これなり。

（262 阿仏房尼御前御返事（あぶつぼうのあまごぜんごへんじ）
謗法（ほうぼう）のいましめ 1729ページー17行）

いよいよ信心をはげみ給うべし。仏法の道理を人に語らん者をば、男女僧尼必ずにくむべし。よしにくまばにくめ、法華経・釈迦仏・天台・妙楽・伝教・章安等の金言に身をまかすべし。「如説修行」の人とは、これなり。

（262 阿仏房尼御前御返事 如説修行 1730ページー14行）

ますます信心を励んでいきなさい。仏法の道理を人に語ろうとす

る者を、謗法の男女や僧尼がかならず憎むことでしょう。憎むならば憎むがよい、法華経・釈迦仏・天台大師・妙楽大師・章安大師の金言に身を任すべきです。如説修行の人とはこういう人をいうのです。

この度、大願を立てて、後生を願わせ給え。少しも謗法不信のとが候わば、無間大城疑いなかるべし。譬えば、海上を船にのるに、船おろそかにあらざれども、あか入りぬれば、必ず船中の人々一時に死するなり。なわて堅固なれども、蟻の穴あれば、必ず終に湛えたる水のたまらざるがごとし。謗法不信のあかをとり、信心のなわてをかたむべきなり。

（262）阿仏房尼御前御返事

信・不信（1731ページ－2行）

このたび、大願を立てて後生を願っていきなさい。少しでも謗法や不信の失があるならば、無間大城（無間地獄と同じ）に堕ちるとは疑いないでしょう。たとえば海の上を船に乗っていくのに、船は粗末でなくても、水が入ったならばかならず船は沈み、船中の人びとはみんないっしょに死んでしまいます。また、畷（田のあぜ）は堅固であっても蟻の穴があればかならず最後にはたたえた水がもれてたまらないようなものです。したがって、船に入る謗法不信の水を取り除き、信心の畷を固めるべきです。

浅き罪ならば、我よりゆるして功徳を得さすべし。重き
あやまちならば、信心をはげまして消滅さすべし。

（262 阿仏房尼御前御返事
罪障消滅 1731ページー6行）

相構えて相構えて、力あらんほどは謗法をばせめさせ給うべし。

（262阿仏房尼御前御返事
謗法のいましめ1731ページ-12行）

末法に入って法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華経と唱うるものは、我が身宝塔にして我が身また多宝如来なり。

（263 阿仏房御書（宝塔御書）

生命とその尊厳 1732ページ－15行）

末法に入って法華経を信ずる男女の姿のほかには宝塔はないのです。もしそうであるならば、身分が貴いとか賤しいとか、上下に

は関係なく、南無妙法蓮華経と唱える者は、そのままわが身が
宝塔であり、わが身がまた多宝如来なのです。

今、阿仏上人の一身は地・水・火・風・空の五大なり。
この五大は題目の五字なり。
しかれば、阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、
これより外の才覚無益なり。

（263 阿仏房御書（宝塔御書）
生命とその尊厳 1733ページ－1行）

いま阿仏上人の体は、地・水・火・風・空の五大でできています。この五大は題目の五字です。ですから阿仏房はそのまま宝塔で

あり、宝塔はそのまま阿仏房なのです。これを覚るよりほかの才覚
（考え、才知）はむだなことです。

多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもえば、さにては候わず、我が身を供養し給う。我が身また三身即一の本覚の如来なり。

かく信じ給いて南無妙法蓮華経と唱え給え。

（263 阿仏房御書（宝塔御書）

一生成仏・仏界湧現 1733ページー3行）

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし。

（263 阿仏房御書（宝塔御書）
地域広布 1733 ページー９行）

阿仏房、あなたはまさしく北国の導師ともいうべき人であります。

この経文は一切経に勝れたり。地走る者の王たり、師子王のごとし。空飛ぶ者の王たり、鷲のごとし。

（265千日尼御前御返事（真実報恩経の事））

使命1737ページー11行）

この経文は一切経に勝れています。地を走る者の王・師子王のようなものです。空飛ぶ者の王・鷲のようなものです。

ここに日蓮（にちれん）、願（がん）じて云（い）わく「日蓮（にちれん）は全（まった）く誤（あやま）りなし。たとい僻事（ひがごと）なりとも、日本国（にほんこく）の一切（いっさい）の女人（にょにん）を扶（たす）けんと願（がん）ぜる志（こころざし）捨（すて）がたかるべし。

（265千日尼御前御返事（せんにちあまごぜんごへんじ）（真実報恩経（しんじつほうおんぎょう）の事（こと））

御本仏（ごほんぶつ）の大慈悲（だいじひ）

1740ページー13行）

地頭・地頭等、念仏者・念仏者等、日蓮が菴室に昼夜に立ちそいて、かよう人もあるをまどわさんとせめしに、阿仏房にひつをしおわせ、夜中に度々御わたりありしこと、いつの世にかわすらん。ただ悲母の佐渡国に生まれかわりてあるか。

265 千日尼御前御返事（真実報恩経の事）

求道（行学の二道）1741ページ-10行

人は見る眼前には心ざし有りとも、さしはなれぬれば心
はわすれずともさてこそ候

（265千日尼御前御返事（真実報恩経の事）
持続1742ページー3行）

去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間この山中に候に、佐渡国より三度まで夫をつかわす。いくらほどの御心ざしぞ。大地よりもあつく、大海よりもふかき御心ざしぞかし。

265 千日尼御前御返事（真実報恩経の事）

婦人と信仰 1742ページー4行）

法華経を供養する人は、十方の仏菩薩を供養する功徳と同じきなり。十方の諸仏は妙の一字より生じ給える故なり。

（266千日尼御前御返事（雷門鼓御書））

功徳1745ページー5行

法華経の師子王を持つ女人は、一切の地獄・餓鬼・畜生等の百獣に恐るることなし。

（266千日尼御前御返事（雷門鼓御書）

婦人と信仰1745ページー9行）

黒漆に白物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆のごとし、南無妙法蓮華経の文字は白物のごとし。人は臨終の時、地獄に堕つる者は黒色となる上、その身重きこと千引きの石のごとし。善人は、たとい七尺八尺の女人なれども、色黒き者なれども、臨終に色変じて白色となる。また軽きこと鵝毛のごとし、軟らかなること兜羅綿のごとし。

（266 千日尼御前御返事（雷門鼓御書）

臨終（1745ページ-14行）

漆におしろいを入れると。白色になります。女性の罪障は漆のようなもので、南無妙法蓮華経の文字はおしろいのようなものです。人は臨終を迎えたとき地獄に堕ちる者は黒色になります。そのうえ、身体が重いことは、綱をかけて千人がかりで引くほどの大きい石のようです。善人はたとえ七尺八尺というからだの大きい女性であっても、色の黒い者であっても、臨終に色が白色に変わります。また身体が軽いことは鵞鳥の毛のようであり、やわらかなことは綿の花のようなものです。

佐渡国よりこの国までは山海を隔てて千里に及び候に、女人の御身として法華経を志しますによりて、年々に夫を御使いとして御訪いあり。定めて法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏、その御心をしろしめすらん。

譬えば、天月は四万由旬なれども、大地の池には須臾に影浮かび、雷門の鼓は千万里遠けれども、打てば須臾に聞こゆ。御身は佐渡国におわせども、心はこの国に来れり。仏に成る道もかくのごとし。我らは穢土に候えど

も、心は霊山に住むべし。御面を見てはなにかせん、
心こそ大切に候え。
いつかいつか、釈迦仏のおわします霊山会上にまいり
あい候わん。

（266 千日尼御前御返事（雷門鼓御書）
婦人と信仰 1746ページ－1行）

されば、故阿仏房の聖霊は今いずくんにかおわすらんと御座
人は疑うとも、法華経の明鏡をもってその影をうかべ浮
て候えば、霊鷲山の山の中に、多宝仏の宝塔の内に、
東むきにおわすと日蓮は見まいらせて候。

（268千日尼御返事

遺族の方への激励1750ページ－2行）

おとこ夫ははしら柱のごとし、女はなかわ桁のごとし。おとこは足（あし）のごとし、女人（にょにん）は身（み）のごとし。おとこは羽（はね）のごとし、女（おんな）身（み）はみのごとし。羽（はね）とみとべちべち別々（べちべち）になりなば、なにを何もってかとぶべき。はしらたおれなば、なかわ桁地（ち）に堕（お）ちなん。いえ家におとこ夫なければ、人（ひと）のたましい魂なきがごとし。

268 千日尼御返事（せんにちあまごへんじ）

婦人（ふじん）と信仰（しんこう）

1750ページー14行）

おとこ男（おとこ）は柱（はしら）のようなものであり、女（おんな）は桁（なかわ）（家（いえ）や橋（はし）などの柱（はしら）の上（うえ）

に渡して、たるきを受ける材木のこと）のようなものです。男は足のようなものであり、女は身のようなものです。男は羽のようなものであり、女は身のようなものです。羽と身とが別々になったらどうして飛ぶことができるでしょうか。柱が倒れたならば、桁は地に落ちてしまいます。家に男がいなければ、人に魂がないようなものです。

子は財と申す経文もはんべり。所以は経文に云わく「その男、福を追修するをもって、大光明有って地獄を照らし、その父母をして信心を発さしむ」等云々。

（268千日尼御返事）

親子・孝養

（1751ページー13行）

子はたからであるという経文もあります。心地観経には「その男女が追って福を修すれば、大光明があて地獄を照らし、その父母に信心をおこさせる」と述べています。

日蓮こいしくおわせば、常に出ずる日、ゆうべにいずる月をおがませ給え。いつとなく日月にかげをうかぶる身なり。

（269 国府尼御前御書 求道（行学の二道）1756ページー2行）

人の御心は定めなきものなれば、うつる心さだめなし。

（270 国府入道殿御返事

人間弱点へのいましめ 1756ページー14行）

佐渡くにそうら
さどの国に候いし時御信用ありしだにもふしぎにおぼえ
ときごしんよう　不思議覚
候いしに、これまで入道殿をつかわされし御心ざし、
そうら　にゅうどうどの遣　おんこころ
また国もへだたり、年月もかさなり候えば、たゆむ御心
くに隔　ねんげつ重　そうら弛　みこころ
もやとうたがい候に、いよいよいろをあらわし、こうを
疑　そうろう　色顕　功
つませ給うこと、ただ一生二生のことにはあらざるか。
積　たも　いっしょうにしょう
（270国府入道殿御返事
こうのにゅうどうどのごへんじ
婦人と信仰
ふじん　しんこう
1756ページー14行）

彼の島に行き付いてありしが、彼の島の者ども、因果の理をも弁えぬあらえびすなれば、あらくあたりしことは申すばかりなし。しかれども、一分も恨むる心なし。

（271一谷入道御書）

御本仏の大慈悲1758ページー10行）

この法門を申し始めしより、命をば法華経に奉り、名をば十方世界の諸仏の浄土にながすべしと思い儲けしなり。

（271一谷入道御書 信仰者の姿勢 1758ページー15行）

源（みなもと）にごりぬれば、流（ながれ）清（きよ）からず。身曲（みまが）れば、影（かげ）直（なお）からず。

（271 一谷入道御書（いちのさわのにゅうどうごしょ）

仏法（ぶっぽう）と社会（しゃかい）1759ページー17行）

日蓮は日本国の人々の父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし。これを背かんことよ。

（271一谷入道御書

御本仏の境涯・確信1764ページ－6行）

しかるに、日蓮は中国・都の者にもあらず、辺国の将軍等の子息にもあらず、遠国の者、民が子にて候いしかば、日本国七百余年に一人もいまだ唱えまいらせ候わぬ南無妙法蓮華経と唱え候

（273 中興入道消息

御本仏の大慈悲 1768ページ－1行）

日蓮は日本国には第一の忠の者なり。肩をならぶる人は先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覚えず。

（273 中興入道消息

御本仏の境涯・確信1769ページ－16行）

しかるに、貴辺は故次郎入道殿の御子にておわするなり。御前はまたよめなり。いみじく心かしこかりし人の子とよめとにおわすればや、故入道殿のあとをつぎ、国主も御用いなき法華経を御用いあるのみならず、法華経の行者をやしなわせ給いて、としどしに千里の道をおくりむかえ、去ぬる幼子のむすめ御前の十三年に丈六のそとばをたてて、その面に南無妙法蓮華経の七字を顕しておわしませば、北風吹けば南海のいろくずその風にあた

きへん　こじろうにゅうどうどの　みこ　ごぜん　よめ　こよめ　こころ　かしこ　ひと　こくしゅ　おんもち　こにゅうどうどの　あと　つ　ほけきょう　おんもち　ぎょうじゃ　やしな　たま　としどし　せんり　みち　おく　むか　おさなご　むすめ　ごぜん　じゅうさんねん　じょうろく　そとば　たて　おもて　なんみょうほうれんげきょう　しちじ　あらわ　ほくふうふ　なんかい　しろくず　かぜ　あ

りて大海の苦をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿その風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生まれん。いわんや、かのそとばに随喜をなし、手をふれ眼に見まいらせ候人類をや。過去の父母も彼のそとばの功徳によりて天の日月のごとく浄土をてらし、孝養の人ならびに妻子は、現世には寿を百二十年持って、後生には父母とともに霊山浄土にまいり給わんこと、水すめば月うつり、つづみをうてばひびきのあるがごとしとおぼしめし候え等云々。これより後々の御そとばにも、法華経の

（たいかい　く　離　とうふう　せいざん　ちょうろく　かぜ　み　触　ちくしょうどう　免　とそつ　ないいん　う　卒　塔　婆　ずいき　て　まなこ　そうろうにんるい　かこ　ふぼ　か　くどく　てん　にちがつ　じょうど　照　こうよう　ひと　さいし　げんぜ　いのち　ひゃくにじゅうねんたも　ごしょう　ふぼ　りょうぜんじょうど　詣　たま　みず　澄　つき　映　鼓　打　響　思　そうら　とううんぬん　のちのち　ほけきょう）

題目(だいもく)を顕(あらわ)し給(たま)え。

（273 中興入道消息(なかおきのにゅうどうしょうそく)

遺族(いぞく)の方(かた)への激励(げきれい) 1771ページー3行）

しかれば、久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら衆生との三つ全く差別無しと解って妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とはいうなり。

（276生死一大事血脈抄一生成仏・仏界湧現1774ページー17行）

さて、久遠実成の釈尊（日蓮大聖人）と、あらゆる衆生を成仏せしめる法華経（文底独一本門の大御本尊）と、私たち衆生との三つは、まったく差別がないと信じ理解して、

なんみょうほうれんげきょう　だいもく　とな

南無妙法蓮華経の題目を唱えていくことを、

しょうじいちだいじ　けつみゃく

生死一大事の血脈

というのです。

詮ずるところ、臨終只今にありと解って信心を致して南無妙法蓮華経と唱うる人を、「この人は命終して、千仏の手を授け、恐怖せず、悪趣に堕ちざらしめたもうこと を為」と説かれて候。悦ばしいかな、一仏二仏にあらず、百仏二百仏にあらず、千仏まで来迎し、手を取り給わんこと、歓喜の感涙押さえ難し。

（276 生死一大事血脈抄

臨終 1775ページ－3行）

ともあれ、臨終のときは只今であると自覚して信心に励み、南無妙法蓮華経と唱えている人は、法華経普賢菩薩勧発品第二十八に「寿命が終わってのち、千仏が手を授けて、恐れもなく、苦しみの境界に堕ちることもないようにしてくださるであろう」と説かれているとおりになるのです。喜ばしいことです。一仏や二仏ではなく、百仏や二百仏でもなく、千仏までもが迎えに来てくれて、成仏の境界へと、手をとって導いてくださることを思えば、喜びの涙がとめどなく流れます。

過去に法華経の結縁強盛なる故に、現在にこの経を受持す。

（276生死一大事血脈抄

使命1775ページー10行）

総じて、日蓮が弟子檀那等、自他・彼此の心なく、水魚の思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、今、日蓮が弘通するところの所詮これなり。もししからば、広宣流布の大願も叶うべきものか。あまつさえ、日蓮が弟子の中に異体異心の者これ有らば、例せば、城者として城を破るがごとし。

生死一大事血脈抄

総じて日蓮の弟子や信者たちが、自分とか他人、あれとかこれとといったわけへだてする心なく、水と魚のような関係にある思いで、異体同心に、南無妙法蓮華経と唱えていくことを、生死一大事の血脈というのです。しかも今末法において、日蓮が弘めようとしているところの究極はこのことなのです。もしこのとおり実践するならば、広宣流布の大願も成就するでありましょう。もし日蓮の弟子のなかに異体異心の者があれば、それはたとえば城のなかにいる者が城を破るのと同じようなものです。

過去の宿縁追い来って、今度日蓮が弟子と成り給うか。
釈迦・多宝こそ御存知候らめ。
（276 生死一大事血脈抄）

使命1776ページ－8行）

（あなたは）過去の宿縁によって、このたび日蓮（大聖人）の弟子となられたのでしょうか。そのことは釈迦・多宝の二仏こそがご存じでありましょう。

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、
南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給え。

（276生死一大事血脈抄
臨終1777ページー1行）

心して強盛な信心を貫いて、たえず南無妙法蓮華経・
臨終正念と祈っていきなさい。

信心の血脈なくんば、法華経を持つとも無益なり。

（276 生死一大事血脈抄）

信・不信 1777ページー2行

総じての信心の血脈が通っていなければ法華経（御本尊）を持っていたとしても、少しも功徳はありません。

我ら衆生死する時、塔婆を立てて開眼供養するは、死の成仏にして草木成仏なり。

（277草木成仏口決）

遺族の方への激励1778ページ-1行）

一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり。
当世の習いそこないの学者、ゆめにもしらざる法門なり。

（277 草木成仏口決）

御本尊は仏の生命1779ページー1行）

一念三千の法門の肝心要をとって建立したのが
南無妙法蓮華経の大曼荼羅なのです。これは当世の仏法に未熟な
学僧たちのけっして知ることのない法門です。

まこと　むしこうごう　けいやく　じょうよしぐしょう　ことわり　にちれん
実に無始曠劫の契約、「常与師倶生」の理ならば、日蓮
こんどじょうぶつ　き へん　あいはな　あくしゅ　だざい
今度成仏せんに、貴辺あに相離れて悪趣に堕在したもう
べきや。

（278
さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事
ごほんぶつ　だいじひ
御本仏の大慈悲
1783ページー5行）

劫初より以来、父母・主君等の御勘気を蒙り、遠国の島に流罪せらるるの人、我らがごとく悦び身に余りたる者よもあらじ。

（278 最蓮房御返事

御本仏の境涯・確信 1784ページ－1行）

されば、我らが居住して一乗を修行せんの処は、いずれの処にても候え、常寂光の都なるべし。

（278 最蓮房御返事

寂光土1784ページー3行）

日蓮が三世の大難をもって、法華経の三世の御利益を覚しめされ候え。過去久遠劫より已来未来永劫まで、妙法蓮華経の三世の御利益尽くすべからず候なり。

（279 祈禱経送状）

御本仏の大慈悲1786ページー2行）

日蓮も信じ始め候いし日より、毎日これらの勘文を誦し候いて、仏天に祈誓し候によりて、種々の大難に遇うといえども、法華経の功力、釈尊の金言、深重なる故に、今まで相違無く候なり。

それにつけても、法華経の行者は、信心に退転無く、身に詐親無く、一切法華経にその身を任せて金言のごとく修行せば、たしかに後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布の大願をも

成就すべきなり。

（279 祈禱経送状）

信仰者の姿勢 1786ページ－12行

日蓮も法華経の信心を始めた日から、毎日これらの法華経の勘文（日蓮大聖人がぬき出された要文）を読誦し、仏や諸天に祈ってきたので、種々の大難にあったけれども、法華経の功徳が偉大であり、釈尊の言葉が正しいがゆえに、今まで無事に過ごすことができたのです。それにつけても、法華経の行者は信心に退転なく、身に偽りなく、すべて御本尊にその身を任せて、仏の言葉

どおりに修行するならば、かならずや後生はもちろんのこと、今生においても災いをやめ、寿命を延ばして、すばらしい功徳を得ることができ、広宣流布という大きな願いをも成就することができるのです。

「阿鼻(あび)の依正(えしょう)は全(まった)く極聖(ごくしょう)の自心(じしん)に処(しょ)し、毘盧(びる)の身土(しんど)は凡下(ぼんげ)の一念(いちねん)を逾(こ)えず」

（280 諸法実相抄(しょほうじっそうしょう)

一生成仏(いっしょうじょうぶつ)・仏界湧現(ぶっかいゆげん)

1788ページ－12行）

末法の始めの五百年に出現して、法体の妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし。これ即ち本門寿量品の事の一念三千の法門なるが故なり。

（280 諸法実相抄

御本尊は仏の生命 1789ページ－3行）

されば、釈迦・多宝の二仏というも用の仏なり。妙法蓮華経こそ本仏にては御座しまし候え。経に云わく「如来の秘密・神通の力」、これなり。「如来の秘密」は体の三身にして本仏なり、「神通の力」は用の三身にして迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。しかれば、釈迦仏は我ら衆生のためには主・師・親の三徳を備え給うと思いしに、さにては候わず、返って仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫な

り。

（280 諸法実相抄（しょほうじっそうしょう） 御本仏の境涯（きょうがい）・確信（かくしん） 1789ページー6行）

地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり。餓鬼と変ぜば、地獄の実のすがたにはあらず。仏は仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華経の当体なりということを、諸法実相とは申すなり。

（280 諸法実相抄）

生命とその尊厳

1789ページ－15行）

地獄は地獄のありのままの姿を見せるのが実相です。もし地獄が餓鬼へと変われば、それは地獄の実相ではありません。すなわち、

仏（ほとけ）は仏（ほとけ）のありのままの姿（すがた）、凡夫（ぼんぷ）は凡夫（ぼんぷ）のありのままの姿（すがた）、この世界（せかい）のすべてのもののありのままの姿（すがた）が妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）そのものであるということを諸法実相（しょほうじっそう）というのです。

日蓮、末法に生まれて、上行菩薩の弘め給うべきところの妙法を先立ってほぼひろめ、つくりあらわし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給う多宝仏、涌出品の時出現し給う地涌の菩薩等をまず作り顕し奉ることと、予が分斉にはいみじきことなり。日蓮をこそにくむとも、内証にはいかが及ばん。

（280 諸法実相抄 御本仏の境涯・確信 1790ページ－3行）

日蓮を供養し、また日蓮が弟子檀那となり給うこと、その功徳をば仏の智慧にてもはかり尽くし給うべからず。

（280 諸法実相抄

功徳 1790 ページー7 行）

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり。地涌の菩薩の数にも
や入りなまし。もし日蓮、地涌の菩薩の数に入らば、あ
に、日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。

（280 諸法実相抄

使命 1790 ページ－10 行）

本化地涌の菩薩の先駆を切ったのは日蓮ただ一人です。あるいは
地涌の菩薩のなかに入っているのでしょうか。もしも日蓮が地涌の
菩薩の一員であるならば、恐らく日蓮の弟子や檀那も地涌の菩薩の

眷属でないはずがありません。

経に云わく「能くひそかに一人のためにも、法華経の乃至一句を説かば、当に知るべし、この人は則ち如来の使いにして、如来に遣わされて、如来の事を行ず」。あに別人のことを説き給うならんや。

されば、余りに人の我をほむる時は、いかようにもなりたき意の出来し候なり。これ、ほむるところの言よりおこり候ぞかし。

（280）諸法実相抄

使命（しめい）1790ページー11行）

ほめられぬれば我が身（わみ）の損（そん）ずるをもかえりみず、そしられ顧（かえり）みず謗（そし）ぬる時（とき）はまた我（わ）が身（み）のやぶるるをもしらずふるまうこと破（やぶ）知（しら）振舞（ふるまい）は、凡夫（ぼんぷ）のことわざなり。事業（ことわざ）

（280諸法実相抄（しょほうじっそうしょう）

人生（じんせい）・生（い）き方（かた）1791ページー3行）

ほめられればたとえ自分（じぶん）の身体（からだ）をいためることをもかえりみず、ま

た非難（ひなん）されれば自分（じぶん）の破滅（はめつ）をも忘（わす）れて行動（こうどう）するのが凡人（ぼんじん）の常（つね）なのです。

いかにも、今度（こんど）、信心（しんじん）をいたして、法華経（ほけきょう）の行者（ぎょうじゃ）にて
とおり、日蓮（にちれん）が一門（いちもん）となりとおし給（たも）うべし。
通
（280 諸法実相抄（しょほうじっそうしょう））

使命（しめい）
1791ページー6行）

どうしても今度（こんど）は信心（しんじん）を奮（ふる）い起（お）こして法華経（ほけきょう）の行者（ぎょうじゃ）として、
日蓮（にちれん）の一門（いちもん）としての生涯（しょうがい）を貫（つらぬ）き通（とお）していきなさい。

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱えしが、二人・三人・百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしかるべし。これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、広宣流布の時は、日本一同に南無妙法蓮華経と唱えんことは、大地を的とするなるべし。

（280 諸法実相抄）

広宣流布 1791ページ－10行）

最初は日蓮（大聖人）ただ一人が、南無妙法蓮華経と唱えて

いたのが、二人、三人、百人と、しだいに唱え伝わってきたのです。未来もまた、そうなることでしょう。これこそ「地涌」ということではないでしょうか。そのうえ、広宣流布の時には、日本国中がそろって南無妙法蓮華経と唱えることは、大地を的にして弓を射ればかならず当たるように絶対に間違いないことなのです。

ともかくも法華経に名をたて身をまかせ給うべし。

（280 諸法実相抄）

使命 1791ページー13行

とにもかくにも、法華経の行者として名を立て、法華経に身を任せていきなさい。

かくのごとく思い続けて候えば、流人なれども喜悦はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。涙は善悪に通ずるものなり。彼の千人の阿羅漢、仏のことを思いいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華経と唱えさせ給えば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は、なきながら「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」と答え給う。余の九百九十九人は、なくなみだを硯の水として、また「如是我聞」の上

に「妙法蓮華経」とかきつけしなり。今、日蓮もかくのごとし。かかる身となるも、妙法蓮華経の五字七字を弘むる故なり。釈迦仏・多宝仏、未来日本国の一切衆生のためにとどめおき給うところの妙法蓮華経なりと、かくのごとく我も聞きし故ぞかし。

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思って喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけどもなみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このなみだ世間のことにはあらず。ただひとえに法華経の故な

り。もししからば甘露のなみだとも云いつべし。

（280 諸法実相抄 御本仏の境涯・確信 1792ページ 4行）

このように思い続けていると、流罪の身とはいえ限りなく喜ばしいことです。人はうれしいことにつけても、悲しいことにつけても涙を流します。涙というものは善悪のどちらにも通ずるもので す。（中 略）いま日蓮も、釈尊がなくなった後に弟子たちが釈尊をしのんで涙を流したのと同じく涙しています。このような流罪の身となったのも法華経の題目を弘めたためです。その妙法

は釈尊、多宝如来が未来に日本の国のあらゆる人びとのために留め残してくださったところの妙法蓮華経であると、私も経文どおりに聞いてきたからです。そして、法華経の教えのとおり修行してきた結果として、現在の大難にあっていることを思っても涙が流れ、未来の成仏を思っても喜びで涙がとめどなくあふれてきます。鳥と虫は鳴きますが、涙は流しません。日蓮は泣きませんが、涙のとどまることはありません。この涙は世間一般のことによるのではなく、ただひとえに法華経の行者として実践するために流す涙です。ですから、それは甘露（最高の味）の涙といえるで

しょう。

涅槃経には、父母・兄弟・妻子・眷属にわかれて流すところの涙は四大海の水よりもおおしといえども、仏法のためには一滴をもこぼさずと見えたり。法華経の行者となることは過去の宿習なり。同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし。仏なりとも権仏となるは、また宿業なるべし。

（280 諸法実相抄 三世の生命 1792ページ-13行）

一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給え。あいかまえて、あいかまえて、信心つよく候いて、三仏の守護をこうむらせ給うべし。

（280 諸法実相抄

信・不信 1793ページー1行）

行学の二道をはげみ候べし。行学たえなば仏法はあるべからず。我もいたし、人をも教化候え。行学は信心よりおこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし。

（280 諸法実相抄）

求道（行学の二道）1793ページー3行）

行・学の二道を励んでいきなさい。信心の実践、教学の研鑽がたえてしまえば、仏法の生命はありえません。自らも実践し、

他の人にもこの仏法を教えていきなさい。行・学は信心からおこってくるのです。もし力があるならば、他人にも仏法の一文一句であっても語っていきなさい。

予が弟子等は、我がごとく正理を修行し給え。智者・学匠の身となりても、地獄に堕ちては何の詮か有るべき。詮ずるところ、時々念々に南無妙法蓮華経と唱うべし。

（281 十八円満抄 求道（行学の二道）1803ページ－1行）

「国に謗法の声有るによって万民数を減じ、家に讒教の勤めあれば七難必ず退散せん」

（283 南部六郎殿御書

勤行・唱題 1807ページー11行）

この法門、当世の人、上下を論ぜず信心を取り難し。その故は、仏法を修行するは「現世安穏にして、後に善処に生ず」等云々。しかるに、日蓮法師、法華経の行者と称すといえども、留難多し。当に知るべし、仏意に叶わざるか等云々。

ただし、この邪難は先案の内なり。御勘気を蒙るの後始めて驚怖すべきにあらず。その故は、法華経の文を見聞するに、末法に入って教えのごとく法華経を修行す

る者は留難多かるべきの由、経文赫々たり。眼有らん者はこれを見るか。

（284 波木井三郎殿御返事
難を乗り越える 1808ページー7行）

既に法華経のために御勘気を蒙れば、幸いの中の幸いなり。瓦礫をもって金銀に易うとは、これなり。

（284 波木井三郎殿御返事

御本仏の境涯・確信 1811ページ－8行）

法華経の心は、当位即妙・不改本位と申して、罪業を捨てずして仏道を成ずるなり。

（284 波木井三郎殿御返事

妙法の偉大さ 1813ページ-17行）

一滴の水を大海になげぬれば、三災にも失せず。一華を五浄によせぬれば、劫火にもしぼまず。一豆を法華経になげぬれば、法界みな蓮なり

（289 大豆御書）

妙法の偉大さ 1819ページー1行）

しかれば、今度(こんど)、法華経(ほけきょう)のために身(み)を捨(す)て命(いのち)をも奪(うば)われ奉(たてまつ)れば、無量無数劫(むりょうむすうこう)の間(あいだ)の思(おも)い出(で)なるべしと思(おも)い切(き)り給(たも)うべし。

（295 大井荘司入道御書(おおいのしょうじにゅうどうごしょ)

使命(しめい)1823ページー2行）

いかなる大善(だいぜん)をつくり、法華経(ほけきょう)を千万部(せんまんぶ)読(よ)み書写(しょしゃ)し、一念(いちねん)三千(さんぜん)の観道(かんどう)を得(え)たる人(ひと)なりとも、法華経(ほけきょう)のかたきをだにも責(せ)めざれば得道(とくどう)有(あ)り難(がた)し。

（296 南条兵衛七郎殿御書(なんじょうひょうえしちろうどのごしょ)
折伏(しゃくぶく) 1826ページー12行）

しかるに、当世(とうせい)は、正像二千年(しょうぞうにせんねん)過(す)ぎて末法(まっぽう)に入(い)って二百余年(にひゃくよねん)、見濁(けんじょく)盛(さかり)にして、悪(あく)よりも善根(ぜんこん)にて多(おお)く悪道(あくどう)に堕(お)つべき時刻(じこく)なり。悪(あく)は、愚癡(ぐち)の人(ひと)も悪(あく)と知(し)れば、従(したが)わぬ辺(へん)もあり。火(ひ)を水(みず)をもってけすがごとし。善(ぜん)は、ただ善(ぜん)と思(おも)うほどに、小善(しょうぜん)に付(つ)いて大悪(だいあく)の起(お)こることをしらず。

（296 南条兵衛七郎殿御書（なんじょうひょうえしちろうどのごしょ）
信仰者(しんこうしゃ)の姿勢(しせい)
1827ページー8行）

善なれども、大善をやぶる小善は、悪道に堕つるなるべし。

（296 南条兵衛七郎殿御書 謗法のいましめ 1827ページー13行）

国をしるべし。国に随って人の心不定なり。たとえば、江南の橘の淮北にうつされてからたちとなる。心なき草木すらところによる。まして心あらんもの、何ぞ所によらざらん。

（296 南条兵衛七郎殿御書 地域広布 1828ページー2行）

されば、法(ほう)は必(かなら)ず国(くに)をかんがみ鑑て弘(ひろ)むべし。彼(か)の国(くに)によかりし法(ほう)なれば必(かなら)ずこの国(くに)にもよかるべしとは思(おも)うべからず

（296 南条兵衛七郎殿御書(なんじょうひょうえしちろうどのごしょ)
折伏(しゃくぶく) 1829ページー3行）

病人（びょうにん）に薬（くすり）をあたうるには、さきに服（ふく）したる薬（くすり）の様（よう）を知（し）るべし。薬（くすり）と薬（くすり）とがゆき合（あ）ってあらそいをなし、人（ひと）を損（そん）ずることあり。

（296 南条兵衛七郎殿御書（なんじょうひょうえしちろうどのごしょ）
病気（びょうき）1829ページー6行）

生々世々の間、ちぎりし夫は大海のいさごのかずより
もおおくこそおわしまし候いけん。今度のちぎりこそ
まことのちぎりのおとこよ。そのゆえは、おとこのすすめ
によりて法華経の行者とならせ給えば、仏とおがませ給
うべし。

（297 上野殿後家尼御返事
婦人と信仰 1832ページ－12行）

生
いきておわしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。

（297 上野殿後家尼御返事
遺族の方への激励 1832ページ－15行）

（上野殿は）生きておられるときはあなたを法華経に導いた「生の仏」で、亡くなった今は「死の仏」であり、生死ともに仏なのです。これが即身成仏という大事な法門なのです。

それ、浄土というも、地獄というも、外には候わず。ただ我らがむねの間にあり。これをさとるを仏という。これにまようを凡夫と云う。

（297 上野殿後家尼御返事 寂光土 1832ページ－17行）

およそ、浄土といっても、地獄といっても、それはどこかほかのところにあるのではありません。ただ私たちの胸の間（生命の中）にあるのです。これを悟った方を仏といい、これに迷うのを凡夫と

いうのです。

たとい無量億歳（むりょうおくさい）のあいだ権教（ごんきょう）を修行（しゅぎょう）すとも、法華経（ほけきょう）を離（はな）るるならば、ただいつも地獄（じごく）なるべし。

（297上野殿後家尼御返事（うえのどののごけあまごへんじ）

退転（たいてん）のいましめ1833ページー2行）

法華経の法門をきくにつけてなおなお信心をはげむを、
まことの道心者とは申すなり。天台云わく「従藍而青
（藍よりして、しかも青し）」云々。この釈の心は、
あいは葉のときよりも、なおそむればいよいよあおし。
法華経はあいのごとし、修行のふかきはいよいよあおき
がごとし。

297 上野殿後家尼御返事

求道（行学の二道）

1834ページ－1行

法華経（三大秘法の南無妙法蓮華経）の法門を聞くたびにますます信心に励む人を、ほんとうの道心者（仏道修行に励む人）というのです。天台大師は摩訶止観の中で「（青は藍より出でて）しかも藍より青し」と述べています。この釈の意味は―藍は葉の時よりも、染めれば染めるほど、いよいよ青い色が濃くなる。法華経（御本尊）は藍のようなもので、信心の修行が深いことは、藍が染めるにしたがってますます青くなっていくようなものである―ということです。

妻子・眷属の死人の前後にあらそいゆくは、獄卒・阿防羅刹なり。妻子等のかなしみなくは獄卒のこえなり。

（297上野殿後家尼御返事

臨終1834ページー6行）

いかにも、いかにも、追善供養（ついぜんくよう）を心（こころ）のおよぶほど及（はげ）み励（たも）給うべし。

（297上野殿後家尼御返事（うえのどののごけあまごへんじ）

遺族（いぞく）の方（かた）への激励（げきれい）1835ページ－9行）

このほどよみ候（読そうろうおんきょう）御経の一分（いちぶん）、故殿（こでん）へ回向（えこう）しまいらせ候（そうろう）。

あわれ、人（ひと）はよき子はもつ（持）べかりけるものかなと、なみだ（涙）かきあえずこそ候（そうら）え。妙荘厳王（みょうしょうごんのう）は二子（ふたりのこ）にみちび導かる。かの王（おう）は悪人（あくにん）なり。故上野殿（こうえのどの）善人（ぜんにん）なり。かれ彼にはにるべくもなし。似

（298 上野殿御返事（うえのどのごへんじ）（故上野殿追善（こうえのどのついぜん）の事（こと））

遺族（いぞく）の方（かた）への激励（げきれい）1836ページ－15行）

その上、殿はおさなくおわしき。故親父は、武士なりしかども、あながちに法華経を尊び給いしかば、臨終正念なりけるよしうけたまわりき。

その親の跡をつがせ給いて、またこの経を御信用あれば、故聖霊いかに草のかげにても喜びおぼすらん。

あわれ、いきておわせば、いかにうれしかるべき。この経を持つ人々は、他人なれども同じ霊山へまいりあわせ給うなり。いかにいわんや、故聖霊も殿も、同じく

法華経を信じさせ給えば、同じところに生まれさせ給うべし。

（299 上野殿御返事（土餅供養の事）
遺族の方への激励 1838ページー11行）

そのうえあなた（時光）が幼少のときあなたのお父さんは亡くなられました。お父さんは武士でしたが強く法華経（御本尊）を信じられたので、臨終正念であったことを承っています。その親の跡をつがれて、あなたもまたこの経を信仰されているのですから、亡きお父さんもどれほどか喜んでいることでしょう。もしも生きて

いらっしゃったならばどんなにうれしく思われたことでしょうか。この法華経を受持する人びとは、他人であっても同じ霊山浄土でいっしょになることができるのです。まして亡きお父さんもあなたも同じように法華経を信じているのですから、かならず同じ所に生まれていくに違いありません。

言（いう）にかいなきものなれども、約束（やくそく）と申（もう）すことははたがわぬ者（もの）ことにて候（そうろう）

（301上野殿御返事（うえのどのごへんじ）（大難必定（だいなんひつじょう）の事（こと））

言動（げんどう）・振（ふ）る舞（ま）い1843ページー8行）

親によき物を与えんと思って、せめてすることなくば、
一日に二・三度えみて向かえとなり。
（305 上野殿御消息（四徳四恩の事））
親子・孝養
1850ページー10行）

「かくれての信あれば、あらわれての徳あるなり」

（305上野殿御消息（四徳四恩の事）

功徳1850ページー13行）

たとえば表面に顕れなくても、心の奥底に信心があれば、その徳はかならず目に見えて顕れるものであると、いわれています。

友におうて礼あれとは、友達の一日に十度二十度来れる人なりとも、千里二千里来れる人のごとく思うて、礼儀いさかおろかに思うべからず。

（305上野殿御消息（四徳四恩の事）

言動・振る舞い1850ページー14行）

劣れる者に慈悲あれとは、我より劣りたらん人をば我が子のごとく思って、一切あわれみ、慈悲あるべし。

（305上野殿御消息（四徳四恩の事）

言動・振る舞い1850ページ－16行）

目下のに者に慈悲あれとは、自分よりも劣っているすべての人びとに対しては、我が子のように思って、慈悲の心で差別せずに情をかけていくべきです。

一に父母の恩を報ぜよとは、父母の赤白二滴、和合して我が身となる。母の胎内に宿ること二百七十日、九月の間、三十七度、死ぬるほどの苦しみあり。生み落とす時、堪えがたしと思い念ずる息、頂より出ずる煙、梵天に至る。さて生み落とされて乳をのむこと一百八十余石、三年が間は父母の膝に遊び、人となりて仏教を信ずれば、まずこの父と母との恩を報ずべし。父の恩の高きこと、須弥山なおひきし。母の恩の深きこと、

大海還って浅し。相構えて父母の恩を報ずべし。

（305 上野殿御消息（四徳四恩の事））

親子・孝養 1851ページー5行

一に父母の恩にむくいなさいというのは、母の血（赤）と、父の精（白）の二滴が結合して人間として生まれるのです。母は子を胎内に宿して二百七十日、九か月の間に三十七回も死ぬほどの苦しみがあります。生みおとす時の苦しみはがまんできないほどであり、苦しみをたえる息、首すじから出る煙は梵天にまでとどくほどです。また、生まれてから飲む乳の量は百八十余石、

三年間は父母の膝で遊び育まれ、大人になって仏教を信ずることができたのですから、まずこの父と母との恩に報いるべきなのです。父の恩を高さにたとえれば須弥山でさえまだ低く、母の恩を深さにたとえれば大海でさえもまだ浅いものなのです。心して父母の恩に報いていきなさい。

されば、昔は一切の男は父なり、女は母なり。しかるあいだ、生々世々に皆恩ある衆生なれば、皆仏になれと思うべきなり。

（305上野殿御消息（四徳四恩の事）

人生・生き方1851ページー12行）

ですから、昔（過去世）は一切の男が（自分の）父であり、女は母なのです。そういうわけで、生々世々に皆、恩のある衆生なのですから、皆が仏になれるようにと願うべきなのです。

法華経を持つ人は、父と母との恩を報ずるなり。我が心には報ずると思わねども、この経の力にて報ずるなり。

（305上野殿御消息（四徳四恩の事））

報恩

1852ページー9行）

法華経（御本尊）をたもつ人は父母の恩を報ずることになるのです。たとえ自分の心では、恩を報ずるとは思っていなくても、御本尊の力によって、恩を報ずることができるのです。

国王のたからは左右の大臣なり。左右の大臣をば塩梅と申す。みそ・しおなければ、よわたりがたし。左右の臣なければ、国おさまらず。

（308 南条殿御返事（大橋太郎の事）
指導者1856ページー13行）

須弥山に近づく鳥は金色となるなり

（310 本尊供養御書 功徳 1863 ページー3 行）

須弥山（古代インドの宇宙観で世界の中心に位置し、最も高いといわれた山に）に近づく鳥は金色に変わっていきます。

法華経を持ちまいらせぬれば、八寒地獄の水にもぬれず、八熱地獄の大火にも焼けず。法華経の第七に云わく「火も焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」等云々。

（310 本尊供養御書）

功徳1863ページー8行）

法華経（御本尊）を持っていたならば八寒地獄の水にもぬれず、八熱地獄の大火にも焼けることはありません。法華経の第七の巻の薬王品に「火も焼くことができないし、水も漂わすことができな

い」と説かれています。

虎うそぶけば大風ふく、竜ぎんずれば雲おこる。野兎のうそぶき、驢馬のいばうるに、風ふかず、雲おこることなし。愚者が法華経をよみ賢者が義を談ずる時は、国もさわがず、事もおこらず。聖人出現して仏のごとく法華経を談ぜん時、一国もさわぎ、在世にすぎたる大難おこるべしとみえて候。

（311 上野殿御返事（梵帝御計らいの事）
難を乗り越える 1866ページ8行）

「虎がほえれば大風が吹き、竜が鳴けば雲が起こる」といわれますが、野兎が鳴いたり、ロバがいなないても、風は吹かないし、雲も起きません。それと同じように、愚かな者が法華経を読んだり、賢い者が法華経を講義しても、べつに、国も騒がないし何事も起きません。しかし聖人が現れて、仏と同じように法華経を説いた時には、国中が騒ぎだして、釈尊の在世の時以上の大難も起こると経文に書かれてあります。

日蓮が弟子に、しょう房と申し、のと房といい、なごえの尼なんど申せしものどもは、よくふかく、心おくびょうに、愚癡にして、しかも智者となのりしやつばらなりしかば、事のおこりし時、たよりをえておおくの人をおとせしなり。

（311上野殿御返事（梵帝御計らいの事）
退転のいましめ1867ページ5行）

されば、この甲斐国にも少々信ぜんと申す人々候えども、おぼろけならでは入れまいらせ候わぬにて候。なかなかしき人の、信ずるようにてなめりて候えば、人の信心をもやぶり候なり。

（311上野殿御返事（梵帝御計らいの事）

折伏1867ページ8行）

なにごと
何事につけても、ことば言をやわらげて和ほけきょう法華経のしん信をうすくな
さんずるようをたばかる様人出来せば、我がしんじん信心をこころ試
むるかとおぼして、「各々、これを御きょうくん教訓あるは
思ひとしゅったい
うれしきことなり。ただし、御身をきょうくん教訓せさせ給
嬉おんみ
え。上の御信用なきことはこれにもしりて候を、上をも
かみごしんよう無そうろう知かみ
ってお脅どさせ給うこそおかしく候え。参ってきょうくん教訓
たもそうらまい
申さんとおもい候いつるに、うわてうたれまいらせて
もうそうらじょうしゅ上手打
候。閻魔王に、我が身といとおしとおぼす御めと子との
そうろうえんまおうわみあい愛おんつまこ妻思

引張ひっぱられん時は、時光に手をやすらせ給い候わんずらん」と、憎打言にくげにうちいいておわすべし。

（311上野殿御返事（梵帝御計らいの事）

信仰者の姿勢1867ページ16行）

千丁万丁（せんちょうまんちょう）しる人（ひと）も、わずかのことにたちまちに命（いのち）をすて、所領（しょりょう）をめさるる人（ひと）もあり。今度（こんど）、法華経（ほけきょう）のために命（いのち）捨（す）をすつることならば、なにはおしかるべき。惜

（311上野殿御返事（うえのどのごへんじ）（梵帝御計（ぼんたいおんはか）らいの事（こと））

信仰者（しんこうしゃ）の姿勢（しせい）1868ページ8行）

そもそも、今の時、法華経を信ずる人あり。あるいは火のごとく信ずる人もあり、あるいは水のごとく信ずる人もあり。聴聞する時はもえたつばかりおもえどもとおざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申すは、いつもたいせず信ずるなり。これは、いかなる時も、つねはたいせずとわせ給えば、水のごとく信ぜさせ給えるか。とうとし、とうとし。

（314 上野殿御返事（水火二信抄））

持続（じぞく）1871（ページ－16行）

それにしても、今の時代に、法華経（御本尊）を信ずる人がいますが、そのなかには火が燃えるように信ずる人もあり、あるいは水が流れるように信ずる人もいます。仏法の話を聞いたときには、火が燃えあがるように信心をしようと思っても、遠ざかると信心を捨ててようとする心がおきてしまうものなのです。水のような信心というのは、水の流れが絶えないのと同じように、いつも退転することがなく信心に励むことをいうのです。あなた（上野殿）は、どのような時でもいつも同じように信心を求めてこられるので、水の流れ

るような信心（しんじん）をなさっているのでしょう。ほんとうに尊（とうと）いことです。

家(うち)患(きじん)所為(そうろう)
いえの内にわずらいの候なるは。よも鬼神のそいには
候(そうら)わじ。十羅刹女(じゅうらせつにょ)の、信心(しんじん)のぶんざい分際(おんこころ)を御心みぞ
候(そうろう)らん。まことの鬼神(きじん)ならば、法華経(ほけきょう)の行者(ぎょうじゃ)をなやま
してこうべ頭破(きじん)思(そうろう)われんとおもう鬼神の候べきか。
（314上野殿御返事（水火二信抄）
諸天(しょてん)の加護(かご)
1872ページー3行）

この人は先世の宿業か、いかなることぞ、臨終に南無妙法蓮華経と唱えさせ給いけることは、一眼のかめの浮き木の穴に入り、天より下すいとの大地のはりの穴に入るがごとし。あらふしぎ、あらふしぎ。

（315上野殿御返事（末法要法の事））

臨終1874ページー3行）

日蓮(にちれん)が弟子等(でしとう)の中(なか)に、なかなか法門(ほうもん)知(し)りたりげに候(そうろう)人々(そうろうひとびと)は、悪(あく)しく候(そうろう)げに候(そうろう)。

（315上野殿御返事（末法要法の事）（うえのどのごへんじ（まっぽうようほうのこと））

信仰者(しんこうしゃ)の姿勢(しせい)1874ページ－10行）

今、末法に入りぬれば、余経も法華経もせんなし、ただ南無妙法蓮華経なるべし。こう申し出だして候も

わたくしの計らいにはあらず、釈迦・多宝・十方諸仏・地涌千界の御計らいなり。この南無妙法蓮華経に余事をまじえば、ゆゆしきひが事なり。

（315上野殿御返事（末法要法の事））

妙法の偉大さ1874ページー13行）

今は末法に入ったのですから、余経（爾前経）も法華経もまったく

意味はなく、ただ南無妙法蓮華経による以外には、成仏はかなわないのです。このようにいうのは、私の勝手な考えではありません。釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の菩薩がきめられたことなのです。この南無妙法蓮華経に余事をまぜ入れることは大きな誤りです。

夫れ、水は寒積もれば氷となる、雪は年累なって水精となる。悪積もれば地獄となる、善積もれば仏となる。女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。法華経供養の功徳かさならば、あに竜女があとをつがざらん。

（317 南条殿女房御返事

婦人と信仰 1876ページー7行）

およそ水は寒さが加われば氷となり、一年中とけない雪は、年が重なるにしたがって氷結し、水晶のようになります。そのよ

うに、悪行を積めば地獄に堕ち、反対に善行を積めば仏となるのです。女性は他人を嫉妬する心がかさなれば毒蛇のような恐ろしい姿や心の持ち主になり、御本尊に供養する功徳が積み重なれば竜女のように女人成仏していけるのです。

この時光が麦、何ぞ変じて法華経の文字とならざらん。この法華経の文字は釈迦仏となり給い、時光が故親父の左右の御羽となりて、霊山浄土へとび給え、かけり給え、かえりて時光が身をおおい、はぐくみ給え。

（319 時光御返事

親子・孝養 1881ページー4行）

ただ南無妙法蓮華経の七字のみこそ、仏になる種には候え。　これを申せば人はそねみて用いざりしを、故上野殿、信じ給いしによりて仏に成らせ給いぬ。各々はその末にて、この御志をとげ給うか。竜馬につきぬるだには千里をとぶ、松にかかれるつたは千尋をよずと申すは、これか。

（322九郎太郎殿御返事（題目仏種の事））

妙法の偉大さ1885ページ－1行）

たとい心ざしありともあらわしがたきに、いまいろをあらわさせ給うにしりぬ、おぼろけならぬことなり。さだめて法華経の十羅刹まぼらせ給いぬらんと、たのもしくこそ候え。事つくしがたし。

（322 九郎太郎殿御返事（題目仏種の事）
諸天の加護 1885ページ－8行）

そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは処をおわれ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれしなどは物のかずならず。されば、色心の二法よりおこりてそしられたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）

御本仏の境涯・確信1888ページ－6行）

およそ日蓮がうけたさまざまな大難のなかでも、竜の口の座と、東条景信におそわれた小松原の法難以上の大難はありませんでした。そのわけは、多くの難のなかでも、ほかには命を捨てるような大難はなかったからです。悪口をいって責められ、あるいは住んでいるところを追い出され、無実の罪をいいつけられ、あるいは顔を打たれたことなどは、たいしたことではありません。したがって、色心の二法にわたって法華経を実践したために非難された者は、日本国のなかでは日蓮一人だけなのです。

提婆(だいば)はこころの成仏(じょうぶつ)をあらわし、竜女(りゅうにょ)は身(み)の成仏(じょうぶつ)をあらわす。一代(いちだい)に分絶(ぶんた)えたる法門(ほうもん)なり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）(うえのどのごへんじ　とうじょうなんのこと)）

妙法(みょうほう)の偉大(いだい)さ1889ページー7行）

勧持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈は、日蓮一人よめり。誰か出でて、日本国・唐土・天竺、三国にして、仏の滅後によみたる人やある。また我よみたりとなのるべき人なし。また、あるべしとも覚えず。

「および刀杖を加う」の「刀杖」の二字の中に、もし「杖」の字にあう人はあるべし。「刀」の字にあいたる人をきかず。不軽菩薩は「杖木・瓦石」と見えたれば、杖の字にあいぬ、刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等

は「刀杖も加えず」と見えたれば、これまたかけたり。日蓮は「刀杖」の二字ともにあいぬ。あまつさえ、刀の難は、前に申すがごとく、東条の松原と竜の口となり。一度もあう人なきなり。日蓮は二度あいぬ。杖の難には、すでにしょうぼうにつらをうたれしかども、第五の巻をもってうつ。うつ杖も第五の巻、うたるべしと云う経文も五の巻、不思議なる未来記の経文なり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）御本仏の境涯・確信1890ページ－11行）

いまおもいいでたることあり。子を思う故にや、おや、つきの木の弓をもって学文せざりし子におしえたり。しかるあいだ、この子、うたてかりしは父、にくかりしはつきの木の弓。されども、終には修学増進して自身得脱をきわめ、また人を利益する身となり、立ち還って見れば、つきの木をもって我をうちし故なり。この子、そとばにこの木をつくり、父の供養のためにたててむけりと見えたり。

（324 上野殿御返事（刀杖難の事））

自らの成長（1891ページ－6行）

いま思い出したことがあります。昔、子どもを思うために、親が槻の木の弓で打って学問をしない子どもに教えたということがあります。そのため、この子は、ひどいのは父であり、憎いのは槻の木の弓だと思いました。けれども、やがて修学が進んで自分自身も悟りをえることができて、人にも教えるような身になりました。ふりかえってみれば、これは親が槻の木の弓で自分を打ってくれたためだったのです。そこで、この子は、亡き父のために槻の木で卒塔婆をつくり、供養のために立てた、という話がありました。

日蓮、仏果をえんに、いかでかしようぼうが恩をすつべきや。いかにいわんや、法華経の御恩の杖をや。かくのごとく思いつづけ候えば、感涙おさえがたし。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）

御本仏の境涯・確信1891ページ－11行）

とにかくに、法華経に身をまかせ信ぜさせ給え。殿一人にかぎるべからず、信心をすすめ給いて、過去の父母等をすくわせ給え。

（324 上野殿御返事（刀杖難の事）
折伏 1891ページー16行）

日蓮、生まれし時よりいまに一日片時もこころやすきことはなし。この法華経の題目を弘めんと思うばかりなり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事））

御本仏の大慈悲1892ページ－1行）

日蓮は生まれた時から現在にいたるまで、一日、しばしの間も心がやすまったことはありません。ただこの法華経の題目を弘めようと思うばかりだったのです。

相かまえて相かまえて、自他の生死はしらねども、御臨終のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむかいにまいり候べし。

（324上野殿御返事（刀杖難の事））

臨終1892ページー2行）

よくよく心して、自分についても他のひとについても生死はわからないでしょうけれども、御臨終のさいに、また生死の中間には、日蓮がかならず迎えに行ってあげましょう。

かつえて食をねがい、渇して水をしたうがごとく、恋いて人を見たきがごとく、病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人、べに・しろいものをつくるがごとく、法華経には信心をいたさせ給え。さなくしては後悔あるべし

（324上野殿御返事（刀杖難の事）信・不信1892ページー6行）

飢えたときに食べ物を求め、のどが渇いたときに水をほしがるよ

うに、恋しい人にあいたいと思うように、病気になって薬を頼りにするように、きれいな人が紅や白粉をつけるのと同じように、法華経（御本尊）に信心をしていきなさい。そうでないと後悔することになります。

「願わくはこの功徳をもって、あまねく一切に及ぼし、我らと衆生と、皆共に仏道を成ぜん」

（326上野殿御返事（竜門御書）

功徳1895ページー13行）

一切（いっさい）のことは時（とき）によることに候（そうろう）か。春（はる）は花（はな）、秋（あき）は月（つき）と申（もう）すことも時（とき）なり。

（327上野殿御返事（うえのどのごへんじ）（適時弘法（ちゃくじぐほう）の事（こと））

時（とき）を知（し）る1896ページ6行）

花は開いて果となり、月は出でて必ずみち、灯は油をさせば光を増し、草木は雨ふればさかう。人は善根をなせば必ずさかう。

（328上野殿御返事（正月三日の事））

福運1897ページー13行）

花は開いて実を結び、月は新月から始まってかならず満月にとみち、ともしびは油をさせば光を増し、草や木は雨が降ればいよいよ繁茂します。そのように、人は善根を積めばかならず栄えるの

です。

貴辺は日本国第一の孝養の人なり。梵天・帝釈おり下って左右の羽となり、四方の地神は足をいただいて父母とあおぎ給うらん。

（329上野殿御返事（孝不孝の事））

親子・孝養1900ページ－1行）

しばらくの苦こそ候ともついにはたのしかるべし。

（330上野殿御返事（神主等庇護の事）

歓喜・遊楽1901ページ－10行）

女子(おなご)は門(もん)を開(ひら)く、男子(おのこご)は家(いえ)を継(つ)ぐ。日本国(にほんこく)を知(し)っても、子(こ)なくば誰(たれ)に継(つ)がすべき。財(たから)を大千(だいせん)に満(み)てても、子(こ)なくば誰(たれ)にかゆずるべき。譲(ゆず)

（331 上野殿御返事（日若御前誕生の事（ひわかごぜんたんじょうのことうえのどのごへんじ））

親子・孝養（おやここうよう）1902ページー6行

見候わざらんことこそかなしくは候え。さは候えども、釈迦仏・法華経に身を入れて候いしかば、臨終めでたく候いけり。心は父君と一所に霊山浄土に参りて、手をとり頭を合わせてこそ悦ばれ候らめ。

（332 上野殿御書（七郎五郎死去の事）
遺族の方への激励 1904ページ－1行）

故七郎五郎殿は、当世の日本国の人々にはにさせ給わず、幼きこころなれども、賢き父の跡をおい、御年いまだ二十におよばれども、ひとたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いてほとけに成らせ給いぬ。「一りとして成仏せざることなけん」はこれなり。乞い願わくは、悲母、我が子を恋しく思しめし給いなば、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて、故南条殿・故五郎殿と一所に生まれんと願わせ給え。一つ

種は一つ種、別の種は別の種、同じ妙法蓮華経の種を心にはらませ給いなば、同じ妙法蓮華経の国へ生まれさせ給うべし。

（334上野殿母御前御返事（四十九日菩提の事）

遺族の方への激励1908ページ－1行）

法華経と申すは、手に取ればその手やがて仏に成り、口に唱うればその口即ち仏なり。

（335上野尼御前御返事（烏竜遺竜の事））

妙法の偉大さ1913ページー3行）

譬えば、小児の火を放つに、心にあらざれども、物を焼くがごとし。法華経もまたかくのごとし。存外に信を成せば、必ず仏になる。

（335 上野尼御前御返事（烏竜遺竜の事）
信・不信 1915ページ－15行）

人のものをおしうると申すは、車のおもけれども油をぬりてまわり、ふねの水にうかべてゆきやすきようにおしえ候なり。

（337上野殿御返事（須達長者御書）
指導者1918ページ－7行）

人がものを教えるということは、車輪が重い時には油をぬればよくまわり、船を水に浮かべれば行きやすいように、教えるものなのです。

月氏国にす達長者と申せし者は、七度貧になり七度長者となりて候いしが、最後の貧の時は、万民皆にげうせ死におわりて、ただめおとこ二人にて候いし時、五升の米あり。五日のかってとあて候いし時、迦葉・舎利弗・阿難・羅睺羅・釈迦仏の五人、次第に入らせ給いて、五升の米をこいとらせ給いき。その日より五天竺第一の長者となりて祇園精舎をばつくりて候ぞ。これをもって、よろずを心えさせ給え。

（337 上野殿御返事（須達長者御書）

福運（ふくうん）1919ページー2行）

その上、わずかの小郷におおくの公事せめあてられて、わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかくべき衣なし。かかる身なれども、法華経の行者の山中の雪にせめられ、食ともしかるらんとおもいやらせ給いて、ぜに一貫おくらせ給えるは、貧女がめおとこ二人して一つの衣をきたりしを乞食にあたえ、りたが合子の中なりしひえをびゃくしぶつにあたえたりしがごとし。とうとし、とうとし。

（337 上野殿御返事（須達長者御書）
信仰者の姿勢 1919ページ－11行）

そのうえ、わずかの領地なのに、そこへいろいろと重い税をかけられて、自分の乗る馬もなく、妻や子どもは着る衣服もないほどです。そのような身でありながら、法華経の行者が身延の山の中で雪に責められて、食べ物もとぼしいだろうという思いから、銭一貫文をわざわざ送ってくださったことは、貧しい婦人が夫婦二人で一枚の着物を着ていたのを、乞食の行者に施してあげたことや、利咤が食器の中にある稗を辟支仏に供養したことと似ています。まことに尊いことです。

子は財と申す経文あり。妙荘厳王は、一期の後、無間大城と申す地獄へ堕ちさせ給うべかりしが、浄蔵と申せし太子にすくわれて、大地獄の苦をまぬかれさせ給うのみならず、娑羅樹王仏と申す仏とならせ給う。青提女と申せし女人は、慳貪のとがによって餓鬼道に堕ちて候いしが、目連と申す子にたすけられて、餓鬼道を出で候いぬ。されば、子を財と申す経文たがうことなし。

（338 上野尼御前御返事（霊山再会の事））

親子・孝養 1920ページ－15行）

子は宝であるという経文があります。妙荘厳王は外典を信じていたため、死後無間地獄に堕ちるはずでしたが、浄蔵という子供の導きで仏法に帰依して救われ、地獄の苦しみを免れることができただけでなく、さらに娑羅樹王仏という仏になられたので す。また青提女という女性は欲深く物惜しみする科によって死後餓鬼道におちましたが、子の目連尊者に助けられて餓鬼道から出ることができました。したがって、子は宝という経文は正しいのです。

故五郎殿は、とし十六歳。心ね、みめかたち、人にすぐれて候いし上、男ののうそなわりて、万人にほめられ候いしのみならず、おやの心に随うこと、水のうつわものにしたがい、かげの身にしたがうがごとし。いえにてははしらとたのみ、道にてはつえとおもいき。はこのたからもこの子のため、つかう所従もこれがため、「我しなば、になわれてのぼへゆきなん。のちのあと、おもいおくことなし」とふかくおぼしめしたりしに、いやなくさきにたちぬれば、「いかんにや、いかんに

こごろうどの　年　じゅうろくさい　こころ　根　見　目　形　ひと　勝
そうら　うえ　おとこ　能　具　ばんにん　褒
そうら　親　こころ　したが　みず
器　物　随　影　み
家　柱　頼　みち　杖　思
箱　財　こ　使　しょじゅう
われ　死　担　野　辺　行　後
跡　思　置　深　思
先　立

や。ゆめかまぼろしか。さめなん、さめなん」とおもえど
もさめずして、としもまたかえりぬ。いつとまつべしとも
おぼえず。ゆきあうべきところだにも申しおきたらば、
はねなくとも天へものぼりなん、ふねなくともももろこしへ
もわたりなん。大地のそこにありときかば、いかでか地を
もほらざるべきとおぼしめすらん。

やすやすとあわせ給うべきこと候。釈迦仏を御使いと
して、りょうぜん浄土へまいりあわせ給え。「もし法を聞
くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」と申

して、大地はささばはずるとも、日月は地に堕ち給うとも、しおはみちひぬ世はありとも、花はなつにならずとも、南無妙法蓮華経と申す女人の、おもう子にあわずということはなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさせ給え、つとめさせ給え。

（338 上野尼御前御返事（霊山再会の事）
遺族の方への激励 1921ページ－1行）

釈迦仏は「我を無量の珍宝をもって億劫の間供養せんよりは、末代の法華経の行者を一日なりとも供養せん功徳は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候

（340南条殿御返事（法妙人貴の事）功徳1923ページー15行）

釈尊は「私を無量の珍しい宝をもって、無限に長い間供養するよりも、末法の法華経の行者を一日でも供養する功徳は、百千万億倍も勝れている」と説かれています。

かかるいと心細き幽窟なれども、教主釈尊の一大事の秘法を霊鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり。されば、日蓮が胸の間は諸仏入定の処なり。舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は正覚の砌なるべし。かかる不思議なる法華経の行者の住処なれば、いかでか霊山浄土に劣るべき

（340 南条殿御返事（法妙人貴の事）

寂光土 1924ページー2行）

「法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊し」と申すはこれなり。

（340南条殿御返事（法妙人貴の事）
仏法と社会1924ページー6行）

「たもつ法が妙であり尊ければ、それをたもつ人が尊い。たもつ人が尊ければ、その人の生活する所もまた尊いのである」というのは、このこと（大聖人が身延山で法を説くことが釈尊の霊鷲山にも劣らないこと）です。

この砌に望まん輩は、無始の罪障たちまちに消滅し、
三業の悪転じて三徳を成ぜん。

（340 南条殿御返事（法妙人貴の事）
罪障消滅 1924ページー7行）

雪重寒責そうろうみ冷いし
ゆきはかさなり、かんはせめ候。身のひゆること石のごとし。胸冷こおりのつめたきこと氷のごとし。

酒温差沸乾薑
しかるに、このさけわたたかにさしわかして、かんこうをはたとくい切って、食きに一度飲そうらのみて候えば、火を胸にたくがごとし。湯いに似汗垢洗ひむね焚滴ゆに入るにたり。あせにあかあらい、しずくに足を濯あしすすぐ。この御志おんこころざしはいかんがせんと、うれしく嬉おもい思そうろう候ところに、両眼りょうがんより一ひとつの涙なんだをうかべ浮そうろう候。

（342 上野殿母御前御返事（大聖人の御病の事））

うえのどののははごぜんごへんじ（だいしょうにんおんやまいのこと）

人生（じんせい）・生き方（いきかた）1926ページ－13行）

すでに仏になるべしと見え候えば、天魔・外道が病をつけておどさんと心み候か。命はかぎりあることなり。すこしもおどろくことなかれ。

また鬼神めらめ、この人をなやますは、剣をさかさまにのむか、また大火をいだくか、三世十方の仏の大怨敵となるか。あなかしこ、あなかしこ。この人のやまいをたちまちになおして、かえりてまぼりとなりて、鬼道の大苦をぬくべきか。

法華証明抄

病気（びょうき）1931（ページ－9行）

かならず仏（ほとけ）になるだろうと思（おも）えたので、天魔（てんま）・外道（げどう）が病気（びょうき）にさせておどそうとためしているのでしょうか。命（いのち）は限（かぎ）りあるものですから、病気（びょうき）になっても少（すこ）しも驚（おどろ）いてはなりません。また、鬼神（きじん）よ、この人（ひと）（時光（ときみつ））を悩（なや）ますことは、剣（つるぎ）をさかさまにのむか、また大火（たいか）をいだくか、三世十方（さんぜじっぽう）のあらゆる仏（ほとけ）の大敵（たいてき）となるのか。おそれおおく、つつしむべきことです。この人（ひと）の病気（びょうき）をすぐに治（なお）して、逆（ぎゃく）に、この人（ひと）を守護（しゅご）して、餓鬼道（がきどう）の苦（くる）しみをいやすべきです。

夫れ、木をうえ候には、大風ふき候えども、つよき
すけをかいぬればたおれず。本より生いて候木なれど
も、根の弱きはたおれぬ。甲斐なき者なれども、たすくる
者強ければたおれず。すこし健げの者も、独りなれば悪し
きみちにはたおれぬ。

また、三千大千世界のなかには、舎利弗・迦葉尊者を
のぞいては、仏よにいで給わずば、一人もなく三悪道に
堕つべかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて、
一切衆生はおおく仏になりしなり。まして阿闍世王・

おうくつまらなんど申せし悪人どもは、いかにもかなうまじくて、必ず阿鼻地獄に堕つべかりしかども、教主釈尊と申す大人にゆきあわせ給いてこそ仏にはならせ給いしか。

されば、仏になるみちは善知識にはすぎず。わがちえなににかせん。ただあつき・つめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知識たいせちなり。

（352三三蔵祈雨事）

善知識と悪知識1940ページー6行）

日蓮、仏法をこころみるに、道理と証文とにはすぎず。
また道理・証文よりも現証にはすぎず。
（352　三三蔵祈雨事）

仏法は勝負
1941ページー8行

日蓮が仏法を判断するのに、道理が正しく経文がきちんとそろっているものに過ぎるものはありません。さらに、道理、経文よりも現実の証拠に優るものはないのです。

すりはんどくは、三箇年に十四字を暗にせざりしかども、仏に成りぬ。提婆は、六万蔵を暗にして無間に堕ちぬ。これひとえに末代の今の世を表するなり。あえて人の上と思しめすべからず。

（352三三蔵祈雨事）

信仰者の姿勢

1945ページー11行）

夫れ、大事の法門と申すは別に候わず。時に当たって、我がため国のため大事なることを少しも勘えたがえざるが、智者にては候なり。仏のいみじきと申すは、過去を勘え、未来をしり、三世を知ろしめすに過ぎて候御智慧はなし。

（353 蒙古使御書
御本仏の境涯・確信
1947ページー2行）

詮ずるところ、万法は己心に収まって一塵もかけず、九山八海も我が身に備わって日月・衆星も己心にあり。しかりといえども、盲目の者の鏡に影を浮かべるに見えず、嬰児の水火を怖れざるがごとし。外典の外道、内典の小乗・権大乗等は、皆、己心の法を片端片端説いて候なり。

（353蒙古使御書 生命とその尊厳 1947ページ－7行）

夫れ、雪至って白ければ、染むるにそめられず。漆至ってくろければ、しろくなることなし。これよりうつりやすきは人の心なり。善悪にそめられ候。真言・禅・念仏宗等の邪悪の者にそめられぬれば、必ず地獄におつ。法華経にそめられ奉れば、必ず仏になる。経に云わく「諸法実相」云々。また云わく「もし人信ぜずして乃至阿鼻獄に入らん」云々。

いかにも御信心をば雪・漆のごとくに御もちあるべく候。

（355 西山殿御返事（雪漆御書）
信・不信 1951ページ－11行）

およそ雪はきわめて白いですから他の色で染めようとしても染めることはできません。漆は非常に黒いものですから白くなることはありません。それとは違って移りやすいのは人に心です。善にも悪にも染められます。真言や禅、念仏宗などのよこしまで悪い者たちに、心を染められれば、かならず地獄に堕ちます。反対に法華経に縁して信心に励めばかならず成仏するのです。

（中略）どうか信心だけは白い雪、黒い漆のように何ものにも

染(そ)められないように持(たも)っていくべきです。

その国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ。「仏種は縁より起こる。この故に一乗を説く」なるべし。

（358 高橋殿御返事（米穀御書）地域広布 1953 ページー14 行）

その国（地域）の仏法は、あなたにおまかせいたします。仏種（成仏の種子のこと）は縁を結んでいくところに生じていきます。そのゆえに、一乗の法である法華経を説いていくのです。

末法に入りなば、迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、
薬王・観音等のゆずられしところの小乗経・大乗経
ならびに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とは
なるべからず。いわゆる、病は重し薬はあさし。その
時、上行菩薩出現して、妙法蓮華経の五字を一閻浮提
の一切衆生にさずくべし。

（359高橋入道殿御返事
御本仏の大慈悲1955ページー3行）

仏と申せし人は、これにはにるべくもなきいみじき
くすしなり。この仏、不死の薬をとかせ給えり。今の
妙法蓮華経の五字これなり。しかも、この五字をば
「閻浮提の人の病の良薬なり」とこそとかれて候え。
（361 妙心尼御前御返事（病之良薬の事）
病気 1962 ページ－14 行）

人の死ぬることはやまいにはよらず。当時のゆき・つしまのものども、病なけれども、みながらむこ人に一時にうちころされぬ。病あれば死ぬべしということ不定なり。

また、このやまいは仏の御はからいか。そのゆえは、浄名経・涅槃経には、病ある人仏になるべきよしとかれて候。病によりて道心はおこり候なり。

（361妙心尼御前御返事（病之良薬の事））

病気1963ページ－5行）

人が死ぬということは、病気だけがその原因ではありません。いまの壱岐・対馬の人たちは、病気ではなかったのに、皆、蒙古軍に攻められて、一時に殺されてしまいました。病気だからかならずしも死ぬとは決まっていないのです。また、入道殿のこの病気は、仏のご配慮によるものではないでしょうか。その理由は、浄明経（維摩経）や涅槃経には、病のある人は成仏できると説かれているからです。病気によって仏道を求める心が起こるのです。

ただいまに霊山にまいらせ給いなば、日いでて十方をみるがごとくうれしく、「とくしにぬるものかな」と、うちよろこび給い候わんずらん。

中有の道にいかなることもいできたり候わば、「日蓮が弟子でしなり」となのらせ給え。

（361 妙心尼御前御返事（病之良薬の事））

臨終1963ページ－16行）

日蓮は日本第一のふとうの法師。ただし、法華経を信じ候ことは、一閻浮提第一の聖人なり。その名は十方の浄土にきこえぬ。定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子となのらせ給わば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬよしは申さじとおぼすべし。

（361 妙心尼御前御返事（病之良薬の事）
御本仏の境涯・確信1964ページ－4行）

この御まぼりは、法華経のうちのかんじん、一切経の
げんもくにて候。たとえば、天には日月、地には大王、
人には心、たからの中には如意宝珠のたま、いえには
はしらのようなることにて候

（362 妙心尼御前御返事（御本尊護持の事）
妙法の偉大さ 1965ページ－7行）

減劫と申すは人の心の内に候。貪・瞋・癡の三毒が次第に強盛になりもてゆくほどに、次第に人のいのちもつづまり、せいもちいさくなりもてまかるなり。

（363 減劫御書

仏法と社会 1966 ページ－6 行）

末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚癡のかしこさは、いかなる賢人・聖人も治めがたきことなり。

（363 減劫御書）

仏法と社会 1967ページ－8行）

今、末代悪世に、世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすめば、いよいよ代のほろぶること出来せり。

（363 滅劫御書

仏法と社会 1967ページ－15行）

智者とは、世間の法より外に仏法を行わず。世間の治世の法を能く能く心えて候を、智者とは申すなり。

（363 減劫御書

指導者 1968 ページー12 行）

大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすならば、「閻浮提内、広令流布（閻浮提の内に、広く流布せしむ）」は、よも疑い候わじ。

（363減劫御書）

広宣流布1969ページ－6行）

古　今　至　親　子　別
いにしえよりいまにいたるまで、おやこのわかれ、主従（しゅじゅう）
女　別　辱　辛　夫
のわかれ、いずれかつらからざる。されども、おとこ
おんなのわかれほど、たっとげなかりけるはなし。
過去遠々よりめの身となりしが、このおとこ、娑婆最後の
善　知　識
ぜんちしきなりけり。

（364 持妙尼御前御返事
婦人と信仰 1970 ページ－17 行）

この妙の文字は、月なり、日なり、星なり、かがみなり、衣なり、食なり、花なり、大地なり、大海なり。一切の功徳を合わせて妙の文字とならせ給う。または如意宝珠のたまなり。かくのごとくしらせ給うべし。

（365 妙心尼御前御返事（妙の字功徳の事）

妙法の偉大さ 1972ページ－16行）

根深葉枯泉

「ねふかければはかれず、いずみに玉あれば水たえず」と申すように、御信心のねのふかく、いさぎよき玉の心のうちにわたらせ給うか。

（366窪尼御前御返事（信心の根深き事））

信・不信1973ページー14行）

法華経を持つ人は、男ならば、いかなる田夫にても候え、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王乃至漢土・日本の国主等にも勝れたり。いかにいわんや、日本国の大臣・公卿・源平の侍・百姓等に勝れたること、申すに及ばず。女人ならば、憍尸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候。

（373松野殿御消息（一劫の事）

妙法を持った人の位1982ページ－15行）

聖人の唱えさせ給う題目の功徳と、我らが唱え申す題目の功徳と、いか程の多少候べきや」と云々。さらに勝劣あるべからず候

（374松野殿御返事（十四誹謗の事）勤行・唱題1987ページー8行）

聖人が唱えられる題目の功徳と、私たちが唱える題目の功徳とでは、どれほどの違いがあるのでしょうか、とのご質問ですが、題目の功徳には、まったく勝劣はありません。

ある人これを分かちて云わく、先に悪因を列ね、次に悪果を列ぬ。悪因に十四あり。一に憍慢、二に懈怠、三に計我、四に浅識、五に著欲、六に不解、七に不信、八に顰蹙、九に疑惑、十に誹謗、十一に軽善、十二に憎善、十三に嫉善、十四に恨善なり」。この十四誹謗は在家・出家に亘るべし。恐るべし、恐るべし。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）
傍法のいましめ 1987ページー13行）

ある人（慈恩）は、この悪の数を分けて、次のように説いていま

す。「さきに謗法の要因をならべ、次に悪果をあげている。まず悪の因には十四ある。一に驕慢（増上慢、慢心の意。おごりたかぶって仏法をあなどること）、二に懈怠（仏道修行をなまけること）、三に計我（我見、自分のかってな考えで、仏法の教えを判断すること）、四に浅識（仏法の道理がわからないのに、誹謗すること）、五に著欲（欲望にとらわれて、仏法を求めないこと）、六に不解（仏法の教えをわかろうとしないこと）、七に不信（仏法を信じないこと）、八に顰蹙（仏法を非難すること）、九に疑惑（仏法の教えを疑って、迷うこと）、十に誹謗（仏法をそしり、悪口を

いうこと)、十一に軽善(仏法を信じている人を軽蔑し、ばかにすること)、十二に憎善(仏法を信じている人を憎むこと)、十三に嫉善(仏法の信者を怨嫉すること。和合僧を破るはたらきをすること)、十四に根善(仏道を修行する者をうらむこと)である」と。この十四誹謗は、在家・出家の両方にわたるのであり、まことにこの謗法の罪は恐れなければなりません。

過去の不軽菩薩は、「一切衆生に仏性あり。法華経を持てば必ず成仏すべし。彼を軽んじては仏を軽んずるになるべし」とて、礼拝の行をば立てさせ給いしなり。法華経を持たざる者をさえ、「もし持ちやせんずらん、仏性あり」とて、かくのごとく礼拝し給う。いかにいわんや、持てる在家・出家の者をや。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）
信仰者の姿勢 1987 ページ－17 行）

「もしは在家にてもあれ、出家にてもあれ、法華経を持ち説く者を一言にても毀ることあらば、その罪多きこと、釈迦仏を一劫の間直ちに毀り奉る罪には勝れたり」と見えたり。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）
同士の怨嫉 1988ページー3行）

忘れても法華経を持つ者をば互いに毀るべからざるか。その故は、法華経を持つ者は必ず皆仏なり、仏を毀っては罪を得るなり。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事））

同士の怨嫉 1988ページー6行）

かりにも法華経（御本尊）を持つ者を、互いにそしってはなりません。その理由は、法華経（御本尊）を持つ者は、かならずみな仏になるのであって、仏をそしれば罪をつくることになるのは当然だからです。

いかに賤しき者なりとも少し我より勝れて智慧ある人には、この経のいわれを問い尋ね給うべし。

（374　松野殿御返事（十四誹謗の事）

求道（行学の二道）1988ページ－14行）

いかなる鬼畜なりとも法華経の一偈一句をも説かん者をば「当に起って遠く迎うべきこと、当に仏を敬うがごとくすべし」の道理なれば、仏のごとく互いに敬うべし。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事））

信仰者の姿勢 1989 ページー2 行）

しょうじむじょう　ろうしょうふじょう　さかい　徒果無よなか
生死無常、老少不定の境、あだにはかなき世の中に、た
ちゅうや　こんじょう　たくわ　おも　ちょうせき　げんぜ　わざ
だ昼夜に今生の貯えをのみ思い、朝夕に現世の業をの
ほとけ　うやま　ほう　しん　むぎょう　むち
みなして、仏をも敬わず法をも信ぜず、無行・無智にし
あく　えんま　ちょうてい　ひむか
ていたずらに明かし暮らして、閻魔の庁庭に引き迎えら
とき　なに　しりょう　さんがい　ちょうと　い　なに
れん時は、何をもってか資糧として三界の長途を行き、何
せんばっ　しょうじ　こうかい　わた　じっぽう　じゃっこう
をもって船筏として生死の曠海を渡って実報・寂光の
ぶっど　いた
仏土に至らんや

（374　松野殿御返事（十四誹謗の事））
まつのどのごへんじ　じゅうしひぼう　こと

人生・生き方
じんせい　い　かた
1990ページー3行）

魚の子は多けれども魚となるは少なく、菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし。人もまたかくのごとし。菩提心を発す人は多けれども、退せずして実の道に入る者は少なし。すべて凡夫の菩提心は、多く悪縁にたぼらかされ、事にふれて移りやすきものなり。鎧を着たる兵者は多けれども、戦に恐れをなさざるは少なきがごとし。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）
退転のいましめ 1990ページー9行）

後世を願わんには、彼の雪山童子のごとくこそあらまほしくは候え。誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば、我が身命を捨てて仏法を得べき便りあらば、身命を捨て仏法を学すべし。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）
求道（行学の二道）1993ページ－7行）

しゃくもん　　われ　しんみょう　あい　　むじょうどう　お
迹門には「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむの
　　説
み」ととき、本門には「自ら身命を惜しまず」ととき、
ねはんぎょう　み　かる　ほう　おも　　みずか　しんみょう　お
涅槃経には「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」と
み　　ほんじゃくりょうもん　ねはんぎょう　　み　ころ　ほう　ひろ
見えたり。本迹両門、涅槃経、共に身命を捨てて法を
ひろ　み
弘むべしと見えたり。

（374　松野殿御返事（十四誹謗の事）
まつのどのごへんじ　じゅうしひぼう　こと
折伏
しゃくぶく
1993ページー15行）

ほけきょうしゃくもん　かんじほんだいじゅうさん　　われしんみょう　あい　　ただむじょうどう
法華経迹門の勧持品第十三に「我身命を愛せず但無上道を
お　と　ほんもん　じゅりょうほんだいじゅうろく　　みずか　しんみょう　お
惜しむ」と説かれ、本門の寿量品第十六には「自ら身命を惜

しまず」と説かれ、涅槃経には「身は軽く法は重し、身を死して法を弘む」と説かれています。法華経の本迹両門も、涅槃経もともに身命を捨てて法を弘むべきであると説かれているのです。

在家の御身は、ただ余念なく南無妙法蓮華経と御唱えありて、僧をも供養し給うが肝心にて候なり。それも、経文のごとくならば、随力演説も有るべきか。

（374松野殿御返事（十四誹謗の事）

信仰者の姿勢1994ページ－3行）

悦ばしからん時も「今生の悦びは夢の中の夢、霊山浄土の悦びこそ実の悦びなれ」と思しめし合わせて、また南無妙法蓮華経と唱え

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

歓喜・遊楽 1994 ページ－6 行）

退転なく修行して最後臨終の時を待って御覧ぜよ。妙覚の山に走り登って四方をきっと見るならば、あら面白や、法界寂光土にして、瑠璃をもって地とし、金の縄をもって八つの道を界えり。天より四種の花ふり、虚空に音楽聞こえて、諸の仏菩薩は常楽我浄の風にそよめき、娯楽・快楽し給うぞや。我らもその数に列なりて遊戯し楽しむべきこと、はや近づけり。信心弱くしては、かかるめでたき所に行くべからず、行くべからず。

（374）松野殿御返事（十四誹謗の事）

臨終（1994ページ－7行）

退転することなく信心の修行をして、最後の臨終のときを待ってごらんなさい。妙覚の山に走り登って、四方をみわたせば、なんとすばらしいことでしょうか。あらゆる世界はすべて寂光土で、瑠璃をもって大地とし、金の縄で涅槃にいたる八つの道のさかいをつくり、天からは曼荼羅華などの四種類の花が降ってきて、空には音楽が聞こえ、もろもろの仏や菩薩は常楽我浄（仏の境地や大乗の悟りにそなわる四つの徳のこと）の風にそよめき、心から楽しんでおられるのですよ、私たちもそのなかに加わって、遊び楽

しんでいけるのは、もう間近(まぢか)です。信心(しんじん)が弱(よわ)くてはこのようなすばらしい所(ところ)へけっして行(い)くことができないのです。

民のほねをくだける白米、人の血をしぼれるがごとくなる
ふるさけを、仏・法華経にまいらせ給える女人の成仏
得道、疑うべしや。

（378 妙法尼御返事
御本仏の大慈悲 1999ページ－13行）

ただ日蓮一人ばかり日本国に始めてこれを唱えまいらすること、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華経とこれを唱うることは一人なり。念仏申す人は千万なり。予は無縁の者なり。念仏の方人は有縁なり、高貴なり。しかれども、師子の声には一切の獣、声を失う。虎の影には犬恐る。日天東に出でぬれば、万星の光は跡形もなし。法華経のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華経の声出来しては、師子と犬と、日輪と星との光くらべのご

とし。譬(たと)えば、鷹(たか)と雉(きじ)とのひとしからざるがごとし。等

（379 松野殿後家尼御前御返事（まつのどののごけあまごぜんごへんじ）

御本仏(ごほんぶつ)の境涯(きょうがい)・確信(かくしん) 2003ページ－6行）

法華経は、初めは信ずるようなれども、後遂ぐることかたし。譬えば、水の風にうごき、花の色の露に移るがごとし。

（382松野殿女房御返事（澄心仏住の事）持続2007ページ－6行）

妙荘厳王と申せし王は、悪王なりしかども、御太子、浄蔵・浄眼の導かせ給いしかば、父母二人共に法華経を御信用有って、仏にならせ給いしぞかし。

（383 浄蔵浄眼御消息 親子・孝養 2008ページ－17行）

もしやのこと候わば、くらき闇に月の出ずるがごとく、妙法蓮華経の五字、月と露れさせ給うべし。その月の中には、釈迦仏・十方の諸仏、乃至前に立たせ給いし御子息の露れさせ給うべしと思しめせ。

（383 浄蔵浄眼御消息
遺族の方への激励
2009ページ－8行）

法門のことは、さどの国へながされ候いし已前の法門は、ただ仏の爾前の経とおぼしめせ。

（385 三沢抄）

求道（行学の二道）2013ページ－8行）

（日蓮大聖人の）法門は、佐渡へ流罪された以前のものについては、釈尊の一代聖教のなかにおける爾前教の立場のように思いなさい。

内房　おんこと　おん年寄　たま　おん渡

うつぶさの御事は、御としよらせ給いて御わたりありし、

労　思　そうら　氏神

いたわしくおもいまいらせ候いしかども、「うじがみへ

詣　序　そうら　見参　い

まいりてあるついで」と候いしかば、げんざんに入るな

さだ　罪深　ゆえ　かみ　しょじゅう

らば定めてつみふかかるべし。その故は、神は所従な

ほけきょう　しゅくん　しょじゅう　序　しゅくん

り、法華経は主君なり。所従のついでに主君への

見参　せけん　恐　そうろう　うえ　あま　おんみ

げんざんは世間にもおそれ候。その上、尼の御身になり

たま　ほとけ　先　おん失

給いては、まず仏をさきとすべし。かたがたの御とがあ

見参　そうろう　あま御前ひとり

りしかば、げんざんせず候。これまた尼ごぜん一人には

限　ほか　ひとびと　下部湯　序　もう

かぎらず、その外の人々も、「しもべのゆのついで」と申

す者をあまたおいかえして候。尼ごぜんは、おやのごとくの御としなり。御なげき、いたわしく候いしかども、この義をしらせまいらせんためなり。

（385 三沢抄）

信仰者の姿勢 2014 ページ－5 行）

目連が色心は父母の遺体なり。目連が色心仏になりしかば、父母の身もまた仏になりぬ。

（387 盂蘭盆御書）

報恩 2025

ページ 6 行

日蓮が法華経を弘通し候を、上一人より下万民に至るまで御あだみ候故に、一切の神を敬い一切の仏を御供養候えども、その功徳還って大悪となり、やいとの還って悪瘡となるがごとく、薬の還って毒となるがごとし。

（388治部房御返事

罰2028ページー17行）

たとい十方三世の諸仏の怨敵なれども、法華経の一句を信じぬれば、諸仏捨て給うことなし。

（388 治部房御返事）

功徳 2029 ページー8 行

妙法蓮華経の徳、あらあら申し開くべし。毒薬変じて薬となる。妙法蓮華経の五字は、悪変じて善となる。玉泉と申す泉は石を玉となす。この五字は凡夫を仏となす。

（389 内房女房御返事

変毒為薬 2033 ページ－13 行）

そもそも地獄と仏とはいずれの所に候ぞとたずね候えば、あるいは地の下と申す経もあり、あるいは西方等と申す経も候。しかれども、委細にたずね候えば、我らが五尺の身の内に候とみえて候。

（390 十字御書）

寂光土2036ページー10行）

いったい、地獄の世界や仏の世界はどんなところにあるのかとたずねてみると、あるいは地の下に地獄があると説く経文もあり、あるいは西方の世界に仏は住んでおられると説く経文もあります。

しかしながら、くわしくたずねていくと、私(わたし)たちの五尺(ごしゃく)の体(からだ)のなかにあることがわかります。

われ　　こころ　うち　ちち　悔　　はは　疎　　ひと
我らが心の内に父をあなずり母をおろかにする人は、
じごく　ひと　こころ　うち　そうろう　たと　はちす　種　なか　はな
地獄その人の心の内に候。譬えば、蓮のたねの中に華
み　見
と菓とのみゆるがごとし。

（390 むしもちごしょ 十字御書

せいめい　そんげん
生命とその尊厳 2036 ページ－12 行）

我ら凡夫（われぼんぷ）は、まつげのちかき（睫近）と虚空（こくう）のとおき（遠）とは見候（みそうろう）ことなし。

（390十字御書（むしもちごしょ）人間弱点（にんげんじゃくてん）へのいましめ2036ページー14行）

わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心より出でて我をかざる。

（390 十字御書）

言動・振る舞い 2037ページー5行）

わざわいというのは自分の言葉から起きて、身をほろぼすもので す。幸福は心（信心）より発して、自分自身をかざっていくのです。

今、日本国の、法華経をかたきとして、わざわいを千里の外よりまねき出だせり。これをもっておもうに、今また法華経を信ずる人は、さいわいを万里の外よりあつむべし。

（390 十字御書）

福運2037ページー8行）

いま日本の国の人びとは法華経（御本尊）を誹謗して、災いを千里の外から招き寄せています。このことから思うことは、反対に、御本尊を信ずる人は、幸福を万里の外から集めることができる

のです。

己が心は本よりつたなき心なれば、はかばかしきことなし。

法華経と申すは、随自意と申して、仏の御心をとかせ給う。仏の御心はよき心なるゆえに、たといしらざる人も、この経をよみたてまつれば利益はかりなし。麻の中のよもぎ、つつの中のくちなわ、よき人にむつぶもの、なにとなけれども心もふるまいも言もなおしくなるなり。法華経もかくのごとし。なにとなけれどもこの経を信じぬる人をば、仏のよきものとおぼすなり。

（393 衆生身心御書（しゅじょうしんしんごしょ）
信仰者（しんこうしゃ）の姿勢（しせい）2040ページ－14行）

露積

つゆつもりて河となる、河つもりて大海となる、塵つもりて山となる、山かさなりて須弥山となれり。小事つもりて大事となる。

（393 衆生身心御書

地道 2046 ページー4行）

当世（とうせい）は世（よ）乱（みだ）れて民（たみ）の力（ちから）弱（よわ）し。

（393 衆生身心御書（しゅじょうしんしんごしょ））

仏法（ぶっぽう）と社会（しゃかい）2047ページー5行）

願わくは、我が弟子等、師子王の子となりて、群狐に笑わるることなかれ。過去遠々劫より已来、日蓮がごとく身命をすてて強敵の科を顕す師には値いがたかるべし。国王の責めなおおそろし、いおうや閻魔のせめをや。日本国のせめは水のごとし。ぬるるをおそるることなかれ。閻魔のせめは火のごとし。裸にして入るとおもえ。

（394 閻浮提中御書

勇気・忍耐 2048ページ－13行）

念願することは、私（日蓮）の弟子たちが師子王の子となっ

て、狐たちのような謗法の輩に笑われることがあってはなりません。遠い過去の昔から、正法弘通のために起きる強敵の過ちをこの日蓮のように身命を捨ててあらわしていきなさい。師子にはあいがたいのです。また、日本国の国主の責めでさえ恐ろしいものです。まして閻魔法王の責めはなおさら恐ろしいのです。ちょうど世法である国家の責めは水にぬれるようなものであり、信心修行のためには恐れることはありません。しかし閻魔法王の責めは火にあぶられるようなものであり、裸にされて地獄の苦しみを受けると思いなさい。

仏法を信じて今度生死をはなるる人の、すこし心のゆるなるをすすめんがために、疫病を仏のあたえ給う。はげます心なり、すすむる心なり。

（394 閻浮提中御書）

病気 2048 ページー17 行

我より後に来り給わん人々は、この車にめされて霊山へ
御出であるべく候。日蓮も同じ車に乗って御迎えに
まかり向かうべく候。

（395大白牛車御消息

臨終2050ページ-15行）

いのちと申す物は、一切の財の中に第一の財なり。「三千界に遍満するも、身命に直するもの有ることなし」ととかれて、三千大千世界にみてて候財も、いのちにはかえぬことに候なり。されば、いのちはともしびのごとし。食はあぶらのごとし。

（397白米一俵御書）

生命とその尊厳

2052ページー9行）

生命というものは、あらゆる財宝のなかでも最高の財宝です。「三千界に遍満する財宝といっても、身命に値するものはあり

えない」と経文に説かれているように、世界中に満ちあふれさせた財宝をもってしても、生命にはかえられないほど尊いものなのです。したがって生命はともしびのようなものであり、それを支える食物は油のようなものなのです。

財あるも財なきも、命と申す財にすぎて候　財は候わず。

（397　白米一俵御書

生命とその尊厳　2052ページー16行）

まことのみちは世間の事法にて候。金光明経には「もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり」ととかれ、涅槃経には「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」と仰せられて候を、妙楽大師、法華経の第六の巻の「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せず」の経文に引き合わせて、心をあらわされて候には、彼々の二経は深心の経々なれども、彼の経々はいまだ心あさくして法華経に及ばざれば、世間の法を仏法に依せてしらせて候。法華経はしから

ず。やがて世間の法が仏法の全体と釈せられて候。

爾前の経の心々は、心より万法を生ず。譬えば、心は大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしからず。心すなわち大地、大地則ち草木なり。

爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。

（397 白米一俵御書

仏法と社会 2053 ページー12 行）

真実の道（仏法）は、世間の道理そのものです。（中　略）

「金光明経と涅槃経の二経は、深い意味をもった経ではあるけれども、いまだ心が浅く、法華経には及ばない。それらは、世間の法を仏法に依るものとして教えているのである。法華経はそうではない。世間の法が、そのまま仏法の全体である」と妙楽大師は釈されています。爾前経の元意は、心から万法が生じていくというのです。たとえば、心は大地のようなものであり、そこから生ずる草木は万法のようなものであると。しかし法華経はそうではなく、心がそのまま大地であり、大地即草木という考え方なので

す。爾前経では、心の澄むのを月にたとえ、心が清らかなのを花にたとえますが、法華経は、月こそ心そのものであり、花こそ心そのものであると説く法門なのです。

悪は多けれども、一善にかつことなし。譬えば、多くの火あつまれども、一水にはきえぬ。この一門も、またかくのごとし。

（398 異体同心事）

仏法は勝負 2055ページ－2行

悪がどんなに多くても一善（正しい仏法＝御本尊）に勝つことはありません。譬えば多くの火が集まっても、水には消されてしまいます。日蓮の一門も、またこれと同じ道理です。（今は無勢であっても仏法が正しいため、かならず広宣流布していくのです）

灸治(きゅうじ)をしてやまいをいやし、針治(しんじ)にて人(ひと)をなおすがごとし。当時(とうじ)はなげくとも、後(のち)は悦(よろこ)びなり。病癒治歎

（398異体同心事(いたいどうしんじ)

宿命転換(しゅくめいてんかん)2055ページー11行）

現身に改悔をおこしてあるならば、阿闍世王の仏に帰して白癩をやめ、四十年の寿をのべ、無根の信と申す位にのぼりて、現身に無生忍をえたりしがごとし。

（398異体同心事）

懺悔2055（ページー14行）

日本の国の人びとが、自分自身の謗法の罪を悔い改めるならば、阿闍世王が釈尊に帰依して白癩という悪瘡と高熱をともなう伝染病をなおし、四十年の寿命を延ばして、無根の信という位にのぼって、現身に悟りを得たように、大功徳をうけることがで

きるのです。

そもそも因果のことわりは華と果とのごとし。千里の野の枯れたる草に蛍火のごとくなる火を一つ付けぬれば、須臾に一草二草、十・百・千・万草につきわたりてもゆれば、十町二十町の草木一時にやけつきぬ。竜は一滴の水を手に入れて天に昇りぬれば、三千世界に雨をふらし候。

（399新池殿御消息広宣流布2056ページー9行）

かえりて、あるいはのり罵、あるいはうち打、あるいは処を追い、あるいは讒言して流罪し死罪に行わるれば、貧なる者は富めるをへつらい諂、賤しき者は貴きを仰ぎ随、無勢は多勢にしたがうことなれば、たまたま法華経を信ずるようなる人々も、世間をはばかり憚、人を恐れて、多分は地獄へ堕つること不便なり。

（399 新池殿御消息 人間弱点へのいましめ 2058ページー13行）

諸経は随他意なり。仏、一切衆生の心に随い給う故に。法華経は随自意なり。一切衆生を仏の心に随えたり。諸経は仏説なれども、これを信ずれば、衆生の心にて永く仏にならず。法華経は仏説なり、仏智なり。一字一点もこれを深く信ずれば、我が身即ち仏となる。

（399新池殿御消息

妙法の偉大さ2059ページー6行）

白紙を墨に染むれば黒くなり、黒漆に白物を入るれば白くなるがごとし。毒薬変じて薬となり、衆生変じて仏となる。故に妙法と申す。

（399 新池殿御消息

変毒為薬 2059ページ-10行）

曲き素直なわ憎偽もの正まがれる木はすなおなる縄をにくみ、いつわれる者はただしき政(まつりごと)をば心(こころ)合(おも)にあわず思うなり。

（399 新池殿御消息(にいけどのごしょうそく)

人間弱点(にんげんじゃくてん)へのいましめ 2059ページー14行）

かかる所へ尋ね入らせ給いて候こと、いかなる宿習なるらん。釈迦仏は御手を引き、帝釈は馬となり、梵王は身に随い、日月は眼となりかわらせ給いて入らせ給いけるにや。ありがたし、ありがたし。

（399 新池殿御消息 求道（行学の二道）2061ページ－4行）

うれしきかな、末法流布に生まれあえる我ら。かなしきかな、今度この経を信ぜざる人々。そもそも、人界に生を受くるもの、誰か無常を免れん。さあらんにとっては、何ぞ後世のつとめをいたさざらんや。

（400新池御書）

信仰者の姿勢

2062ページー6行）

うれしいことです。末法に妙法が広まっていくときに生まれあわせた私たちのなんと福運のあることよ。悲しいことです。今この経（御本尊）を信じられない人びとは。およそ人間としてこの世に

生を受けた人は、誰一人として無常（死）からまぬかれることはできません。ですから、信心をとって後世のために仏道修行をするべきではないでしょうか。

終に世間の悪業・衆罪は須弥のごとくなれども、この経にあい奉りぬれば、諸罪は霜露のごとくに法華経の日輪に値い奉って消ゆべし。しかれども、この経の十四謗法の中に一も二もおかしぬれば、その罪消えがたし。

（400 新池御書

罪障消滅 2062ページー13行）

結局、世間の悪業やさまざまな罪は須弥山のように多くあっても、法華経にめぐりあえたならば、すべての罪業は霜や露のよう

に、法華経の日輪にあって消えてしまうでしょう。しかしながら、法華経に説かれている十四謗法のなかの一つでも二つでもおかしたならば、その罪は消えにくいのです。

かかる悪所にゆけば、王位・将軍も物ならず。獄卒の呵責にあえる姿は、猿をまわすに異ならず。この時は、いかでか名聞名利・我慢偏執有るべきや。

（400新池御書）

人生・生き方2063ページー4行）

このような悪い所（地獄）へいけば、王の位も将軍という肩書きも何の役にもたちません。地獄の役人にせめられる姿は、猿が猿まわしに扱われているのと同じです。このときは、世間のどんな名誉も財産も、慢心も偏心も何の役にもたたなくなってしまう

のです。

皆人のこの経を信じ始むる時は信心有るように見え候が、中ほどは信心もよわく、僧をも恭敬せず、供養をもなさず、自慢して悪見をなす。これ恐るべし、恐るべし。始めより終わりまで、いよいよ信心をいたすべし。さなくして、後悔やあらんずらん。譬えば、鎌倉より京へは十二日の道なり。それを十一日余り歩みをはこびて、今一日に成って歩みをさしおきては、何として都の月をば詠め候べき。何としてもこの経の心をしれる僧に近づき、いよいよ法の道理を聴聞して、信心の歩みを運ぶべ

し。

（400 新池御書）

持続2063ページー12行

だれでもこの妙法を信じ始めたときは信心があるように見えますが、中間では信心も弱くなり、僧（法華経の行者）を尊敬せず、供養もしないで、慢心を起こして悪い考えを抱くのです。これは実に恐るべきことです。はじめより終わりまで、ますます信心をまっとうしていきなさい。そうでないと後悔することでしょう。たとえば、鎌倉から京までは十二日の道のりです。それを十一日あ

まり歩いて、あと一日となった時に歩くのをやめたのでは、どうして京都の月をながめることができましょうか。なんとしても、この経（法華経、御本尊）の心を知っている僧に近づいて、ますます仏法の道理を聞いて、信心の歩みを進めていきなさい。

ああ、過ぎにし方のほどなきをもって知んぬ。我らが命、今幾ほどもなきことを。春の朝に花をながめし時ともない遊びし人は、花とともに無常の嵐に散りはて、名のみ残りてその人はなし。花は散りぬといえども、またこん春も発くべし。されども消えにし人は、またいかならん世にか来るべき。秋の暮れに月を詠めし時戯れむつびし人も、月とともに有為の雲に入って後、面影ばかり身にそいて物いうことなし。月は西山に入るといえども、またこん秋も詠むべし。しかれども、かくれし人は

今いずくにか住みぬらん、おぼつかなし。

無常の虎のなく音は耳にちかづくといえども、聞いて驚くことなし。屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん。雪山の寒苦鳥は、寒苦にせめられて、夜明けなば栖つくらんと鳴くといえども、日出でぬれば、朝日のあたたかなるに眠り、忘れて、また栖をつくらずして一生虚しく鳴くことをう。一切衆生もまたまたかくのごとし。地獄に堕ちて炎にむせぶ時は、願わくは今度人間に生まれて、諸事を閣いて三宝を供養し、後世菩提をたすからんと願

えども、たまたま人間に来る時は、名聞名利の風はげしく、仏道修行の灯は消えやすし。無益のことには財宝をつくすにおしからず、仏法僧にすこしの供養をなすにはこれをものうく思うこと、これただごとにあらず。地獄の使いのきおうものなり。寸善尺魔と申すはこれなり。

（400新池御書

人生・生き方2063ページ－17行）

賤しき者なりとも、この経の謂れを知りたらんものを
ば、生身の如来のごとくに礼拝・供養すべし。これ経文
なり

（400新池御書

信仰者の姿勢2065ページ－4行）

いかなる智者・聖人も無間地獄を遁るべからず。またそれにも近づくべからず。与同罪、恐るべし、恐るべし。

（400新池御書

謗法のいましめ2065ページー9行）

（謗法の者は）どのような智者、聖人も、無間地獄の苦しみから逃れることはできません。またそれらの人に近づいてはなりません。与同罪（同じ罪をともにうけること）を恐れるべきです。

譬えば、本性よき人なれども、酒に酔いぬればあしき心出来し、人のためにあしきがごとし。

（400新池御書

人間弱点へのいましめ2066ページー3行）

信心弱くして成仏ののびん時、某をうらみさせ給うな。譬えば、病者に良薬を与うるに、毒を好んでくいぬれば、その病愈えがたき時、我がとがとは思わず、還って医師を恨むるがごとくなるべし。

（400新池御書

信・不信2067ページー14行）

この経の信心と申すは、少しも私なく、経文のごとくに、人の言を用いず、法華一部に背くことなければ、仏に成り候ぞ。

（400新池御書

信・不信2067ページ-17行）

仏に成り候ことは別の様は候わず。南無妙法蓮華経と他事なく唱え申して候えば、天然と三十二相八十種好を備うるなり。「我がごとく等しくして異なることなし」と申して、釈尊程の仏にやすやすと成り候なり。

（400新池御書）

勤行・唱題2068ページ－1行）

仏になるということは特別なことではありません。ただ南無妙法蓮華経とほかのことをさしおいてひたすら唱えていくなら、自然に生命に仏の相である三十二相八十種好をそなえてい

けるのです。法華経方便品第二に「我が如く等しくして異なること無からしめん」とあるように、釈尊のような仏にやすやすとなっていけるのです。

鳥の卵は始めは水なり。その水の中より、誰かなすともなけれども、觜よ目よと厳り出で来て、虚空にかけるがごとし。

（400 新池御書

自らの成長 2068 ページー4 行）

有解無信とて、法門をば解って信心なき者は、さらに成仏すべからず。有信無解とて、解はなくとも信心あるものは、成仏すべし。皆この経の意なり。私の言にはあらず。されば、二の巻には「信をもって入ることを得たり。己が智分にあらず」とて、智慧第一の舎利弗も、ただこの経を受け持ち信心強盛にして仏になれり、己が智慧にて仏にならずと説き給えり。舎利弗だにも智慧にては仏にならず。いわんや、我ら衆生、少分の法門を心得たりとも、信心なくば仏にならんことおぼつかな

有解無信 成仏すべからず 有信無解 成仏すべし 皆この経の意なり 二の巻には 信をもって入ることを得 己が智分にあらず 智慧第一の舎利弗も 受け持ち信心強盛にして 仏になれり 己が智慧にて 仏にならずと説き給えり 舎利弗だにも智慧にては仏にならず 我ら衆生 少分の法門を心得たりとも 信心なくば 仏にならんことおぼつかな

し。

（400 新池御書

信・不信 2068ページ－10行）

有解無信といって、たとえ仏法を理解していても、信心のない人はけっして成仏することはできません。反対に、有信無解といって、仏法の法理を理解できていなくても信心がある人は成仏することができるのです。（中略）（智慧第一の舎利弗でさえ、自分の智慧では成仏できなかったのですから）まして、私たち凡夫が少しぐらい仏法の道理をわかったとしても、信心がなければ成仏す

ることはおぼつかないのです。

後世を願わん者は、名利名聞を捨てて、いかに賤しき者なりとも法華経を説かん僧を生身の如来のごとくに敬うべし。

（400新池御書

求道（行学の二道）2068ページ-17行）

伝教大師の御釈に云わく「川獺祭魚のこころざし、林烏の父祖の食を通ず。鳩鴿三枝の礼あり、行雁連を乱らず、羔羊踞って乳を飲む。賤しき畜生すら礼を知ること、かくのごとし。何ぞ人倫においてその礼なからんや」とあそばされたり〈取意〉。

（400 新池御書

言動・振る舞い 2069 ページー6 行）

それにつきても、母の御恩忘れがたし。胎内に九月の間の苦しみ、腹は鼓をはれるがごとく、頸は針をさげたるがごとし。気は出ずるより外に入ることなく、色は枯れたる草のごとし。臥せば腹もさけぬべし。坐すれば五体やすからず。かくのごとくして産も既に近づきて、腰はやぶれてきれぬべく、眼はぬけて天に昇るかとおぼゆ。かかる敵をうみ落としなば、大地にもふみつけ、腹をもさきて捨つべきぞかし。さはなくして、我が苦を忍んで急ぎいだきあげて血をねぶり、不浄をすすぎて胸にかきつけ、懐き

抱
かかえて三箇年が間慇懃に養う。母の乳をのむこと、
一百八十斛三升五合なり。この乳のあたいは、一合なり
とも三千大千世界にかえぬべし。されば、乳一升のあた
いを撿えて候えば、米に当つれば一万一千八百五十斛
五升、稲には二万一千七百束に余り、布には三千
三百七十段なり。いかにいわんや、一百八十斛
三升五合のあたいをや。

（401刑部左衛門尉女房御返事
出産2072ページ－12行）

これら（親が子を守る姿）をみるにつけても、母の恩は忘れがたいものです。子が胎内にいる九か月の間の母親の苦しみというものは、腹は鼓をはったようであり、頸は針をさげたようなものです。呼吸ははく一方で吸いこめず、顔色は悪く、枯れ草のようになってしまいます。ふせれば腹が裂けそうに思われ、座れば体中が苦しくなります。このようにして、お産が近づけば、あまりの痛さに腰は破れて切れてしまいそうであり、眼はぬけて天に昇るかと思われます。このような苦しい目にあわせる敵を産み落としたならば大地にふみつけ、腹をさいて捨ててもかまわないであろうに、そう

はせずに、自分の苦しみを忍んで、急いで抱きあげて、血をぬぐいとり、きたないものを洗いおとし、胸にかきあげ抱きかかえて三か年の間心をこめて育てるのです。その間に、子が母の乳を飲む量は百八十石三升五合あまりになります。この乳の値はたとえ一合といえども全世界にも値するほど貴重なものです。そこで乳一升の値をかんがえでみるならば、米に当てはめれば一万一千八百五十石五升、稲ならば二万一千七百束よりも多く、布ならば三千三百七十段となります。まして百八十石三升五合の値はあまりに膨大なものなのです。

構えて構えて、所領を惜しみ、妻子を顧み、また人を憑んであやぶむことなかれ。

ただひとえに思い切るべし。今年の世間を鏡とせよ。そこばくの人の死ぬるに、今まで生きて有りつるは、このことにあわんためなりけり。これこそ宇治川を渡せし所よ。これこそ勢多を渡せし所よ。名を揚ぐるか、名をくだすかなり。

（404 弥三郎殿御返事
信仰者の姿勢
2085ページ－6行）

心して領地（財産）を惜しんだり、妻や子を心にかけたり、また他人を頼みにしたりして、恐れ危ぶむ心をもってはなりません。ただひとえに覚悟を固めて決定して信心と取り組んでいきなさい。今年の世間の様相を鏡としていきなさい。多くの人が死んでいくなかで、今まで生きてこられたのは、この重大事にあわれるためだったのです。今こそ、勝負を決する宇治川を渡るところであり、勢多を渡るところなのです。勝って名をあげるか、負けて名を下すかの堺です。

ここに日蓮（にちれん）、いかなる不思議（ふしぎ）にてや候（そうろう）らん、竜樹（りゅうじゅ）・天親等（てんじんとう）、天台（てんだい）・妙楽等（みょうらくとう）だにも顕（あらわ）し給（たま）わざる大曼荼羅（だいまんだら）を、末法（まっぽう）二百余年（にひゃくよねん）の比（ころ）、はじめて法華弘通（ほっけぐつう）の旗（はた）印（じるし）として顕（あらわ）し奉（たてまつ）るなり。これ全（まった）く日蓮（にちれん）が自作（じさく）にあらず。多宝塔中（たほうとうちゅう）の大牟尼世尊（おおむにせそん）、分身（ぶんしん）の諸仏（しょぶつ）、すりかたぎたる本尊（ほんぞん）なり。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）（にちにょごぜんごへんじ　ごほんぞんそうみょうしょう）
御本尊（ごほんぞん）は仏（ほとけ）の生命（せいめい）2086ページー14行）

これらの仏菩薩・大聖等、総じて序品列坐の二界八番の雑衆等、一人ももれずこの御本尊の中に住し給い、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる。これを本尊とは申すなり。

（405日女御前御返事（御本尊相貌抄）御本尊は仏の生命2087ページー6行）

かかる御本尊を供養し奉り給う女人、現在には幸いを
まねき、後生には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、
闇に灯のごとく、険難の処に強力を得たるがごとく、
かしこへまわりここへより、日女御前をかこみまぼり給う
べきなり。

（405日女御前御返事（御本尊相貌抄）
功徳2087ページー13行）

このような尊い御本尊を供養する女性は、今世には幸せを招き
よせ、衆生には、この御本尊が左右前後に立ちそって、あたかも

闇夜に燈火を得たように、また険難な山路で強力（力の強い従者）を得たように、彼方へまわり、ここに寄りそって、どこにあって日女御前のまわりを取り囲んで守るでしょう。

この御本尊もただ信心の二字におさまれり。「信をもって入ることを得たり」とは、これなり。日蓮が弟子檀那等、「正直に方便を捨つ」「余経の一偈をも受けず」と無二に信ずる故によって、この御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのもし、たのもし。いかにも後生をたしなみ給うべし、たしなみ給うべし。あなかしこ。南無妙法蓮華経とばかり唱えて仏になるべきこと、もっとも大切なり。信心の厚薄によるべきなり。

仏法の根本は信をもって源とす。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄））

信・不信 2088ページ－5行）

この御本尊も、ただ信心の二字に収まっているのです。「信を以って入ることを得たり」というのは、このことです。日蓮の弟子や檀那たちは「正直に方便の教えを捨てて」の経文や「余経（法華経以外のあらゆる経）の一偈をも受け持ってはいけない」の経文のとおり、法華経（御本尊）のみを唯一無二に信じ、勤行・唱題していくことによって、この御本尊の宝塔の中に入ることができるのです。（中略）「南無妙法蓮華経」とだけ唱えて、成仏していく

ことがもっとも大切（たいせつ）です。それはひとえに信心（しんじん）の厚薄（こうはく）（強弱（きょうじゃく））によるのです。仏法（ぶっぽう）の根本（こんぽん）は、信（しん）をもって源（みなもと）とするのです。

彼の漢王も、疑わずして大臣のことばを信ぜしかば、立つ波こおり行くぞかし。石に矢のたつ、これまた父のかたきと思いし至信の故なり。いかにいわんや仏法においてをや。

（405日女御前御返事（御本尊相貌抄）一念の力2088ページー17行）

あの漢王（光武帝）も、臣下の言葉を疑わずに信じた故に、それまで波の立っていた水面がたちまちに凍っていったのです。石に矢が立ったのも、父のかたきと信じた李広の一念の強さ故です。ま

して、仏法（ぶっぽう）においてはなおさらのこと、信（しん）ずる一念（いちねん）の強（つよ）さが大切（たいせつ）なのです。

法華経をば経のごとく持つ人々も、法華経の行者を、あるいは貪・瞋・癡により、あるいは世間のことにより、あるいはしなじなのふるまいによって憎む人あり。これは法華経を信ずれども信ずる功徳なし。かえりて罰をかぼるなり。

（406日女御前御返事（嘱累品等大意の事）罰2093ページー1行）

法華経を経文どおりに持つ人びとであっても法華経の行者を、あるいは貪・瞋・癡等の煩悩により、あるいは世間のことにより、

あるいはさまざまな言動（げんどう）がよくないといって憎（にく）む人（ひと）がいます。このような人（ひと）は法華経（ほけきょう）を信（しん）じてはいても、信（しん）じた功徳（くどく）はなく、かえって罰（ばち）を受（う）けるのです。

罰に四つあり。総罰・別罰・冥罰・顕罰なり。聖人をあだめば、総罰一国にわたる。また四天下、また六欲・四禅にわたる。賢人をあだめば、ただ敵人等なり。今、日本国の疫病は総罰なり。定めて聖人の国にあるをあだむか。山は玉をいだけば草木かれず。国に聖人あればその国やぶれず。山の草木のかれぬは玉のある故とも愚者はしらず。国のやぶるるは聖人をあだむ故とも愚人は弁えざるか。

406 日女御前御返事（嘱累品等大意の事）

罰（ばち）
2094ページー2行）

妙荘厳王品と申すは、殊に女人の御ために用いることなり。妻が夫をすすめたる品なり。末代に及んでも、女房の男をすすめんは、名こそかわりたりとも功徳はただ浄徳夫人のごとし。

いおうや、これは女房も男も共に御信用あり。鳥の二つの羽そなわり、車の二つの輪かかれり。何事か成ぜざるべき。天あり地あり、日あり月あり、日てり雨ふる、功徳の草木花さき菓なるべし。

（406）日女御前御返事（嘱累品等大意の事）

婦人（ふじん）と信仰（しんこう）2095ページー5行）

この宝塔品はいずれのところにか只今ましますらんと
かんがえ候えば、日女御前の御胸の間、八葉の心蓮華の
内におわしますと日蓮は見まいらせて候。

（406日女御前御返事（嘱累品等大意の事）
一生成仏・仏界湧現2096ページー3行）

周の文王は老いたる者をやしないていくさに勝ち、そのすえさんじゅうしちだいはっぴゃくねんあいだまつだいにはひが事ありしかども、根本の功によりてさかえさせ給う。

（406日女御前御返事（嘱累品等大意の事））

指導者2096ページ-14行）

周の文王は、老いた者を大切に養って戦いに勝ち、その子孫は三十七代八百年の間、末代には悪政の時代もありましたが、根本である文王の功によって長く栄えることができたのです。

末法のきょうこのごろ法華経の一句一偈のいわれをも尋ね問う人はありがたし。

（407 妙法尼御前御返事（一句肝心の事））

求道（行学の二道）2098ページー8行）

末法の今日において、法華経の一句一偈の趣旨をたずね問う人はまれです。

この法華経には、我らが身をば法身如来、我らが心をば報身如来、我らがふるまいをば応身如来と説かれて候えば、この経の一句一偈を持ち信ずる人は、皆この功徳を具そなえ候。

（407妙法尼御前御返事（一句肝心の事）
一生成仏・仏界湧現2098ページー13行）

法華経一部の肝心は南無妙法蓮華経の題目にて候。
朝夕御唱え候わば、正しく法華経一部を真読にあそばすにて候。二返唱うるは二部、乃至百返は百部、千返は千部、かように不退に御唱え候わば、不退に法華経を読む人にて候べく候。

（407妙法尼御前御返事（一句肝心の事）
勤行・唱題2099ページ－8行）

法華経一部八巻二十八品の根本は、南無妙法蓮華経の題目です。朝夕題目を唱えるならば、まさに法華経二十八品のすべてを

本当の意味で読まれてことになるのです。題目を二遍唱えれば、法華経二十八品を二回読んだことになり、百遍であれば百回、千遍であれば千回読んだことになります。このようにして、退転せずに題目を唱えていくならば、不退転に法華経を読む人になるのです。

さて、この経の題目は、習い読むことなくして大いなる善根にて候。悪人も女人も、畜生も地獄の衆生も、十界ともに即身成仏と説かれて候は、水の底なる石に火のあるがごとく、百千万年くらき所にも灯を入れぬれば明かくなる。世間のあだなるものすら、なお、かように不思議あり。いかにいわんや、仏法の妙なる御法の御力をや。我ら衆生の悪業・煩悩・生死果縛の身が、正・了・縁の三仏性の因によりて、即ち法・報・応の三身と顕れんこと、疑いなかるべし。

（407 妙法尼御前御返事（一句肝心の事））

一生成仏・仏界湧現2100ページー4行

御消息（ごしょうそく）に云（い）わく「みょうほうれんげきょうを、よるひる
となえまいらせ、すでにちかく（近）なりて、二声（ふたこえ）こうしょうに
となえ（唱）、乃至（ないし）いきて候（そうら）いし時（とき）よりも、なおいろもしろ
く、かたち（形）もそんぜ（損）ず」

（408 妙法尼御前御返事（みょうほうあまごぜんごへんじ）（臨終一大事（りんじゅういちだいじ）の事（こと））

臨終（りんじゅう）2101ページー6行）

法華経（ほけきょう）に云（い）わく「如是相乃至本末究竟等（にょぜそうないしほんまつくきょうとう）」云々（うんぬん）。大論（だいろん）に云（い）わく「臨終（りんじゅう）の時（とき）に色黒（いろくろ）きは、地獄（じごく）に堕（お）つ」等（とう）云々（うんぬん）。

（408妙法尼御前御返事（みょうほうあまごぜんごへんじ）（臨終一大事（りんじゅういちだいじ）の事（こと））

臨終（りんじゅう）2101ページー8行）

されば、まず臨終のことを習って後に他事を習うべし

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）
臨終 2101
2101ページ－13行）

ゆえに初めに臨終ということについて学んでから、その後でその他の事柄について学んでいくべきです。

法華経は実語の中の実語なり。真実の中の真実なり。

（408妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）

妙法の偉大さ2102ページ－14行）

白粉の力は、漆を変じて雪のごとく白くなす。須弥山に近づく衆色は、皆金色なり。法華経の名号を持つ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いおうや、無始の善根、皆変じて金色となり候なり。

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）
罪障消滅 2103ページ－2行）

白粉は漆をも雪のように白くし、須弥山に近づけばすべてが金色になります。それと同じように法華経（御本尊）を持ち題目を

唱える人は、今世だけでなく遠い過去からの 漆 のような黒業もま
っ白な善業となり、限りない 昔 から積んできた善根はすべて金色
となって 輝 くのです。

故聖霊（こしょうりょう）、最後臨終（さいごりんじゅう）に南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）えさせ給（たま）いしかば、一生乃至無始（いっしょうないしむし）の悪業（あくごう）変（へん）じて仏（ほとけ）の種（たね）となり給（たも）う。煩悩即菩提（ぼんのうそくぼだい）・生死即涅槃（しょうじそくねはん）・即身成仏（そくしんじょうぶつ）と申（もう）す法門（ほうもん）なり。かかる人の縁（ひとえん）の夫妻（ふさい）にならせ給（たま）えば、また女人成仏（にょにんじょうぶつ）も疑（うたが）いなかるべし。

（408妙法尼御前御返事（みょうほうあまごぜんごへんじ）（臨終一大事（りんじゅういちだいじ）の事（こと））

遺族（いぞく）の方（かた）への激励（げきれい）2103ページ－5行）

謗法と申す罪をば、我もしらず、人も失とも思わず、ただ「仏法をならえば貴し」とのみ思って候ほどに、この人も、またこの人にしたがう弟子檀那等も、無間地獄に堕つることあり。

（409 妙法比丘尼御返事 謗法のいましめ 2107ページ－7行）

日月は仏法をなめて威光勢力を増し給うと見えて候。

（411妙一女御返事（即身成仏法門）

諸天の加護2130ページ-11行）

日蓮（にちれん）は、今（いま）、時（とき）を得（え）たり。あにこの所嘱（しょぞく）の本門（ほんもん）を弘（ひろ）めざらんや。

（412妙一女御返事（みょういちにょごへんじ）（事理成仏抄（じりじょうぶっしょう））

時（とき）を知（し）る2133ページー12行）

女人の身として度々かくのごとく法門を尋ねさせ給うことは、ひとえに只事にあらず。

（412 妙一女御返事（事理成仏抄））

求道（行学の二道）2134ページー6行）

叶い叶わぬは御信心により候べし。全く日蓮がとがにあらず。

（413 日厳尼御前御返事

祈り 2135 ページー8 行）

あなたの願いが叶うか叶わないかは、あなたの御信心によるのです。（願いが叶わなくても）まったく日蓮の失ではありません。

一切経の中にこの寿量品ましまさずば、天に日月無く、国に大王なく、山海に玉なく、人にたましい無からんがごとし。されば、寿量品なくしては一切経いたずらごとなるべし。根無き草はひさしからず。みなもとなき河は遠からず。親無き子は人にいやしまる。詮ずるところ、寿量品の肝心南無妙法蓮華経こそ、十方三世の諸仏の母にて御坐しまし候え

（421 寿量品得意抄 妙法の偉大さ 2143ページ－8行）

国はいかにも候え、法華経のひろまらんこと疑いなかるべし。

（422大果報御書）

広宣流布2144ページー14行

大事には小瑞なし。大悪おこれば大善きたる。すでに、大謗法、国にあり。大正法、必ずひろまるべし。

（423 大悪大善御書

広宣流布 2145ページー6行）

大きなことが起きるときには小さな前兆では済みません。大悪が起これば かならず大善はやってくるのです。すでに大謗法が国に充満しているのですから、次は大正法がかならず弘まっていくにちがいありません。

迦葉尊者にあらずとも、まいをもまいぬべし。舎利弗にあらねども、立っておどりぬべし。上行菩薩の大地よりいで給いしには、おどりてこそいで給いしか。

（423大悪大善御書）

歓喜・遊楽2145ページー7行）

迦葉尊者でなくても、舞いを舞うでありましょう。舎利弗でなくても立って踊るでありましょう。上行菩薩が大地より湧出したときには、踊り出るようにして出現してきたのです。

そもそも、この車と申すは、本迹二門の輪を妙法蓮華経の牛にかけ、三界の火宅を生死生死とぐるりぐるりとまわり候ところの車なり。ただ信心のくさびに志のあぶらをささせ給いて、霊山浄土へまいり給うべし。

（431大白牛車書

信・不信2151ページ－13行）

釈迦仏(しゃかぶつ)は、三十二相(さんじゅうにそう)具(そな)わって、身(み)は金色(こんじき)、面(おもて)は満月(まんげつ)のごとし。しかれども、あるいは悪人(あくにん)はすみとみる。炭(あくにん)見(すみ)あるいは悪人(あくにん)は灰(はい)とみる。あるいは悪人(あくにん)はかたきとみる。敵

（448 破信堕悪御書(はしんだあくごしょ)

御本尊(ごほんぞん)は仏(ほとけ)の生命(せいめい)2164ページー8行）

その上、日蓮の身ならびに弟子等、過去の謗法の重罪いまだ尽きざるの上、現在は多年の間謗法の者となり、また謗法の国に生まる。当時、信心深からざらんか、あにこれを脱れんや。ただし、貴辺この病を受くるの理、ある人これを告ぐ。予、日夜朝暮に法華経に申し上げ、朝暮に青天に訴う。除病の由、今日これを聞く。喜悦何事かこれに過ぎん。

（450 除病御書

病気 2165 ページー6行）

ああ、仏法に値うこと希にして、喩えを曇華の蕊に仮り、類いを浮き木の穴に比せんすら、なおもって足らざるものか。ここに、我ら宿縁深厚なるによって、幸いにこの経に遇い奉ることを得。

（456 日興遺誡置文

福運2195ページー6行）

学問未練にして名聞名利の大衆は、予が末流に叶うべからざること。

（456 日興遺誡置文）

求道（行学の二道）2196ページー3行

当門流においては、御書を心肝に染め、極理を師伝して、もし間有らば台家を聞くべきこと。

（456 日興遺誡置文）

求道（行学の二道）2196ページー7行）

下劣の者たりといえども、我より智勝れたる者をば、仰いで師匠とすべきこと。

（456 日興遺誡置文）

求道（行学の二道）2196ページー13行）

巧於難問答(ぎょうおなんもんどう)の行者(ぎょうじゃ)においては、先師(せんし)のごとく、賞翫(しょうがん)すべきこと。

（456 日興遺誡置文(にっこうゆいかいおきぶみ)）

折伏(しゃくぶく)2197ページー8行）

いまだ広宣流布せざる間は、身命を捨てて随力弘通を致すべきこと。

（456 日興遺誡置文

使命 2196ページー9行）

法自ずから弘まらず、人法を弘むるが故に、人法ともに尊し。

（457百六箇抄）

折伏2200ページー15行

法は、しぜんに弘まるものではなく、弘める人がいて、はじめて弘まるのです。ゆえに弘める人も弘まる法もともに尊いのです。

信心強盛にして、ただ余念無く南無妙法蓮華経と唱え奉れば、凡身即仏身なり。これを天真独朗の即身成仏と名づく。

（458本因妙抄

祈り2223ページ3行）